

矢田野エジリ古墳

発掘調査報告書

1992年3月

石川県小松市教育委員会





序 文

小松市の南部地区には、かつて加賀三湖と呼ばれた今江潟・木場潟・柴山潟という三つの潟があり、一帯は風光明美な水郷風景を留めていました。しかしながら戦後、大規模な干拓事業が進められ、今江潟がその全てを、柴山潟がその3分の2を失い、現在、往時の景観を伝えるのは木場潟のみとなっております。この加賀三湖に囲まれるようにして台地がひろがっていますが、その高台にのぼれば、西方に日本海、対する東方には雄大に横たわる靈峰白山を望み、そして眼下には、加賀三湖を一望のもとに眺めることができるという名勝がありました。この台地には、縄文時代からの遺跡が多数発見されており、古くからの住適地であったことが伺われます。また、多くの古墳が築かれ、加賀の古代史を考える上で重要な地域とされております。

今回、報告に至りました矢田野エジリ古墳は、この地域の古代史解明に新たな布石を投じるものであります。古墳は、多量の円筒埴輪や人物埴輪そして馬形埴輪を伴う前方後円墳で、その埴輪群は、北陸では今まで考えられなかつたような豊富な内容であり、また、全国的にみても学術的価値の極めて高い資料であります。平成元年11月には、市指定文化財に認定し、郷土の歴史を語る貴重な財産として恒久的に受け継いでゆくものとしました。

本古墳は、伝承や記録が全く無かった新発見のもので、すでに市街化されていた区域での試掘調査によって確認されたものです。開発にあたっては、その都度事業者の方のご理解とご協力を得て、埋蔵文化財の確認と調査を徹底してまいりましたが、こういった地道な対応の積み重ねによって得た一つの大きな成果と考えております。この成果が市民の文化財愛護精神の普及と郷土理解の基礎となり、教育・文化の発展に寄与するものとして、広く活用されることを真に望むものであります。また、この貴重な文化財を未来に生きる人達に伝えることが、私達の責務と考えます。

小松市教育委員会

教育長 木下健次

例　　言

1. 本書は、石川県小松市矢田野町ワ1番地に所在する、矢田野エジリ古墳の発掘調査報告書である。
2. 矢田野エジリ古墳の発掘調査は、信開産業株式会社が実施する宅地造成事業に伴い、昭和63年8月8日から10月19日にかけて小松市教育委員会が主体となって実施した。尚、調査に係る経費は、開発事業主である信開産業株式会社が負担した。
3. 出土品整理は、平成元年2月から7月にかけて実施し、報告書の作成は、平成3年度事業として実施した。尚、整理及び報告書作成に係る経費については、開発事業者と小松市の双方が負担した。
4. 発掘調査は、石田和彦と樋田誠が担当し、小村茂、宮下幸夫、望月精司、土屋宣雄の指導と協力を得た。
5. 出土品整理及び報告書の作成は下記の分担により実施し、樋田・石田（平成元年4月転出 現加賀高等学校教諭）が総括した。
〈遺物の洗浄〉北風利義、北風阿意子、松原修一、伊藤節子、山口美子、成毛覚美
〈遺物の記名・復元〉打田外喜代、宮田佐和子、江野直子、上野昌子、伊藤節子、山口美子、石田
〈形象埴輪・須恵器の実測・トレース〉宮田佐和子、江野直子、樋田
〈円筒埴輪・石器の実測・トレース〉樋田
〈遺構のトレース〉江野直子、林 真輝、樋田
〈遺物の写真〉樋田
6. 報告書の編集及び執筆は樋田が担当した。ただし、第V章第5節2「矢田野エジリ古墳出土埴輪・須恵器の螢光X線分析」については、奈良教育大学の三辻利一氏の手をわざわせた。また、分析のための産地試料については、石川県埋蔵文化財センターの木立雅朗氏にご便宜をはかって戴いた。
7. 本書で示す方位はすべて磁北である。尚、第1図の遺跡位置図には、小松市発行10,000分の1都市計画図3（平成2年修正）を、第3図の調査位置図には、小松市発行2,500分の1国土基本図（平成2年修正「四丁」「矢田野」）を、第6図の周辺の遺跡分布図には、国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和62年発行「小松」「動橋」）を引用した。
8. 本遺跡の遺構図、現場写真、出土遺物、遺物実測図などの資料は、小松市教育委員会で一括して保管している。
9. 発掘調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体からご協力とご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい。（敬称略 50音順）
赤塚次郎、伊藤雅文、上野与一、大賀 健、大下 武、小栗明彦、梶 幸夫、加納他家男、川崎みどり、川畑 誠、北野勝次、北野博司、木立雅朗、木村有作、久保智康、小嶋芳孝、桜井甚一、佐藤由紀男、鈴木敏則、善端 直、竹内宇哲、田嶋正和、田端泰子、近間 強、塙田良道、土屋宣雄、都出比呂志、富田和氣夫、中司照世、中屋克彦、永井宏幸、南雲芳昭、新納 泉、西井龍儀、野澤則幸、橋本澄夫、浜岡賢太郎、平口哲夫、藤井明夫、藤川智之、古川 登、前田清彦、麻柄一志、松井政信、松島吉信、安 英樹、谷内尾晋司、山本正敏、吉岡康暢、和田晴吾
石川県立埋蔵文化財センター、石川県立博物館、石川考古学研究会、岡崎市立郷土資料館、春日井市教育委員会、名古屋市立博物館、名古屋市立見晴考古資料館、福井県立博物館

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
1. 調査地の概要	1
2. 調査に至る経緯	2
第2節 調査概要	4
1. 発掘調査	4
2. 出土品整理	5
第Ⅱ章 遺跡の環境	6
第1節 遺跡の地理的環境	6
1. 小松市の地形	6
2. 月津台地と遺跡の立地	7
第2節 歴史的環境	8
1. 周辺の遺跡	8
2. 周辺の古墳分布	10
3. 国・郡の沿革と遺跡の動向	11
第Ⅲ章 遺構と遺物出土状況	13
第1節 遺構	13
1. 調査の方法	14
2. 古墳の規模	17
3. 周溝	21
第2節 遺物出土状況	21
1. 検出状況と垂直分布	21
2. 平面分布	22
小 結	22
第Ⅳ章 出土遺物	25
第1節 須恵器・土師器	25
1. 須恵器	25
2. 土師器	30
第2節 形象埴輪	31
1. 人物埴輪	31
2. 馬形埴輪	53
3. 小結	58

第3節 円筒埴輪	61
1. 円筒埴輪概観	61
2. 図示方法について	62
第4節 石器	77
観察表	78
 第V章 塩輪の分析	84
第1節 円筒埴輪の分類	84
1. はじめに（円筒埴輪分類の視点）	84
2. 成形技法による分類（I群とII群の把握）	84
3. ハケ工具の原体同定による分類	86
4. 普通円筒埴輪におけるハケ工具以外の諸属性の分類	95
5. 普通円筒埴輪の類型化と内容	117
6. 朝顔形円筒埴輪におけるハケ工具以外の諸属性の分類	124
7. 朝顔形円筒埴輪の類型化と内容	129
8. 普通円筒埴輪の法量と形態	131
第2節 塩輪の製作工程	136
1. 人物埴輪の製作工程	136
2. 馬形埴輪の製作工程	138
3. 円筒埴輪の製作工程	140
第3節 塩輪の分布状態	143
1. 形象埴輪の分布	143
2. 円筒埴輪の分布	144
第4節 塩輪の生産体制	146
1. 工人と工人集団	146
2. 工人集団Iの生産体制	146
3. 脱土による検討と工人集団IIの性格	150
4. 小結	150
第5節 自然科学的分析	152
1. 分析試料の概要	152
2. 分析	153
「矢田野エジリ古墳出土埴輪・須恵器の螢光X線分析」 奈良教育大学 三辻利一	
3. 分析結果に対する考古学的所見	157
 まとめ	159
 おわりに	161

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第38図 人10、11・騎乗の男子 (1/4)	51
第2図 試掘トレンチ配置図	2	第39図 馬1・鹿り馬 (1/4)	55
第3図 調査位置図 (1/2,500)	3	第40図 馬2・鹿り馬 (1/4)	59
第4図 小松市の位置と地形	6	第41図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	63
第5図 月津台地と周辺の地形	7	第42図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	64
第6図 周辺の遺跡	9	第43図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	65
第7図 月津台地の古墳分布	10	第44図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	66
第8図 配点・区割り図	13	第45図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	67
第9図 平面企画	14	第46図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	68
第10図 古墳測量図 (1/100)	15	第47図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	69
第11図 周溝内落ち込み平面図	18	第48図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	70
第12図 周溝土断面図	19	第49図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	71
第13図 ベルト内遺物垂直分布図 (1/80)	21	第50図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	72
第14図 II区下底土坑 (1/20)	22	第51図 普通円筒埴輪実測図 (1/4)	73
第15図 遺物出土状況図 (1/100)	23	第52図 朝顔形円筒埴輪実測図 (1/4)	74
第16図 出土須恵器実測図 (1/3)	26	第53図 朝顔形円筒埴輪実測図 (1/4)	75
第17図 出土須恵器実測図 (1/3)	27	第54図 出土石器実測図 (1/1)	77
第18図 出土須恵器実測図 (1/3)	29	第55図 塹輪各部の呼称等(1)	82
第19図 出土須恵器実測図 (1/3)	30	第56図 塹輪各部の呼称等(2)	83
第20図 人1・摩掛け製裘衣の女子 (1/4)	32	第57図 ハケ調整痕拓影(1) (1/1)	89
第21図 人1・摩掛け製裘衣の女子 (1/4)	33	第58図 ハケ調整痕拓影(2) (1/1)	90
第22図 人2・製裘衣の女子 (1/4)	34	第59図 ハケ調整痕拓影(3) (1/1)	91
第23図 人2・製裘衣の女子 (1/4)	35	第60図 ハケ調整痕拓影(4) (1/1)	92
第24図 人3・飾り帽子の男子 (1/4)	36	第61図 ハケ調整痕拓影(5) (1/1)	93
第25図 人3・飾り帽子の男子 (1/4)	37	第62図 ハケ調整痕拓影(6) (1/1)	94
第26図 人4・刀子を佩びる人 (1/4)	38	第63図 外面調整各種のヨコハケ (1/2)	96
第27図 人4・刀子を佩びる人 (1/4)	39	第64図 内面調整のナデ手法 (1/2)	97
第28図 人5・勾玉をつける人 (1/4)	40	第65図 凸帯断面形態分類図(1) (1/1)	99
第29図 人5・勾玉をつける人 (1/4)	41	第66図 凸帯断面形態分類図(2) (1/1)	101
第30図 人6・天冠の男子 (1/4)	42	第67図 透孔a種切り抜き面拓影	103
第31図 人6・天冠の男子 (1/4)	43	第68図 口縁部断面形態分類図	104
第32図 人7・跪座の男子 (1/4)	44	第69図 底部断面形態分類図	104
第33図 人7・跪座の男子 (1/4)	45	第70図 透孔分類図(1) (1/4)	105
第34図 人8・右手を擧げる口髭の男子 (1/4)	46	第71図 透孔分類図(2) (1/4)	107
第35図 人8・右手を擧げる口髭の男子 (1/4)	47	第72図 記号分類図 (1/2)	109
第36図 人9・右手を擧げる男子 (1/4)	48	第73図 内面同心円文当具拓影 (1/2)	111
第37図 人9・右手を擧げる男子 (1/4)	49	第74図 外面当具拓影 (1/2)	113

第75図 普通円筒埴輪属性分類一覧	115	第87図 馬形埴輪製作工程図	139
第76図 I A 各類型の主要属性構成	117	第88図 普通円筒埴輪 I 群の製作工程	141
第77図 I B 各類型の主要属性構成	120	第89図 形象埴輪分布状況概念図	143
第78図 I C 各類型の主要属性構成	121	第90図 円筒埴輪分布状況概念図	145
第79図 朝顔凸帯断面形態分類図 (1/1)	126	第91図 塩輪分類概念図	146
第80図 朝顔透孔分類図 (1/4)	127	第92図 主要ハケ工具使用段階図	147
第81図 朝顔口縁断面形態 (1/2)	127	第93図 朝顔形円筒埴輪のハケ工具関連図	148
第82図 朝顔同心円文当具分類図 (1/2)	128	第94図 塩輪生産フロー概念図	149
第83図 朝顔形円筒埴輪属性分類一覧	129	第95図 朝顔形円筒埴輪製作工人の分担概念図	149
第84図 普通円筒埴輪の法量	133	第96図 エジリ古墳埴輪供献に係る生産体制	151
第85図 普通円筒埴輪形態模式図	135	第97図 御幸塚古墳出土埴輪 (1/4)	152
第86図 人物埴輪製作工程図	137	第98図 黄光X線分析掉図	155

目次

表 1 月津台地古墳一覧	11	表 6 -(I)(2) 普通円筒埴輪計測表	80
表 2 須恵器観察表	78	表 7 -(I)(2) 朝顔形円筒埴輪計測表	82
表 3 土師器観察表	79	表 8 I群とII群	85
表 4 人物埴輪観察表	79	表 9 使用ハケ原体によるグルーピング	94
表 5 馬形埴輪観察表	79	表 10 類型別法量属性平均値	132

〈第Ⅶ章第5節 黄光X線分析〉

表 1 矢田野エジリ古墳出土埴輪分析値	156
表 2 二ッ梨殿様池古窯跡須恵器・埴輪分析値	156
表 3 矢田野エジリ古墳須恵器、御幸塚古墳、矢田借屋古墳群埴輪分析値	156

写真図版目次

写真図版 1	遺構検出状況・周溝断面	写真図版 24~25	人物埴輪の製作工程
写真図版 2	周溝断面・調査風景	写真図版 26~31	普通円筒埴輪
写真図版 3~4	遺物出土状況	写真図版 32	朝顔形円筒埴輪
写真図版 5	完掘状況	写真図版 33	ハケ工具原体の分類
写真図版 6	須恵器	写真図版 34	普通円筒埴輪の器面調整各種
写真図版 7	須恵器・土師器	写真図版 35	普通円筒埴輪の凸帯各種
写真図版 8	須恵器・石器	写真図版 36	普通円筒埴輪 I A 1類の記号
写真図版 9~20	人物埴輪 (人1~人11)	写真図版 37	普通円筒埴輪の当具底
写真図版 21~23	馬形埴輪	写真図版 38	朝顔形円筒埴輪の凸帯と内当具

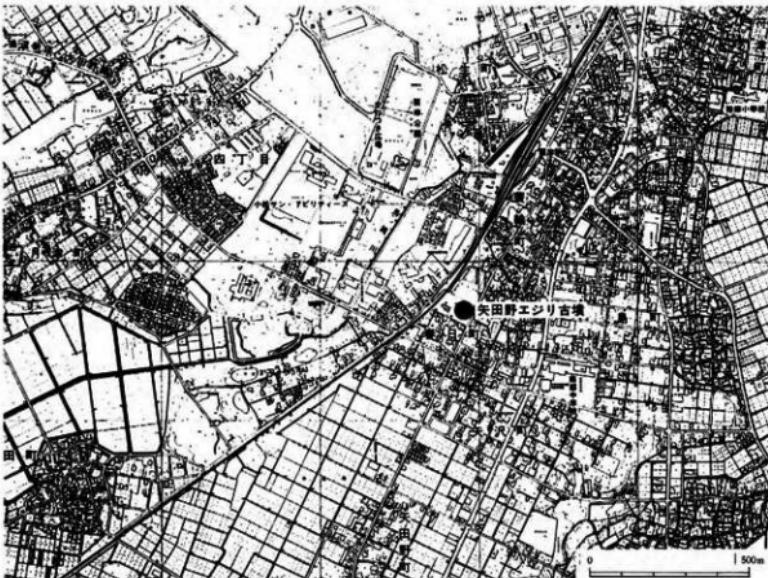
第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査概要

第1節 調査に至る経緯

1. 調査地の概要

遺跡は、小松市矢田野町ワ1番地に所在する。JR粟津駅から線路に沿って南西へ400m程下ったところである。地籍は矢田野町であるが、その広い町域の北端にあたり、通称春日町（矢田野町内の地区名称で地番をもたない）に含まれる。遺跡はすぐ北側で蓑輪町と接しており、粟津駅南の蓑輪町所在といった方が位置感がつかみやすい。ただ、市制施行以前には、ここがちょうど能美郡と江沼郡の境界にあたり、矢田野町は江沼郡、それに接する北側の蓑輪町、島町等は能美郡に属していた。

遺跡の周辺は、明治40年の粟津駅開設以来、交通の便がひらかれ、駅西での小松製作所の操業開始とともに、産業人口も増加、さらに、粟津温泉への玄関口としての役割も果たし、南部地区的中心街として発展してきた。やや南に下れば、矢田野町の台地上に展開する田園地帯がかろうじて残されているものの、駅前を中心に住宅が密集していて、僅かに散在する小規模な遊休地や畠も、往時の地形をとどめたあり方はみられない。本遺跡も、北側の児童公園・健康広場に隣接したグラウンドとして利用されており、盛土整地された遊休地であった。本米の地盤は盛土下約1.5~2mに存し、かつての小松製作所社宅跡で、その廃屋後に埋立られたものである。しかし、グラウンドのレベルは周辺宅地と同一であり、本来高低差のあった周辺地形がかなり改変されたことをものがたっている。



第1図 遺跡位置図 (S=1/15000)

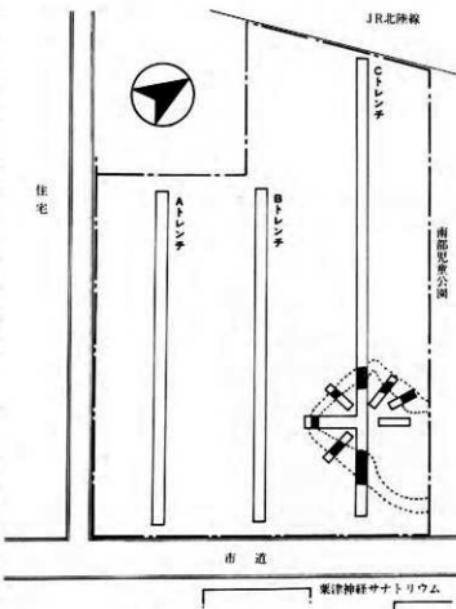
2. 調査に至る経緯

昭和63年3月に、信開産業株式会社より、市街化調整区域である当地での分譲宅地の開発行為が示され、都市計画法に基づく事前審査の申請がなされた。当地は、かつての宅地であったし、周知の遺跡も存在していなかったことから、埋蔵文化財の事前調査対象として扱うかどうかという議論もあった。しかし、当地は消滅した前方後円墳の蓑輪塚古墳にも近く、今後この周辺における地下の状況把握の機会も望めないという観点から、一応、トレンチ調査をしておく必要があると判断した。そして、3月23日に開かれた事前審査会において、要協議の旨を開発者に告げた。同年3月28日に、土木工事等に係る埋蔵文化財の取扱いについての協議書が提出され、これに対して試掘調査を実施する旨の回答をした。

試掘調査は、昭和63年4月25・26日の2日間にわたって実施した。当地が盛土されていたことから、開発者より重機の提供をうけて行い、当初は調査期間1日の予定でA-Cの3本のトレンチを設定した。1.5~2mの厚い砂の盛土を除去すると、やはり旧宅地であったことから、多くの擾乱が認められた。最初のA・Bトレンチでは一片の遺物も検出されず、集落に伴う遺物の包含地ではないことが早い段階で判明したが、Cトレンチの東端部で突然黒褐色土の落ち込みが現れ、掘削面に埴輪片が散乱した。当初から古墳近接地として確認調査を行った

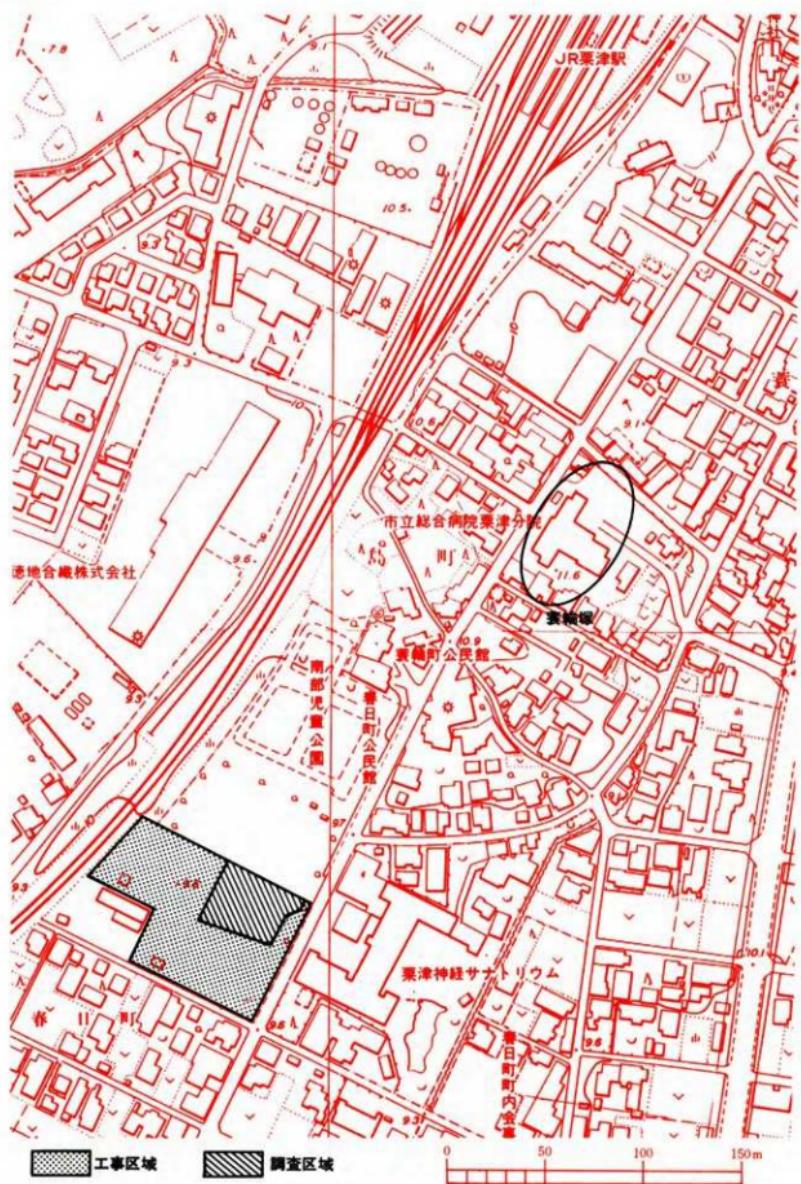
ものの、古墳存在の伝聞もなく、周囲の住宅密集の景観からくる先入観もあって、実際は、衝撃的な驚きであった。それも、多量の埴輪を伴うらしいのである。早速次の日、その周囲に放射状のトレンチを設定して、周溝の範囲確認を行った。この試掘段階で、墳丘はすでに削平されて残っていないことが判明した。墳形については、円墳であろうという予測を持ち、トレンチで確認した周溝プランの連続性にややいびつな印象を受けたが、その原因を広範囲で認められた擾乱に求めている。しかしこれも、先入観からくる過小評価によるものであって、実際には、未知の前方後円墳が埋もれていたのである。遺跡の名称は、町内の地籍図によって旧小字名を確認し、矢田野エジリ古墳と命名することになった。

事業者に対しては、試掘調査の結果を報告後、ただちに事業実施の予定について協議したが、計画続行の意思は堅く、また、遺跡の遺存状態からも、現状保存よりはむ



第2図 試掘トレンチ配置図

しろ内容の解明が望まれる状況にあると判断し、発掘調査の実施を決定した。そして昭和63年5月25日付けで発掘調査の実施依頼並びに文化庁への発掘届が事業者より提出された。同年7月15日付けで教育委員会より事業者に対して発掘調査実施の回答書を提出。発掘調査を事業者負担により実施する旨等を確認し、「矢田野エジリ古墳発掘調査の実施に関する覚書」を取り交わした。そして8月8日より、約1ヶ月半の調査予定で着手するに至った。



第3図 調査位置図($S=1/2,500$)

第2節 調査概要

1. 発掘調査

調査にあたっては、まず平均1.5mに及ぶ盛土を除去する必要があり、古墳が含まれる範囲に限って盛土除去範囲とし、ほぼ30m×38m（約1,150m²）の調査区を設定した。盛土の除去は、重機によって8月1日から開始し、7日までに終了、8日より作業員による掘り下げを開始した。重機による掘削は、攪乱を主体しながらも残存していた黒褐色土層（層厚約20cm）を念のため残して行われたため、8月中旬は周溝プランの確認作業となった。8月末にはほぼプランがはっきりし、これが前方後円墳であることが判明したのである。試掘段階では、前方部の周溝をとらえて円墳の可能性を考えていたため、後円部の東端が盛土除去範囲に收まらず、急速人力によって拡張した。プラン確認の段階で、すでに削平されていた埴丘部には、主体部の痕跡すら残されていないことも確認した。

9月に入って、周溝を全8区に区分して掘り下げを開始、周溝内に多量の埴輪が残存していることが判ったものの、破片は総じてあまりにも細かく、出土状況の実測は不可能と考えられた。しかし、一括で取り上げるのは、数少ない情報源を失うことになると考え、全点をドットマップ化することにした。

9月中頃、後円部周溝下底で出土していた須恵器が特異な形状をしていることに気付いた。脚の付いた球形の器体が、どうも中に陶丸を含んだ鈴になっているようである。早速周囲の破片類とともに復元すると、それが鈴台付の高杯で、鈴付きとしては、はじめて見る形態だったのである。このニュースは、9月28日報道機関を通じて発表され、「古代の音」としてテレビでも報じられた。

この発表からまもなくして、ふたたび我々を驚かせるものが出土した。掘り下げる順番がもっとも遅くなつた調査区北端のⅣ区（くびれ部）

から、棒状の土製品が出土したのである。その先端部は、はっきりとした5本の指をもつ手のひらだった。それでも半信半疑であったが、顔面の一部と思われるものや、明らかに円筒埴輪とは異なる無文の破片が次々と顔を出しあしめたのである。人物埴輪の存在は確実となつた。10月5日には再び新聞・テレビを賑わせることになったが、ただ、と



にかく破片が細かく、確認した数から人物埴輪五体以上と言うしかなかった。

調査自体は周溝のみを掘り下げる単調な経過を踏んだが、遺物の取り上げ点数が1万点を越えるなどで、予定より約1ヶ月の調査期間の延長となった。10月11日より、周溝のコンタ測量にかかり、全測図を含めて10月19日で全調査を完了した。

2. 出土品整理

調査後直ちに事業者と出土品整理について協議し、昭和63年度末から平成元年度にかけて出土品整理を行い、報告書の刊行を含めて経費は事業者の負担によるものとし、この旨で覚書を交換した。

平成元年2月28日から洗浄に入り、3月25日までにはほぼ終了、注記作業も4月7日までに完了した。つづく接合作業は困難を極めた。器体が大きい上に破片が細かいこと、円筒埴輪各個体それぞれの特徴が細かく把握できないのである。人物埴輪にいたっては、完成品の姿さえ想像できないのであるから毎日が意外性の驚きと接合の喜びの連続であった。調査中には全く予想もしていなかった馬形埴輪まで接合により登場してきたのである。7月8日に、事業者負担による出土品の整理作業を終えたが、復元作業の補足は継続して行う必要があり、市単の整理事業のなかで継続した。ほぼ完形に復元されたのは普通円筒埴輪14個体、朝顔形円筒埴輪2個体、人物埴輪11個体、馬形埴輪2個体というもので、全国有数の画期的資料と評価され、ただちに市指定文化財として、平成元年11月に指定を受けた。

内容が極めて重要なものとなり、資料化に要する期間については、予定を大きく上回ることが確実となつた。このため、報告書刊行時期を遅らせる旨の理解を事業者からいただきて、平成3年度事業として刊行することに決定した。また、報告書の刊行費については、当初全額事業者負担とするものとなっていたが、取り扱う出土品がすでに市指定文化財となっていたこと、および、重要資料を広く公開するために、刊行冊数を当初予定より増やすことが望ましいと考えられたことなどから、刊行費の一部について、市も負担するかたちをとった。



第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

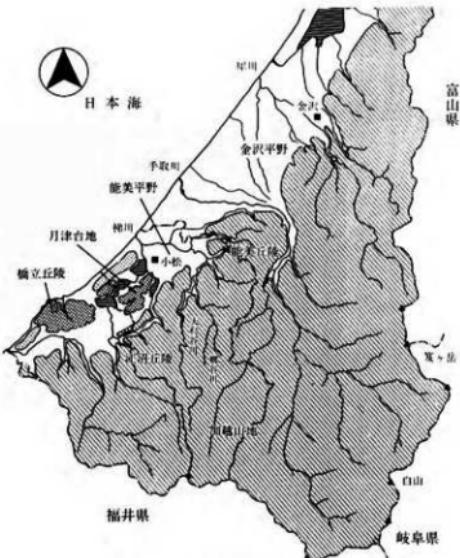
1. 小松市の地形

小松市は、石川県下第二の都市で、人口・面積ともに金沢市に次ぎ、県下南西部（南加賀地域）の中 心都市をなしている。市域は、北西縁で日本海に面し、南端は、市域の最高峰大日山（1,369m）を境に 福井県勝山市に接している。海岸部から山岳部までを擁する南北に長い市域は、その大部分が山地・丘 陵で占められており、海岸線に沿った狭長な平野部に市街地と農地が集中している。行政上、人口の集 中するこの平野部を主たる対象として、北部・東部・中部・南部の各地区に呼称区分されている。

市域の北部地区は、手取川扇状地の南縁と接して、梯川の沖積低地が広がっており、西に中心市街地 及び東に農地が展延している。また、その東側は、白山より連なる加越山地の北西縁をなす能美丘陵が とりまいている。沖積地を西流する梯川は、県下では手取川に次ぐ規模をもつ一級河川で、その流れは 東側丘陵部を境に90度方向を変えて南へ遡上し、上流部の郷谷川・大杉谷川を介して、白山山系大日連 峰に源を発している。

中南部地区は、かつては、今江潟、木場潟、柴山潟という、いわゆる加賀三湖を擁して、たぐいまれ な水郷風景をとどめていた。しかし、大規模な干拓事業によって、今江潟はそのすべてを、柴山潟はそ の3分の2を失い、いまは幻の景観となってしまった。この加賀三湖は、もともとは沿岸州によって閉 塞されて生じた海跡湖（ラグーン）であ

る。今江潟のみが、梯川の河口部で合流する前川によって、海と連結しており、さらに、木場潟と柴山潟は、それぞれ今江潟と芋蔓のごとく小河川で連結していた。現在は、木場潟が前川によって、柴山潟が新設水路の新堀川によって、日本海と連結している。各湖の周囲には、閉塞後の潟埋積平野として、低湿地帯が形成されている。一方、加賀三湖及びその潟埋積平野によって囲まれている標高10~20mの月津台地は、柴山潟西接部の台地及び加賀市橋立台地と同様の中位海成段丘として、更新世堆積物をのせているが、橋立台地に比べれば平坦な地形で占められている。そして、今江潟・柴山潟と海岸線の間は、北を梯川、南を橋立台地が区切る、完新世の大規模な海岸砂丘が形成されている。月津台地上からは、木場潟を前にして白山を望むことができ る。白山を頂点として、その前山地帯を



第4図 小松市の位置と地形

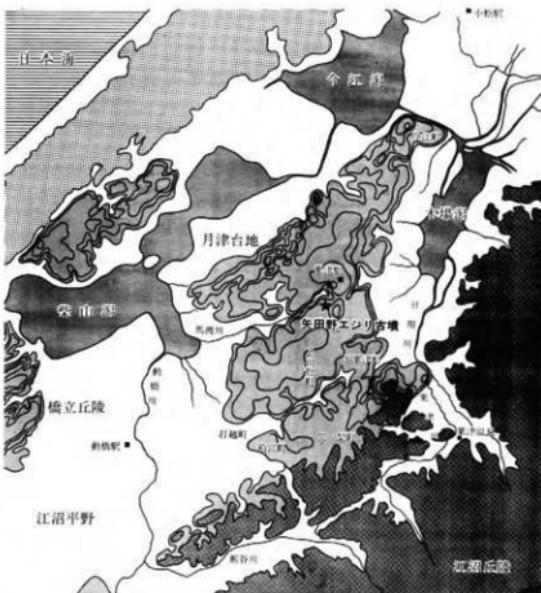
なす広大な加越山地は、漸次高度を減じて平野部に達している。この加越山地の前線をふちどって平野部に面している丘陵部を江沼丘陵と呼んでいる。江沼丘陵は、途中に梯川の大きな開析をはさんで北方の能美丘陵に連なっていく。丘陵縁辺、そしてそこから海岸部にかけて分布する各地形の配置は、海岸線と平行する北東—南西方向への傾きをもっており、海成地形の名残りを示している。

以上のように、小松市中南部は、背後に広大な山地・丘陵を擁し、平野部を潟湖と潟埋積平野及び台地と砂丘が構成する、豊富な地形構造となっている。

2. 月津台地と遺跡の立地

遺跡の所在する月津台地について、もう少し詳しく見てみたい。月津台地は、近・現代の開発が著しく、土採取や谷の埋立、農地開発等によって、現在ではほとんど旧地形の把握が困難な状況にある。そこで、陸地測量部発行で、明治42年測量の5万分の1測量図をもとに、往時の地形を読み取ったのが第5図である。江沼丘陵の前縁部

には、木場潟に注ぐ栗津川と、柴山潟に注ぐ動橋川の支流那谷川との開析によって分断された南西方向に細長い低丘陵が横たわっている。台地地形は、その丘陵の北東半部から派生して、今江・柴山潟と、木場潟を分かつように、一見能登半島のような形状で広がっている。柴山潟・今江潟に面する北西縁辺部の標高が高く、複数の小頂部をもつ起状の激しい地形となっており、他は、比較的平坦な地形である。台地を刻む大小の開析谷が、周囲の低地部に向かって発達している。わけても、打越町から下栗津町にむかって長く延びる谷は、丘陵前線の台地部から一旦区切るかたちとなっており、一応これを月津台地の南東端の境としておきたい。



第5図 月津台地と周辺の地形

月津台地はそのほぼ中央部で、馬渡川による開析谷が栗津駅に向かって深く入り込み、木場潟側からの開析谷とともに台地を強くくびれさせて、ちょうど栗津駅を境に北西半部と南東半部に台地を区分している。遺跡は、栗津駅から南北へやや下った谷の左岸に位置し、馬渡川の谷頭部に近い南側台地上縁辺にあたる。「エジリ」という名称も、川の谷頭部を示す「江尻」のことのようである。北面する谷は、現在は埋め立てられて宅地となっており、旧地形はほとんど伺い知ることはできない。調査地自体は、グランドとして利用されていた地盤から、1m以上の盛り土を除去したレベルにあって、標高約9m前後を測る。しかし、周辺宅地はグランドとはほぼ同レベルで展開しており、ゆるやかながらも、谷に向かって開析を受けた細かな起伏があったものと考えられる。

第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡

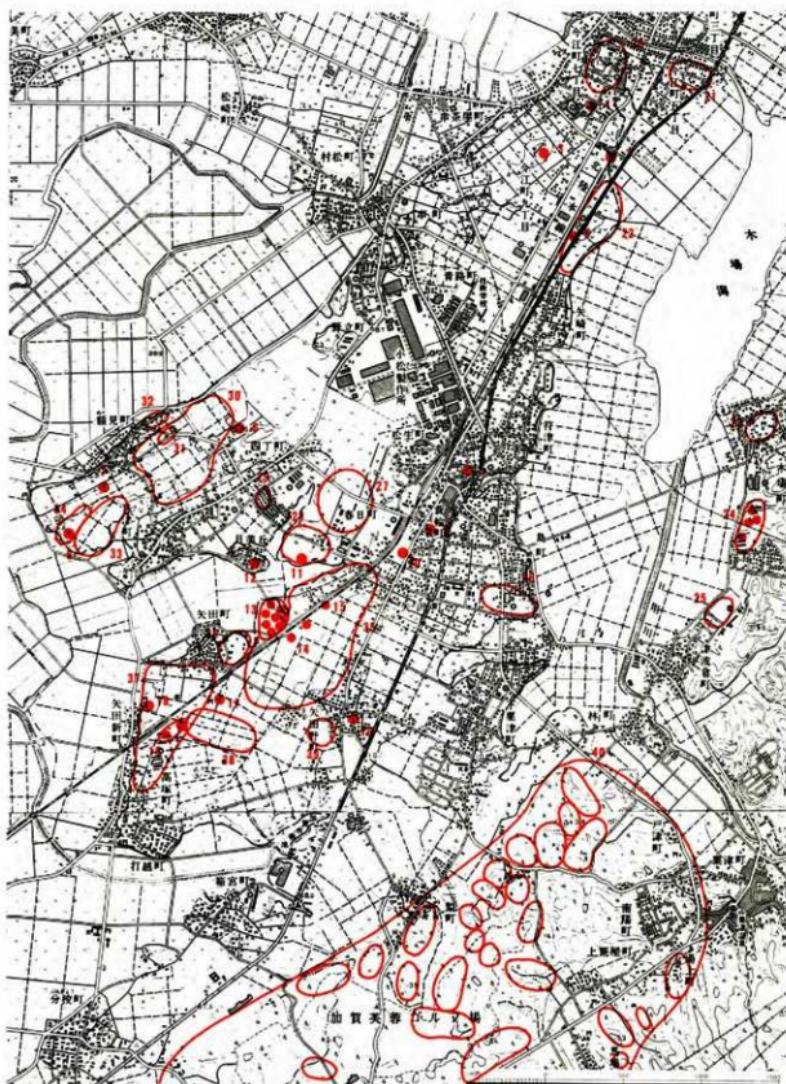
小松市の遺跡分布は、豊富な各地形要素に結び付いた明解なあり方を示している。北部・東部地区では、梯川の沖積平野のはば全面にわたって、弥生時代～中世にまでいたる大規模な集落跡が密集しており、そして、平野をとりまく東部の丘陵上には、古墳や中世墓などが展開している。また、丘陵裾部では縄文時代集落や寺院跡などの分布がみられる。

一方、中南部地区では、台地部と丘陵部の二極を舞台に、特徴的な遺跡の分布が示されている。即ち台地部は、縄文時代～中世にまでわたって断続的に営まれた集落の舞台となっており、その東南部の戸津町から加賀市分校町にかけての江沼丘陵前縁部では、古墳時代から中世にかけての窯跡が密集し、北陸有数規模の南加賀古窯跡群を形成している。また、製鉄遺跡も多く、この窯跡群と重複しながら、北方の木場潟東岸丘陵部にまで分布を伸ばしている。

それでは、中南部地区的本遺跡周辺を中心、具体的な遺跡展開のあり方を追ってみたい。この地域で確認されている最古の資料は、念仏林遺跡⁽²⁷⁾出土の石槍で、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての所産であるが、単独の検出状態である。集落としての明確な展開がみられるのは、三湖が入江の状態にあったと考えられる縄文時代前期で、木場潟東南岸丘陵線の大谷山貝塚(25)など、貝塚を伴った集落が、潟に面して営まれているものの、この時期の遺跡分布は未だよく把握されていない。縄文時代中期になると、月津台地上を舞台に多くの集落が営まれるようになる。念仏林遺跡や、念仏林南遺跡(28)、茶臼山A遺跡(33)のほか、この時期の遺物は台地上の他遺跡でも複合するかたちで採取されている。後・晩期になると、遺跡の分布は丘陵部に中心を移し、台地上からしだいに姿を消してゆく。次に集落が展開するのは、弥生時代末～古墳時代初頭の月影期に属するもので、念仏林南遺跡では、良好な堅穴住居跡を検出している。この時期以降、古墳時代を通して遺跡数は増加し、これらが複合して大規模な遺跡が台地上を占有している。特に、後期の集落では、月津と矢田野とを分断して柴山潟に通じる大きな開析谷の周囲に、念仏林南遺跡・矢田野遺跡(35)・矢田B遺跡(36)・刀何理遺跡(38)などが群集し、該期の古墳分布（次項）との重なりをみせている。昭和59・60年に調査された念仏林南遺跡では、堅穴住居跡21軒、掘立柱建物跡が17軒検出されている。内容的には、際だった建物や遺物ではなく、さほど広くない舌状の台地を地形単位で居住地として占有した、村落形態の一典型例といふことができる。本遺跡は、先に触れたように、縄文中期や弥生末、さらには古墳前・中期集落が重複しており、周辺遺跡もこれと同様な展開をみせていることが予想される。奈良時代になると木場潟西岸台地上の島遺跡(26)、柴山潟に面した矢田新遺跡(37)、中世までの複合遺跡である額見町遺跡(30)等の存在が知られている。しかし、この時代以降、特に平安時代を中心とする時期の集落の展開はまだ確認されていない。

以上、集落の動向を述べてきたが、調査された遺跡は、念仏林遺跡・念仏林南遺跡・島遺跡の三遺跡を数えるのみで、ほとんどの遺跡は調査されておらず、耕地整理や宅地開発も進展しているため、良好な包蔵地はかなり少なくなっている状況にある。

南加賀古窯跡群(40)は、現在確認されているもので、須恵器窯跡 160基、土師器窯跡27基、中世陶（加賀古陶）窯跡31基を数える。中世陶への転換期に若干のブランクはあるものの、須恵器生産の開始から約900年の間、連續と生産を行っている。須恵器生産の開始は、5世紀末ないし6世紀初頭と考えられ、二ツ梨・戸津町付近の、月津台地とのつながりをもつ丘陵部にまず営まれることが注目される。この中には、埴輪併焼窯の二ツ梨豆岡山（殿様池）古窯跡が含まれており、県内唯一確認されている埴輪窯となっている。



1~19表1 参照 20御幸塚跡(中世) 21五郎座貝塚(縄文) 22薺道跡(時代不詳) 23池田城跡(中世) 24本場古墳群(古墳) 25大谷山貝塚(縄文) 26島遺跡(古墳~奈良) 27念佛林遺跡(縄文) 28念佛林南遺跡(縄文・弥生末・古墳) 29津新遺跡(縄文) 30額見遺跡(縄文~中世) 31額見神社前A道跡(縄文) 32額見神社前B道跡(弥生~古墳) 33茶臼山A道跡(縄文) 34茶臼山祭祀遺跡(奈良) 35矢田野遺跡(古墳) 36矢田B道跡(古墳) 37矢田新道跡(奈良) 38刀何理道跡(古墳) 39矢田野神社前遺跡(平安) 40南加賀古窯跡・製鉄跡群(古墳~中世)

第6図 周辺の遺跡

2. 周辺の古墳分布

南加賀地域には、古墳分布に大きな二つのまとまりがみられる。一つは、梯川流域以北の丘陵を舞台とした能美古墳群、もう一つは、江沼盆地を取り巻く丘陵・台地を舞台とした江沼古墳群である。月津台地上の古墳群は、距離的に両古墳群の中間的位置にあることから、その性格付けに諸説がある。現在は、この台地上の古墳群を一括して三湖台古墳群と汎称し、埴輪をもたない能美古墳群と異なり、埴輪祭祀を取り入れていることから、江沼古墳群の一ブロックとする考え方が主流である。月津台地は、近・現代において、その平坦な地形を格好の住・農適地として開かれた部分が多くいたためか、多くの古墳がその姿を消した。現在知見にのぼっている古墳のはほとんどは開発によって消滅しており、その内容等は、能美・江沼両都誌などにおける、破壊時あるいは盗掘時の伝聞の記録に負うところが大きい。

台地上では、今までのところ後期古墳以外の展開は確認されていない。最も古墳が集中するのは、柴山潟に通ずる馬渡川の開析谷周囲で、右岸には念仏塚古墳(11)、念仏林古墳(12)、左岸には、無名古墳群(16)、百人塚古墳(15)、矢田野古墳群(14)、30m級の前方後円墳2基を含む借屋古墳群(13)など、小規模円墳を主体とした濃密な分布状態を示し、これらは、当該期集落分布とも重なりをみせる。全て6世紀前葉～中葉に属し、粘土室(箱形粘土棺)を内部主体とすると考えられている。この左岸部の西端には、家形石棺を持つ孤森古墳(17)、横穴式石室内に家形石棺をもつ矢田新丸山古墳(18)が盟主的な内容を示して存在しているが、墳丘自体は、中規模の円墳と考えられる。後者は、採集遺物から6世紀中葉頃に位置付けられる。谷の奥部の栗津駅方向に進むと、本報告の矢田野エジリ古墳(10)と、40m級の前方後円墳の蓑輪塚古墳(9)が隣接している。蓑輪塚古墳は、破壊途中に調査されたもので、くびれ部頂部に粘土室をもつという特異な状況を示しているが、調査当時すでに半壊していた後円部に本来の主体部が存していた可能性が強い。谷頭部にあたる栗津駅のすぐ東には、切石横穴式石室をもつ符津石山古墳(5)がある。同種の石室と考えられるものが、矢崎B古墳(4)、矢田野町の中村古墳(19)でも検出されたと伝えられており、一定距離をおいた散在傾向がみられる。いずれも6世紀の後半代のものであろう。

また、谷部を望んで展開するこれら地区とやや距離を置いて、二つのグループがみられる。一つは、柴山潟に面する台地の北東縁沿いに存する白のはぞ古墳(6)と左門殿古墳(7)、茶臼山古墳(8)である。白のはぞ古墳は、全長52mを測る月津台地最大の前方後円



第7図 月津台地の古墳分布

墳で、茶臼山古墳は、径約25m二段築成の円墳である。両者は重要な位置付けを担うものと考えられ、本地域では墳丘の完存する希有の存在もあるが、残念ながら年代的決め手に欠けている。もう一つのグループは台地の最北端のいわゆる三湖台と称する高台にある御幸塚古墳⁽¹⁾や土百古墳⁽²⁾、狐山古墳⁽³⁾で、先にふれた切石積横穴式石室の矢崎B古墳を含めて、一応一つのまとまりを成している。ただ、御幸塚古墳が全長約30mの前方後円墳で5世紀末・土百古墳が6世紀前半代の円墳と思われるが、当該期の群としての展開は不明で、切石の石棺あるいは石室と伝えられる狐山古墳や矢崎B古墳との有機的な連続性には一考を要する。

表1 月津台地古墳一覧（番号は第6図・第7図共通）

No.	名 称	所 在 地	墳 形	規 模 m	理 審 施 設	備 考
1	御 幸 塚 古 墳	今 江 町	前方後円	全長30	不 明	後円部先端削取、指輪・須恵器・直刀
2	土 百 古 墳	*	円	径10	不 明	消滅、菅玉
3	狐 山 古 墳	*	円	—	切石 組合 石棺 ?	消滅
4	矢 崎 B 古 墳	矢崎町	円	—	切石 積横穴式石室	消滅、馬具・金環他
5	符 津 石 山 古 墳	符津町	円	—	切石 積横穴式石室	消滅、須恵器・直刀・金環他
6	白 の ぞ 古 墳	串 町	前方後円	全長52	不 明	主体部・埴輪部破壊
7	左 衛 門 駿 古 墳	駿見町	円	—	不 明	大部分削平
8	茶 白 山 古 墳	月津町	円	径28	不 明	主体部破壊、二段築成、須恵器
9	裏 輪 墓 古 墳	町	前方後円	全長40	箱 形 粘 土 棺	消滅、須恵器・玉他
10	矢 田 野 エ リ ジ 古 墳	矢田野町	前方後円	30	不 明	消滅（地下に周溝残）、埴輪・須恵器
11	念 仏 墓 古 墳	月美丘町	円	—	不 明	消滅
12	念 仏 林 古 墳	月津町	円	—	箱 形 粘 土 棺	消滅、須恵器・直刀・鉄斧・金環他
13	唐 尾 古 墳 群 1号墳～8号墳	矢 田 町	前方後円 2基 円 6 基	7号全長35 8号全長30 径9～13	2・4号・粘土棺 7・8号不詳、能一不 明	消滅、2号・須恵器・直刀他、1・3号・須恵器、 4号・須恵器・埴輪・玉類、7号・須恵器・埴輪・ 直刀他、8号須恵器・埴輪・金環
14	矢 田 野 古 墳 群	矢田野町	円 2 基	—	不 明	埴丘破損
15	大 人 墓 古 墳	矢 田 町	円	—	不 明	消滅
16	無 名 古 墳 群	矢 田 町	円 10基?	—	箱 形 粘 土 棺 ?	消滅
17	狐 藤 古 墳	矢 田 町	円	—	家 形 石 棺	消滅
18	矢 田 新 九 山 古 墳	矢田野新町	円	—	横穴式石室・家形石棺	埴丘崩一部・主体部破壊
19	中 村 古 墳	矢田野町	円	—	切石 積横穴式石室	消滅、須恵器・金環

3. 国・郡の沿革と遺跡の動向

律令体制下国郡制施行当初の加賀地域は、越前国に属し、手取川を境に江沼郡と石川郡に分かれていた。つまり南加賀地域の全域が江沼郡（厳密に言えば江沼評）ということになる。律令以前、江沼平野を舞台に地域国家をまとめていた王家が、記紀等にみえる「エヌ」氏一族であり、国造本紀でいう「江沼国造」につながることは確かである。ただ、その地域国家としてのまとまりと郡域が等しい関係であったかどうかは、検討の余地が残されている。

月津台地は從って、越前国江沼郡に属していたし、古墳分布の上からも先に述べたとおり、少なくとも6世紀代においては、実質上エヌ氏の勢力下にあって、江沼古墳群の該期の特色的様相との捉え方が有力である。一方、6世紀後半以降は、加賀市大聖寺町周辺での官衙級遺跡の集中や、また、白鳳期にいたっての、寺院の建立が集中して5ヶ寺が競合する特異な状況からも、江沼平野における勢力の継続性は推察され、都衙推定地としても有力である。この間の月津台地の詳細な状況は不明であるが、奈良時代の集落の展開があるものの、6世紀代の集落や古墳の集中を引き継ぐべき大集落や寺院の分布は認められない。平安時代に入ると、まさに潮流が引いたごとく遺跡数は減少し、江沼平野においてもまた同様の傾向にある。北辺の梯川流域においては、6世紀後半以降からすでに遺跡の縮小傾向にあった。

823年(弘仁14年)に、越前国より分離して加賀国が設置された。同時に、江沼郡は、南北で能美郡と江沼郡とに分郡されている。その都度は、月津台地のほぼ中央を横断するという、地形的要素を無視し

たかたちとなっており、該期集落の縮小にみる当地の比重の軽さ、あるいは、政策的な境界設定の性格を色濃く示している。加賀国府の所在地としては、能美郡梯川北岸の古府台地が有力視されており、10世紀代以降には確実に国府が設置されていたとみられる。しかし、立国当初の9世紀前半では、この地域の遺跡は極めて乏しく、考古学的側からの状況証拠に欠けている。一方、金沢平野西北部の柏加賀郡においては、8世紀後半から9世紀前半に遺跡のピークをむかえており、文献による考察を含めて、立国当初の国府所在地についての疑惑が示されている。¹⁰ 梶川流域での遺跡増加は10世紀代をまたねばならず、国府所在の移転説が浮上するわけである。

以上の問題に対しては、須恵器窯の動向からも、有意な状況が看取される。江沼の古窯跡群は、8世紀後葉～9世紀前半に著しい縮小傾向をみせ、北加賀の河北窯や末窯とは全くの対称を成すのである。越前国府からの遠隔地統治の困難さを開拓することを目的とした立国措置ということも、当初の国府が北加賀に置かれた可能性を支持する一つの留意事項になるかもしれない。

この間の江沼郡は、總じて聚落遺跡が著しく乏しく、これ以後も、江沼を統治した一族の隆盛はうかがうことができない。もっぱら須恵器窯の操業や、製鉄などの手工業生産を維持させるにとどまっている。

注

- (1) 小松市教育委員会 1988 「念佛林遺跡発掘調査報告書」
- (2) 小松高校地歴班 1949 「石川県小松市蓑輪地方念佛林古墳発掘調査報告書」 小松高校地歴班
- (3) 小松高校地歴クラブ考古学研究班 1951 「江沼郡月津村矢田借屋古墳調査報告」 「研究報告」 第3輯
石川県立小松高等学校
- 小松高校地歴クラブ 1956 「石川県小松市矢田町所在借屋7号古墳調査報告」 小松高校地歴クラブ
- 小松高校地歴クラブ 1962 「借屋8号古墳調査」 「石川県高等学校文化連盟郷土部会報」 2号
- (4) 小松実業高校地歴クラブ 1954 「石川県小松市島町のみわ塚古墳調査報告」 「石川考古学研究会誌」
第6号 石川考古学研究会
- (5) 石川考古学研究会・小松市社会科教育研究会 1952 「符津石山古墳調査報告」 「石川考古学研究会会誌」
第4号 石川考古学研究会
- (6) 昭和57年、小松市教育委員会によって、周辺整備に伴う試掘調査が実施されている。
- (7) 北野博司 1986 「第3節 加賀における奈良・平安時代遺跡の動態——加賀国府の所在地をめぐって——」
「佐々木ノテウラ遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター

参考文献

- 石川県 1977 「第1分冊 地形地質」 「石川県の自然環境」
- 上野与一 1965 「第二篇 考古篇」 「小松市史」 第4巻

第III章 遺構と遺物出土状況

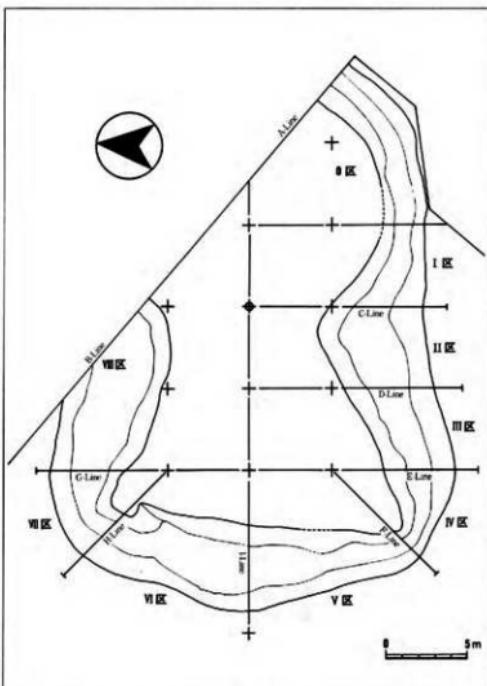
第1節 遺構

1. 調査の方法

本墳は、以前宅地であったために、墳丘は削平されていた。このため、地山面において周溝のプランを確認する調査方法をとった。厳密には、墳丘盛土の残存があった可能性もあるが、上面を被覆する土は、黒褐色の耕作土的な土か、擾乱層であり、盛土の把握を前提とした調査は不可能の状態であった。ただし、周溝の土層堆積状況は、確認面までがほぼ自然堆積の状況を呈しており、墳丘削平時には、すでに周溝は埋没してしまっていたことが推測される。このことから、周溝内の遺物出土状況に関しては、長年にわたる耕作等の軽易な人為的作用による二次的な遺物分布の形成は別として、大規模な人為的埋土の形跡は認めがたく、良好な遺存状況であったと言うことができる。

調査はまず、1 m 以上に及ぶグラウンド盛土の除去からはじまったが、当初は円墳を想定しており、調査区域の設定は、試堀で確認した周溝の位置から、予想される最大径を割り出して行った。しかし実際に、試堀で確認した周溝は、前方部部分のみに該当し、着手後に確認した後円部側は、調査地周囲の状況から、人力による拡張作業をとらざるをえず、周溝外郭ギリギリの線での調査範囲境界の設定となった。

基準点の設定は、プラン確認後、前端部とくびれ部の幅の中心点を求め、それをつないで主軸を設定した。そして、くびれ部の中心点を基本杭として、墳丘内に 5 m 方眼を組んだ。この方眼の各線は、そのまま周溝土層断面図のラインとして用いることとし、周溝外へは、横方向では南側に 3 本、北側に 1 本、主軸方向で前方部側に 1 本、それぞれ任意の距離による延長杭を設けた。さらに、前方部隅角付近を通るように主軸から 45 度の角度で振ったラインも設定した。これらの各ラインは、周溝の調査区割りの基準にもなっている（第 8 図）。また、周溝の土層断面図ラインは、北側の調査範囲境界線でも設定しているが、後円部の周溝



第 8 図 配点・区割り図

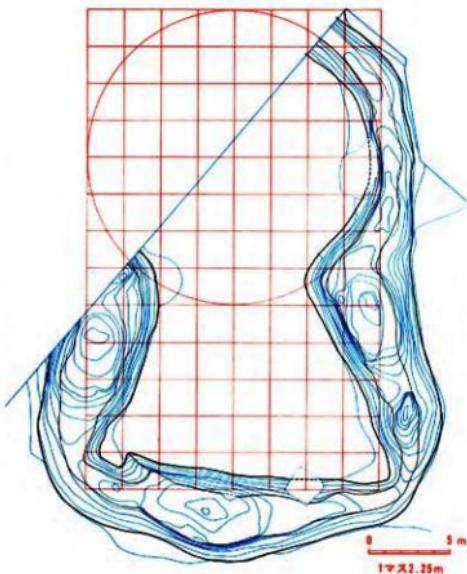
土層断面図は、この境界線における1本のみである。拡張作業を経る過程での配慮不足から、周溝を正面で割るラインの設定を怠ってしまったこと、そして、くびれ部の土層断面図ラインについても、プラン確認後の基準点設定時に把握したくびれ部位置と、実際の堀下げによって得られたくびれ部の位置が若干ずれてしまったことが悔やまれる。

2. 古墳の規模

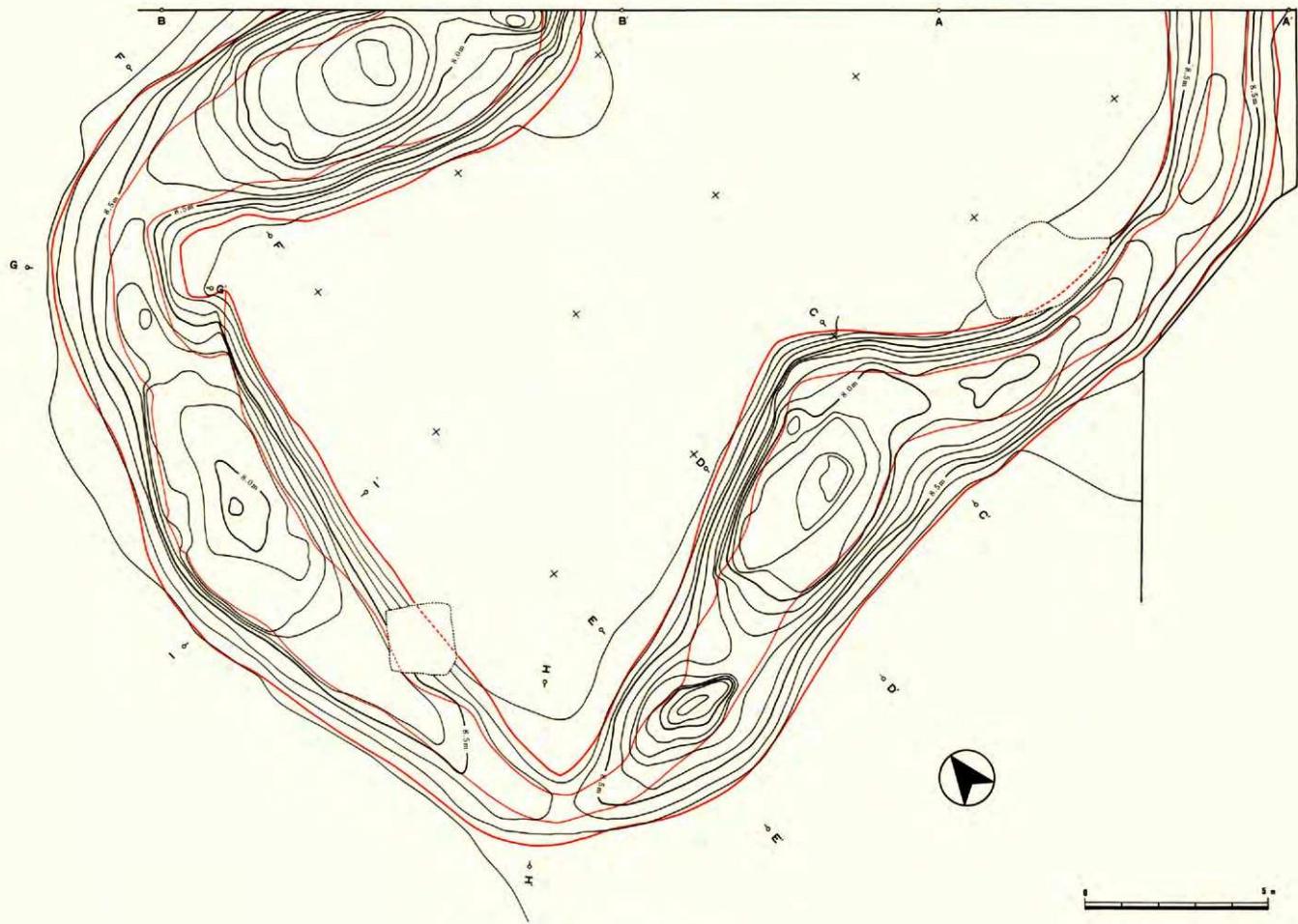
主軸をほぼ東西に向けた前方後円墳である。後円部の北側約1/3が調査区外にあるため、後円部の直径は推定となるが、周溝の内側立ち上がり位置からでは約18m、上端では約16mを測る。上端、すなわちプラン確認面で示される後円部の輪郭は、正円形の弧を維持せず、東端部で弧を強めており、直径の算出には不都合な輪郭を示している。このため、上端の直径は、まず比較的正円形に近く把握された周溝立ち上がり部の線で直径を算出して中心点を定め、その中心点から最も整合性のある円を描き出して求めた数値である。くびれ部幅は、上端で9.1m、立ち上がりからで11.4m、前方部前端幅は、上端で17.8m、立ち上がりからで19.4mを測る。尚、前端幅は、主軸と直行させて求めた数値ではなく、隅角部を直線で結んだ線で求めた距離である。調査時に設定した基準の主軸と平行となるように、後円部の中心点を通した軸で求めた全長は、上端で27.4m、立ち上がりからで29.7mである。

本墳の場合、主軸の認定に関しては苦慮する。というのは、後円部の中心点を定めたものの、前方部前端のラインを主軸と直行させるという原則に立った場合、前方部は著しく左右非対称のものとなってしまうのである。ここで注目される

のは、北側隅角の造り出し的な突出部の存在である。この突出部は幅約1.8mを測り、くびれ部側からはやや外反して膨らみ、前端線ではえぐりを入れるように造り出している。この突出部を造り出す意図が、前端部のラインを主軸に対して斜傾させる要因となった可能性も指摘できる。ただ、左右非対称の前方部もあり得ることであり、また、前端部の周溝立ち上がりが示すラインに注目すれば、剣菱形の可能性すら考えることができる。ここでは一応、調査時に設定した主軸方向と平行となるようなかたちで、後円部直径の八等分を単位とする区割り図（第9図）を提示しておきたい。尚、後円部の直径は、周溝内側立ち上がり部からの計測値をもととしている。本墳の場合、あくまでも地山面において検出した墳形であり、墳丘をある高さで横かう裁断した形態にすぎない。墳丘が



第9図 平面企画



第10図 古墳測量図(S = 1/100) - 15~16 -

残存していたなら、墳丘裾が別のかたちで把握された可能性もあり、先に問題とした前方部、特に、周溝が浅くなる南側隅角の裾の把握についてが、多くの修正余地を残している。以上のようなことから、築造企画とそれを念頭においた墳形の概念図化に関しての結論は保留としておきたい。

3. 周溝

(1) 形態

周溝は全周するもので、外郭においても若干のくびれを成し、墳形に沿った形態に近い。ただし、前方部前端では外郭中央部が外側へ膨らんでいる。幅は、後円部では比較的狭く、約3m、くびれ部が最も幅広く、南側で6.5mを測る。前方部隅角部は幅をせばめ、南側で1.8m、北側で3.3mで、前端中央の最も膨らむ位置では5.3mを測る。

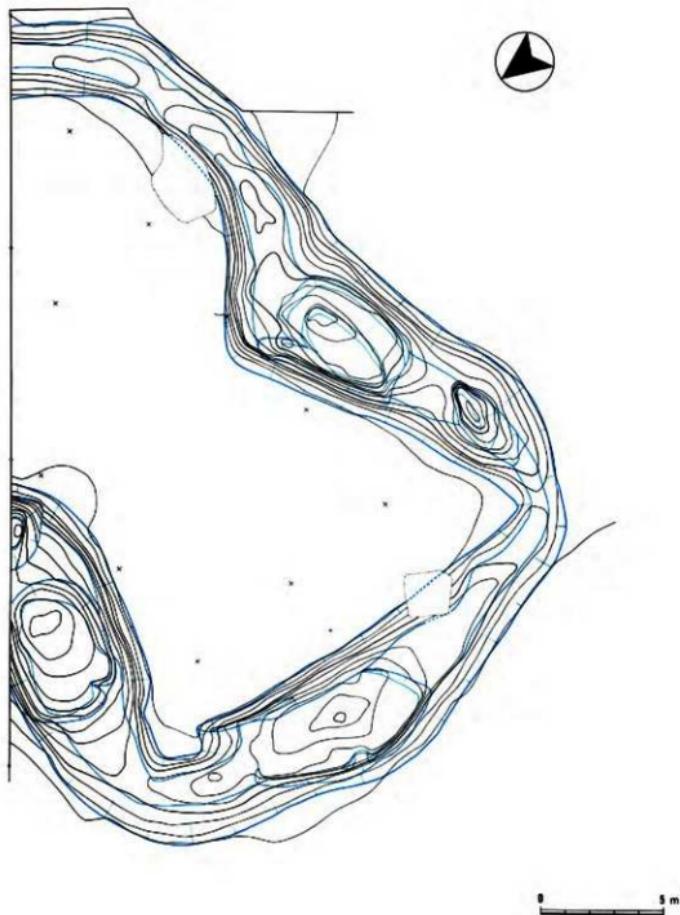
周溝のコンタ測量は、10cmコンタと細かくした。これは、墳丘が残存しておらず、周溝の落ち込み状況の詳細な把握を主眼としたためである。これによって、かなり複雑な底面の様子が看取される。総体としては、後円部の周溝が深い傾向を認めるが、全体をとおして言えることは、底面の起伏が激しく、それも、単に乱れているのではなく、土坑状落ち込みの単位が連鎖し、深い部分と浅い部分が一定の間隔をおいて繰り返す状況を呈していることである。上面からの深さを示すと、後円部では40cm内外、最も深いくびれ部では、擦り鉢状に凹み、南側で約140cm、北側で約130cmを測る。南側前方部側邊では、くびれ部から一旦深さを減じて50cm程になるものの、再び隅角寄りで急斜な擦り鉢状の凹みを成して、深さは100cm近くとなる。前方部隅角部では、最も浅いブリッジ状に近いかたちとなり、南角では15cmを測るに過ぎない。前端部中央で再び深さを増し、100cm近くを測る。

第11図は、墳形に沿った周溝の立ち上がり線の把握を念頭においていた大局的視点で変換線を求めた図面とは別に、周溝内で把握できる傾斜変換線を主体に捉えたものである。このように、深い部分は、スムーズな傾斜で連なるのではなく、明らかな傾斜変換線を把握できるような「土坑」となっている場合が多い。これはまさしく、周溝掘削土を盛土に利用する際、墳丘各所の需要に応じて不均等に周溝を掘削した結果と考えられる。すなわち、くびれ部近くが最も深いのは、前方部と後円部両方へ盛土を供給した結果であり、また、前方部の方が総じて深いことから、比較的高い前方部を成していたことも予測できる。土坑状落ち込みが間隔を空けて存在することから、周溝掘削にかかる人間の作業単位（位置的分担）の存在についても推測可能である。均一な周溝掘削を前提として、墳丘各所盛土に配分するやり方との違いを注目しておきたい。

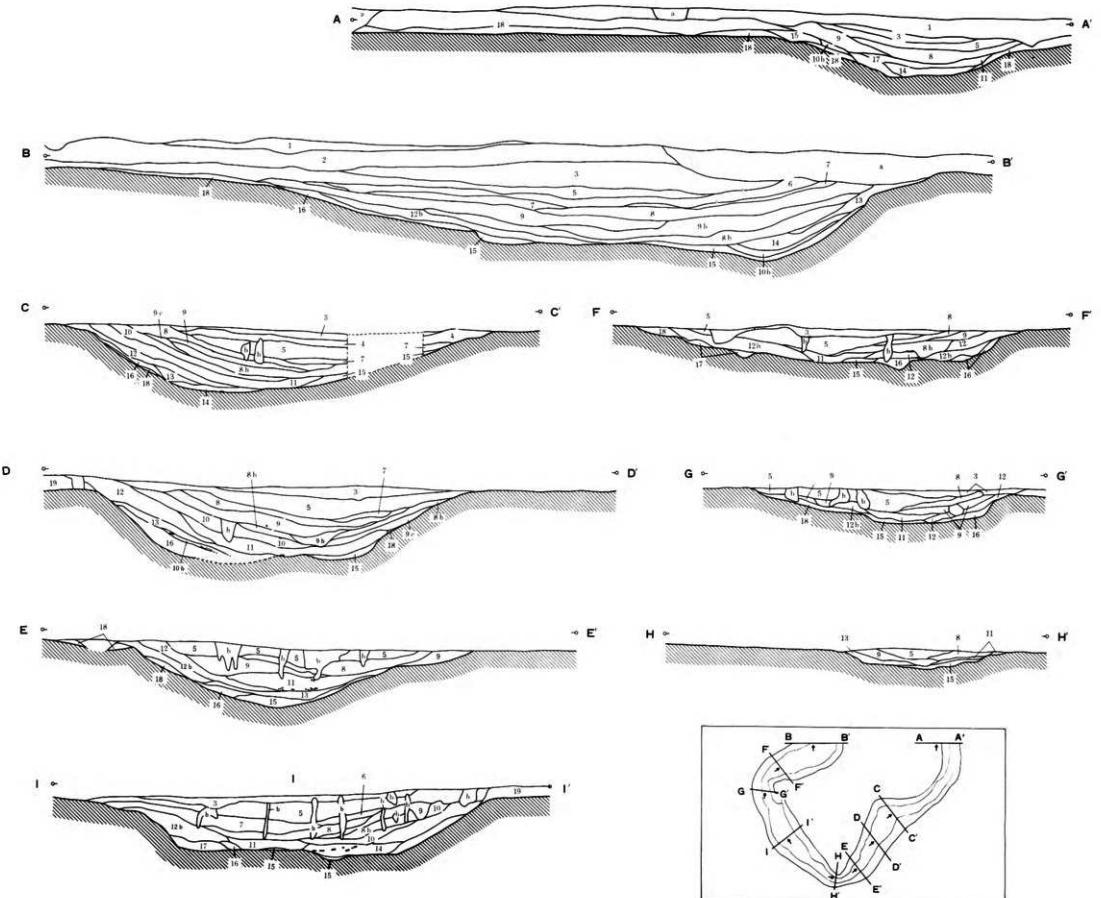
(2) 土層堆積状況（第12図）

周溝の浅深が激しく、深い部分では、濃淡の反復等を増して、より多くの分層を可能とするような状況にあったため、全体の土層対比は非常に難しかった。堆積の状況は、ほぼ墳丘側からの流れ込みの傾斜を示している。基本的な色調は、暗褐色から黒褐色を主体とし、地山土の含有量や濃淡等によって19層に分けられる。そして、同一性質の土層で、間層の介在によって細分されたものを含めると、都合23枚の層に分けたことになる。このなかで10層は、地山土の含有が多く、明るい色調を呈しており、他の暗・黒褐色系の土とは明確に性質的差異を認める層で、盛土表層の崩壊土の可能性が強い。また、この層中には、凝灰岩の層と思われるものが混在することから、主体部を凝灰岩を用いた石室としていた可能性も考えられる。遺物の垂直分布の状況は、この10層の下位を中心としており、これを境に上層と下層に大別しておきたい。上層の8層と9層は、間層の介在に伴う細分が進んでいるが、周溝の深い位置であるがゆえの現象と考えてよい。下底の15層は粗粒で、ある程度水の影響を受けたと考えられる1次堆積土である。上層、下層及び下底層の形成過程に関しては、第2節の中の垂直分布の項で触れる。

造溝全体を被っている表土層に関しては、黒褐色土を主体としており、周溝堆積土との切り合い関係の把握に曖昧な点がある。Aラインの土層断面図では、2層は、9層下位にもぐりこんで把握しているが、Bラインでは全体を被覆する層としており、また、旧表土的に把握した19層についても検討余地が残る。これらは、調査時の検討不足による矛盾点である。



第11図 周溝内落ち込み平面図



土層註

- 地山 明黄褐色(橙)色土
 1層 淡褐色土：地山土粒・ブロック多量含有の耕作土。
 2層 黒褐色土：比較的均質な表土層。
 3層 増褐色土：柔らかい。覆土較上層。
 4層 黑褐色土：やや軟味を帯びる。柔らかい。
 5層 暗(黒)褐色土：堅く、しまり良い。
 6層 増褐色土：まれに5層と7層の間で嵌入する明るい層。地山土粒・ブロック(5~7mm)少量含有。
 7層 黑褐色土：地山土粒・ブロック(2~3mm)微量含有。非常に堅く、しまり良い。
 8層 黑褐色土：較軟、黒味強く均質。堅く、しまり良い。同質層が下位で認められる場合があり、これを8b層とする。
 9層 (暗)褐色土：地山土粒・ブロック(2~5mm)中量含有。極めて堅く、しまり良い。8層と8b層とに分離させて嵌入することが多い。この場合、やや黒味を増して8b層との間中の色調として分離されることがある。これを9b層とする。また、8b層下位でも同質層がみられる場合があり、これを9c層とする。
 10層 暗(明)褐色土：地山土粒・ブロック(1~5mm)多量含有。黃白色の凝灰岩質軟質礫片(5~10mm)少量含有。11~14層下位でも同質層がみられる場合があり、これを10b層とする。
 11層 黑褐色土：遺物少量含有。
 12層 暗(黃)褐色土：地山土粒・ブロック(1~2mm)多量含有。同質層で、黃褐色土の含有がやや乏しい点で分離されたものを12b層とする。
 13層 黑褐色土：12層と同様地山土を多量に含むが、マトリックスは褐色より黒色主体。土質は粗粒で、焼土様の小ブロックを時折含有。
 14層 (黒)褐色土：柔らかい。遺物多量含有。
 15層 黑褐色土：13層に似るが、さらに粗粒で、サビ色の小礫を多量含有してガリカリしている。大粒の地山土ブロック(10~20mm)少量含有。
 16層 暗黃褐色土：地山土粒・ブロック(3~5mm)多量含有。地山土粒の含有量で濃淡のムラがある。
 17層 増褐色土：比較的均質で極めて堅く、しまり良い。地山土ブロック(3mm)微量含有。
 18層 増褐色土：地山土粒多量含有。地山崩壊土または地山漸移層。
 19層 黑褐色土：旧表土の可能性がある均質な層。

a 掘削層

b 木根状軟質部

c 地山土ブロック

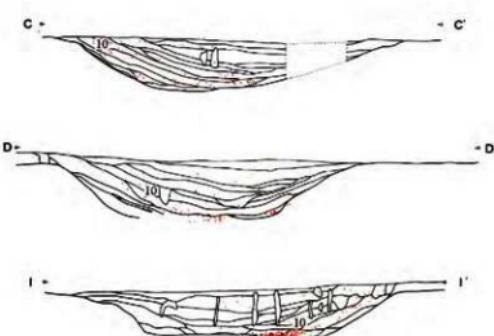
第2節 遺物出土状況

1. 検出状況と垂直分布（第13図）

周溝内には、埴輪片を主とする極めて多量の遺物が含まれていた。その量は、墳丘に立て並べられていた埴輪のほぼ全てが周溝に落ち込んでいたと思わせる程である。しかも、埴輪のほとんどは細かい破片となっていた。そして、完形に近いものがその場で割れたというよりは、小破片に碎けたものが流れ込んだような、あるいは、碎いて一括投棄（またはその場で碎いたか）されたような状況を呈していた。この様子が特に明らかだったのは形象埴輪の集中区域で、人物埴輪の数や馬形埴輪の存在さえも全く予想できなかったのである。遺物の取り上げに際して、出土状況図をドットとせざるを得なかったのは、こういった理由によるものである。

遺物は、周溝上層から含まれているが、最も多くの検出をみるのは、おおよそ10層下位の下層においてである。先に述べたような検出状況は、この下層においてであり、一方、最下位の15層に含まれる埴輪や須恵器は、わずかではあるが、その場で割れたような状況のものがみられる。従って、遺物の埋没過程には、4つの段階が想定される。第1の段階は、埋葬時の祭りとして据え置かれたか、または投棄されたもの。第2の段階は、15層等下底層形成時に落ち込んだもの。この段階は、埴輪を樹立した古墳として一定の管理が保たれていた段階である。第3の段階は、大量の破片が含まれる段階で、第4の段階が、上下のレベル差を大きくもって遺物が散在する上層形成の段階である。第1と第2の段階の区別はつけがたいが、他の各段階は明確な差が認められる。特に、第3と第4、すなわち上層と下層の垂直分布状況を比べると、下層がもつ多量の遺物は、かなり短期間のうちに埋没したものと考えることができる。そして、同一個体が一定の範囲に集中する（個体別分布図参照）にもかかわらず、破碎状況が極めて激しい点を考慮すれば、一定期間を置いた後に、墳丘の「かたづけ」が介在していた可能性もでてくる。墳丘樹立の埴輪が、樹立時の被葬者に対してのみ意味を持つものであり、そして、主体部が追葬可能な施設であったとすれば、その段階で主体部内の副葬品同様、墳丘の埴輪等もかたづけられたのかもしれない。あるいは、もっと別の意図で払拭されたのかもしれない。この下層には、築造年代よりは新しく位置付けられる須恵器

(15, 20, 32) が含まれており、この須恵器の段階が、廐棄行為が行われた時として有力である。以上、遺物理没過程に4つの段階を想定した。本来ならば、個々の遺物について、接合状況を含めた垂直分布のあり方を検討しなければならないのであるが、時間的な制約から断念することになった。また、第1・第2の段階と第3の段階の区別については、調査時の注意を必要とするものであるが、極度の遺物密集により、その把握には至らなかった。



第13図 セクションベルト内遺物垂直分布図 (S = 1/80)

2. 平面分布（第15図、区割りについては第8図参照）

遺物はほぼ周溝全域から出土している。ただし、後円部の0区南半で約5mにわたって空白部が形成されており、また、周溝の深い部分により多く集中する傾向にあるため、特に浅い前方部隅角部での出土は乏しい。円筒埴輪はほぼ全域に分布し、一方、形象埴輪は前方部北側からくびれ部（Ⅶ区・Ⅷ区）に集中している。埴輪分布の詳細については、別章で検討したい。須恵器は、南側くびれ部（II区）で特に集中している。このくびれ部内側立ち上がり近くでは、3・14の蓋環と、19の甌、17の壺蓋の4点が小さく浅い土坑状落ち込み内に一括して埋置されていた（第14図）。また、この周囲で、2・4の壺蓋と5の坏身が底面に貼り付いたかたちで検出されている。

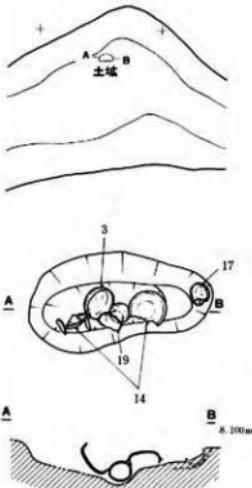
この他については、ほぼ下層に包含される遺物集中に混在する状況であった。蓋環は、II区とVI区の2箇所で一定のまとまりがあり、特にVI区では、蓋環のみで構成される集中を成している。提瓶は両くびれ部に1個体ずつ、甌は南側に限られ、0区とIII区に1個体づつ、II区に2個体検出されている。甌は全てII区からの出土である。また、鈴台付高环はI区出土である。下底の須恵器は別として、出土状態から考えると、埴輪と同様に、墳丘の一定区域に据え置かれていたものを投棄した可能性が高い。横穴系の主体部とすれば、形象埴輪の集中から予想される入口は北側くびれ部であり、須恵器の集中するII区とは逆となるため、主体部から取り出されて廃棄されたものではないと考えた。

一方、土師器の椀が墳丘地山面に貼り付くように2個体近接して検出されている。土師器の検出はこの2点のみで、その出土状態から考えると、墳丘築造前に、何らかの目的で廃棄されたものと予想される。

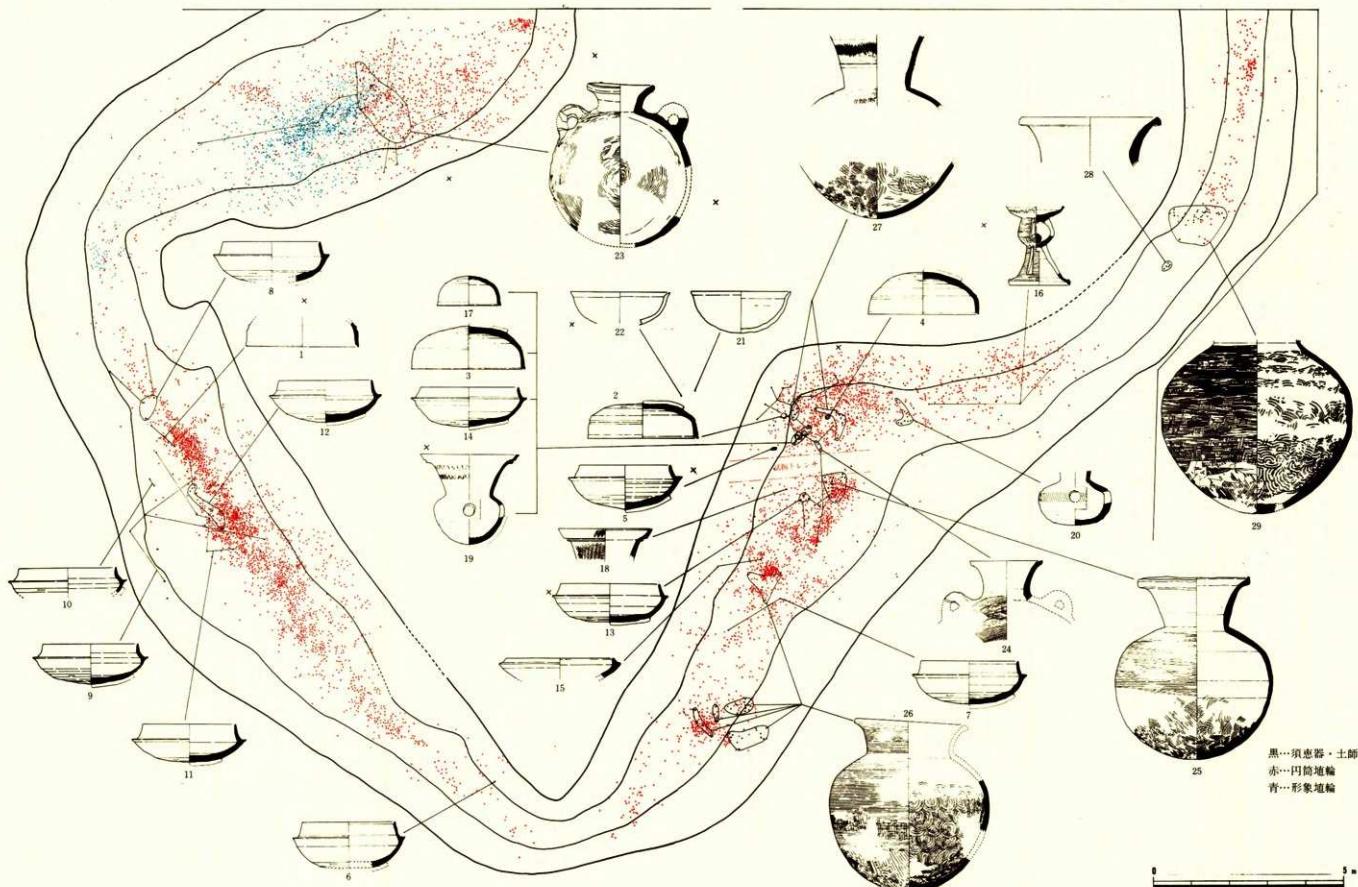
小 結

本項は、墳丘が削平されていたために、墳形の企画や規模について、確定することができなかった。全長に関しては、30mを越えるものではなく、月津台地上では、御幸塚古墳や借屋8号墳と同規模の小型の部類に属する。周溝については、月津台地の古墳において周溝を全掘した例ではなく、同時期のものとなると、江沼古墳群全体をとおして初めての調査例となった。周溝のみの調査となつたものの、遺物のほとんどが周溝内に落ち込んでいたと思えるようなありかたも、本調査の意義を大きくした。このような例が通例であるとすると、墳丘のみの調査を経て削り取られた借屋古墳群についても、地下に遺物を多量に含んだ周溝が残存している可能性も考えられる。追葬を伴うような古墳で、墳丘の埴輪がどのように扱われていたのか興味がもたれる。あるいは、追葬によるものではないにしても、このように盛大な埴輪祭式が行われた古墳が、後々どう扱われたのか、周溝内の遺物出土状況には人為的な作用が働いていないのかという点においても、統括的な分析の必要性があるようと思われる。

遺構の記述に際しては、調査時の注意不足を痛感することが多く、矛盾点はそのまま提示するしかなかった。築造企画の把握や、突出部の評価等については、今後も検討を重ねてゆきたい。



第14図 II区下底土坑 (S=1/20)



第15図 遺物平面分布図 — 23~24 —

第Ⅳ章 出土遺物

出土遺物の総点数は約1万点で、須恵器片・土師器片が約350点、埴輪片が約7650点を数える。埴輪片のうち、形象埴輪片が約1350点含まれる。以下に、出土遺物の諸特徴を述べるが、円筒埴輪に関しては資料提示のみとし、次章において考察的要素を含ませた上での分類・記載を行なった。

第1節 須恵器・土師器

確認した器種別個体数は、須恵器では、壺身14、壺蓋4、小型蓋1、高環4、甕3、瓶1、提瓶3、甕6、土師器では、壺2で、総数は37個体におよぶ。土師器の梶を除いてすべて周溝からの出土で、極めて大きい数字といえる。しかし、そのすべてが完器として築造当初に周溝へ投棄あるいは据置されたものではないことは、残存率が極めて低い個体が含まれていることからも推察できる。

1. 須恵器

壺 蓋（第16図1～4）

口径は14.5～15.0cmとほとんど開きはない。天井部の形態では、扁平な2とやや丸みをもつ3及び強い丸みをもつ4というように各々で三様のあり方を示している。口縁部と天井部の境の稜は、天井部の丸い3・4では、浅い凹線がめぐり、痕跡程度となる部分もある。2では、同様に凹線であるものの比較的深いV字形に近く、凹線下底に鋭い微細沈線を形成している。しかし、いずれの場合も稜は丸い。1の稜は上方に突出した隆起線となっているが、凹線形成時に粘土が天井部輪へせりだしたかたちのものであり、天井部側からは稜形成としてのこれに対する補正はみられない。口縁端部はいずれも弱い段をもって内傾する。端部先端は、1・2が比較的鋭く、他は丸い。

壺 身（第16図5～15）

口径は12～13cmの範囲に分布する。口縁部の形態から4つの類に分けることができる。第1類は、口縁端部に内傾する面をもつ6・7であるが、この面は図から受ける印象ほどには実際明瞭ではなく若干丸みをおびている。8でも僅かながら内傾する面の面影をみることができる。第2類は口縁端部が丸くおさまるものであるが、口縁部立ち上がりの状態によって細分される。第2a類は、一旦付け根から内傾したあと強く屈曲して直立ぎみに端部にいたる9・10、第2b類は、ごく緩いカーブを描きながらスムーズに端部に至り、口縁部高が2cm近くを計る11・12、第2c類は、直線的に内傾し、口縁部高も1.5cm前後とやや低い13・14である。

受部は水平にのびるものとやや上方にのびるもののが各類に混在するが、第1類では、受部付け根に浅い細沈線がめぐって口縁部立ち上がりとの境界を明瞭にしているのに対し、その他のものでは弧状に連続して境界が不明瞭となる傾向にある。端部は概して丸みをもっている。

体部形態では、第1類が底部から受部までの高さが約4cmと深い椀形を呈し、第2b類・第2c類では約3.5cm以下のものが多くなり、皿状に近い形態となるものもみられる。

15は時期の全く異なるもので、口径は14cmをはかり、鈍厚な短い口縁部と受部をもっている。

鈎台付高壺（第17図16）

壺部と脚部の間に鈎もつ特殊な形態の高壺である。壺部は口縁部を欠失していて形態は不明である。体部には波状文が施されているが、これは櫛描きではなく、細いヘラ状工具様のものによって描かれたと思われる1単位の極浅い凹線である。この波状文より下は屈曲して底部となり、ヘラケズリが施され

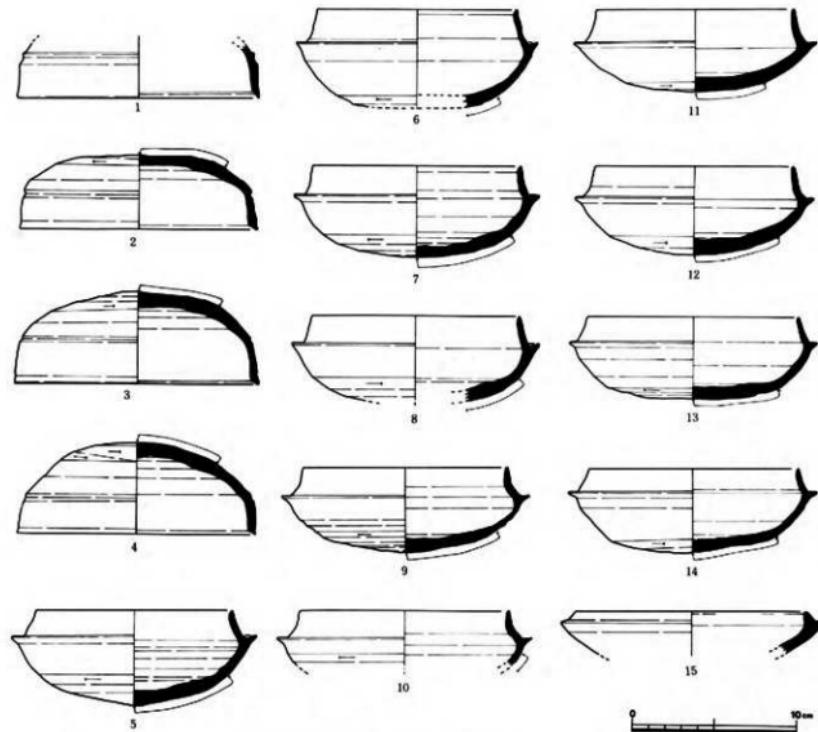
て基部近くで後出のナデがみられる。鈴部はやや下ぶくれの截頭卵形を呈して最大径4.9cmを計り、外面はカキ目調整で三方に長方形スカシを穿つ。内部に直徑約1cmの陶丸を1個含む。脚は、基部から緩くラッパ状に開いて、裾部でやや強く外反して脚端部に至る。脚端部は、上端を上方にやや突出させており、下端は比較的鋭い接地部として仕上げられている。外面カキ目調整で、三方に長方形スカシを穿つが、鈴部のスカシとは、二方向でズレがみられる。

蓋（第17図17）

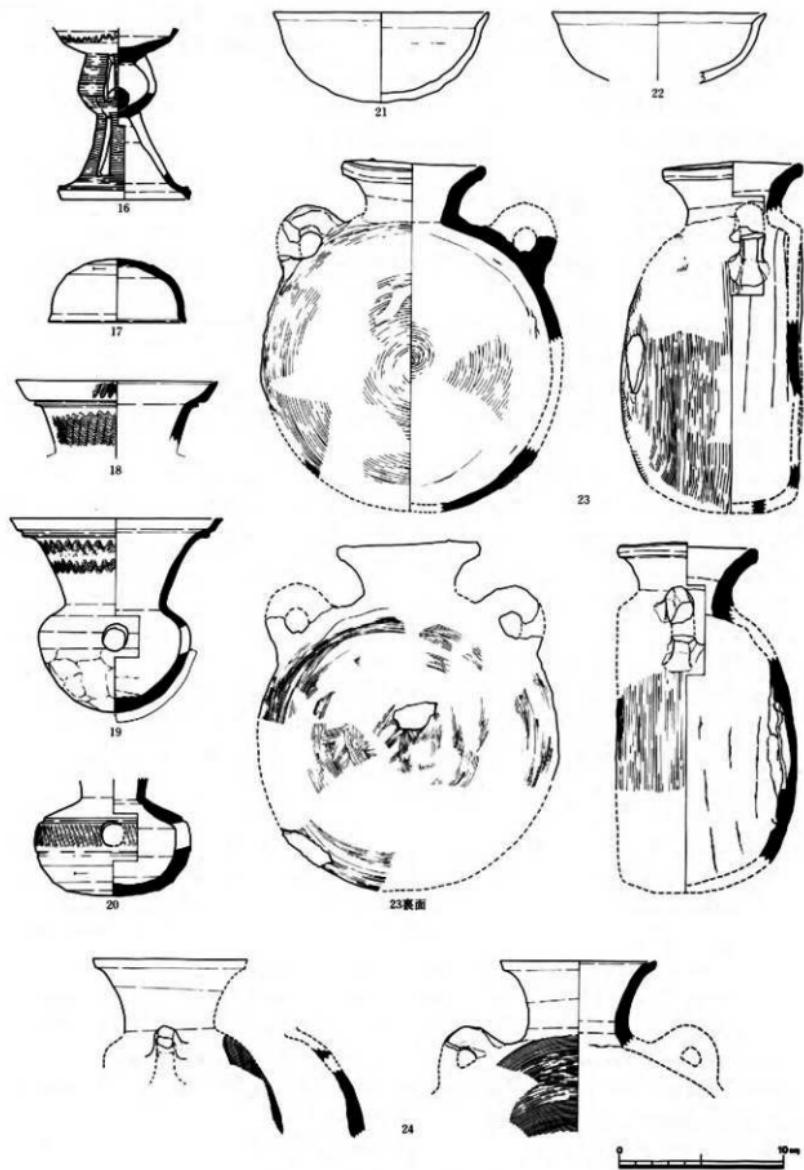
口径8.4cmの小型の蓋で、身に該当するものは検出されていないが、有蓋の短頸壺につくものであろう。天井部が丸く、全体形状は半球形に近く、口縁部先端近くでやや外に開く。口縁部端は、丸みのある先端から内傾して段をもつ。

鈴（第17図18~20）

18は推定口径12.2cmを計る口頸部片である。口縁部端は内傾して弱い段をもつ。口縁部下端は強く屈曲して段をもち、頸部との境に鋭く突出した1条の棱をめぐらせる。口縁部と頸部に飾描きの波状文が



第16図 出土須恵器実測図 (S = 1/3)



第17図 出土須恵器・土師器 (21, 22) 実測図 ($S=1/3$)

施されている。口頸基部からを欠失しているため、空回気的なもので推測するしかないが、口径の大きさと口縁部及び頸部の開き具合などから、頸が比較的短く、口頸高：体部高がおよそ3:4で、口径に近い胴部径を計るタイプのものになると思われる。

19は、推定口径13.0cmを計り、口縁部のみ約4/5が欠失している。口縁端部は水平な面で、平坦あるいはごく弱い凹みがみられる。口縁部の外傾は18よりやや強く幅も狭い。下端は屈曲して段をもち、その下位の頸部との境には丸みのある1条の稜がめぐる。頸部は比較的長く、口頸高：体部高は1:1に近い。頸部の上半部に2段の櫛描き波状文が施されている。体部は、径9.4cmと口径よりはかなり小さい。上半部に丸い肩をもつたちで最大径を示し、このもっとも張る部分に弱い回転ヘラ削りが認められる。それより下位は、手持ちのヘラ削りやあるいは粘土の重ね貼り、そしてナデ調整によって整美な半球形に仕上げている。

20は、口頸部上部を欠失したもので、先のものよりかなり年代的に下るものである。体部にはヘラ（櫛？）による斜位の連続刺突による文様帶を有してこの位置に円孔が穿たれ、それを挟んで上下に沈線がめぐる。上の沈線は屈曲する肩部を画し、そこから直線的に細い口頸基部に至る。下の沈線は、これより下位の底部全体を調整する回転ヘラ削りによって一部消失している。

捷 瓢 (第17図23・24)

3個体を確認しているが、図化し得たのは2個体である。23は、口径8.8cm、体部幅18.5cmを計る輪状把手をもつものである。短い口頸部は強く外反し、口縁端部はやや丸みをもちらも垂直な外端面をもって、中程には弱い凹線がめぐる。外端面下方は小さな段をもって頸部につながる。体部は、片面が平たく被蓋部側に丸い万頭形を呈し、外面をカキ目調整しているが、平坦面とその周囲の屈曲部に施されるカキ目は、被蓋部側のそれに比し原体が細かく、回転によらないと思われる断続的なものが主体を占める。また、平坦な方の内面にも、丸い方の外面と同様のカキ目調整が施されている。把手は分厚くやや荒いつくりとなっている。

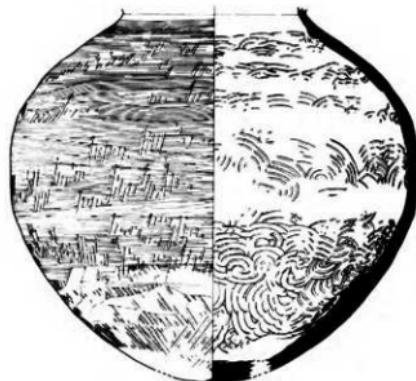
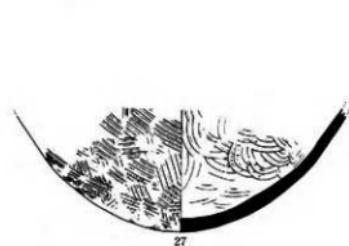
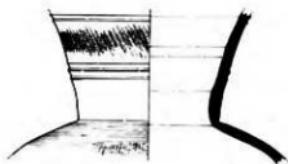
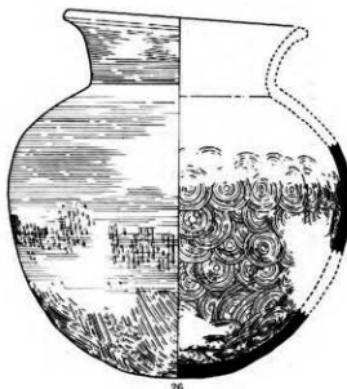
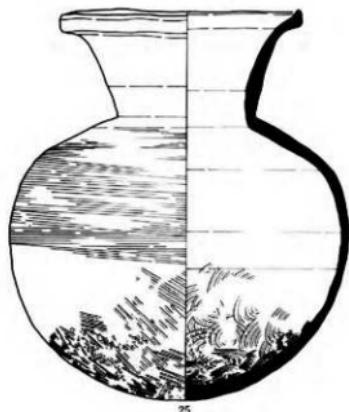
24は、口頸部から被蓋部側上部にかけての破片である。口頸部は口径9.5cmを計り、比較的長く、ゆるく外反する。口縁端部にかけては外反をやや強め、四角く垂直な外端面をもつ。端部内面には弱い段が認められる。把手は比較的分厚いが、整美なナデ仕上げとなっている。法量は23とはば等しいものと考えられる。

捷 (第18図25~29)

捷は6個体を識別しているが、図化し得たのは5個体である。形態的バラエティーの乏しさから捷として一括したが、いずれも小振りであり、分類上は広口壺と称すべきものが主体である。

25は、球洞に比較的長い口頸部のつくもので、口径14.8cmとするがゆがみが激しい。頸部は直線的に緩く外傾し、口縁部で強く外反してやや肥厚する口縁端部をつくる。中央がわずかに凹む垂直な外端面をもつが、丸みをもって上下端に至る。上端は丸いが、上方につまみ上げたかたちで内側に弱い段をもち、下端は丸いか、一部若干角張って頸部に連続する。体部は、その最大径を3/5位の高さで計るが、肩はあまり張らない。外面の上半にカキ目調整痕、下半に平行タタキ目を残すが、口頸基部にかけてのカキ目の上側及び、タタキとカキ目の合流部では、回転ナデによってこれら調整痕が消されている。底部の平行タタキ目も浅いスリケシナデ調整を受けている部分が多い。内面は、下1/2~1/3に細めの同心円タタキ目を残すが、上部にかけてはきれいにナデ消されている。

26は、25に比して短めの口頸部をもつもので、推定口径14cmを計る。頸部は緩く外傾し、口縁部付近から強く外反して丸い口縁端部をつくる。外面はカキ目調整されている。体部は、その最大径を2/3位の高さで計る。外面は、上2/3は縱方向の平行タタキを施した後カキ目調整によりタタキ目を消していく



第18図 出土須恵器実測図 ($S = 1/3$)

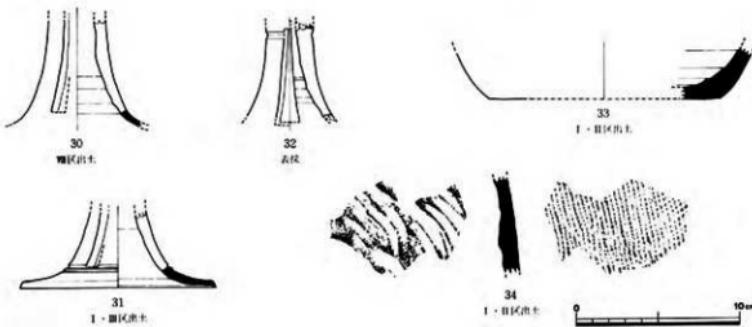
るが、下方ではやや消しが浅い。下1/3では、斜位のタタキ目が残されている。内面は細めの同心円のタタキ目で、上1/3がナデ消されている。

27は、頸部付近と底部の破片で、唯一装飾をもつものである。外傾度は低く直線的で、残存する頸部の1/2の位置に、沈線に伴う2条の凸帯がめぐり、上端にも同様の凸帯がめぐる。この両凸帯の間には1単位の非常に細かい櫛描き波状文がめぐる。口頸基部は急激に厚さを減じ、明瞭な角をもって屈曲して薄手の体部につながる。体部には、縱方向の平行タタキ目の痕跡と、それを消すカキ目調整がみられる。底部は丸底であるので、その中心点とそこからの立ち上がり方の把握に苦慮した。外面は、斜交する平行タタキ目で、内面は若干幅広の同心円タタキ目をもつ。口頸部との同体識別の根拠は、セビア色の緻密で比較的良質の胎土が、この2者にのみ共通していたことによっている。

28は、口頸部のみのもので、推定口径17.5cmを計る。外反ぎみに外傾し端部で上下に肥厚する。外端面は、上半で内傾して真上を頂点とする断面三角形の上端をかたちづくり、外端面下半は垂直で、下端に垂下する鋭い棱をもつ。頸部はカキ目調整されている。

29は、口頸部を欠くもので、図示したものの中では最大のものである。28とは焼成が異なるため区別したが、その大きさや、平面分布からすると、同一個体の可能性もある。体部の最大径を3/5位の高さで計って他とは大差ないが、底部にかけて膨らみが乏しくすばまるため、他の球状のものとはやや異なる印象をうける。外面のはば3/4という底部付近を除く広い範囲で、平行タタキ後のカキ目調整が施されている。底部付近では、スリケシナデあるいは一部ケズリ調整も認められる。内面は、中位以下に同心円タタキ目を残し、上半部では、回転ナデ調整によって消しているが、その強弱によって帶状に消し残しのタタキ目が認められる。

以上その他、小破片で、やや曖昧な復元実測となるものであるが、組成を示す上で提示必要なものも数点ある(第19図)。高坏では、3方スカシの長脚部片(30, 31)と、中位に沈線をもつ4方スカシの長脚部片(32)がある。また、瓶類では、内面に強いロクロ目を持つ平底底部片(33)、甕では、極めて幅広の同心円タタキ目を残す大型部類に属するであろう体部片(34)がある。



第19図 出土須恵器実測図 (S=1/3)

2. 土師器 (第17図21・22)

土師器は、坏のみで、いずれも墳丘地山面で検出されたものである。両者同様の形態を呈し、やや深めの腰の張らない楕円形の体部で、口縁は外反して薄くすばまり、その屈曲部内面には弱い稜線をもつ。調整はナデが主体と思われるが、表面の摩耗が激しく観察しがたい。

第2節 形象埴輪

本墳出土の形象埴輪は、人物埴輪と馬形埴輪であり、残片から推察しても、その他の動物あるいは器材埴輪の存在は考えがたい。検出した形象埴輪片の9割以上の個体識別及び接合を成し得た。そして、形象埴輪集中区域であるくびれ部の一部は調査区外にあるものの、残片の量や個体識別の状況から、本墳に伴う形象埴輪の組成を全て満たしているものと判断される。

尚、個体毎に必要属性項目は異なり、多岐にわたるため、観察表としての記載は基本事項にとどめ、すべて文章中に説明・記載することにした。そして、製作技法については、各個体の説明文での記載の他に、次章で統括的に補説することとした。

1. 人物埴輪（第20図～第38図）

人物埴輪は11個体あり、その全てが半身像である。それぞれの個体の表記にあたっては、装身あるいは所作の特徴の一部を抽出し、その様態の表現を冠して人物像の分類上の名称とした。こういった表記方法以外に、例えば「巫女」「馬子」等の人物本来の性格を示す慣例的な名称を付すこともできるが、ただそれが一部の人物にのみ言えるものであって、全てに適用できないこと、尚且つそれが推測である以上、あくまでも注解として使用すべき名称であると考えている。しかしながら先の特徴抽出の基準についても、多分に主観的要素を含むことになるのが実際であるが、個体別表記上の便宜的なものと理解していただきたい。

尚、解説文中の「左右」の使い分けは、人物埴輪を主体として捉えている。

人1・櫛掛け袴姿衣の女子（第20・21図）

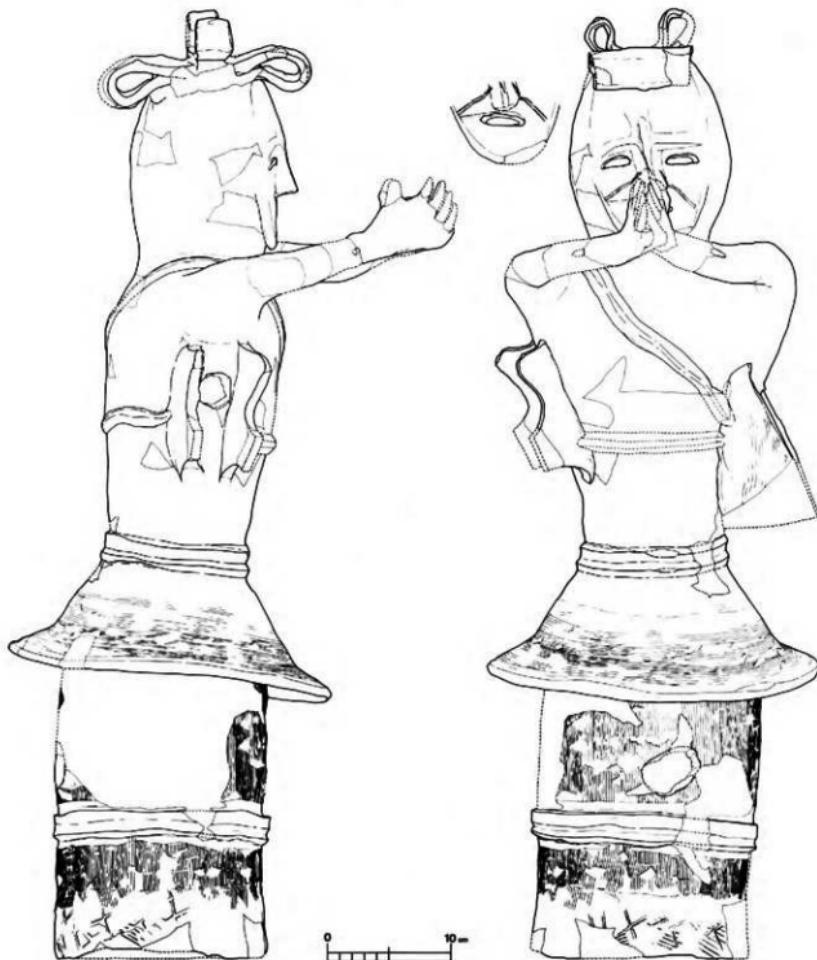
高さは、半身部約55cm、全体77.2cmを測る。焼成は良好で、色調は全体ほぼ赤橙色（10R6/6）、一部赤灰色（10R5/1）を呈する。頭には島田櫛、胴部には櫛と袴姿衣の表現があることから、巫女像と考えられる。

髪は、長さ約18cm、幅約8cmを測り、一枚の粘土帯を前後で折り返して膨らみをもたせ、頭頂部中央で済したリボン状とする。従って頭頂部では、粘土帯の中央に両端が重なって、大きく開口している頭頂部内におさまり、さらに粘土が被覆されて粘土帯自体は頭部に埋没したかたちとなる。そして、その上に幅約2.5cmの粘土帯によって直交するリボン状の結びが表現される。頭部は長卵形に近く、ほぼ中央で最大幅を測る。側頭部から僅かに平坦化して綫に長い額を成す。額の中央には、上から下へ徐々に高さを増して継走する丸みを帯びた隆起（以下「額央隆起」と呼ぶ）があり、眉間を経て鼻筋に連続し、鼻先まで直線的に高さを増してゆく。眉間をすぎてからの鼻筋は比較的鋭くよく通る。眉は、額から緩く立ち上がり、稜を成した後、眼窩へ深く落ち込む。眉間の隆起よりはやや低く落差を持ち、左眉の稜は横へまっすぐ延びるが、右眉はやや右下がりの弧を描く。目及び口は長楕円形に比較的大きく切り抜かれている。額面上の配置では、鼻筋は斜行し、眉や目も左右がアンバランスで、全体に重んだ印象を与える。額から顎にかけては舌状の輪郭で頬部から強く屈曲して張り出し、顔面の範囲を明瞭にしている。また、1本の細い沈線が眉間上方から鼻筋上にかけて描かれており、さらに、2本単位の細い沈線が左右の小鼻上から両頬へ「ハ」の字にひらいて描かれている。耳の表現はない。

長い両腕は前に差し出し、口の正面で手のひらを合わせて祈りの姿勢を示す。親指は垂直に立て、あとの指は揃えて斜め上方を指している。前腕中央付近には、一本の棒が両腕を横方向から貫通していたことを示す径5mm程の穿孔が対峙する。これは、製作・乾燥段階で、両手の合わせを維持させるとともに、前に差し出した腕の重さを支えるための工夫の痕跡と考えられる。恐らくこの貫通する横棒は、別

の木か何かでT字状に中央で支えられていたのであろうと予想できる。

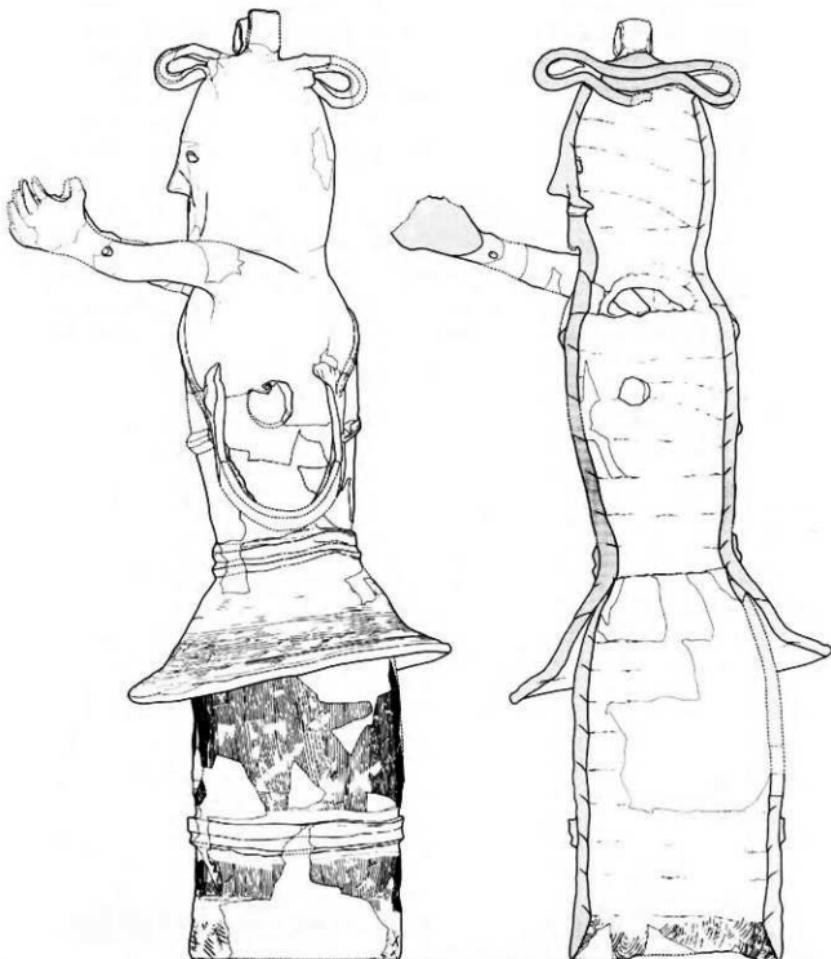
胸部は、肩幅約23cm、腰幅約12cmと、腰の細い胴長逆三角形の体型である。上衣は、右脇に「弓」形の2枚の粘土板を矢羽根状に付し、左脇で、裾広がりのU字形袋状とした、いわゆる意須比あるいは製婆衣の表現である。袋状とした粘土板の表裏には、部分的にタテ方向の荒いハケ目状の痕跡を残すが、胴部へ取り付ける前か後かの判別はしがたい。また、幅約2cmで断面山形の襷（細帯）が右肩から左脇を通り、胸の中位で横に一周する。結び目の表現はない。両脇には、径2.5~3cmの円形の透孔が穿たれている。腰は断面M字状の凸帯がめぐり、それ以下は短くラッパ状に大きく広がる衣裾となる。裾下半



第20図 人1・襷掛け製婆衣の女子 (S=1/4)

にはカキ目調整痕を多く残すが、部分的にナデ消されている。裾端近くで浅い凹線がめぐり、やや丸みの強い端面をもつ。

基台部は、裁頭砲弾形（以下全ての人物共通）で、底径17.5cm、高さ約30cmを測り、上約1/4が衣裾内に収まる。全体はタテハケ調整で、下1/3の位置で凸帯が付される。基底部5cm程の範囲でハケ目は斜めナデにより消されており、さらに叩き締めによる調整が施されて、断面は基端へ鋭く尖る。内面の当て具は同心円文で、外面は柾目板材に×印の刻線を施したものを使用している。凸帯の上位で前後に対向する径4～5cmの透孔をもつ。



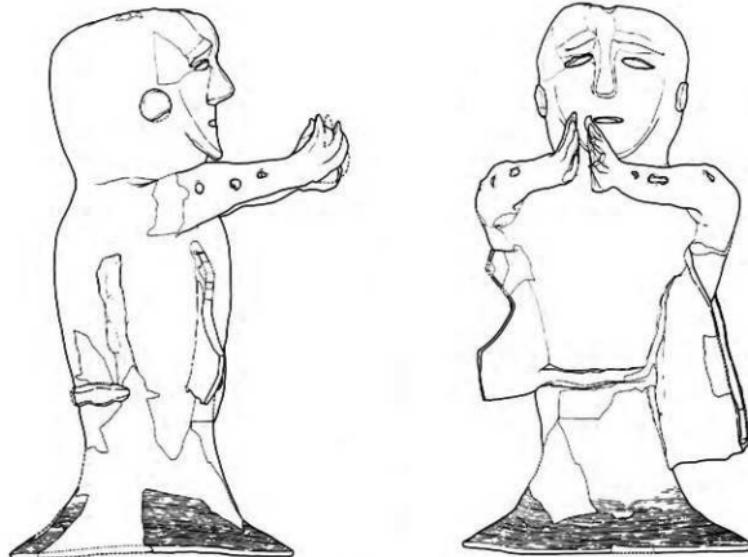
第21図 人1・棒掛け袈裟衣の女子(S=1/4)

人2・婆娑衣の女子（第22・23図）

婆娑衣の表現があることから、巫女像と考えられるが、髻及び基台部を失っており、現存高44.8cmを測る。また、1とはかなり作風を異にし、硬質焼成で、色調も灰赤色～暗赤灰色(7.5R 4/2-4/1)を呈して、いわゆる紫色に近い。

頭部は、眉の位置で最大幅を測り、額は、側頭部及び頭頂部から連続して丸く狭く、面を持たない。顔面の輪郭は、顎から平坦な頬へは緩やかに連続して明瞭ではないが、頬のつけ根より顎先に向ては除々に頬からの張り出しを強めて、舌状の輪郭としている。顔面は平坦で、鼻下から顎先に向かってややしゃくれた風貌である。額央隆起は強く丸みを帯びて高く、眉間をすぎてから目の位置で、眼窓の凹みに準じて落ち込んだと鼻筋として鼻先へ再び高くなる。鼻の立ち上がりは急斜で高く、鼻筋は絶じて丸いため横断面逆U字形に近い。眉は眉間の隆起より低く、やや弧状の下がり眉で、比較的しっかりした稜を成して眼窓に深く落ち込み、鼻のつけ根と連続する明瞭な立ち上がりをつくる。目と口は木葉形に切り抜かれ、耳は側頭部前寄りで径2.5cmのボタン状に貼り付けている。髻の欠落している頭頂部は径5cmの円形に開口している。頭部の額側中央部には浅い溝状の凹みをもち、そこに貼付物の剥落痕が認められる。

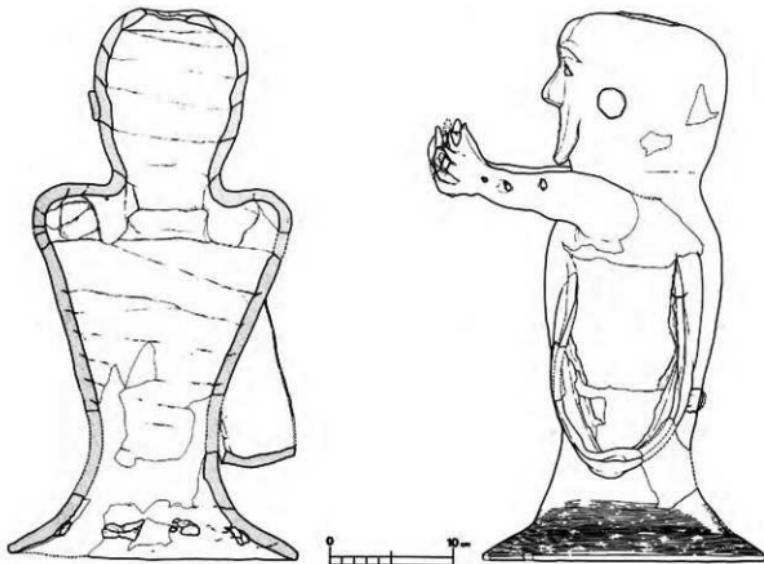
腕は人1と同様の動作をとるが、両手のひらは1cm程離れており、意図的なものかどうかは判らない。各指は上反りぎみで、揃えて斜め上方を指すが、左手指が6本かと思われたり、親指らしい表現を欠くなど、やや不自然な印象である。指の取り付けは、腕先を平たく潰して指状の手のひらとし、その上に粘土を棒状に丸めて作った指を並べている。両腕には人1と同様、製作段階に付随する孔が認められるが、様相はやや異なる。孔は両腕に3個づつ並列している。まず、左腕手先側の孔は、斜め前方やや上



第22図 人2・婆娑衣の女子(S=1/4)

から右脇下に向かうものの貫通はせず、深さ約2cmを測る。左腕中央の孔と、右腕手先側の孔は、真横から水平に1本の棒が両腕を貫通できる位置にある。残る、左腕の1つ、右腕の2つの孔は、僅かに上方寄りの横方向から穿たれているが、対向する組み合わせは無い。また、両腕を貫通する孔では、孔の径は外と内では変わらず、乾燥段階における棒の痕跡も明瞭であるが、その他では、内側の抜ける部分の孔は小さくやや歪んでおり、外側の挿入部では孔外輪が僅かに隆起するなど、これは乾燥前に抜き取ったか、あるいは差し込み後にやや引っ張りぎみで棒先端を腕内に留めたかである。意図からすれば前者は考えがたく、外へ突き出させた棒を外側で支える工夫を想定したい。貫通させた棒は、人1と同様、両手の合わせの維持を目的に含めたものと考えられる。

胸部は、肩幅約21cm、腰幅約11cmの強い逆三角形の体型を呈し、胸部の膨らみも比較的強い。製裘衣は人1と同様のパターンであるが、より大きく表現されている。右脇の羽根状粘土板は、後部の1枚は欠失しているが、前部のものは、後方に向けてやや内寄りで、取り付け部へは粘土を塗布して胴部からスムーズに連続させている。左脇のU字形袋状の粘土板は、上端部で接合を維持しているものの、他のほとんどの部分が、焼成の段階で胴部から剥離し、浮き上がった状態となっている。胴下半部には幅1~1.5cmの凸帯がめぐるが、帯の両端は前後ともに、両脇の粘土板の上へ僅かにかかったところで途切れさせ、粘土板に狹まれた脇の部分には凸帯はない。人1の腰部凸帯とは異なり、縫掛けではないが、それと同様の衣服を押さえる細帯と考えられる。腰部凸帯はなく、細帯から衣裾へスムーズにつなげ、接合部には、胴部から縦方向になでおろして粘土を裾へ被覆させた痕跡が、焼成色調の違いで観察される。衣裾全体にはカキ目調整が施されており、端部は比較的丸くおさめている。内面には、基台との接合・押さえのために隙間に詰め込んだ粘土塊が断続的に貼り付いている。

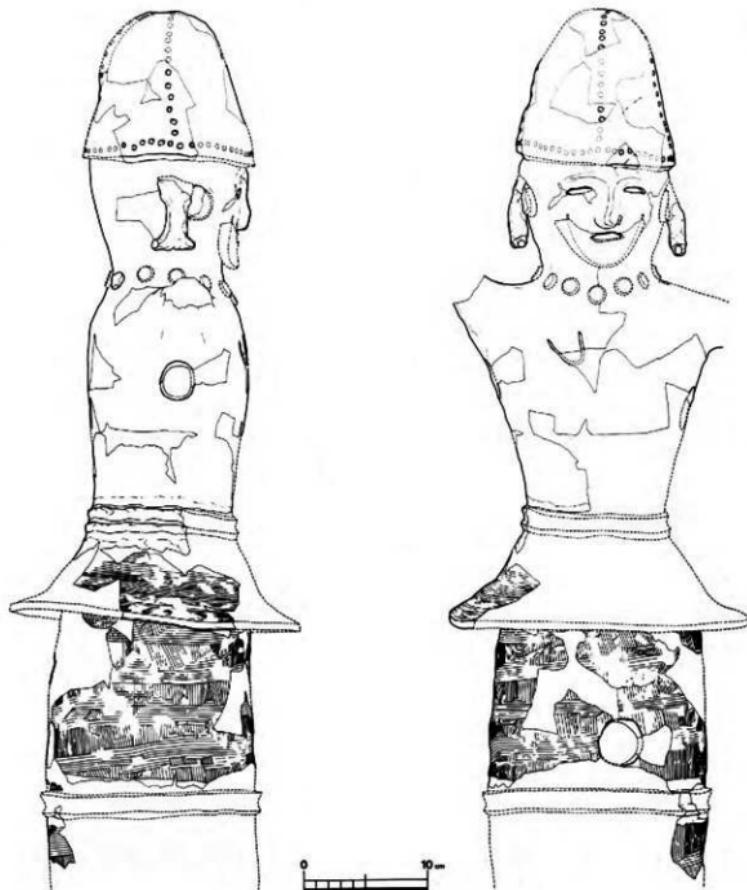


第23図 人2・製裘衣の女子

人3・飾り帽子の男子（第24・25図）

半身部の高さ約50cmを測るが⁴、帽子の頂部片は接点がなく、帽子の高さは推定復元である。基台底部を欠失しており、全体現存高71.5cmで、復元推定高は75cm前後になると思われる。硬質焼成で、色調は左半部の焼成が強く、暗赤色(7.5 R 3/1)～灰赤色(7.5 R 4/2)を呈し、右半部では、焼成のややあまい黄色味の加わった灰赤色(2.5 Y R 4/2～5/2)を呈する。

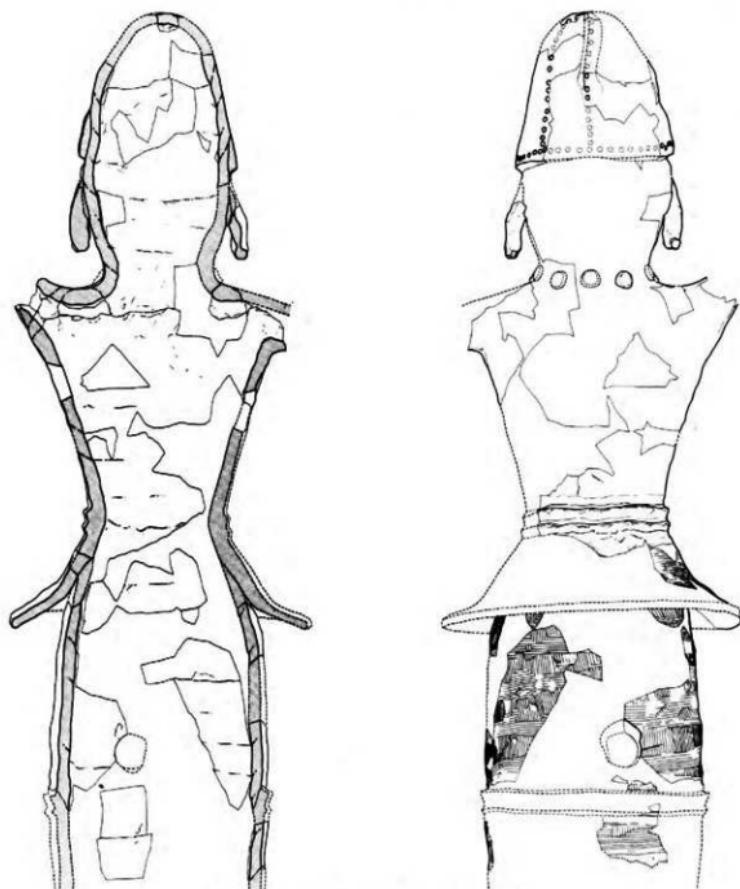
帽子は、底径13cm、高さ推定12.5cmの頂部が丸い半紡錘形である。锷はなく、直径5mmの棒を連続刺突した列点の飾りが裾を周り、さらに、上から見ると十字形となるよう、前後左右に輻方向の列点が4列と、左後方中間の変則的な位置にもう1列施されている。また、後部中軸上の中程から頂部にかけては、帽子の繋ぎ目であろうか、鋭い棱を持つ断面三角形の凸帯が付されている。帽子の裾は、頭部から



第24図 人3・飾り帽子の男子(S=1/4)

帽子頂部までを一気に巻き上げて成形したあと、幅3~4cmの薄い粘土板を貼り付けて造り出したもので、角張った端部を形成して額部とは約5mm程の段差をなしている。尚、帽子裾下の狭く残された顎には、比較的低い額央隆起を認めるが、隆起上部は裾内に入り込んでおり、この帽子裾の取り付けが顔面の眉等の造形より後出であることがわかる。

側頭部には、側面觀が逆丁字形の美豆良が垂れ下がり、その接合部の前寄りに接して、径3cm程のボタン状の粘土を貼り付けて耳としている。顔面は、鼻筋が、眉の稜かららさほど高低差をなさずに丁字に連続し、鼻の側面觀は、鼻先への顯著な高まりをみせずほぼ垂下する。目は若干下がり氣味で、比較的小さく細い楕円形に切り抜かれている。全体の意匠は精悍な印象である。顔面下半の顎部分は剃落しており、このことから、頬から張り出させて舌状の輪郭を呈する顎は、粘土貼付によって造り出されてい

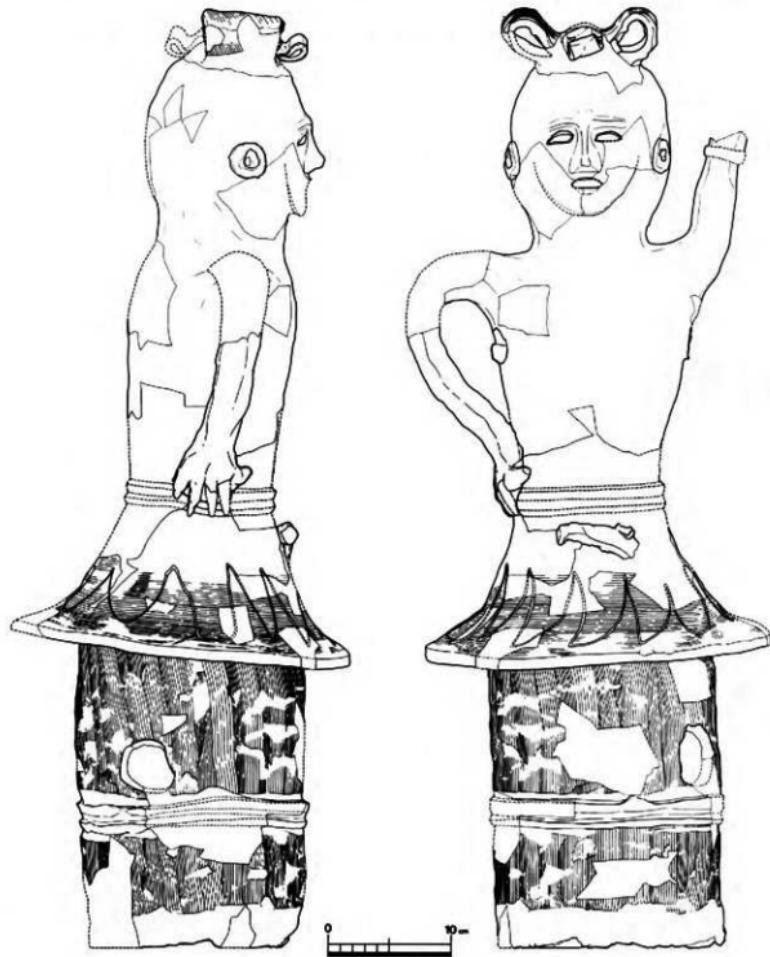


第25図 入3・飾り帽子の男子(S=1/4)

たことがわかる。顎の付け根部分の剥落面には、粘土の貼り付きを良くするために、ヘラ状工具による十文字の切り込みが認められた。

頸部には、丸玉を連ねた頸飾りをしている。丸玉は、直径1~1.5cmのボタン状とした粘土を貼り付けたもので、残存するのは1個だけであるが、剥落の痕跡から、12個を0.5~1cmの間隔をあけて連ねたものに復元できる。

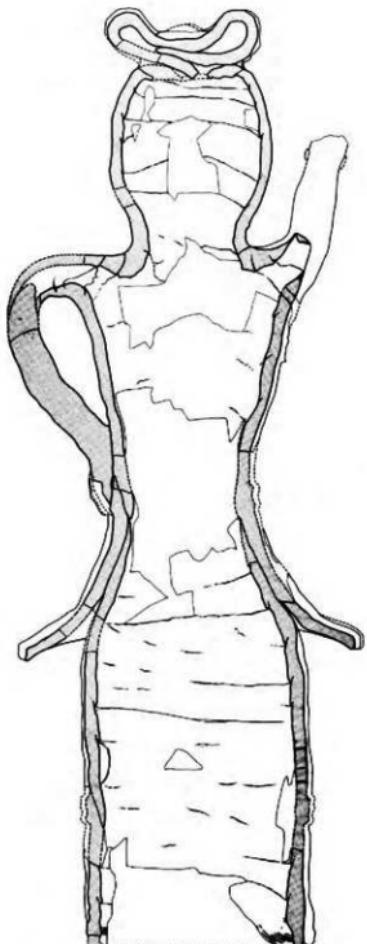
両腕を欠失しているが、右腕を真横上方に挙げ、左腕は真横斜め下方に下ろした姿勢が予測される。



第26図 人4・刀子を佩びる人 (S=1/4)

逆三角形の体型とするが、胸部の影らみは強くなく、全体としてスマートな印象である。胸部右寄りにヘラによる沈線が描かれており、一応U字形に復元したが、意図するものは不明である。両脇には径3cmの円形の透孔が穿たれている。腰部には断面M字形の凸帯がめぐり、それ以下を衣裾とする。衣裾の腰部近くでは、凸帯貼り付け部から縫に粘土をナデ下ろした形跡がみられ、それ以下ではカキ目調整痕が残されている。端部はやや角張り、平滑な端面をもつ。

基台は、底径18cm前後、高さ27cm前後と推定され、上部約1/4が衣裾内に収まる。また、体部が僅かに前傾するかたちで接合させている。調整は、タテハケ後、回転によるヨコハケが施されている。下約1/4の位置に断面M字形の凸帯を付し、その上位に、前後で対向する径約4cmの透孔が穿たれている。



第27図 人4・刀子を佩ぐる人(S=1/4)

人4・刀子を佩ぐる人（第26・27図）

残りが良好ではば完形に復元され、高さ76.5cm半身部は約53cmを測る。硬質焼成で、色調は暗赤灰色～灰赤色(7.5R 3/1～4/2)を呈し、右側頭部から頸にかけてオリーブ黄色(5Y 6/4)の霜降り状の降灰による色調の変化がみられる。

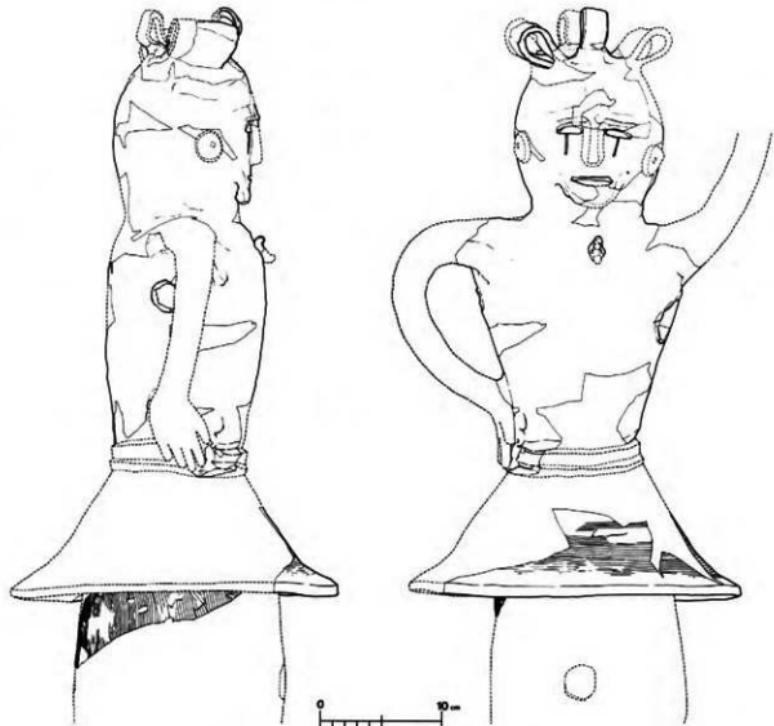
頭頂部には、巫女にみられた島田髪をそのまま真横にした結髪が表現されている。作り方も全く同じであるが、折り返した髪がリボン状に斜め上方を向き、中央で結ぶ帶が前後にやや垂れ下がる状態は、巫女とは構成上で逆のあり方である。髪の外面にはハケ目調整痕がみられる。頭部は卵形でも球体に近く、その幅に比して顔面が比較的狭い範囲に収められているため、側頭部が強く張り出した印象を受ける。額は広いが、鼻筋へ連なる額央隆起は発達していない。眉の後線は丸みをもち、眉間から鼻先へ若干弓形に反って通る鼻筋へとつながる。鼻の立ち上がり線は、目頭から小鼻へ強く開き、鼻先は尖って断面はば正三角形を呈する。目は、目尻側に尖る木葉形に切り抜かれており、上縁は鋭く突出し、眉から落ち込んで形成する瞼との境界は深いV字の谷となる。舌状の輪郭をなす顎の張り出しが、比較的弱い。耳は、径約3cmの粘土をボタン状に貼り付け、さらに、中央に径1cm程の孔を側頭部まで貫通させている。この孔は、単に棒を突き刺したものではなく、ごく細い工具で繰り抜いたもので、孔の縁には複数の切り込み単位がみられ、また、孔の径は奥で小さ

くなる。

腕は、左腕を真横上方に真っ直挙げ、右腕は下に下ろして手を腰にあてる。左手は消失しているが、手首には、幅1cm弱の帯をめぐらせて腕輪を表現している。右手は、腕先を平たく潰して手のひらとして、その上に指を並べて貼り付ける手法である。尚、右腕の二の腕部分は消失しており、つながりは推定復元である。

胸部は、胸部の膨らみも小さく、幅や丈も、頭部との比較からすればやや華奢な印象である。腰部は右手が添えられた部分以外は消失しており、くびれや凸帯の状態は推定復元である。両脇には径2.5~3cmの透孔が穿たれている。正面の腰直下に刀子の把部分が横位に付され、刀身部にかけては左下がりとなるが、その大半は消失する。残存長約7cmの内、ほぼ半分が径1.5cm前後の断面円形を呈した把部分とし、中央部から徐々に厚さを減じて幅を増し、断面長方形の刀身部へ移行する。足金具にあたる部分の上端には、吊り紐を表すと思われる粘土紐が張り付いており、腰部凸帯へ伸びていたものと考えられる。把頭先端部は円形の平坦面をなし、下端は把間より下方へ屈曲して張り出す。

衣裾は、比較的長く、下1/3の位置で屈曲して開きを強める。上2/5は腰部からの縦ナデおろしで、



第28図 人5・勾玉をつける人(S=1/4)

それ以下はカキ目調整痕が残されており、これに重ねて、鋸歯状のヘラ描き文が一周している。衣裾端面は垂直であるが、上下端は丸みをおび、内面には弱い段をもつ。

基台は、高さ約35cm、径約19cmを測り、上1/3弱を衣裾内に収めている。胸部を若干前傾ぎみとするかたちで接合しており、先細りの上端は腰付近まで達し、胸部にしっかりと圧着されている。外面は縦ハケ調整で、下1/3の位置で凸帯がめぐる。底部の約3cmの範囲は、柾目板材によるタタキの後ヨコナデを施しているが、その調整後の重圧による端部の歪み等が認められる。底部内面には同心円文のタタキ目が残されている。透孔は、凸帯の上位に、左前方と右後方で対向する斜位の配置となっている。

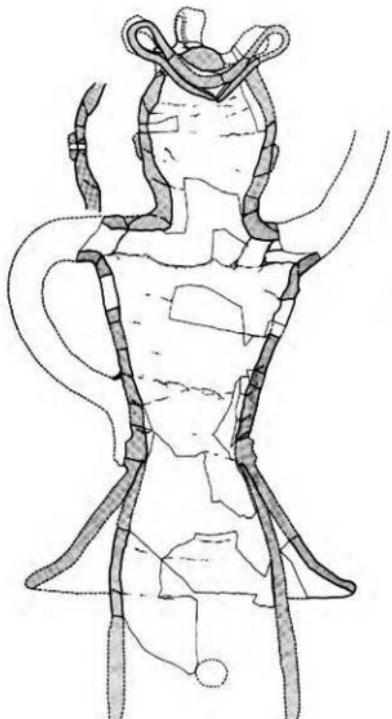
人5・勾玉をつける人（第28・29図）

残存率が低く、衣裾・基台の大半及び両腕を欠失する。半身部の高さは48cmを測る。硬質焼成で、色調は灰赤色(7.5R 4/2)から暗赤灰色(7.5R 3/1)を呈し、降灰による灰白～浅黄色(5Y)の霜降りが全体を弱く被っている。

頭頂部には、人4と同様の結髪が表現されているが、中央のリボン状の結びの表現はやや異なり、輪

にした帯を直立させている。頭部も同様に球体近く、正面から見て、側頭部は、顔面より強く張り出す。丸みを帯びた額央隆起をもつが、眉間以下の鼻自体は剃落している。眉は、額から緩く立ち上がって、稜はごく僅か下がり氣味に横へのびる。左眉は、眉間部分に粘土紐貼付による眉作出の形跡をとどめ、右眉より強い表現となっている。上瞼は非常に狭く縁は突出し、眉へ立ち上がる境界部も明瞭な谷線を成す。目は尻側に尖る木葉形で、下瞼中央から頬へ垂下するヘラによる沈線が描かれている。顎の作り出しは小さいが、口は非常に長く柳葉形に切り抜かれている。耳は剃落しているが、側頭部に孔が残存していることから、人4と同様のものであったと考えられる。頸に近い胸部中央やや左寄りに、粘土塊が付されており、下半を欠失するものの、勾玉を表しているものと考えたい。

先に述べた頭部に加え、胸部や衣裾等の形状や構成は、人4と極めて良く似た意匠・作風となっており、腕の所作も同様に復元される。全体



第29図 人5・勾玉をつける人 (S=1/4)

にひとまわり小さくなっているものの、同一の性格をもたせた人物をセットで製作したものであることが予測される。

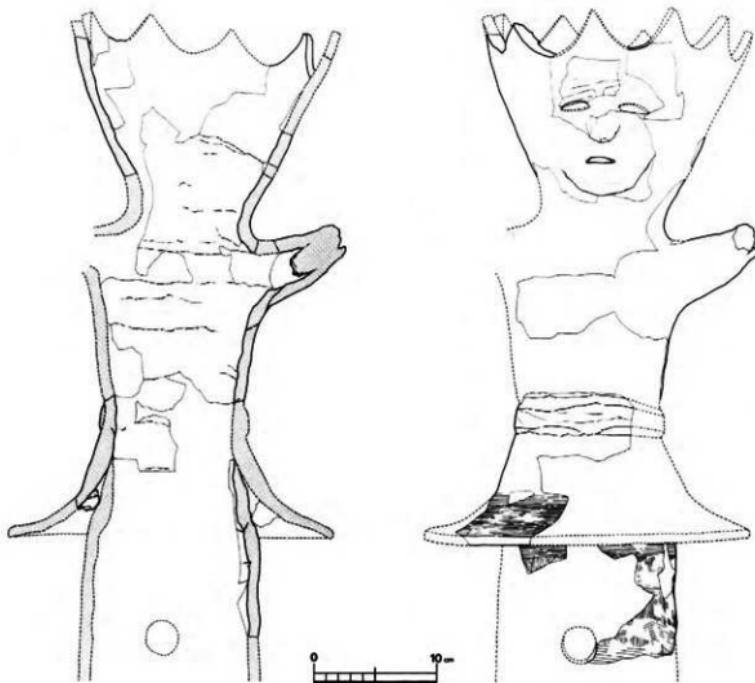
基台残存部の大半は、衣裾内に収まる部分である。背面側で、透孔のごく一部にかかるところまでが残存しており、前後で対向する透孔が穿たれていたことがわかる。

人6・天冠の男子（第30・31図）

残存率が低く、螺旋状の接合により、基台底部を除いてかろうじて全体形状の復元ができる。半身部の高さは約44cm、全体の現存高は52cmを測る。焼成は良好で、色調は全体には赤橙色(10R 6/6)から赤灰色(10R 5/1)を呈し、人1と良く似た焼成となっている。

頭部は、上部へ円錐形に拡がる漏斗状で、その上縁をU字形に連続して刻み、頂部の尖った波状線の冠を表現している。したがって頭頂部は大きく開口したままで、頭部と冠は区別なく連続し、表現の簡略化が著しい。山形突出部の残存は2箇所、谷部も散在的に残存するのみであるが、10個の突出部を持つ冠に復元された。

顔面は、粘土貼付によって頸から張り出させた頸部を除いて、特に面を造り出すことなく、漏斗状頭



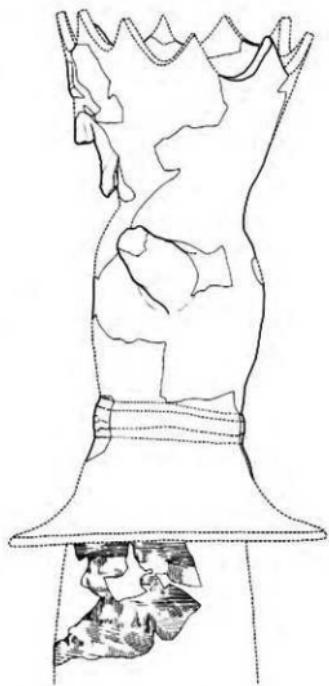
第30図 人6・天冠の男子 (S=1/4)

部の一角に各部を配して顔面としており、明瞭な輪郭はもたない。額は狭く、冠の範囲に重なる程で、丸い額央隆起が眉間に至る。眉間から緩く高さを減じて横に伸びる眉があり、棱は丸みをもって緩やかに眼窓に落ちる。目は、左は上瞼側を、右は下瞼側を欠失している。右上瞼は縁が突出して狭く、すぐに眉への立ち上がりとなる。鼻は、側面観は眉間から垂下するが、下へすばまる頭部形態のために、結果として比較的高さのある鼻となっている。鼻筋は概して丸いが、鼻先が弱く尖り、末端のつけ根部分では顔面へのつなぎの細かい調整を欠き、貼付の隙間を明瞭に残す。口は小さく柳葉形に切り抜かれている。

頸部から胴部にかけては欠失部分が多い。右腕は肩部分からを失うため動作は不明で、左腕は二の腕までが残存しており、やや前方寄りに手を擧げるかたちが予測される。腕の丈は短く、体型も小振りでやや寸胴ぎみである。腰には凸帯がめぐるが、幅約3.5cmと広く、断面は不整な皿形を呈して粗雑な印象を受ける。

衣裾はごく一部が残存するのみである。上半部は腰からの継ナデおろしで、筆で描いたような赤黒色の色調の変化が現れている。下半はカキ目調整痕が残り、端部は丸く仕上げられている。

基部も大半が欠失しているが、衣裾内に収まる接合部分で比較的良好に残存する。先端部の接合面は比較的狭く、固定のために隙間へ粘土塊が填め込まれており、円筒部側にはある程度連続的に貼付されていた痕跡を認める事ができる。調整は、タテハケ後に回転ヨコハケを施すもので、前後に対向する透孔が穿たれていたようである。



第31図 人6・天冠の男子 (S=1/4)

人7・跪座の男子 (第32・33図)

ほぼ完形に近く、高さ46.3cm、半身部高約38cmを測る。唯一足の表現を持つ人物であるが、基本的には半身像で、基台部後方に足先を付加することによって、座る姿勢の意図を果たしたにすぎない。全体は非常に小さく造られている。硬質焼成で、色調は灰赤色(7.5R4/2)から一部暗赤灰色(7.5R3/1)を呈する。背面側の腕や基台の一部を中心に浅黄色(7.5Y7/3)の自然釉がみられる。

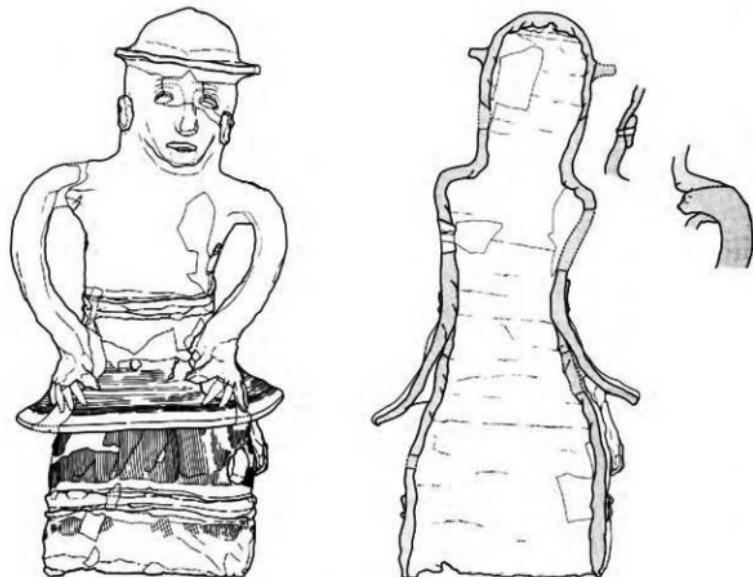
頭に鐸付きの帽子を被る。頭部全体を一体に巻き上げて半球状の頭頂部を造り、粘土帶を鉢巻き状に貼り付けて鐸としている。鐸は突出度が高く、下面は頭部から斜めに強く外反して立ち上がり、上下端の丸い幅5mm程の垂直な端面に至る。上面の立ち上がり部は丸く屈曲し、水平に端部へ延びる。この上下面の違いは、鐸の固定の仕方によっている。即ち、幅1.5cm弱、厚さ5mmの粘土帶を頭部にリング状に付した後上面の繋ぎ目には粘土を薄くナデ付けるように

して調整している程度であるが、下面側では、鐸を支えるように、太目の粘土紐を貼り付けて固定している。鐸の後部中央にはやや上向きの突起がある。これは、鐸として巻き付けた粘土帯両端を合わせ目で揃えて外方に突き出させたかたちをとっており、鉢巻きの結び目のごとくである。

頭部全体は、頸部のくびれをほとんど成さずに胴部から円筒状に立ち上がりつておらず、左へ僅かに傾き加減として、顔もやや左寄り前方を向く。

顔面は、額から眉間を中心にもう大半にかけてを欠失している。眉は、後を明確としない丸みのある隆起とするが、眼窩へは急激に落ち込んで、極端に強く庇状に突出した上瞼との間は狭く深い谷を成す。鼻は、立ち上がりの屈曲が強く、鼻筋は丸い。鼻先端面もやや丸みを帯びて、小鼻にかかる立ち上がり部はU字形の輪郭で明瞭な継ぎ目を有する。口は比較的大きくやや開き気味に切り抜かれており、受け口状となっている。顎の線は、頬から直立気味に立ち上がり、下顎の垂下する張り出しあはみられない。側頭部で頬の横位置に径約3cm弱のボタン状とした大きめの耳が付され、中央に径5mm程の穿孔が側頭部まで貫通している。

胸部は、非常に短く寸胴で、胸部は若干前へ膨らむ。腰には、幅1.5cm程の断面M字状の凸帯がめぐり、それ以下を衣裾とする。衣裾の上半は、腰部からの縫ナデおろし、下半はカキ目調整である。端部は丸くおさめ、端部内面はごく緩やかに内湾する。衣裾と胴部のつながりは、頭部と同様上半身を左へ僅かに傾けた姿勢としている。両腕は腰にあてがうかたちで、広げた手のひらを衣裾上に置く。この手の造りは、やはり手首より先を撥状に潰して手のひらとし、その上に指を配したものである。手首側に



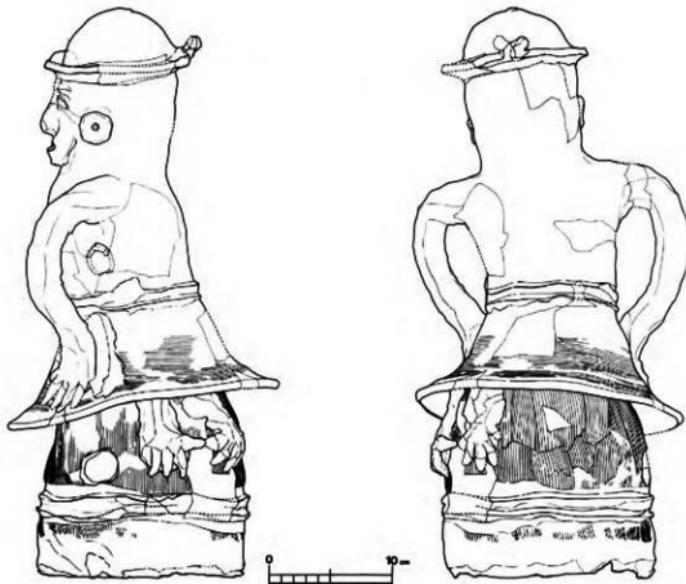
第32図 人7・跪座の男子 (S=1/4)

かけての手の周囲およびその衣裾上には、接着補強のために施された粘土の剥落痕がある。衣裾の両手にはさまれた中央にも円形の剥落痕がみられるが、貼付されていたものは、焼成時に失われてしまっていたようである。

基台は、底径約17cm、高さ約20cmを測る。衣裾部が右前方に傾くように接合されており、したがって反対側の左後方に向けて衣裾部は高くなる。この衣裾が最も高くなった位置の基台に、足首より下を表現した足が、2本揃えて垂下させるかたちで付されている。つまり両足は、左後方の斜めの位置に揃えており、いわば横座りの状態に近い。この足は、長さ8cm程度、断面が半月形～伏鉢形で、下膨れの琵琶形を呈するものを本体とし、その裾部に、潰した短い粘土紐を指として貼り付けているが、指の配置や付け方が不自然で、その意匠はどうみても手の造りと区別しがたく、理解に苦しむ。基台の外面は、タテハケ調整で、底部3cm程の範囲が、タテハケ後に横あるいは斜めの強いナデ調整が施されている。接地面は無調整である。下1/4の位置で凸帯がめぐり、その上位には、左のやや前寄りと右のやや後ろ寄りで対向する楕円形の透孔が穿たれている。

人8・右手を擧げる男子（第34・35図）

基台底部を欠失しており、現存高は56.5cm、復元推定高は62cm前後で、半身部高は約39cmを測る。焼成は良好で、色調は、上半身の右後背部が緋帶状に赤橙色(10R6/6～6/8)を呈し、漸次煤けた感じで黒さを増しながら、右半部の(暗)赤灰色(2.5YR3/1～4/1)に移行する。衣裾から基台部にかけては、淡赤

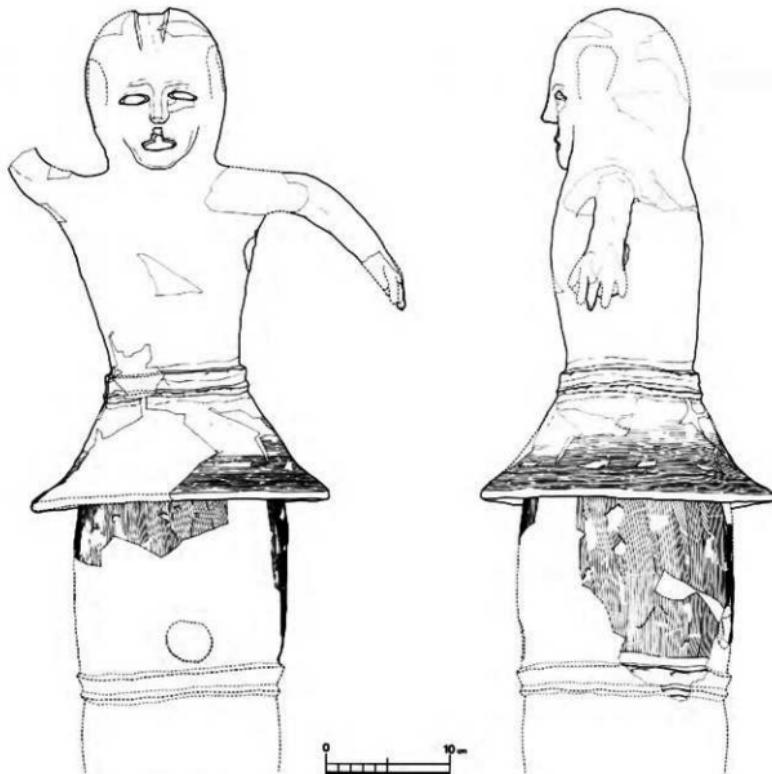


第33図 人7・跪座の男子 (S=1/4)

橙色(2.5YR7/4)を基調として、左半部は褐灰色を帯びる。簡素な出立ちでとその身振りから、馬子(馬銅)と考えられる。

頭頂部の縦方向中心線には、幅2.5cm程の溝が走る。頂部で深く、前後に深さを減じて抜けてゆくもので、左右に振り分けた髪の表現あるいは、髪を剃った表現とも言われている。ケズリによる凹み作出後に、底面を縦方向2列の強い指ナデで仕上げているため、中央に縱走する高まりを持ち、断面は弱いW字状を呈する。側頭部に径3cm程の円形の剥落痕があり、左右に振り分けた髪を束ねて垂らす表現がされていた可能性がある。

額は、僅かに平坦化し、中央部は低い額央隆起をもって鼻筋に連なる。眉は低く、棱を明確としない丸みのある隆起とし、瞼へ至る眼窩の落ち込みも丸みを持つ。目は木葉形の垂れ気味に切り抜かれており、上縁は鋭く突出する。鼻は、眉間から鼻先へ若干弓形に反って高さを増すかたちで、鼻筋は概して丸く、さらに、幅が狭く立ち上がりも急なため、棒状の印象を受ける。小鼻から下の立ち上がり部分に



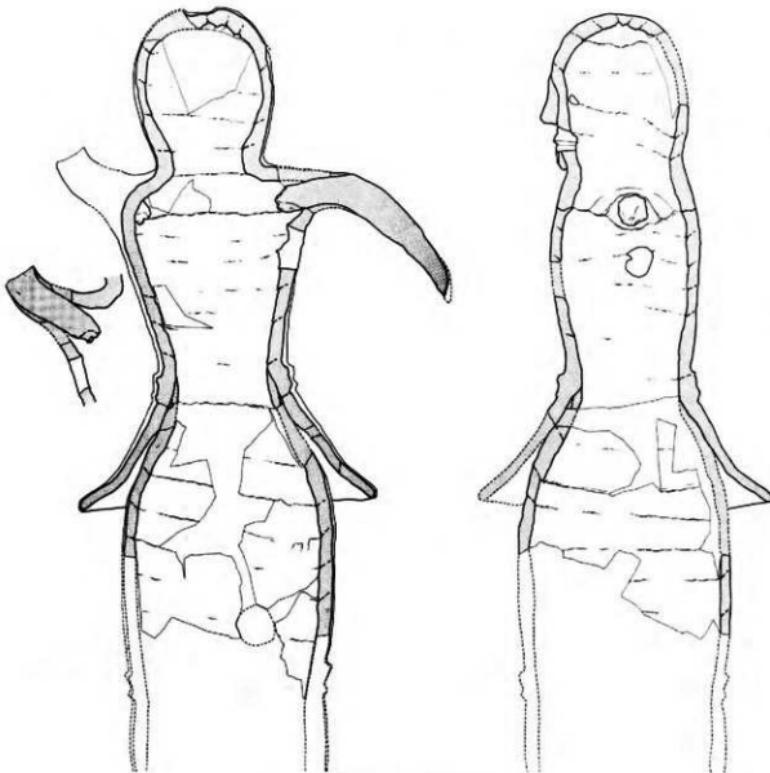
第34図 人8・右手を擧げる男子 (S=1/4)

は、顔面との繋ぎのために施された粘土の小規模な剥落痕がある。口は、やや開き気味の長楕円形に切り抜かれている。また、上唇中央部に縦の切り込みがみられ、兎唇を表現した極めて珍しい例と考えられる。頸は比較的立ち上がりが低く、張り出もしも弱い。

胸部は、逆三角形の体型であるが、胸部の膨らみは弱い。挙げる右腕は、肘から先を欠失しており、横に垂らす左腕は、棒状の差し込み部分が完存するものの、それを被覆してささえる肩の部分を欠失しており、取り付けの角度は推定復元である。左手の指は、中指以外は欠失しており、腕先を撥状に潰して手のひらとして、その上に指を配した通有の製作方法である。両脇には、径3cm程の透孔が穿たれている。腰には、断面M字状の凸帯がめぐり、それ以下を衣裾とする。

衣裾は、下約1/4の位置で屈曲して開きを強め、端部は丸く仕上げている。全体カキ目調整で、上半部は、凸帯下端から粘土を梃にナデおろした形跡を明瞭に留める。

基台は、半身との接合部及び背面が比較的残りは良いが、底部及び前部の大部分が欠失している。全



第35図 人8・右手を挙げる男子 (S=1/4)

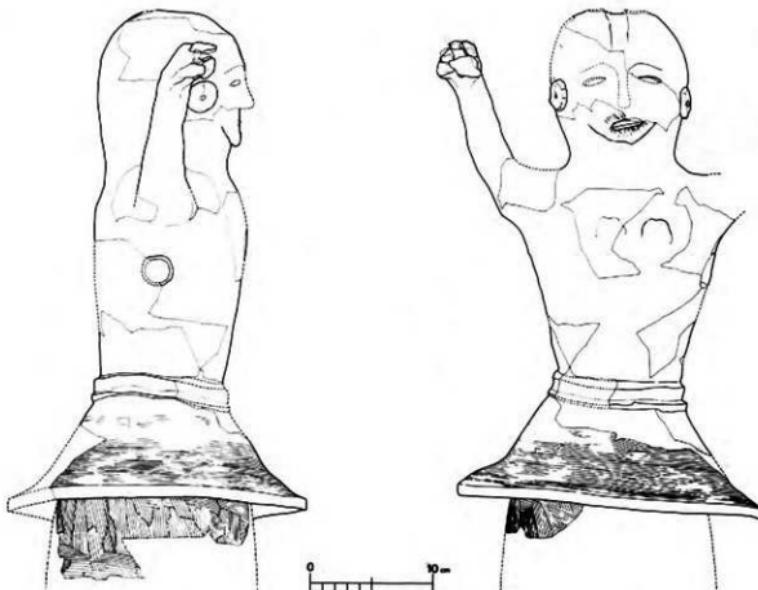
体タテハケ調整で、径は比較的大きく約17cmを測り、前後に対向する円形の透孔と、その下に断面M字状の凸帯をもつ。

人9・右手を擧げる口髭の男子（第36・37図）

基台の大半を欠失しており、現存高は46cm、半身部高は約41cmを測る。焼成・色調ともに人8と類似し、上半身の前面が赤橙色、背面が(暗)赤灰色を呈し、その性格も同様に馬子と考えられる。

頭頂部には人8と同様に溝を持つが、幅は約1.5cmと狭く、1単位の指ナデ調整のため、断面は浅いU字形を呈する。そして、前頭部へは額から眉間へと徐々に消えてゆくが、後頭部側へは下らず、水平に抜ける感じである。右側頭部から顔面の中央部を大きく欠失しており、不明な部分が多い。額は面としての作り出しが狭く、額央隆起は頭頂部の溝を調整する上で失われたものと思われる。眉は額から緩やかに隆起し、比較的明瞭な「へ」の字の稜を成した後眼窩に落ち込み、丸みのある凹みをなして瞼に至る。目の上縁は鋭く突出し、下がり気味に切り抜かれている。口は、やや左上がりの細木葉形で、上下の唇から放射状に線刻による口髭（刺青？）が表現されている。側頭部には、直径2.5cm強のボタン状の耳が付され、その中央には、直径5mm程の棒状工具を差し込んで作った孔が頭部を貫通している。

頭部を含め、胴部形態の特徴など全体の意匠・作風は人8と極めて良く似ている。左腕は欠失しているが、擧げる右腕は肩を除いて残存しており、手を握るような表現は、馬の鬚をひく姿を想起させる。胸部には、逆U字形の線刻がみられ、2つ並置されていたと考えられる。腰部以下、衣裾の諸特徴も人



第36図 人9・右手を擧げる口髭の男子（S=1/4）

8と同じである。

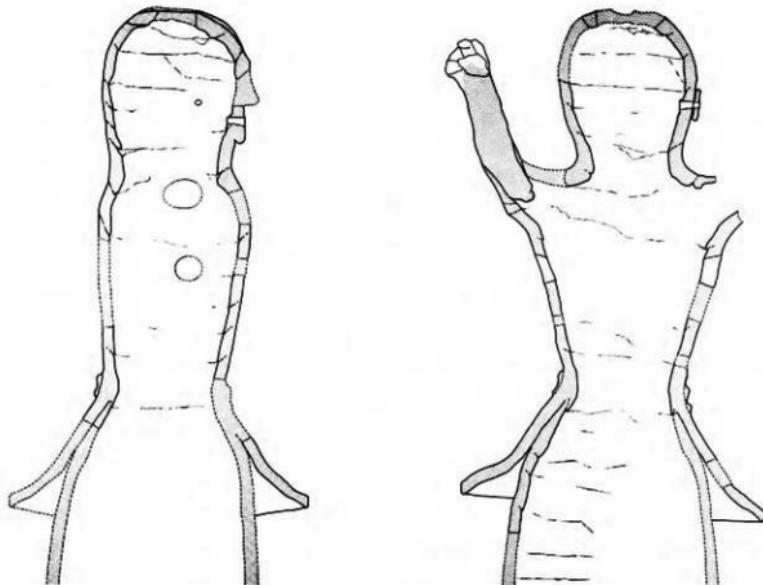
基台は、左側面上方、半身との接合部にかけてが残存するのみで、タテハケ後に回転ヨコハケの調整が施されている。

人10・騎乗の男子（第38図）

大きく開いた太腿部の表現を持ち、馬上にまたがる人物と考えられる。現存高は47.5cmを測る。硬質焼成で、色調は灰赤色～暗赤灰色(7.5R 4/2～3/1)を呈し、右後背の頭頂部から脚まで縦帯状にオリーブ黄色(7.5Y 6/3)の自然釉がかかっている。

頭には、先端の丸い半截針錐形の鉗付き帽子を被る。鉗の形態や作り方は跪座の男子のものと全く同じで、前傾させることで、帽子を前に深く被るかたちを表現している。額は鉗内に収まり、立ち上がり直下を眉としている。眉は、やや下がり気味の比較的明瞭な稜を成し、目の上縁まで真っ直落ち込む。目は、下がり気味の細木葉形で、上縁は鋭く突出し、口もほぼ同様の形に切り抜かれている。顎の輪郭の張り出しあはしっかりしており、貼り付け痕の明瞭な境を成している。一応、側頭部にはボタン状の耳を想定したが、凹んだ形跡を留めるのみで、剥落痕や色調の変化は認められない。

胴部は、正面観では逆三角形の体型であるものの、側面観は裾広がりで、いわば寸胴形であった胴部を腰の位置で両横から圧縮した様なものであるため、腰部の横断面は前後に長い楕円形を呈する。腰には断面M字状の凸帯がめぐり、前部中央で上方へ屈曲して山形に合わさる。この結合部は一部剥落して



第37図 人9・右手を挙げる口髭の男子(S=1/4)

いるが、腰帯の結び目の表現であると考えられる。両脇には、径約2cmの透孔が穿たれている。腕は、左腕の肘から先と、右腕の挿入部を取り巻く肩の一部分を欠失している。左腕は前向きに垂らし、右腕は横へ垂らしており、手綱を持つ構えを想起させる。ただ右手には、先端を欠失する棒状のものを握っており、左手は手綱をもつものとしても、左右の構えの違いも考慮すれば、右手は異なる動作をしていった可能性が強い。ただ、いわゆる「弓手」と「馬手」の関係とは逆の動作である。

左右に大きく開く脚は太腿部分が残存し、胴部から分岐する筒状で、横断面形は、下面が平坦で上面に丸みを持たせたカマボコ形に近い。端部は、明らかに割れ口とわかる状態であるが、色調は外面と変化無く、焼成中あるいはその直前にすでに欠損していたようである。外面には、部分的に平行タタキ目がみられるが、内面には当て具痕はみられない。正面の股間には、体部とは色調の異なる粘土がごく低く外輪山のごとクリング状に貼り付いている。これは、粘土を筒状に形づくった物を取り付けるために周囲を押さえていた名残であると思われるが、その筒状のものの残片は残存せず、実体は不明である。

人11・騎乗の男子（第38図）

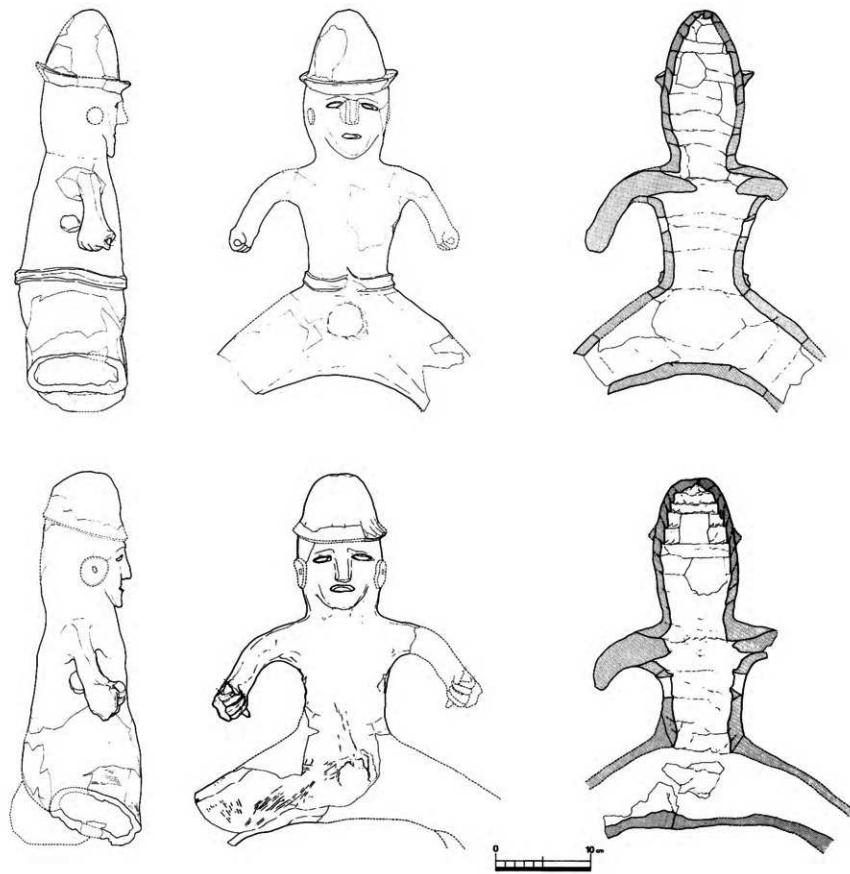
人10と同様のもので、現存高は39cmを測る。硬質焼成であるが、色調は人10より淡く、灰赤色～にぶい赤褐色(7.5R 5/2～4/3)を呈する。

頭には、頂部が丸く、裾にかけてやや外反するベル形状の帽子を被る。外反する裾部分はほとんど剥落しているが、粘土帶を一周して貼り付けてから、連続する強い縦ナデで仕上げ、上から見ると、裾部を放射状に連続してめぐる弱い稜が形成されていたと思われる。裾端は、幅5mm程の端面を成し、下端の被り目の部分は、頭部から連続させて立ち上げる調整は施さずに、屈曲させて入り込ませ、帽子としてリアルに表現している。また、人10と同様に、前に深く被る表現である。

額は、中央が緩く隆起するかたちで、帽子裾下に狭く見えている。眉は、額からの立ち上がりをほとんど持たず、不明瞭でなだらかな下がり気味の稜を成して眼窓に浅く落ち込む。目は下がり気味で、両端が比較的鋭く細い柳葉形に切り抜かれている。鼻は、眉間から直線的に高さを増すが、棒状の粘土を両側から押さえただけの作りであるため、頬から強く屈曲する急な立ち上がりを持ちながら鼻筋が丸く面的となっている。鼻の輪郭線も末広がりとしない棒状のままで、鼻先端面は円形に近く、小鼻にかかる立ち上がり部は、貼り付け時の隙間を残して明瞭なU字形の輪郭を成す。鼻下は短く、口は、目と同様柳葉形で、右上縁と下縁は鋭く突出する。顎は明瞭な舌状の輪郭で、立ち上がりの張り出しも比較的強い。両耳は剥落しているが、側頭部を貫通する孔が存在しており、中央に孔を持つ径2cm強のボタン状の耳として復元できる。

胸部は、人10と同様、両横から圧縮したかたちであるが、より華奢な体型となっている。胸部上方に1単位の平行タタキ目が見える。腰の凸帯はなく、やや膨らみをもたせて股間に至り、臀部の膨らみも強い。右腕は横に構えて下ろし、前腕がやや前方を向く。手には人10と同じく先端を欠く棒状のものを握っており、また、手背には、「手っ甲」の表現と考えられる粘土板が突出している。左腕は肩の部分を除いて欠失しているが、人10と同様、右腕よりはやや前方に構えていた可能性がある。

脚は右足の多くの部分と左脚を欠失しているが、脚の開きは人10より大きかったものと推測される。残存部の状況からすると、開きの方向が上半身の主軸とすれ合っており、上半身を右前方に若干ひねっているようなかたちとなる。脚の断面はカマボコ形で、股間ににはやはり人10と同様の剥落痕がみられ、脚端部もまた、同様の欠損面となっている。腹部から脚にかけて、ヘラ状具による意味不明の浅い線刻が数条あるいは十数条単位で断続的に認められる。また、脚の端部近くにはナデ以前の平行タタキ目痕が認められる。



第38図 人10(上), 人11(下)・騎乗の男子

2. 馬形埴輪

馬1・飾り馬（第39図）

高さ64.6cm、全長70.7cm、胴部幅29.6cmを測る。脚部を除いて、残存率は高い。硬質焼成で、色調は灰赤色～にぼい赤色（7.5R4/2～4/4）を主体に、所々暗赤灰色（7.5R3/1）を呈する。上面には、降灰によってオリーブ黄色の霜降り状となっている部分が多い。この色調から、人10の「騎乗の人」がセットをなすと考えられる。

体部の上面觀は太い輪形で、半円形の臀部から微妙に膨らむ胴部を経て、首と言える意匠をほとんど持たずにはしまって、頭部に直結している。側面觀でも、首をもたげた表現は乏しく、頭部と胴部が直結して、頭頂部が胴部より若干高さを増す程度のずんぐりとした体型となっている。また、頭部の取り付けが、胴部の主軸方向と若干ずれているため、正面からみると、向かって左方向に首をかしげた風貌となっている。背部の横断面は均整のとれたアーチ形を呈して比較的平坦な側面を持ち、下半部で急速にまるまる平坦な腹部につづく。腹部を横からみると、中央が僅かに下がった後、後脚の付け根に向かってせりあがるリアルな表現となっている。後輪内側立ち上がり部の鞍上から測る最大厚は25cmである。臀部は、脚の位置より後方に若干丸く張り出して球体に近く、上部中央には、後ろ斜め上方を向く尻尾が付されている。この尻尾は、粘土紐巻き上げによる中空の円筒形で、裾部の直径約5cmを測り、上方にかけて僅かにすばまる傾向にあるが、先端は欠失している。また、尻尾の下方には、真後ろよりやや上向きに、直径4.5cmの透孔が穿たれている。胸は、前脚の付け根からやや膨らみを持って始まるが、その後は外傾してほぼ真っすぐ喉に至る。前方への立体的な膨らみは比較的小ない。脚は欠失部が多く、唯一左前足のみが、接合によって辛うじて長さを知り得るまでに復元された。この前脚の股下の長さは28cmで、後脚は推定で約32cmである。脚下半部は、直径9～10cmの円筒と考えられるが、上半部にかけては左右から弱く押し潰したかたちで、前後にやや長い断面扁円形を呈し、付け根近くの直径は約12×10cmを測る。前後の脚は、付け根付近で約22cmの間隔をあけている。一方、左右の脚は非常に近接しており、付け根付近では後脚で約1.5cm、前脚で約2cm強しか離れていない。蹄の表現の有無は不明で、タテハケ後に回転によるヨコハケを施した調整痕を全体にとどめる。全ての脚の側面上方、胴部との境界付近には、直径約4cmの円形の透孔が穿たれている。また、前脚の股間胴部には、真下を向く梢円形の孔が開いている。さらに、後脚では、側面の透孔と対向する直径約3cmの透孔が穿たれているため、脚の付け根直下の股間に両脚の孔が向かい合うかたちとなっている。

頭部は、頭頂部が丸く、項綱のまわる位置で最大幅約17cmを測り、直線的に鼻面へすばまっている。先端は、直径約8cmのはぼ円形に開口するもので、頭部本体の立体的な形状は、概ね截頭円錐形の筒である。しかし、口から頬の近くまでの僅かな間が、はぼ断面円形を維持するものの、頬から後方へは次第に上下からやや押し潰したような断面梢円形となっている。このため頭部の側面觀は、口先へ急速にすばまる正面觀とは異なり、鼻梁と頬がほぼ平行な円筒形にみえる。頬の下部は、厚さ約1cmの粘土帯を膜状に垂下させるもので、丸く仕上げた下端をほぼ水平に胴部へつなげている。その内側の喉部から下端までは最大で約1.5cmの落差を持ち、側面からは喉の屈曲部は見通せない。目は、木葉形から梢円形で、垂れ気味に切り抜かれている。耳は、目の上方に位置し、大部分を欠失しているが、馬2と同じ形に復元できる。たて髪は、厚さ1cm強の三日月形粘土板を垂直に立てたもので、後部を欠失しているが、耳の前側裾に並ぶ位置から強い弧を描いて立ち上がり、頭頂部付近で最高6.2cmを成す。その後は、弧をややゆるめながら前輪の裾に接して取まるものと考えられる。

装具は、いわゆる三筋のうち面繫、尻繫を備え、さらに、鞍、障泥、鐙やその他いくつかの装飾がみられる。

面繫の綱は、幅1.2~1.5cm、断面カマボコ形から丸みのある台形を呈する粘土紐で表現している。綱を連結する辻金具は、直径2~2.5cm、厚さ5~8mmのボタン状粘土板で、それを綱の上に貼付したものである。頬綱は、三つの辻金具によって、顔面にまわす3本の綱と等間隔で順次連結しているが、各綱の位置関係や表現方法にやや違和感がある。まず、耳の後ろをまわる綱はいわゆる項綱であり、頬後方で頬綱と辻金具で連結している。通常この辻金具は、額綱とも連結する場合が多いが、目の上方をめぐる額綱はみられない。次に、目の下方をめぐる綱が連結しているが、次の末端部にまわす綱が鼻綱の表現であるとすれば、中間位置にあるこの綱の性格は判然としない。この2本の綱は、顔面中央部で辻金具が付され、鼻梁綱でつながれている。2本セットで鼻綱を表現したものか、あるいは単に額綱の位置を製作者が熟知していなかったかのどちらかであろう。

手綱は、項綱を連結する辻金具を介して頬綱から連続し、鞍の前輪とたて髪が接する位置まで真っすぐ延びている。

鞍部は、厚さ約1cm、幅約26cmの三日月形粘土板を垂直に立てたもので、厚さに関しては、取り付け部への粘土塗り込めも相まって、裾広がりに厚さを増し、約1.7~2cmをはかる。中軸上の高さは、前後とも約4cmを測る。また、前輪と後輪の間隔は約9cmである。両輪の間には、背部の曲面に合わせて曲げた厚さ1cm程の長方形粘土板が、爪先まで達するような長さで埋め込まれており、鞍擣（あるいは居木）を表現したものと考えられる。その裾部には、強い指ナデによる凹線が施されている。

陣泥は、前後幅約19cm、上下幅約10cmの長方形粘土板を垂下するように貼り付けたものである。上端は胸部の最も張り出す位置にあり、段差なくつなげているが、それ以下は、腹部に至る曲面部にかかるため、下方にゆくに従って垂下する粘土板と胸部の間には段差が増している。また、周縁として、2条（前部のみ1条）の凹線が描かれ、さらに、その内側にそって2列の刺突文が施されている。

鐙は輪鎧で、幅約1cmの粘土紐を用いる。前輪内側の爪先に近い鞍擣上から力革を表す粘土紐を貼り付け、8cmほど垂下したところで径約5cmの環をつくるもので、1本の粘土紐による非常に簡略なつくりとなっている。

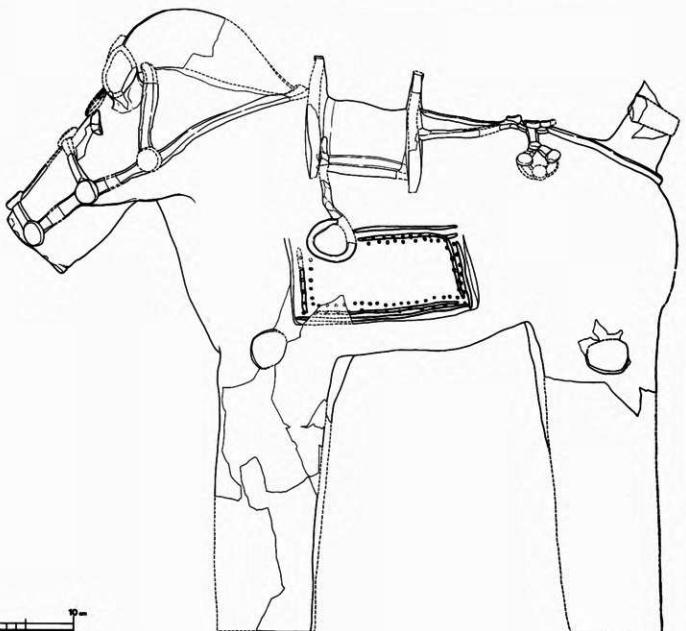
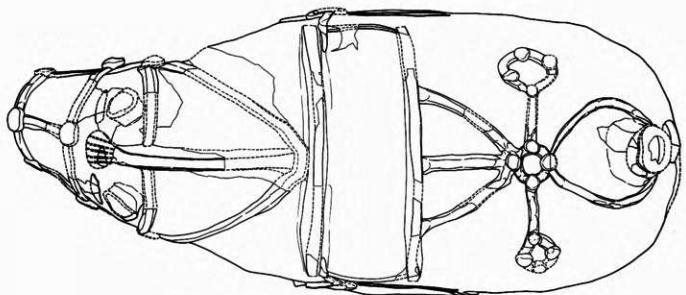
尻繫の綱は、幅1cm内外と面繫よりはやや細い。後輪と尾の中間の腰に置かれた雲珠は、粘土紐で直径約4.5cmの円環をつくり、その上に直径約1.5cm前後のボタン状粘土粒による4つの鉢（辻金具）を十字の位置に配した簡素なものである。この雲珠からは、3本の綱が前方へ放射状に延びて後輪に繋がれており、後方に出てる綱は、左右にやや膨らみをもちながら尾の付け根をまわっている。雲珠から左右に垂れる杏葉は、1本の粘土紐を5cm程横に伸ばし、末端で円環をつくって、その上に4つの鉢を配したものである。雲珠と全く同じ仕様で、表現の方法は鐙と変わらない。心葉形杏葉の簡略表現であろうか。

その他の装飾としては、たて髪の先端部に厚さ3~4mm下彫れの粘土板がペンダントの如く貼り付けであった形跡があり、僅かな残存部の状況から、深いV字の線刻が縦に5~6本描かれていたものに復元される。また、尻尾には、革巻き様の装飾があったようで、幅2cmの粘土帯が僅かに残存するが、実体は不明である。

馬2・飾り馬（第40図）

推定高65cm、全長76.7cm、胸部幅29.7cmを測る。脚部は、付け根付近を除いてすべて欠失している。色調は、赤灰色~灰赤色（2.5YR 4/1・5/1・5/2）を主体とし、部分的に赤橙色（10YR 6/6・6/8）を呈する。この色調から、人11の「騎乗の人」がセットをなすと考えられる。

体部の上面觀は、馬1と全く同じである。側面觀は、背中から頭部への移行をほほ馬1と同じくする



第39図 馬1・飾り馬(S=1/4) - 55-56 -

が、腹部は、中央の垂下がやや目立ち、後脚の付け根に向かって比較的強くせりあがる。後輪の外側立ち上がり部の腰上から測る最大厚は23.5cmで、馬1よりは胸部断面が若干扁平となっている。臀部も厚みを欠き、上下から圧縮したような扁球形を呈する。上部中央には尻尾が付されるが、立ち上がり部のみの残存である。尻尾の下方には、直径約3.5cmの透孔が、馬1と同様に穿たれている。胸部は、丸く前方に張り出し、立体的にもほぼ扁球面に近い膨らみをもっている。また、喉にかけても丸く折り返すため、馬1に比べれば、一応首の形を成しているように見える。脚はすべて付け根部分のみの残存で、直径は、約10.5×11.5cmで、やはり、前後に僅かに長い断面扁円形を呈する。前後の脚は、約25cmの間隔をあけており、全長の大きさと相まって、馬1よりも胴長的印象を与えている。左右の脚の間の距離は、前脚で約2.5cm、後脚で約1.5cmを測る。全ての脚の側面上方、胸部との境界付近には、円形の透孔が穿たれており、直径は、前両脚で約3cm、後両脚で約4cmを測る。また、前脚の股間で、馬1の後脚と同様に向かい合う透孔が穿たれている。直径は約2cmを測るが、脚部にかかるのは円孔の下半部だけで、上半部は胸部内に及んでいる。そしてこの股間胸部は、両円孔の上半部をアーチ形天井のトンネルで連結するようなかたちで凹ませている。一方、後脚の股間胸部では、馬1の前脚と同様、真下に向く不整規円形の孔がみられる。

頭部の形態は、馬1とはほぼ同じで、最大幅17cmを測る。先端開口部は、約8×9.5cmの縦に長い楕円形となっている。頬のつくりも、内側喉部から下端までの落差も全く同様であるが、側面から見て、喉の屈曲部を隠す配置にはなっていない。目は、木葉形から楕円形を呈して、垂れ気味に切り抜かれている。耳は、目の上方にあり、向かって右側の耳がほぼ先端までの状況を確認できる。耳を付す位置には前もって円孔が穿たれており、それを取り巻くように粘土紐を巻き上げ、肉厚0.8~1cm弱の筒をつくって本体としている。立ち上げは、貼り付け位置の面に対して垂直に近く、結果として、外開きで斜め上方を指している。端部は、竹を斜め切りにした切り口状の面を外方に向けるものである。ただ、下半は丸いU字形とするものの、先端部はやや尖り気味として左右の面を振り分ける稜をもつため、端面の形状としては涙滴形に近い。裾部の直径3.7cm程度、先端部の高さは約4cm、相対するもっと低い部分の高さは約1.5cmを測る。たて髪は、耳の中軸に沿う位置から立ち上がる痕跡を認めるが、残存するのは、前輪の裾に至る後方部分のみである。馬1と同様、三日月形の粘土板を垂直に立てる形態を推定した。ただし、断面形は異なり、厚さ約1cmの本体の上端を0.7mmの厚さで左右に丸く張り出させて、上面幅2.1cmを測る断面T字形としている。このため、横から見ると凸線で縁取りされたかたちになっている。

装具は、馬1と同じ構成となっている。

面繩は、頬綱、額綱、鼻綱、鼻梁綱からなり、項綱を欠く。各綱及び辻金具の表現は、馬1と同様であるが、綱の太さにバラツキが認められる。まず、手綱から連続する頬綱が幅約1.3cmで、立ち上がりの高さは上部で約0.7cm、下部で約1cmを測り、断面は角の丸い長方形を呈する。また、粘土紐上面下端を幅3~4mmの強いナデによる四線が採取している。鼻綱は、幅をほぼ同じくするが、立ち上がりが低く、約0.5cm弱で、断面形は、カマボコ形から台形を呈する。額綱及び、額綱と鼻綱をつなぐ鼻梁綱は、幅0.8~1cm、立ち上がりの高さ0.3~0.5cmと細く、断面台形を呈する。

額綱が連結する辻金具を介して頬綱と連続する手綱は、頬綱と同じ形態をとりながら幅約1.5cmと太さを増し、たて髪帽と前輪の接点へ真っすぐのびている。

鞍部は、厚さ1~1.3cm、幅約25cmの三日月形粘土板を垂直に立てたもので、中軸上の高さは、前後とも約4cmを測る。また、前輪と後輪の間隔は、立ち上がり部で約7cm、上端で約8.5cmである。尚、鞍橋は表現されていない。

障泥は、左右ともほとんど剥落しているが、痕跡及び残存部の状況から、前後幅約15cm、上下幅約9cmの粘土板を垂下させたものと考えられる。ただ、残存部を見る限り、馬1のような周線等の装飾はなかったようである。

鎧も鞍とともに消失しているが、前輪と後輪の内側爪先近くへV字にのびる2本の粘土紐が力革の表現として残っている。

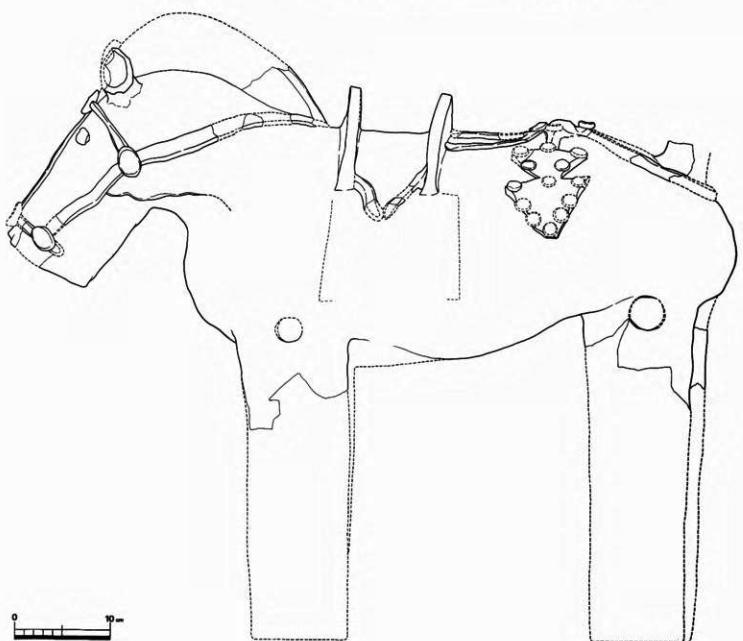
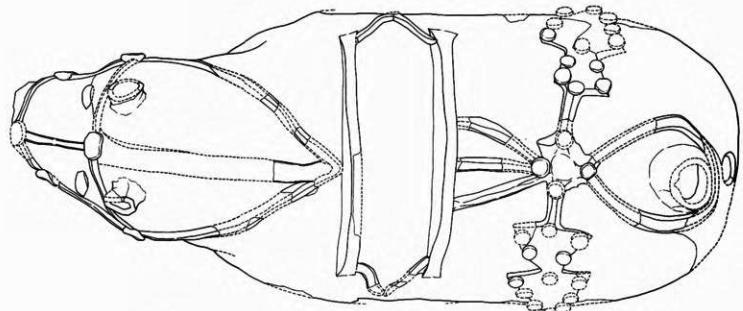
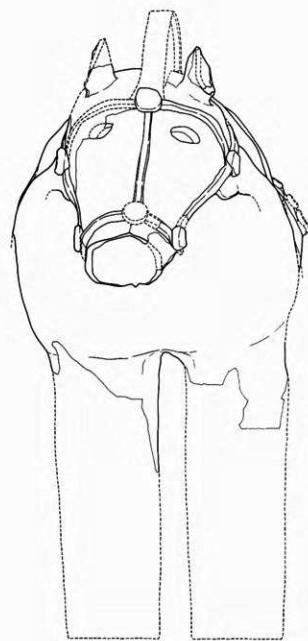
尻繩は、馬1と同じ構造であるが、雲珠と杏葉の形態に大きな差を持つ。腰中央の雲珠は、直径約5cmの半球形で、直径1.3cmのボタン状粘土粒による2つの鉢が前後に付されている。この鉢は、正確には、雲珠から前後へ延びる尻繩の各綱を留める位置の上に貼付されている。この雲珠のある位置を頂上として、腰自体が盛り上がってつくられていることが異様である。雲珠から放射状にのびて後輪に繋がれる3本の綱は、幅1.2cmで比較的細いが、後方、尾の付け根をまわる綱は、幅1.5~2cmの重厚なものである。また、左右へは、長さ5cm弱の粘土紐が垂れて杏葉を繋いでいるが、この綱と雲珠との連結部にも鉢が付されていた可能性もある。杏葉は、厚さ約7~9mmの逆三角形粘土板を2つ縫に連ねたかたちで、厳密には、上の三角形は、下端が下の三角形の上辺と重なるため、短い下底をもつ逆台形である。左右の大きさに若干の違いはあるが、上方の三角形が1辺6~7cm、下方の三角形が1辺約9cmと、下の方をやや大きくしている。また、三角形の上辺は中央から左右へやや下がり気味とする傾向がある。雲珠から垂れる綱との連結部及び上下の板の連結部に鉢状のものが付され、さらに、各頂点とその間の左右の辺にも等間隔で鉢状の飾りが付されている。本形態の類例を知らない。

その他の装飾としては、たて髪の先端部に、馬1の装飾を思わせる剥落痕を認めるが、実体は不明である。

3. 小 結

以上、形象埴輪について述べたが、その組成を整理してみたい。人物埴輪11体は、大きく7つのグループに分類できると考えられる。第1は、袈裟衣をまとった巫女像(人1、人2)2体、第2は、飾り帽子を被り、美豆良を結った、一定の身分を備える官人あるいは武人等従者と考えられる男子像(人3)、第3は、巫女の髪を真横にしたかたちの髪型の像2体(人4、人5)で、これについては、男女の区別はつけがたく、性格は保留とするが、一定身分を備えたものと考えられる。第4は、頭に王冠状の表現をもつ男子像1体(人6)、第5は、帽子を被り、ひざまづいて何かを唱えているような男子像1体(人7)、第6は、装身具や装飾を一切持たない簡素な出立ちで、片手を挙げた馬子と考えられる像2体(人8、人9)、第7は、両脚を広げて馬にまたがる男子と考えられる像2体(人10、人11)である。後2者は、馬形埴輪2頭と明確なセット関係で結び付けられる。あとのグループも、ある儀式における登場人物を役割毎に忠実に表現しているようである。2個体で一つのグループを成す場合でも、各々にはしっかりと個性が作り出されており、表現に対する配慮の精細さを感じられる。ただ、第4の天冠の男子については、通常の予想をすれば、首長像と考えるべきであろうが、半身像であることに加えて、全体の意匠に貧弱さを感じる点で、主人公とするには奇異な印象を受ける。

このような組成の意味することについて、ここで言及する準備はないが、ある儀式の1場面を表現しようとしていたことは確かである。その儀式が、葬送儀礼であるのか、首長権繼承儀礼であるのか、あるいは、亡き首長が生前に成し遂げた偉業を称えるため、その時のあり様を再現したものであるのか、想定できる場面が多い。ここでは、細かな分析を展開する余裕はないので、先学諸氏の解釈に委ねるものとするが、漠然とした筆者の捉え方については、最後のまとめに若干触れておきたいと思う。



第40図 馬2・飾り馬(S=1/4) - 59~60 -

第3節 円筒埴輪

1. 円筒埴輪概観

第41図～第53図に示した実測図は、類型に分けた結果（第V章第1節5）に基づいて掲載したものである。円筒埴輪の類型化は、構成属性個々の細かな分類とその組み合わせを検討することによっておこなっている。ただ、その分類作業の内容を記述するには多くの紙幅を費するので、これについては次章で述べることとし、筋としては相前後する結果となってしまうが、本章では、全体の概要と、実測図及び計測値を中心とした観察表をまず示しておきたい。

本遺跡出土の円筒埴輪には、朝顔形円筒埴輪と普通円筒埴輪が存し、出土状況を交えた諸属性の照合によって識別された個体数は、朝顔形円筒埴輪が6個体、普通円筒埴輪が43個体（内1個体は図化及び計測不能）である。普通円筒埴輪については、少ない破片数をもって1個体として成立させているものや、同一個体とするには出土状況の点で検討余地が残されるもの、あるいは、所属個体不明の破片もみられることから、個体数に± α を考える必要がある。

普通円筒埴輪は全て3凸帯4段で、2個一対で対向する透孔が2段目と3段目に穿たれており、段を進えて直交させる配置としている。朝顔形円筒埴輪は、体部が3凸帯4段で4段目ですばり、くびれ部に一条の凸帯をめぐらせ、朝顔部は1凸帯2段としている。透孔は体部において普通円筒埴輪と同様に穿たれている。即ち基本的には、普通円筒埴輪の最上段がくびれ部になることによって、朝顔形円筒埴輪になるもので、こういった意味では、画一的な構成がとられている。凸帯の断面形態はいわゆるM字状であるが、上下対称ではなく、「フ（こざとへん）」形が主体を占める。凸帯の貼り付けは整美さを欠き、直線的なものは少なく、ほとんどが一周する間に著しいねりをみせている。それにともなって断面形態も激しく変化するものが多い。ハケ調整は基本的にはすべて縦ハケあるいはやや斜めハケであるが、僅かに、回転ヨコハケをもつもの（1）や静止した状態で部分的調整としてヨコハケを施したもの（26・31）がある。内面は、指によるナナメナデか、あるいは皮や布のような工具を用いたと考えられるナナメナデ、ヨコナデが見られる。

ヘラ記号が、1～7、9、10の9個体で認められ、全て同じ記号として捉えられる（第V章第72図）。

大きさは、普通円筒埴輪で高さ50cm、口径30cm、底径20cm程度、朝顔形円筒埴輪で高さ70cm、口径40cm、底径22cm程度が平均値である。

技法的な面については第V章で詳しく述べるが、実測図からわかるように、内面に同心円文当具痕を残すものが多く、そしてそれらの断面を観察すると、タタキが施された位置で、粘土紐接合痕が逆転していることが分かる。即ち、一定の高さまでを倒立した状態で製作する特殊な技法が主体的に認められるのである（普通円筒埴輪1～35、朝顔形円筒埴輪）。一方、底部から口縁まで正立させた状態でつくりあげる通常の技法のものも存在している（普通円筒埴輪36～42）。この正立のものの中には、底部設定用の輪型圧痕をとどめるものが存在する（36、39b）。

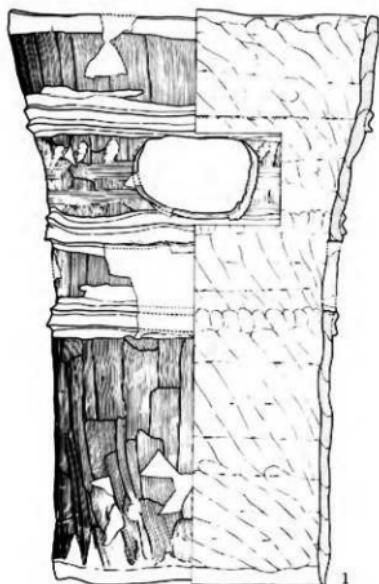
焼成は窓窯焼成であるが、いわゆる須恵質と呼ばれる高温焼成の硬質のものから、土師質の柔らかいものまで様々である。前者は、倒立させて製作したグループにおいて主体的にみられるが、軟質のものや、漸移的変化を帯びるものもあり、須恵質か土師質かといった明確な区分はできない。ただ、全て窓窯焼成であることは明らかで、その多くが、須恵器焼成に近い高温で焼成されていたことも予想される。また、1～10や17～25などは、須恵質とはいえ、表面が青灰色を呈するものはほとんどみられず、赤褐色主体で、焼成の最終段階では酸化焰として、赤い発色を意図していたことが予想される。いわば中世陶器に似た焼き上がりである。一方、正立成形のものは一般的に土師質と呼ばれるものとなっている。

2. 図示方法について

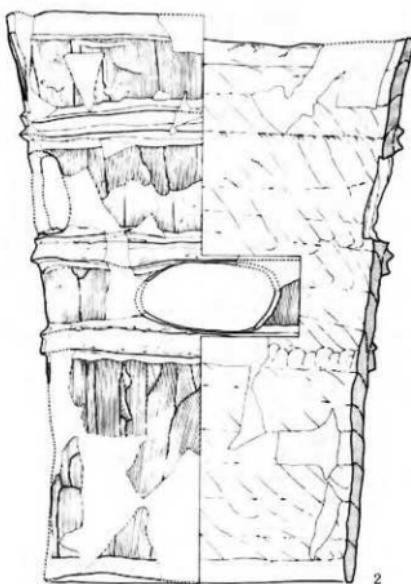
円筒埴輪の図示方法についてはかなりの試行錯誤をくりかえした。結局、ある一方から見たままの立面図として、器面の調整状況等を割り付けて描いた実測と、拓本を用いた復元実測のものとの二つの方法を採用することになった。まず、ほぼ完形状態に復元されたものをみると、全体に歪みが大きく、凸帯や口縁はしばしば大きくなうねりをみせ、擬割によって計測した形状が必ずしも器面に通有の属性には成り得ていない場合が多い。凸帯位置もさることながら、凸帯の形状も均質さを欠くのである。このため、復元作業の結果、口縁または底部を接地面として自立可能となった残存状況が良好な個体や、あるいは残存の乏しい個体でも、図上左側にくる器面が良好な遺存状況にあるものについて、写実性をもった器面の実測を行うものとした。ただ、この場合種々の弊害も生じ、例えばほぼ完形に近く復元された個体については、透孔の一つを図上正面に配置するという統一性を維持させたため、最も残りの良い面が必ずしも図上に現れてこない場合や、器面の観察が良好な面を図示できても、断面図に欠失部を多く含んでしまったり、ヘラ記号が図上に現れてこないというジレンマを感じることも多かった。もっとも、拓本を活用して、器面の遺存が良好な部分を移動させて貼り付ける方法もあったが、凸帯のうねりとの整合性や、なによりもハケ目の切り合いや単位の把握といった器面観察結果の一図示方法としても器面の実測は捨てがたく、できる限りこの方法を採用した。残存率の低いものについては、反転させて図化したものがある。欠失部を細線で明瞭に区切ったのは、器面に現れるハケ目のスリ消えの痕跡など製作時に伴う現象をしっかりと区別して把握するためである。また、断面図部分で、大規模な欠失部を含んでしまったものについては、残りの良好な部分の断面形を移動・合成させて破線で示しているので、全くの推定線というわけではない。

一方、拓本を用いた実測図については、自立させた状態での実測が不可能であるものを主体とするため、凸帯のうねりなどを正立させた正面觀として把握することはできない。このため、各部径を算出して外郭線を作成したあと反転させる復元実測とし、口縁・底縁・凸帯は、断面図に現れた端点を水平に直線でのばして概念図化した。外郭線は、本来は縦に連続していない異なる位置の破片を合成して完成させたものが多く、この場合は、外郭線合成都を一旦途切れさせることで区別している。拓本も良好な面を採用し、簡略な直線表示となった凸帯は、その一部を拓本表示で補った。内面については異なる部分を合成して連続させたものも多い。

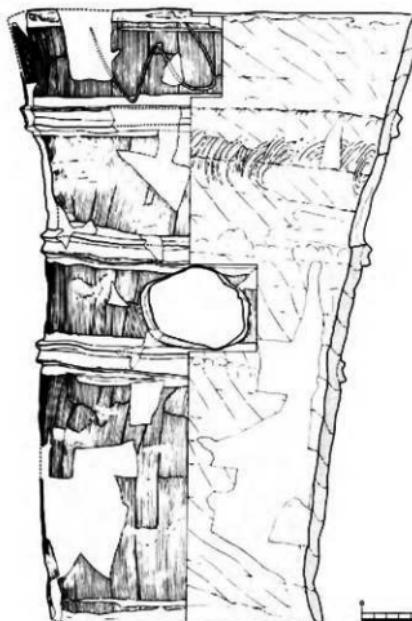
以上のような、器面実測個体と拓本表示個体の2様については、分類を念頭において、特定の類が片方の図化に限られることを避け、同一類が双方の図によって相互補完的に把握できるように配慮することに心がけた。しかし、図示が不統一であることや、あるいは図化方法自体にも問題があることはいなめず、このことについては、「図で何を表現しようとしているのか」といった、目的のあいまいさが指摘されるかもしれない。これは、立体の埴輪が実際に示す情報量を遥かに下回る制約を受ける実測図について、埴輪研究の現状が欲する情報を整理し、図に反映させることができなかった筆者の勉強不足によるものであり、先学の御批判を仰ぐ次第である。



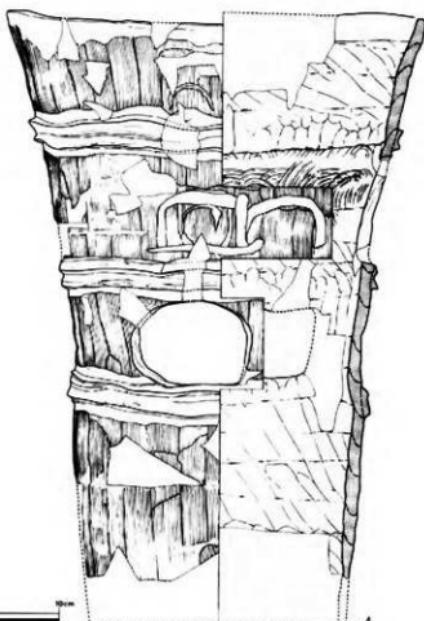
1



2



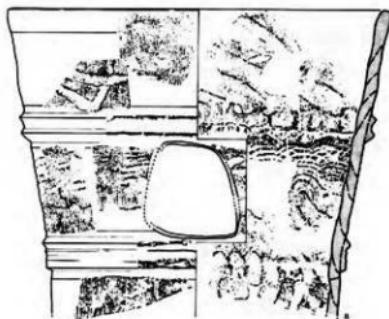
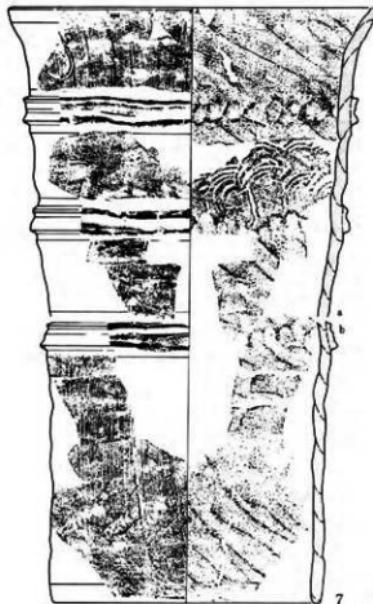
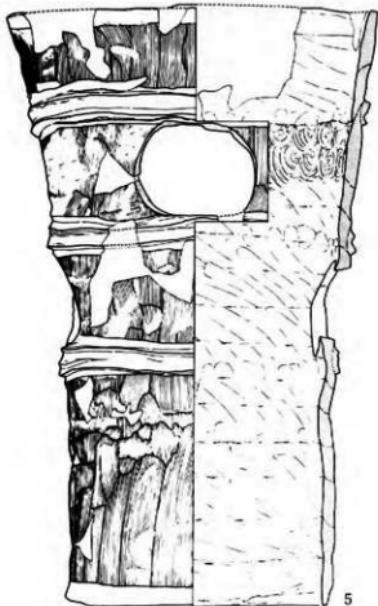
1mm



4

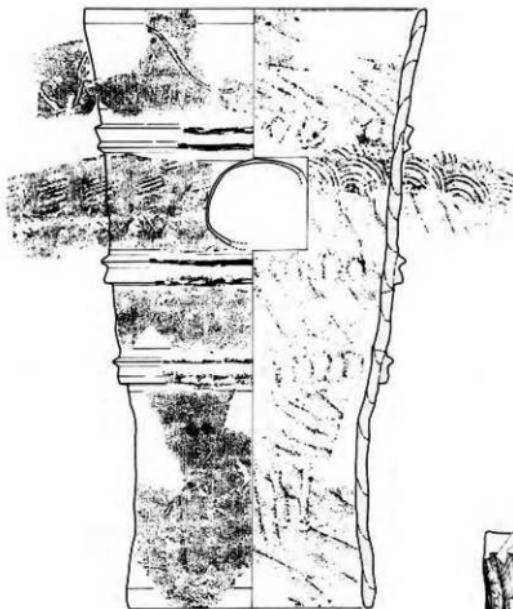
第41図 普通円筒地輪実測図 ($S = 1/4$)

(IA1類)

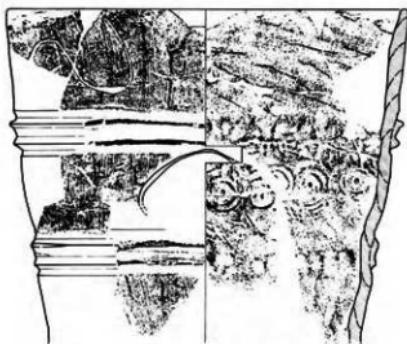


第42図 普通円筒埴輪実測図 ($S=1/4$)

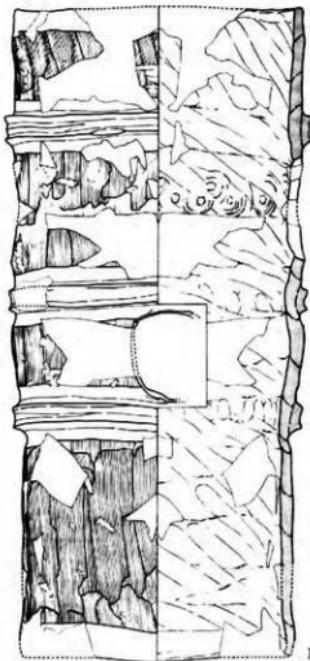
(IA 1類)



9



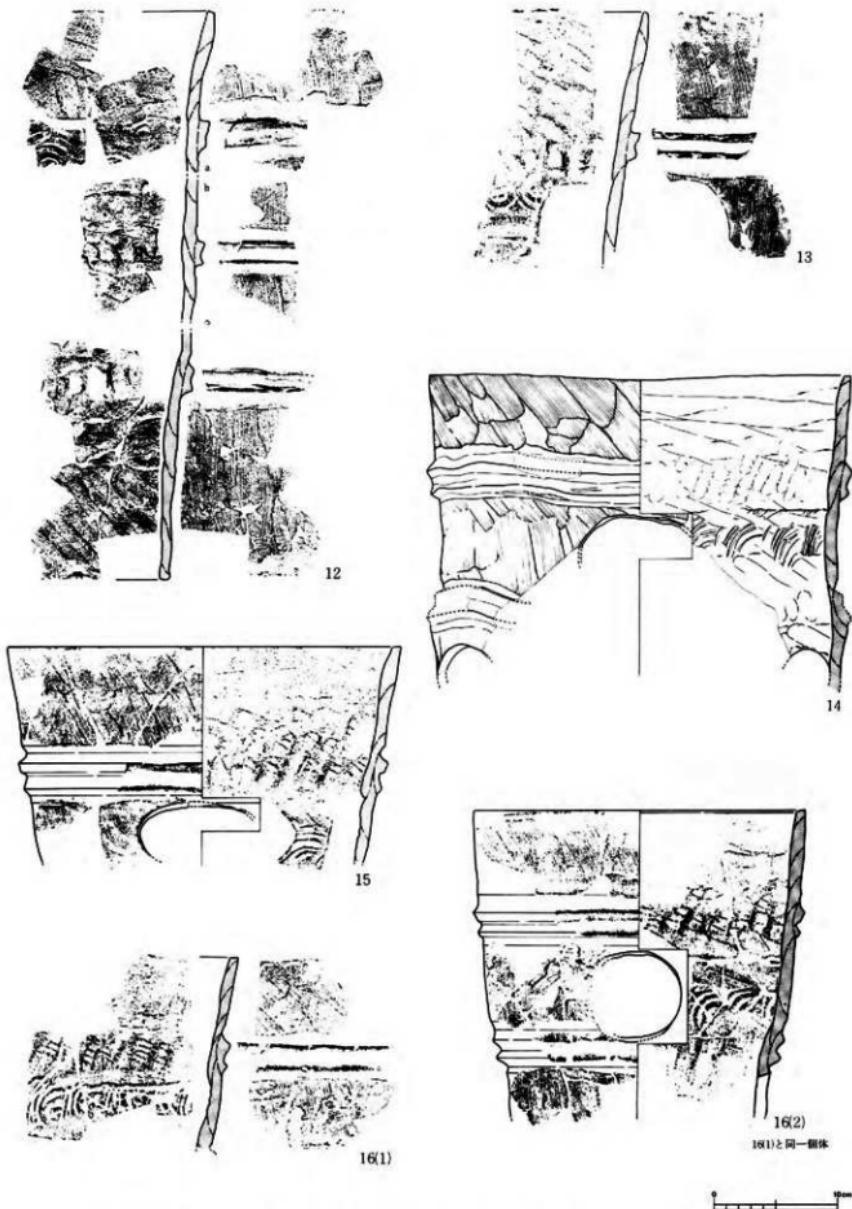
10



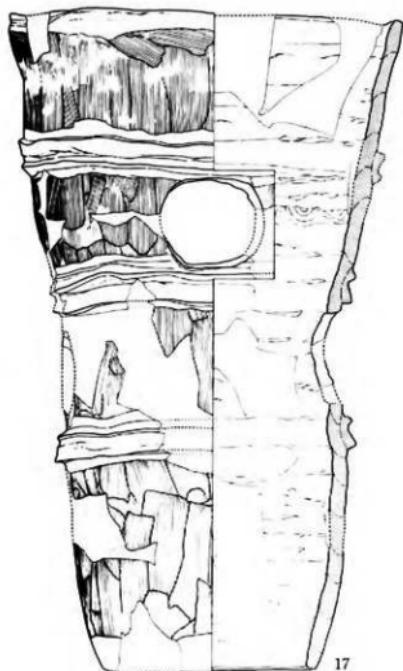
11

(9,10: I A 1類, 11: I A 2類)

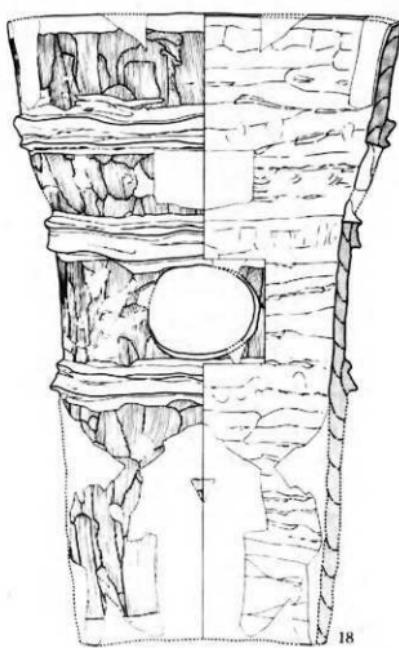
第43図 普通円筒埴輪実測図 ($S=1/4$)



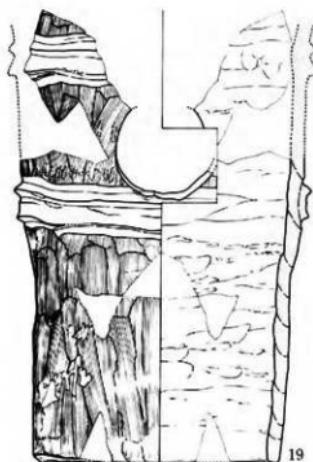
第44図 普通円筒埴輪実測図 ($S=1/4$) (12,13: I A 2類、14~16: I A 3類)



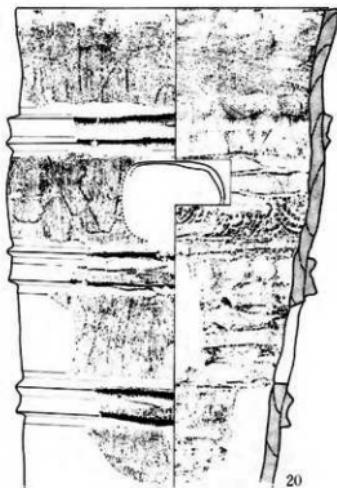
17



18



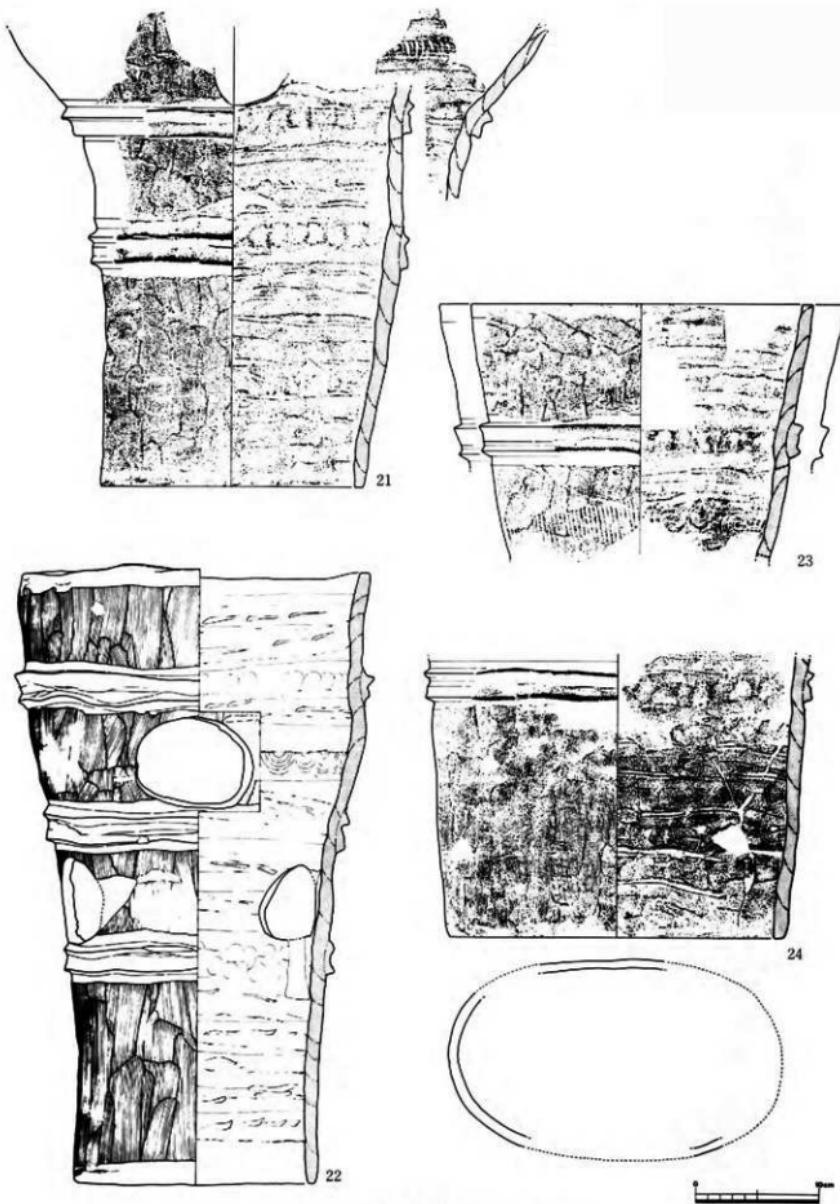
19



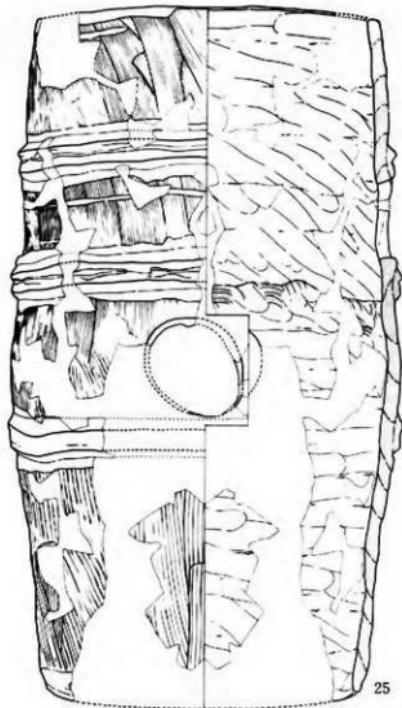
20

第45図 普通円筒埴輪実測図 (S=1/4)

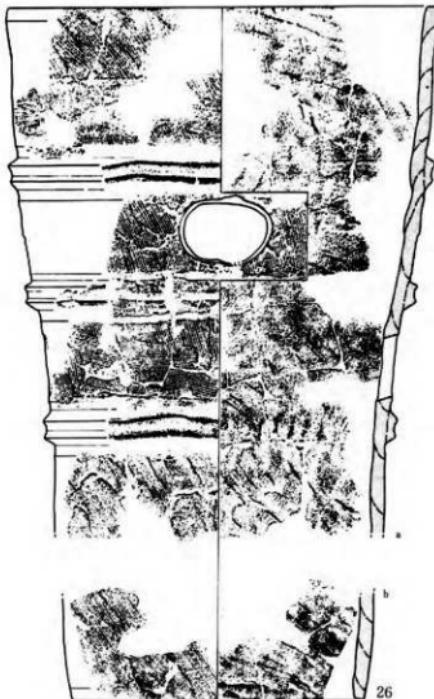
(1B1類)



第46図 普通円筒埴輪実測図 ($S = 1/4$)



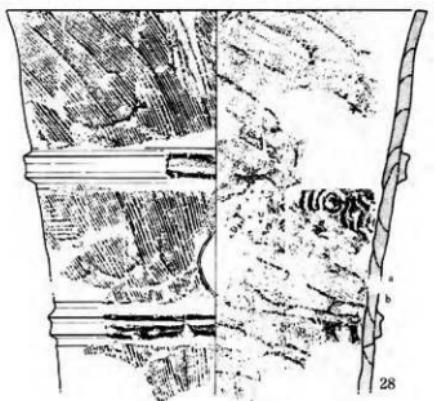
25



26



27

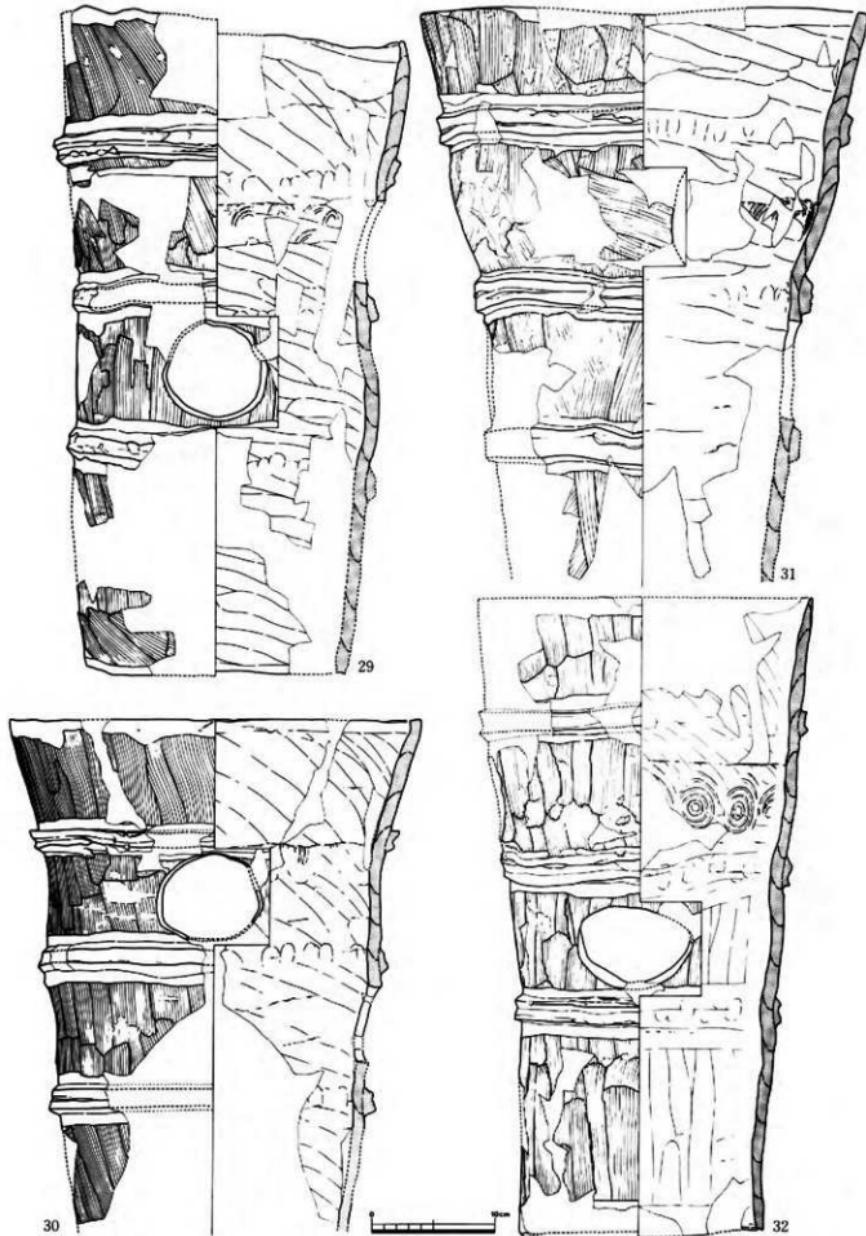


28

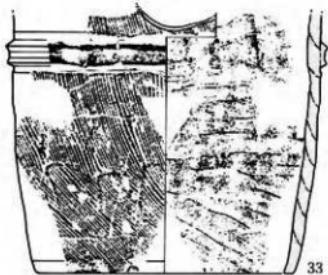
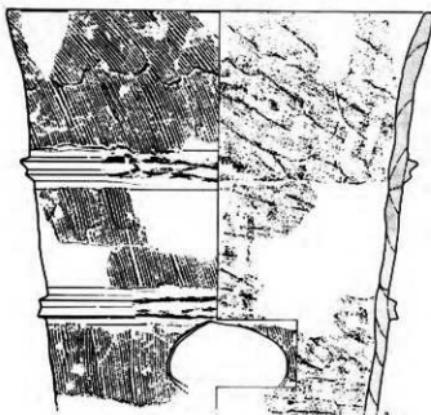
(25: I B 2 類、26: I A 4 類、

27,28: I C 1 類)

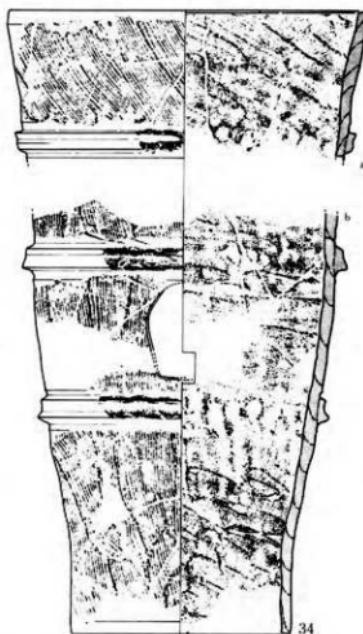
第47図 普通円筒埴輪実測図 ($S = 1/4$)



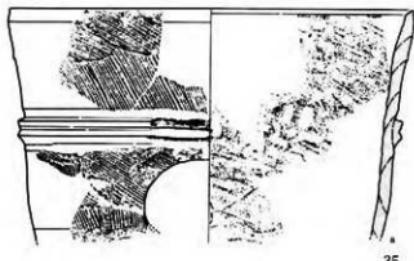
第48図 普通円筒埴輪実測図 ($S=1/4$) (29: I C 1類, 30~32: I C 2類)



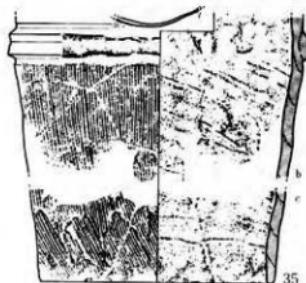
33



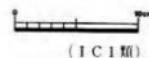
34

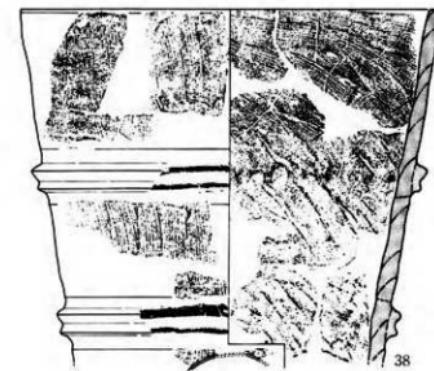
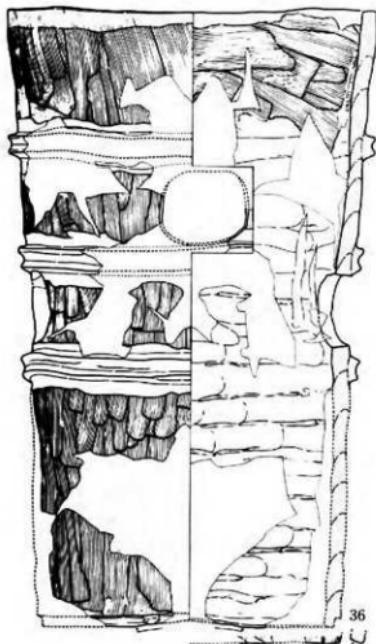


35

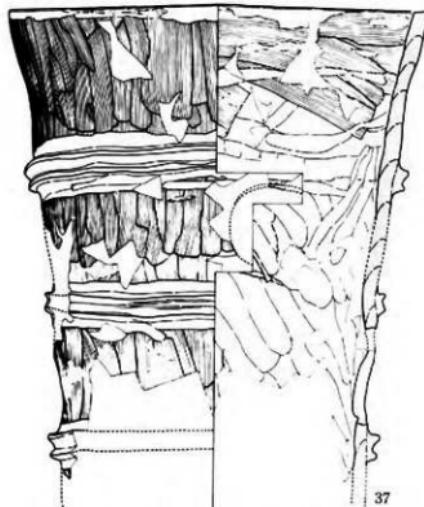


35

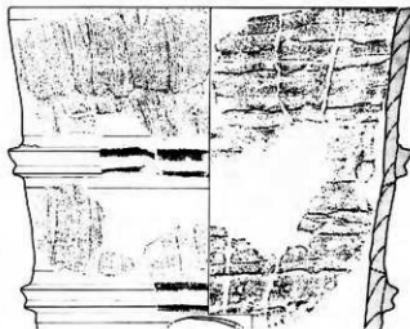
第49図 普通円筒埴輪実測図 ($S = 1/4$)
(1 C 1 M)



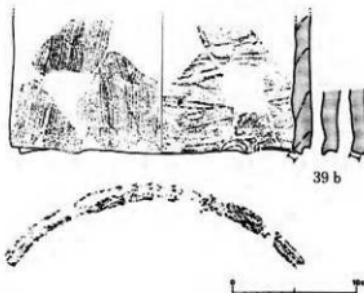
38



37



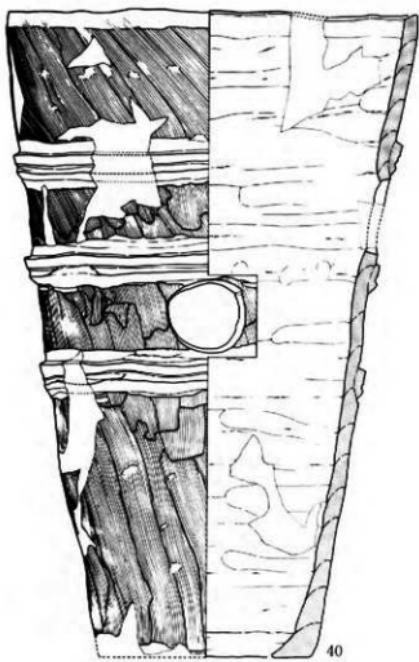
39 a



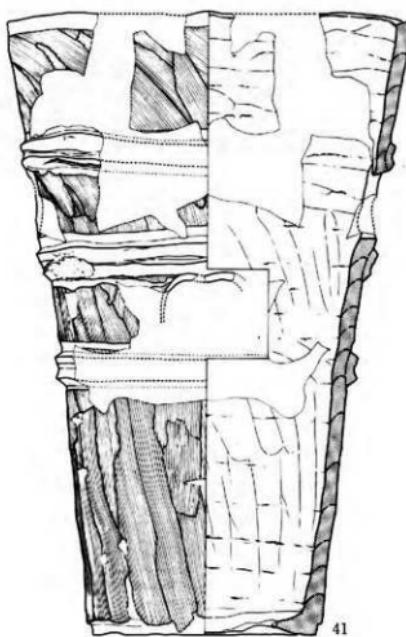
39 b

第50図 普通円筒地輪実測図 ($S = 1/4$)

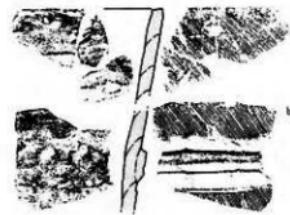
(II A類)



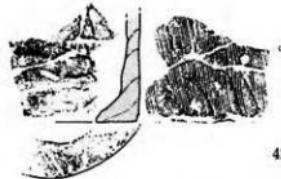
40



41



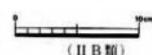
40 底面

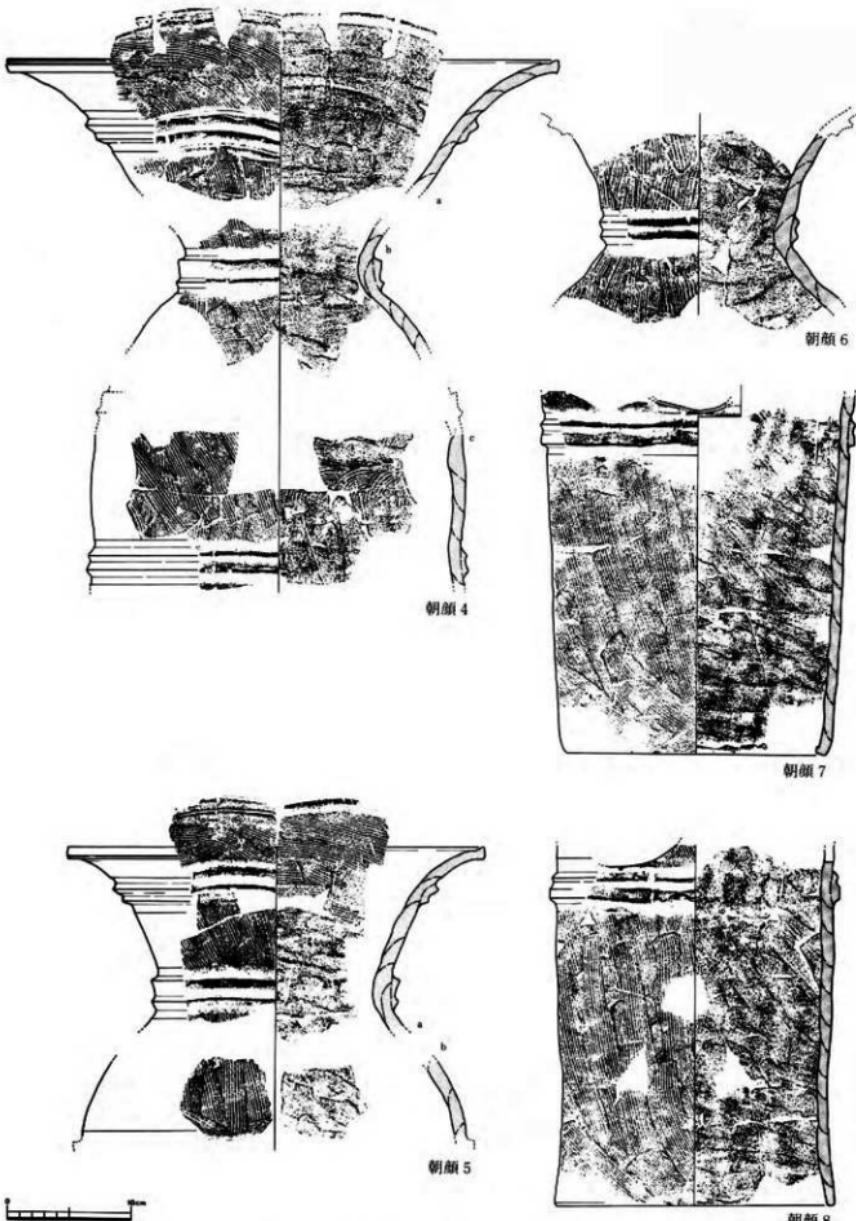


42



41 底面

第51図 普通円筒地輪実測図 ($S = 1/4$)



第52図 朝顔形円筒埴輪実測図 ($S = 1/4$)



第53図 朝顔形円筒埴輪実測図 ($S = 1/4$)

第4節 石 器(第54図)

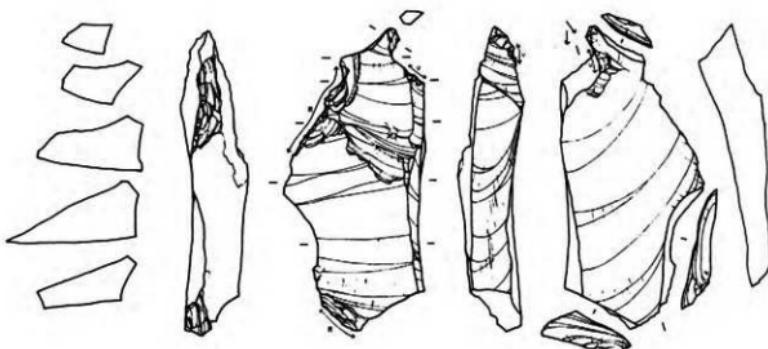
周溝Ⅷ区より石器が1点検出されている。覆土中からの出土であるが、器種は彫器に分類されるもので、旧石器時代の所産である可能性が強い。遺物整理段階で発見したものであるため、現地における包含層の確認作業は行っていない。当台地上で、今後、旧石器時代遺跡確認作業の必要性を痛感する。

石材は暗赤灰色の珪質岩で、縦長剝片を素材としている。彫刀面は右側縁にあり、素材剝片打面を加撃面として長軸方向に施した2度にわたるものである。最初のファシットは、剝片を縦に裁断してしまうもので、彫刀面と表裏面との角度は、末端側を除いて、ほぼ90度を成している。この最初のファシットについては、この素材剝片を剥離するときに、偶発的に生じた可能性も指摘できる。しかし、2度目のファシットについてはその角度等から意図的なものと判断される。彫刀面は短く、そして強く屈曲する蝶番状剥離面となっており、表裏面との角度は、加撃点近くでは90度に近いが、屈曲後は斜傾し、表面とは約50度と鋭角的、裏面とは約130度と鈍くなっている。先端は正面觀山形の尖り氣味となつていい。この彫刀面周囲には処所微細剥離痕が観察される。まず先端部は小規模な潰れ痕状を成し、表裏面に向てもごく僅かな剥離痕が及んでいる。次に、頂部直下の彫刀面において、裏面からの微細剥離痕があり、その下部から屈曲部近くにかけては、裏面において彫刀面からの微細剥離痕、さらに、屈曲後の鋭角部側において、彫刀面及び表面の双方に微細剥離痕が観察される。

左側縁では、その上半部に、裏面からの調整剥離によって鋸歯状縁が作出されており、中央部に素材縁辺をわずかに残している。その下は切断面を介し、末端近くで再び裏面からの調整剥離が施されている。この調整剥離は、裏面との角度約55度を測り、細部調整のあり方から、削器としての機能を果たしていた可能性がある。

切断面は3個所有し、いずれも加撃点を備えるものであるが、それらに接する調整剥離痕との先後関係は明確にはしがたい。ただし、末端の切断面は、最初に作出された彫刀面よりは後出のものである。

長さ6.1cm、幅2.9cm、厚さ1.1cm、重さ17.2gを測る。



第54図 出土石器実測図 (S=1/1)

観察表

表2

須恵器觀察表

番号	出土区	器種	法量(cm)	複存度	地成	色調	胎工	器面	調査	備考
1	N	环 置	口14.6、残高3.4 天井部欠	2/7	良	灰(黄)白色	白色砂粒・黑色 粒多量含有	粗		
2	II	ス	口14.6、高4.5	完 形	良好	淡灰褐色、外・一部 黑色	"	やや 平滑	天5/7へラ削り その後底部ナダ	黒色斑点吹 出多
3	"	"	口15.0、高5.7	"	不良	淡灰黃白色	"	粗	"	
4	"	"	口14.6、高5.6	ほぼ完形	やや 不良	淡灰黃白色、外・半 部暗灰色	"	"	天5/8へラ削り	5とセッタ か
5	"	环 身	口12.0、受15.0 高6.0、口高1.7	7/8	"	淡灰黄色、外・一 部暗灰色	"	"	底2/3へラ削り	4とセッタ か
6	V	"	口12.3、受14.8 高6.0、口高2.1	1/6	"	淡灰(黄)白色	4mm小石僅含有	やや 平滑	底1/2へラ削り 後その上部ナダ	
7	III	"	口12.8、受15.0 高5.6、口高1.8	2/5	やや 良	灰白色	"	やや 粗	底2/5へラ削り	
8	質	"	口12.7、受15.2 残高5.2、口高1.8	1/4	良	淡灰(黄)色、外・一 部暗灰色	"	粗	底2/3へラ削り	9と同一個 体か
9	"	"	口12.6、受15.2 高5.2、口高1.7	3/5	"	"	"	"	"	8と同一個 体か
10	"	"	口12.8、受15.6 残高3.4、口高1.7	口縁1/3	"	淡灰(黄)色	白色砂粒・黑色 粒多量含有			
11	"	"	口12.2、受14.8 高5.0、口高2.0	2/5	"	淡灰(黄)色、外・大 半純白色自然胎	"	極めて粗	底1/2へラ削り	
12	"	"	口12.0、受14.6 高5.5、口高1.9	6/7	"	淡灰色、外・一部純 白色自然胎	白色砂粒・黑色 粒多量含有	"	底1/3へラ削り	
13	II	"	口13.0、受15.3 高5.0、口高1.5	4/5	良好	内・灰褐色、外・灰 色一部黑色	"	やや 粗	"	内面黑色斑 点吹出斑
14	"	"	口12.8、受15.2 高5.2、口高1.5	ほぼ完形 口一部欠	"	"	"	"	底5/8へラ削り	内面黑色斑 点吹出多
15	III	"	口14.0、受16.0 残高2.6、口高0.6	口縁2/5	"	内・灰褐色、外・灰白 色一部黑色	"	"	"	
16	I	踏台付 高 扇	受基33.6 身42.9、背高3.7 脚基4.6、脚端 折3.8、脚高5.2 残高10.5	口縁金具欠 脚2/5欠	"	白色細砂粒多量 黑色細粒微量含有	平滑 倒密	环底へラ削り後 ナダ化後ヘラ彫 或杖支 跡・脚部カキ目		跡・脚部と もに長方形 三方スカン
17	II	壺 盖	口8.4、高3.9	完 形	"	内・該灰色 外・灰褐色	白色砂粒・黑色 粒多量含有	やや 平滑	天1/2へラ削り	外面黑色斑 点吹出多
18	"	壺	口12.3、残高4.0	口頭細片	"	内・灰白色 外・暗灰褐色	白色砂粒・黑色 粒多量含有	やや 粗	口縁・腹部各1 段脚部底状文	
19	"	"	口13.0、脚9.4 脚高6.2、残高7.1	ほぼ完形 口縁一部欠	"	暗灰色	白色砂粒僅含有 白色微細粒多量 含有	極めて 平滑 倒密	頭部・段脚部底 状文、底部粘土 ナダ化	
20	I	"	脚基3.9、脚9.5 脚高6.0、残高7.1	口頭部欠 脚3/4欠	"	内・暗灰色、外上半 部・灰白色に緑色自然 胎、下半・紫灰色	白色砂粒・黑色 粒多量含有	粗	脚部・輪脚突変 或部大半へラ削 り	外面底部黒 色斑点吹出
23	III	鏡	口8.7、脚18.5 高21.5、脚幅11.1	2/3	"	淡灰褐色～灰褐色 口、縁外・素灰色 内・綠色自然胎	"	"	脚外側カキ目 半周曲内カキ目	
24	II	"	口3.4、残高10.7	口縁1脚一 脚欠	"	内・該灰色 外・淡灰褐色～灰 色	"	やや 粗	脚外側カキ目	
25	"	壺	口14.8、脚20.8 脚高6.4、残高23.8 口頭高6.5	2/3	"	(青)灰色～灰褐色	白色(細)砂粒多 量含有	やや 平滑		表面剥落多
26	III	"	口15.0、脚21.0 脚高11.2、高22.0 口頭高4.0	2/3	"	灰色～灰褐色～一 部黑色	白色砂粒・黑色 粒多量含有	やや 粗	口頭部底状文 脚外平行タタキ →上半ナダカキ目 脚内同心円タタ キ→上半ナダ	
27	II	"	脚基8.6	脚部付近、 底部破片	"	口縁・灰色～灰褐色 制、淡灰褐色～灰 色	白色砂粒・白色 微細粒中量含有	平滑 倒密		
28	O	"	口17.5、脚基12.8	口縁脚片	不良	灰白色	白色砂粒・黑色 粒多量含有	やや 平滑	カキ目	表面剥落多
29	O	"	高基11.2、脚25.0 残高22.8	口縁脚片 脚3/5	良	内・暗灰色 外・灰白色～暗灰色	"	やや 粗	脚外平行タタキ →上2/3カキ目 脚内同心円タタ キ→部分ナダ	

番号	出土区	器種	法量(cm)	残存度	地成	色調	胎土	器面	調整	備考
30	■	高环	残高6.5	脚部断片	良	内・紫灰色 外・淡(紫)灰色	白色砂粒・黑色 粘多量含有	粗・表面多孔	ナゲ	三方スカシ
31	I・Ⅲ	■	脚環12.0 残高4.7	■	■	内・紫灰色 外・黑灰(緑)色	■	やや 平滑	ナゲ	三方スカシ 黑色点吹出
32	表様	■	残高5.4	■	■	灰(白)色・暗灰色	■	やや粗	■	四方スカシ
33	I	瓶	残高3.0	底部断片	やや 良	内・淡紫灰色 外・淡(紫)灰白色	■	内面不滑 外多孔	■	内面黑色斑 点吹出
34	II	甕		胴部片	■	淡(紫)灰白色、内 绿色自然釉	■	粗	外・平行タキ 内・同心円タキ	

*蓋環等ケズリ範囲は、中心点から輪郭線に沿って計測した比率。

表3 土師器観察表

番号	出土区	器種	法量(cm)	残存度	地成	色調	胎土	器面	調整	備考
21	II 埴丘	环	D13.4、高5.5	ほぼ完形	良	内・淡黄褐色 外・(明)褐色	白色微細砂粒・ 黑色粘多量含有	磨耗激	ナゲ	
22	*	*	D13.0、残高4.3	口縁部片	■	淡褐色	■	■	ナゲ、ハケ?	

表4 人物埴輪観察表

番号	名 称	高さ(cm)	半身高(cm)	残存状況	色 調	胎 土	調整・その他
人1	傳びき装袴の女子	77.2	約55	ほぼ完形。	10R%、一部10R%	白色砂粒多量 黑色粘少量含有	基台: 堀ハケ
人2	袴姿の女子	残44.8	44.8	基台は欠く。頭頂部髪欠。 他の部分は完形。	7.5R%~分	■	
人3	傳び帽子の男子	規71.5 推75	約50	両腕、半身約分。 基台は頭部欠。	暗赤色(7.5R%)~灰赤 色(7.5R%)	■	基台: 堀ハケ後 横ハケ、面部へ一筋
人4	刀子を佩る人	76.5	約53	左手、腰部、顎面一部欠。	暗赤色~灰赤色(7.5R %~5%)	■	基台: 堀ハケ
人5	勾玉をつける人		48.0	両腕、衣裾大半、基 台底部断大半。	灰赤色(7.5R%)~暗赤 色(7.5R%)	■	基台: 堀ハケ
人6	天冠の男子	規52.0	約44	右手欠。他の全体の約 2/3欠。	赤褐色(10R%)~赤灰色 (10R%)	■	基台: 堀ハケ後 横ハケ
人7	萬葉の男子	46.3	約38	ほぼ完形。顎面若開 口端欠。	灰赤色(7.5R%)~暗赤 色(7.5R%)	■	基台: 堀ハケ
人8	右手を擧げる男子	規56.5 推62	約39	右腕半欠。基台大半 欠。	赤褐色(10R%~5%)~暗 赤褐色(2.5Y R%~5%) ~淡赤褐色(2.5Y R%~5%)	■	基台: 堀ハケ 兎骨?
人9	右手を擧げる口點の男子	規46.0	約41	左腕、基台大半欠。	赤褐色(10R%~5%)~暗 赤褐色(2.5Y R%~5%)	■	基台: 堀ハケ
人10	騎乗の男子	規47.5		左腕欠。脚先欠?耳 欠。	灰赤色~暗赤灰色(7.5R %~5%)	■	
人11	騎乗の男子	規39.0		■	灰赤色~より赤褐色 (7.5R%~5%)	■	脚部平行タキ

表5 馬形埴輪観察表

番号	名 称	高さ(cm)	全長(cm)	胸幅(cm)	残存状況	色 調	胎 土	調整・その他
馬1	鞍馬	64.6	70.7	29.6	西脚大半欠、尻尾先 端欠。耳大半欠。	灰赤色~にい赤色 (7.5R%~5%)	白色砂粒多量 黑色粘少量含有	円錐杏葉
馬2	鞍馬	様65	76.7	29.7	西脚欠、尻尾・たて 髪大半欠、蹄泥剥落。	赤褐色~灰赤色(2.5Y R %~5%)	■	刺彫り?杏葉

表 6-(1)

普通円筒埴輪計測表(左右対一表)

番 号	出 土 区	法 量								凸 带 · 通 孔																						
		基 高				口 徑				底 徑				器 肉 厚		残 存 (%)	凸 帶 幅		凸 帶 高		通 孔											
		最大		平均		最大		平均		最大		平均		最大			平均		最小		平均		A		B		C		D			
		最小		最大		最小		最大		最小		最大		最小			最大		平均		最小		平均		最小		平均					
1	Ⅶ	46.5 45.5	46.0 29.4	31.8 30.6	30.6	21.7 20.3	21.0	1.1 0.7	0.9	95	1.8 1.2	1.5 0.4	0.8 0.6	0.6 0.5	7.2	10.4	7.0	10.2	6.0	10.4	6.2	9.0	—	—	—	—						
2	Ⅴ・Ⅷ Ⅳ	46.1 43.3	44.7 33.0	33.6 31.8	31.8	25.0 25.0	25.0	1.1 0.7	0.9	75	2.0 1.2	1.6 1.4	0.7 0.4	0.6 0.4	7.8	9.8	7.2	10.6	6.2	11.9	(5.6)	11.1	—	—	—	—	—	—				
3	Ⅸ・Ⅹ Ⅸ	49.7 48.5	49.1 32.0	34.5 30.5	33.3	22.5 20.5	21.5	1.1 0.8	1.0	90	1.8 1.4	1.6 1.3	0.7 0.4	0.6 0.3	7.8	9.6	8.2	9.4	7.2	8.9	7.1	10.6	—	—	—	—	—	—				
4	Ⅷ	—	—	34.5 33.5	34.0 30.7	—	—	1.1 0.7	0.9	80	2.0 1.3	1.7 1.4	0.8 0.4	0.6 0.3	10.0	9.8	8.8	—	7.1	10.3	6.8	—	—	—	—	—	—	—				
5	Ⅷ	48.5 47.4	48.0 28.2	31.0 21.5	29.6	22.5 22.0	1.1 0.7	0.9	90	2.2 1.8	0.7 0.3	0.5 0.3	0.6 0.3	9.0	9.8	—	10.6	7.8	9.6	7.8	10.4	—	—	—	—	—	—					
6	Ⅲ・Ⅳ Ⅲ	—	(46.2)	—	(31.2)	—	(18.8)	—	—	40	1.6 1.3	1.5 0.5	0.8 0.6	0.6 0.5	—	—	—	—	(7.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
7	Ⅸ	—	(48.4)	—	(29.8)	—	(21.5)	—	—	25	2.0 1.4	1.7 1.4	0.6 0.4	0.5 0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
8	Ⅹ	—	—	—	(31.2)	—	(20.0)	—	—	20	2.0 1.2	1.6 1.3	0.6 0.5	0.6 0.4	—	—	—	(7.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
9	Ⅱ	—	(48.5)	—	(28.0)	—	(19.9)	—	—	50	1.9 1.5	1.7 1.5	0.7 0.6	0.6 0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
10	Ⅹ	—	—	—	(32.7)	—	—	—	—	50	1.2 0.8	1.0 1.3	0.5 0.6	0.6 0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
11	Ⅹ	—	(42.8)	—	(23.2)	—	(22.0)	—	—	50	1.8 1.3	1.6 1.5	1.0 0.6	0.8 0.6	—	—	9.0	8.3	7.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
12	Ⅹ	—	—	—	—	—	—	—	—	50	2.0 1.2	1.8 1.6	0.8 0.6	0.7 0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
13	Ⅹ	—	—	—	—	—	—	—	—	50	1.1 0.9	1.0 1.0	0.7 0.6	0.7 0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
14	Ⅱ	—	—	—	(34.4)	—	—	—	—	50	1.1 0.9	1.0 1.0	0.5 0.5	0.7 0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
15	I・II	—	—	—	(32.0)	—	—	—	—	50	1.2 0.8	1.0 1.0	0.6 0.6	0.7 0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
16	I・II	—	—	—	(27.0)	—	—	—	—	50	1.1 0.9	1.0 1.0	0.6 0.6	0.7 0.7	2.0 1.5	1.8 1.5	0.8 0.6	0.7 0.6	7.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
17	III・IV V	53.4 52.0	52.7 51.5	32.1 32.3	31.8 31.9	19.0 19.7	18.3 19.7	1.4 1.4	1.2 1.2	80	2.5 1.6	2.1 1.5	1.4 0.5	1.0 0.5	7.3 (8.5)	7.6	—	—	—	7.6	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
18	II・V VI	51.5 49.7	50.6 51.5	32.3 31.5	31.9 31.5	20.9 19.4	19.7 19.0	1.4 1.2	1.2 1.2	75	2.4 1.6	2.0 2.0	1.1 0.5	0.8 0.8	—	—	7.0	—	8.3	9.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
19	I・II	—	—	—	—	—	20.7 16.8	—	—	35	2.3 1.6	2.0 2.0	1.1 0.7	0.9 0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
20	II・III	—	—	—	27.0 26.0	—	26.5 26.5	—	—	40	2.5 1.7	2.1 2.1	1.1 0.6	0.9 0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.0			
21	○・I II	—	—	—	—	—	21.3 18.3	—	19.8 19.8	40	2.4 1.6	2.0 0.7	0.9 0.8	0.8 0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
22	II	49.9 48.7	49.3 49.0	28.5 27.5	28.0 28.0	21.0 19.8	20.4 21.9	1.3 1.4	1.2 1.2	98	2.5 1.5	2.0 2.0	1.0 0.5	0.8 0.8	7.6	9.4	7.0	8.6	7.2	(8.2)	6.7	9.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
23	Ⅹ	—	—	(32.0) (28.0)	(30.0)	—	—	1.3 1.1	1.2 1.2	50	2.0 1.8	1.9 1.6	0.9 0.6	0.8 0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
24	II	—	—	—	—	—	(27.0) (16.0)	—	21.9 19.0	50	2.2 2.0	2.1 2.0	1.0 0.8	0.9 0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
25	II	56.0	56.0	30.5 28.3	29.4	—	(25.0)	0.8	1.1	70	1.7 1.5	1.6 1.6	0.9 0.7	0.8 0.8	(7.2)	—	6.3 (8.4)	(8.2)	—	(8.2)	10.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
26	V・VI	—	—	—	(34.6)	—	(23.6)	1.0	1.1	40	1.6 1.4	1.5 1.5	1.0 0.9	0.8 0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
27	V	—	—	—	(32.0)	—	—	1.2	1.1	50	1.7 1.5	1.6 1.5	1.0 0.7	0.9 0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
28	I・II	—	—	—	(34.0)	—	—	1.1 0.9	1.0 1.0	30	1.9 1.3	1.6 1.3	0.8 0.6	0.7 0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
29	V・VI	53.9 52.2	52.2 28.0	29.0 28.5	28.5 18.5	—	22.0 20.3	1.2 1.0	1.0 0.9	60	2.1 1.2	1.7 1.2	1.0 0.5	0.8 0.6	7.0	—	—	—	8.3	8.6	—	8.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
30	I	—	—	—	(33.6)	—	—	1.2 0.8	1.0 0.7	60	1.8 1.1	1.5 1.0	1.0 0.6	0.8 0.8	(7.4)	8.6	—	—	(7.0)	—	6.5	(8.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
31	V	—	—	—	36.6 36.0	—	36.3 36.3	—	—	60	2.0 1.8	1.9 1.8	0.8 0.7	0.8 0.7	(9.8)	9.0	(9.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
32	V	—	(51.5)	—	(27.6)	—	(20.0)	0.7	0.9	50	1.6 1.2	1.4 1.0	0.7 0.6	0.6 0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	6.6	9.8	—	—	—	—	—	—	—	—
33	○・V	—	—	—	(34.6)	—	(20.3)	0.9	1.1	60	1.5 1.3	1.4 1.3	0.9 0.7	0.8 0.7	—	—	—	—	—	—	—	9.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
34	II・V	—	—	—	(29.5)	—	(17.8)	0.8	1.0	45	1.6 1.2	1.7 1.2	0.9 0.8	0.9 0.9	—	—	—	—	—	—	—	(7.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

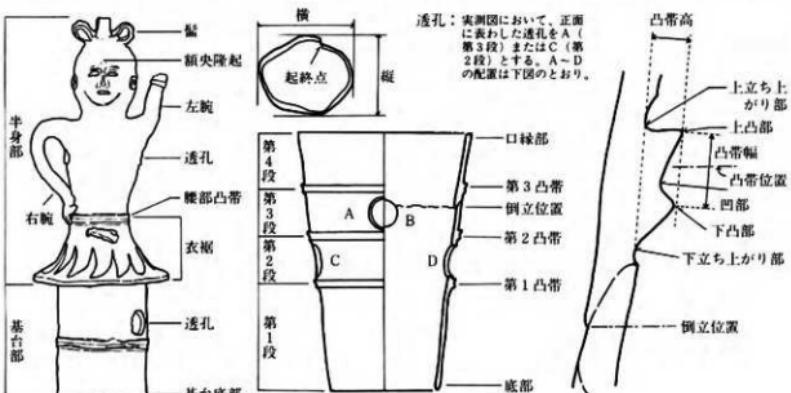
表 6-(2)

番 号	底部からの凸部位置・倒立位置								口縁からの凸部位置・倒立位置								備 考	
	第1		第2		第3		倒立位置		第1		第2		第3		倒立位置			
	最大	平均	最大	平均	最大	平均	最小	最大	平均	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大		
1	21.5 20.5	21.0 20.3	29.5 28.3	28.9 37.2	38.2 37.5	37.7 37.5	38.5 38.0	25.9 24.6	25.3 16.9	17.6 8.4	17.3 8.7	8.9 7.5	8.5 8.0	8.5 8.0	8.5 8.0			
2	20.0 18.3	19.2 25.8	27.4 36.0	26.6 36.8	37.5 35.7	37.7 36.7	36.7 36.6	26.6 25.6	26.1 18.0	19.5 18.8	19.5 8.3	9.5 8.9	9.0 8.0	8.5 8.5	8.5 8.0			
3	21.7 20.6	21.2 29.7	30.7 40.3	30.2 40.3	41.0 40.7	41.7 40.1	40.9 40.1	29.0 27.2	28.1 18.9	19.7 19.3	9.4 8.1	8.8 7.4	9.4 7.4	8.4 8.4	8.4 8.4			
4	—	—	—	—	—	—	—	31.1 29.2	30.2 20.7	22.3 21.5	10.5 9.1	9.7 9.7	11.5 9.5	10.5 10.5				
5	20.2 19.4	19.8 29.5	30.3 29.9	29.5 38.3	40.5 39.4	40.5 39.0	39.8 38.1	29.1 28.6	19.3 18.0	18.7 18.7	10.3 7.9	9.1 8.2	9.5 8.9	8.9 8.9	8.9 8.9			
6	—	(20.0)	—	(29.7)	—	(39.3)	(37.5)	—	(26.2)	—	(16.5)	—	(6.9)	—	(8.7)	a・b 標点なし 反転実測		
7	—	(21.5)	—	(31.0)	—	(40.0)	(37.7)	—	(26.9)	—	(17.4)	—	(8.4)	—	(10.7)	a・b 標点なし 反転実測		
8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(20.0)	—	(9.7)	—	(10.2)	a・b 標点なし 反転実測			
9	—	(18.9)	—	(27.2)	—	(38.0)	(37.0)	—	(29.6)	—	(21.3)	—	(10.5)	—	(11.6)	反転実測		
10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(20.0)	—	(10.2)	—	(10.8)	#			
11	20.0 19.2	19.6 28.5	30.7 28.6	44.0 42.0	43.0 40.6	41.5 40.8	33.4 32.8	33.1 32.6	23.5 23.1	9.7 9.2	9.5 12.0	13.5 12.8						
12	—	—	—	—	—	—	—	(30.0)	—	(19.7)	—	(10.0)	—	(8.9)	a・b・c 標点なし			
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(11.0)	—	(13.7)				
14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.0 8.2	8.6 11.0	11.6 11.3	反転実測			
15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(10.8)	—	(12.4)	#			
16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(19.3)	—	(9.1)	—	(12.5)	(1) (2) 同一側体			
17	19.5 18.1	18.8 30.0	31.2 41.1	30.6 42.1	42.9 42.0	36.6 40.0	36.8 33.4	35.0 34.2	23.6 21.9	22.8 19.5	12.0 10.6	11.3 11.3	16.0 15.2	15.6 15.6				
18	21.7 20.3	21.0 32.1	33.5 39.7	32.8 39.7	42.2 41.0	40.0 38.5	39.3 29.7	30.5 30.1	18.9 17.5	18.2 18.2	9.8 9.0	9.4 9.4	12.5 11.5	12.0 12.0		反転実測		
19	21.7 19.3	20.6 —	32.5 32.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	#			
20	—	—	—	—	—	—	—	—	(32.2)	—	(21.4)	—	(10.0)	—	(10.4)	#		
21	—	(19.0)	—	(29.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
22	18.7 18.0	18.4 28.0	29.0 28.5	28.5 39.2	40.5 39.9	39.9 34.6	36.9 35.3	31.7 31.2	21.7 21.0	21.0 21.0	10.1 9.1	9.6 13.5	14.6 14.1					
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(34.0)	—	(15.6)	反転実測			
24	—	(20.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(11.2)	—	—	#			
25	—	(21.6)	—	(33.8)	—	(43.7)	—	(32.6)	12.8 11.4	—	22.6 21.1	—	33.0 34.8	(12.7) 22.0	24.0 46.0	#		
26	—	—	—	—	—	—	—	—	(13.5)	—	(23.3)	—	(34.0)	—	(18.4)	a・b 標点なし 反転実測		
27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(11.2)	—	(12.8)	a・b 標点なし 反転実測			
28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(12.7)	—	(14.4)	a・b 標点なし 反転実測			
29	18.5 14.3	16.4 28.8	31.0 29.9	43.2 38.0	40.6 37.7	39.7 37.7	37.2 34.6	35.9 35.9	23.4 21.7	22.6 22.6	13.8 10.4	12.1 12.0	15.0 13.5					
30	—	—	—	—	—	—	—	—	30.6 29.7	30.2 19.0	19.5 19.5	10.0 9.2	16.0 15.0	15.5 15.5		反転実測		
31	—	—	—	—	—	—	—	—	36.4 34.8	35.6 22.7	23.8 23.3	9.8 9.1	10.8 10.4	10.6 10.6		#		
32	19.2 18.2	18.7 29.3	29.9 29.6	42.2 41.5	41.9 38.5	39.5 39.0	—	(33.7)	—	(22.1)	—	(9.7)	—	(12.7)				
33	—	(17.8)	—	(32.0)	—	(43.0)	—	(42.3)	—	(38.2)	—	(24.0)	—	(13.0)	—	(13.7)	a・b 標点なし 反転実測	
34	—	(18.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	(20.2)	—	(10.8)	—	—	a・b 標点なし 反転実測		

番 号 号	出 土 区	法 量										凸 帶・透 孔											
		器 高					口 徑		底 径			器 肉 厚		残 存 率 (%)		凸 帶 幅		凸 帶 高		透 孔			
		最大	平均	最小	最大	平均	最大	平均	最小	最大	平均	最大	平均	最小	最大	平均	A	B	C	D	縫 縫 縫 縫 縫 縫 縫		
35	II・V	—	—	—	(32.8)	—	(18.8)	1.2	1.0	破片	1.5	1.4	0.8	0.7	—	—	—	—	—	—	—		
36	■	50.2 49.5	49.9	—	30.0	—	(23.8)	1.4 1.1	1.3	65	1.6 1.4	1.5	1.0 0.8	0.9	—	(7.5)	—	(6.4) (7.9)	—	—			
37	V	—	—	—	(34.0)	—	—	1.0	1.2	30	1.8 1.7	1.6	1.0 0.8	0.9	—	—	—	(7.8)	—	—			
38	III	—	—	—	(34.0)	—	—	1.5 1.1	1.3	20	1.8 1.5	1.7	0.9 0.6	0.9	—	—	—	—	—	—			
39	■	—	—	—	(32.8)	—	(22.8)	1.4 1.1	1.3	30	1.9 1.8	1.9	0.9 0.7	0.8	—	—	—	—	—	—			
40	II	52.3 51.5	51.9 32.5	33.5 33.0	17.5 17.0	—	17.3	1.3 1.0	1.2	90	2.0 1.2	1.6	0.8 0.5	0.7	(6.3)	(6.4) (6.2) (6.6) (6.2) (6.4)	(6.4)	(7.4)	—				
41	0	50.3 49.0	49.7 29.7	32.5 31.1	18.5 18.0	—	18.3	1.3 1.0	1.2	75	2.0 1.4	1.7	0.7 0.5	0.6	—	(5.8) (7.2)	—	—	—	—			
42	■	—	—	—	—	—	—	1.2 1.0	1.1	破片	1.7 1.7	0.6	0.6	—	—	—	—	—	—	—			

表7-(1) 朝顔形円筒埴輪計測表(左右対一)

番 号	出 土 区	法 量										凸 帶								凸 帶 幅			
		器 高					軸 部 高		朝顔部高			口 徑		くび 口徑		底 径		器 肉 厚		残 存 率 (%)		凸 帶 幅	
		最大	平均	最小	最大	平均	最大	平均	最小	最大	平均	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	
朝顔1	V	71.2 68.5	69.6 54.6	55.2 54.9	16.4 13.0	14.7 10.5	41.0 40.8	19.5 17.8	18.7 23.4	25.0 24.2	1.2 1.0	1.0 0.8	80	2.0 1.3	1.7 1.0	0.6 0.5	0.6	—	—	—	—		
朝顔2	■	73.7 73.1	73.4 59.0	58.7 58.3	14.5 14.0	14.3 —	(43.3)	16.1 15.5	15.8 20.4	22.6 21.5	1.0 0.7	0.9 0.6	50	1.8 1.4	1.6 1.6	0.7 0.4	0.6	—	—	—	—		
朝顔3	II・III (V)	—	—	—	—	—	(14.6)	—	(38.0)	—	(16.8)	—	(20.8)	1.1 0.9	1.0 1.0	30	1.7 1.1	1.4 1.4	0.5 0.4	0.5	—	—	
朝顔4	I・II	—	—	—	—	—	—	(44.8)	—	(16.3)	—	—	—	1.1 0.9	1.0 1.0	25	1.6 1.3	1.5 1.5	0.6 0.3	0.5	—	—	
朝顔5	0・I II	—	—	—	—	—	(11.6)	—	(34.0)	—	(19.5)	—	—	—	1.2 1.1	1.1 1.1	—	1.9 1.4	1.7 1.5	0.5 0.4	0.5	—	—
朝顔6	■	—	—	—	—	—	—	—	—	(15.6)	—	—	—	1.2 0.9	1.1 1.1	—	1.8 1.2	1.5 1.5	0.6 0.4	0.6	—	—	
朝顔7	II	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(21.0)	1.0 0.8	0.9 0.8	25	1.8 1.6	1.7 1.7	0.6 0.5	0.6	—	—	
朝顔8	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23.3 22.6	23.0 22.0	1.0 0.8	0.9 0.8	25	1.9 1.5	1.7 1.7	0.6 0.5	0.6	—	—



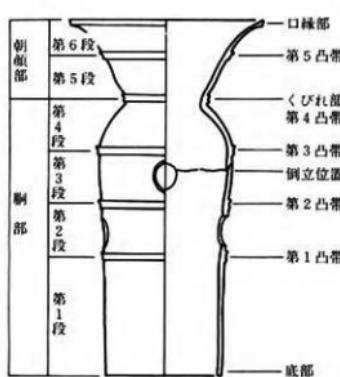
第55図 墓輪各部の呼称等(1)

番号	底部からの凸帯位置・倒立位置								口縁からの凸帯位置・倒立位置								備考	
	第1		第2		第3		倒立位置		第1		第2		第3		倒立位置			
	最大	平均	最大	平均	最大	平均	最大	平均	最大	平均	最大	平均	最大	平均	最大	平均		
35	—	(19.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(9.9)	—	(13.5)	a・b・c 接点なし 反転実測		
36	22.1 20.0	21.1 29.6	30.7 38.3	30.2 38.3	40.1 39.2	—	—	11.5 11.3	11.4 19.6	21.0 20.3	30.2 27.0	29.6 —	—	—	—	反転実測		
37	—	—	—	—	—	—	—	14.4 12.8	13.6 23.9	24.9 24.4	35.7 —	35.7 —	—	—	—	—		
38	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(25.4)	—	(13.8)	—	—	—	—		
39	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(23.7)	—	(12.6)	—	—	—	a・b・c 接点なし 反転実測		
40	22.7 21.4	22.1 30.6	31.6 30.6	31.1 30.6	40.4 39.3	39.9	—	30.4 29.2	29.8 20.4	21.2 20.8	12.8 11.3	12.1 —	—	—	—	反転実測		
41	21.3 20.5	20.9 29.7	31.0 30.4	31.0 38.0	39.1 38.6	—	—	29.8 28.2	29.0 19.5	20.0 19.8	12.2 11.0	11.6 —	—	—	—	反転実測		
42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	a・b・c 接点なし		

表7-(2)

下表につづく

番号	通 孔								底部からの凸帯位置・倒立位置								備考		
	A		B		C		D		第1		第2		第3		第4		第5		
	絶	相	絶	相	絶	相	絶	相	絶	平均	絶	平均	絶	平均	絶	平均	絶	平均	
朝輪1	6.3	6.8 (5.8)	6.8	6.8	—	6.1	—	24.3 23.1	23.7 43.3	33.5 43.2	33.0 43.2	45.1 44.2	55.2 54.6	54.9 54.9	63.8 61.3	64.8 64.8	42.0 41.0	41.5	
朝輪2	—	—	—	—	(8.8)	(8.8)	—	—	22.4 20.7	21.6 33.1	34.8 34.0	49.5 48.9	59.0 49.2	68.2 58.7	67.8 67.3	48.5 47.7	48.1		
朝輪3	—	—	—	—	—	—	(7.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
朝輪4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
朝輪5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
朝輪6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
朝輪7	—	—	—	—	—	—	—	—	(25.8)	—	—	—	—	—	—	—	—		
朝輪8	—	—	—	—	—	—	—	—	(25.6)	—	—	—	—	—	—	—	—		



番号	口縁部からの凸帯位置・倒立位置								備考
	第1	第2	第3	第4	第5	倒立			
朝輪1	45.9	36.6	25.4	14.7	4.8	28.1	—	—	—
朝輪2	51.8	39.4	24.2	14.7	5.6	25.3	—	—	—
朝輪3	(43.9)	(34.6)	(22.2)	(14.6)	(6.1)	(23.8)	a・b・c 接点なし	—	—
朝輪4	—	—	—	—	(5.6)	—	a・b・c 接点なし 朝輪8と同一個体	—	—
朝輪5	—	—	—	(11.6)	(3.9)	—	a・b 接点なし 朝輪7と同一個体	—	—
朝輪6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
朝輪7	—	—	—	—	—	—	朝輪5と同一個体	—	—
朝輪8	—	—	—	—	—	—	朝輪4と同一個体	—	—

＊円筒埴輪観察表凡例

1. ()内は推定値(= 固化した)数値、最大・最小値を求めているものは、实物の計測値であり、実測間に表示した数値とは必ずしも一致しない。
2. 凸帯・倒立位置の実物計測値について、口縁からの計測値は、部位ごとに測定して示して置き、計測している。このため、口縁が水平でない場合、底部からの計測値とその関係で矛盾を生じる場合がある。
- ただし、明輪形埴輪の口縁部からの計測値については、底部からの計測値(平均値)をもとに逆算して求めている。

第56図 地輪各部の呼称等(2)

第V章 塚輪の分析

第1節 円筒埴輪の分類

1. はじめに（円筒埴輪分類の視点）

本古墳出土の円筒埴輪は、朝顔形円筒埴輪と普通円筒埴輪に2大別されるが、この大別は、より上位のレベル、いわば器種レベルの分類であって、ここで言う分類とは、主に技術的側面によって表する個体差の把握と、一定レベルの技術的共通性によって統合される個体の集合を把握することである。前章で概観したように、本遺跡の両器種は、凸帯の数や透孔という基本的な要素が統一されており、いわば「同じ物」を目指して造っているのである。そして、古墳に供えられる埴輪というものが、日常器物のような恒常的生産物からの抽出品を供獻したのではなく、特定機会に特定目的をもって発注された生産物とみると、技術的な側面からの分類は、埴輪供獻体制をリアルに物語るはずである。技術的な相違の最小単位が工人に帰納すると考えるならば、技術的共通性をもつ集合体を階級的に整理・把握することによって、一工人の把握から工人の組織体制まで、あるいは複数工人集団の抽出から異なる集団間での供獻の実態解明にまで昇華できるものと考えられる。しかし、実際には、一工人の抽出をどのレベルの相違でおさめるかに微妙な問題を含み、工人の「クセ」と「バラツキ」そして一時の「応用」の範囲の確定は極めて困難である。ただ、これの把握を目的とした分類作業自体は必要不可欠であり、「工人」により近い単位としての集合の抽出を目指したいと考えている。

分類の方法については、諸要素の細かな分類作業を前提とするが、例えば、全体形状や法量、口縁や凸帯、透孔の形態等は、分類作業の有力な属性で、工人の作風を如実に示す可能性が高いが、逆に、同一の指向性をもった製品群の中で、その細かな形態差の把握を先行させてしまうことは、各属性の有機的関連性を無視した機械的で無意味に細かい分類となってしまう危険性がある。このため、より固定的かつ客観的に把握可能な上位の分類基準が必要となる。

ここではまず、極めて特徴的なあり方を示す成形技法上の差異に基づき、「群」として分離把握することを前提とする。この成形技法上の差異は、本古墳出土埴輪を全く2分してしまう決定的な分類基準として最も上位に位置付けられる。次に具体的な分類作業として、全てに必ず施されているハケ調整に着目し、ハケ工具の原体同定により、固定的な集合を把握する。ハケ工具の相違がそのまま分類の最小基本単位とはならないことは明白であるが、ただ、極めて有機的な結び付きの強い集合体を示していると言える。これらを前提にその他の諸属性の分類を付加して検討することによって、細かな属性が一定の傾向と相違を明確化させる2次的な分類基準として整理されるものと考えられる。

尚、分類された属性の内容提示にあたっては、その種を代表せるものを1つのみ示すのではなく、できるだけ、その種を構成する全ての個体からの資料提示に心がけた。なるべく、客観的な観察資料を提示しておきたいという意図からである。

2. 成形技法による分類（I群とII群の把握）

本古墳出土円筒埴輪は、先に述べたように、成形技法の決定的差異によって大きく2大別される。通常、円筒埴輪の成形は、底部から口縁部に向けて粘土紐を巻き上げ、正立させた状態で仕上げる。しかし、本古墳出土埴輪の成形技法で最も主体となる技法は、いわゆる倒立技法である。円筒埴輪の倒立技

法については、小栗明彦氏の統括的な考察があり、その概念規定は、「埴輪製作工程において、粘土紐を積み上げたある段階で倒立させて上下を逆転し、倒立前に底部だったところから更に上に粘土紐を積み上げて成形する技法」であるとした。このような技法について、初めて着目したのは赤塚次郎氏で、¹¹ 製作者としての手順の志向性の解明を主眼とした論述のなかで、確認された古墳群の名称から、手順としての「味美バタン」を抽出された。¹² その後氏は、この手順を「2分割倒立技法」として技法のレベルに昇華させている。本文では「倒立技法」という名称を用い、この技法を採用した円筒埴輪をI群として、通常の正立成形のものをII群として大別する。

I群の普通円筒埴輪は、1~35の35個体で、全体の80%を越えている。ほとんどの個体は3段目までを上下逆の状態で製作し、その後倒立させて4段目、即ち口縁部を積み上げているが、25と26のみ、1・2段目製作後に倒立させている。この倒立前に底部であったところを境として、断面にみる粘土紐接合面の傾きは逆転する。特に、倒立前の底部に対しては、倒立後に同心円文当て具を用いたタタキを施して調整するとともに、鋭く外傾する端面を作り出して口縁部積み上げの準備をしているため、境界の認定は比較的容易で（以下、この境界部を「倒立位置」と呼ぶ）、倒立技法の採用を明確に判断することができる。また、朝顔形円筒埴輪も全て3段目以下を倒立させる同様の技法を採用している。一方II群の普通円筒埴輪は、36~42の7個体で、ごく少数の割合を示している。

この成形技法によるI・II群の把握を、分類上の大前提とした以上、本来ならば、ここでその成形技法の実態を詳述すべきかもしれない。しかし、円筒埴輪の製作というものは、まず粘土を巻き上げて全形をつくる、というような「成形」段階が常に独立しているわけではなく、実際には成形の過程に、様々な調整や、凸帯貼り付け、透孔の穿孔などの作業が交錯している。ここでいう「成形」とは、埴輪製作にかかわる一部門を抽出し、分類の基準としたにすぎない。したがってここでは、倒立技法の存在によりI群とII群に分離されるという指摘にとどめ、円筒埴輪の分類を経たうえで、第2節において具体的な製作工程をまとめたいと思う。ただし、以下に進める諸属性の分類にあたり、製作工程に係わることとして特に留意しておかなくてはならない約束事がある。それはI群についてであるが、倒立位置より下の調整等は、いわば逆さまにした状態で行われていることである。つまり、正置した時に、ハケやナデの方向が下向きであったとしても、手法としてはあくまでも上向きとしなければならないし、ヨコナデの方向についても同様のことを考慮する必要がある。当然ハケ目原体の対比にあたっても、倒立位置より下のハケ目は、上下逆転させて見なければ、倒立位置より上のハケ目やII群のハケ目との統一的対比はできない。さらに、凸帯については、第1凸帯と第2凸帯が倒立した状態で付しており、第3凸帯は正置した状態で付している。従って、凸帯の断面形態の対比にあたっても、倒立位置より下のものは上下逆転させて捉えなければならないのである。ただし、唯一透孔については、すべて正置した状態で穿たれていると考えられる。これらのこととをまず念頭においておかなければならない。

表8 I群とII群

群	個体番号	備考
I群	普通1~35	倒立技法。透孔を除き、倒立位置を境に調整等も逆転。
	朝顔1~8	
II群	普通36~42	正立成形。

3. ハケ工具の原体同定による分類

(1) 原体同定の方法

ハケ工具の原体同定は、ハケ目間の隆起の太さを1本1本細かく観察し、その配列パターンを把握する方法をとった。器面上に表れるハケ目は、ハケ原体の全体を示すことは非常にまれで、器体の曲面に直交する方向へのタテハケとなるため、大体は原体の一部分があてがわれることになる。原体の端部が常にあてがわれる場合は、配列パターンによる同定が比較的容易であるが、同一器面でも、原体のあてがわれる位置はさまざままで、同一原体に対して複数の位置的パターンを把握しておく必要がある。また、ハケ工具の原体同定は、細かなハケ目ほどその同定作業が難しく、本古墳出土埴輪で主体となる、2cmの幅に20本前後の本数が入るものでは、1本が1mm内外の幅のハケ目となり、大きさの変異による配列パターンの把握は、執拗な観察の繰り返しが必要となる。

この方法による原体同定には、一つの問題点も生じる。それは、ハケ原体が柾目板材の破口に表れる年輪を応用したものと考えた場合、同一のハケ目配列パターンを示す原体が複数製作される可能性がでてくることである。また、同定の際、配列パターンが表裏で対応するものも確認している。これも、一つの原体を表裏で使ったものか、あるいは、ハケ工具というものは本来使用する面が決まっており、裏返しのパターンを示すものは同一材を用いた二つの工具と考えるかが問題となる。これらのことについては、解決するのは不可能に近く、ここでは、表裏の関係で捉えられるものも含めて、全て同一原体として認定しておきたい。

また、ハケ目に関しては、横山浩一氏によって詳細な分析がなされている。¹⁴⁾これによると、木の薄板で、一端が材の纖維方向と交差するように一直線に切り整えられてさえいれば、特に刻目を付けなくても自然にハケ目が形成されるという。そして、そのハケ目形成にかかるスピードは以外に早いという実験結果である。即ち、器面を擦ったときの材の摩耗が早く進むということである。ただ、ハケ目の生因が春材部の摩耗によるのであれば、調整を重ねるうちに、断面の波形に変化はあっても、基本的な年輪幅の配列は変わらないと言える。実際に複数個体で同配列のハケ目を確認していることからも、樹種によっては、ハケ目生成後は、摩耗がいわば飽和状態となったかたちの使用状態が一定期間維持されたと考えられる。

分類にあたっては、幅2cm内のハケ日本数を数え、その密度によって種別し、さらに配列に差異がある場合には細分した。分類上、配列ではなく、密度を優先させたのは、標記上の便宜からで、実際には配列を優先させて分類を進めたが、結果として密度の把握と整合し、さらに、同一密度内で細分されたものについては、相互に強い関連性を認めることになったためである。配列の表記は、その類内部での相対的な大きさの変化で捉え、太大・太・中太・中・中細・細・極細の順でランク付けした。「太5」とは太線が5本連続することを示し、1本の場合は単に「太」とした。また、ハケ工具の端部として把握した場合は〔 〕で括り、中間位の場合は〈 〉で括った。

(2) ハケ工具の原体分類（第57図～第62図、図版33）

ハケa種

2cm内に18～22本を数え、隆線の最大幅は1.2mm程度である。隆線はカマボコ状で、沈線も下底はやや丸みをおびる。配列パターンにより2つに分けられる。

ハケa1種：配列 〈細5・太・中5・極細・太・細・中・細・太・大太・中・太3・中・太・中・中・極細・太2・中・太・中2・極細・太・中・大太・太4〉

番号 1、3、4、7、8、10、11、12、13、14、15、16

倒立位置より上のみ本種 2、5、6、9

倒立位置より下のみ本種 朝顔 2

ハケa2種：配列 〈極細4以上・細・極細5・中2・細・極細・中・細・中・極細・中太・中2・細・中・細2・大太4・太・中2・太〉
番号 倒立位置より下のみ本種 2、5、6、9、26(?)

ハケb種

2 cm内に17~21本を数え、隆線の最大幅は1.5 mm前後である。ハケ目の形態はa種に類似する。
配列 〈細8以上・太・中・(極)細4・中2・太・中3・太・中・中細・太・大太・太・中2・大太2・太〉
番号 17、18、19、20、21、22、23(裏)、24
倒立位置より上のみ本種 25

ハケc種

2 cm内に16~20本を数え、隆線の最大幅は1.2 mm前後である。ハケ目の形態はa種に類似するが、沈線部がやや幅広の傾向をもつ部分が多い。
配列 〈太5・中・極細3・中2・細・中・太・中・細2・太2・極細2・太3〉
番号 倒立位置より下のみ本種 朝顔 1

ハケd種

2 cm内に15~19本を数え、隆線の最大幅は1.5 mm前後である。ハケ目の形態はa種に類似する。
配列 〈中・太・中・大太・太・大太・中・太2・中・太・中4・太・極細・太・細・太・中・太・中太・太・細2〉
番号 36、37、38、39(裏)

ハケe種

2 cm内に12~15本を数え、隆線の最大幅は2 mm前後である。ハケ目間の隆線は膨らみの強いカマボコ形で、影りは細く鋭いため、裾を接してカマボコ形の隆線が並ぶ感じである。
配列 〈大太・太・大太・中・太・中細3・太・中・太・中3・細3・中〉
番号 40(裏)、41、42

ハケf種

2 cm内に10~15本を数え、隆線の最大幅は2.5 mm前後である。隆線の断面は、片方が緩やかでもう片方が険しい左右非対称で、比較的荒い追査目の様子を良く残す。
配列 〈太10以上・中太・中・中太・中2・細4・中太・細5〉
番号 上3段のみ本種 26

ハケg種

2 cm内に9~13本を数え、隆線の最大幅は2.5 mm前後である。隆線の断面は、e種のような追査目の形跡を示すが、総じて丸みをおびて低いカマボコ形に近い。また、人物の円筒部も本種の可能性が強い。
配列 〈中4・太2・中太・中・中細3・細4以上〉
番号 朝顔4、朝顔5(裏)、朝顔7(裏)、朝顔8
倒立位置より上のみ本種 朝顔 1^{mm}
倒立位置より下のみ本種 朝顔 3

ハケト種

2cm内に7~9本を数え、隆線の最大幅は3.5mm前後である。隆線の断面は、e種と同様に荒い追査目の様子を良く残す。配列パターンにより、2つに分けられる。

ハケh1種：配列 〈縦2・中3・大太2・太・中2・縦・中太・縦・中・縦5・太〉

番号 27、28、31、33、朝顔6

倒立位置より上ののみ本種 朝顔2、朝顔3

ハケh2種：配列 〈中太・縦・中・縦5・太2・中2〉

番号 29、30、32、34、35

h1種は、28の個体において原体全体の配列を把握できたものであるが、一方、h2種は、原体の一端の配列を確認した。このh2種の端部から中2本と太1本を引いたものがh1種の配列と同じパターンとなり、従って、h1種は、h2種の工具の端部が一部欠失してしまったものである可能性が高い。

ハケi種

2cm内に4~7本を数え、隆線の最大幅は5mm前後である。非常に荒く、断面は低平なカマボコ形から一部追査目の形跡を示す低い山形となる。

配列 〈大太・太・中・太・中太・縦〉

番号 倒立位置より下のみ本種 25

以上、ハケ工具の原体同定により、11種に分類することができた。同一個体に2種類のハケ原体を用いるものもあり、この組み合わせを持つ個体を独立させて全体の構成をみたのが表9(P94)の使用ハケ原体によるグルーピングである。

これによると、普通円筒埴輪I群は、7つのグループに分けることができるが、相互の関連性で捉えていければ、結局はa種・b種・h種の3系統に分離統合される。また、f種とi種は、それのみで成立する個体をもたらす、それぞれa種とb種に関係して1個体ずつ製作されているのみである。普通円筒埴輪II群は、d種とe種の2種の構成をもち、他との重複関係をもたない独立した存在を示す。一方、朝顔形円筒埴輪では、g種が製作の主体として用いられていたようであるが、a種とh種との重複関係を示すものが1個体、h種とg種の重複関係を示すものが1個体、他の個体での使用が認められないc種をg種とともに用いているのが1個体認められる。

注

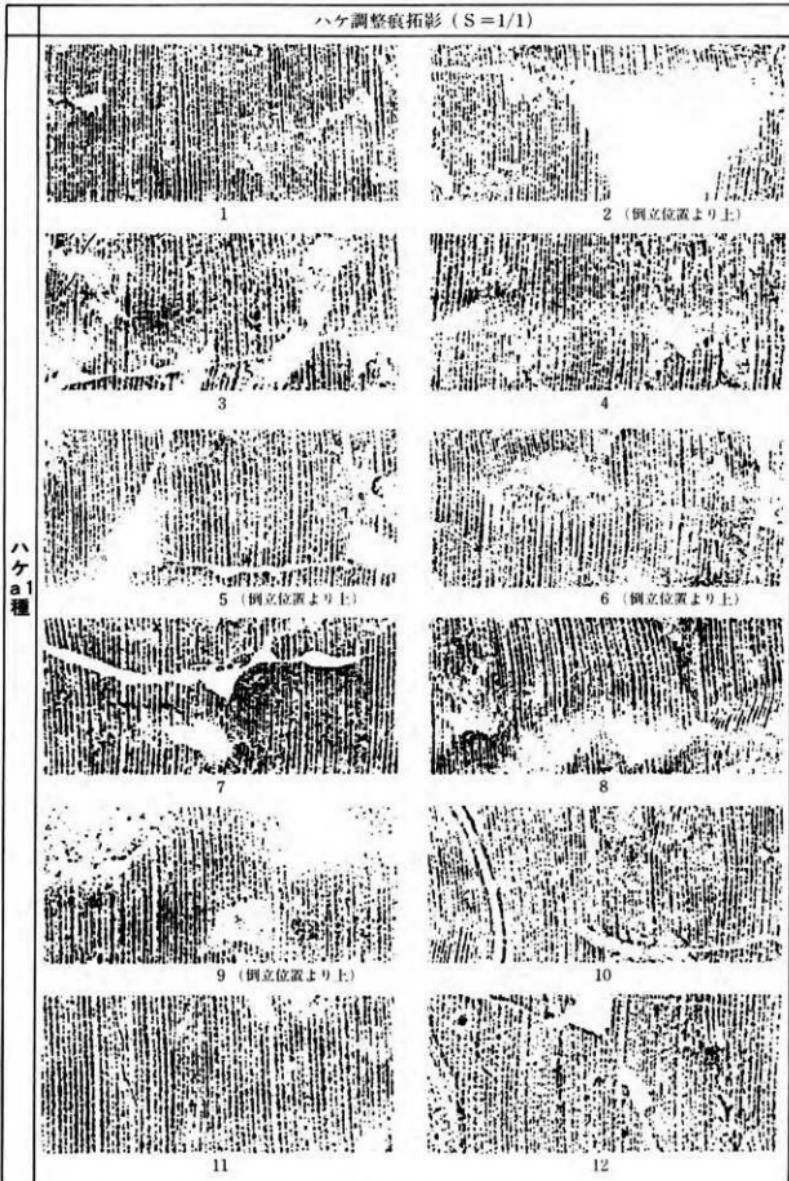
(1) 小栗 明彦 1992 「埴輪倒立技法の問題」『史学研究集録』第17号 国學院大学

(2) 赤塚 次郎 1983 「尾張としてのはにわ製作」『考古学の広場』第1号 考古学フォーラム

(3) 赤塚 次郎 1985 「文字が刻まれた埴輪」『埋蔵文化財発掘調査年報III~昭和59年度~』(財)愛知県教育サービスセンター

(4) 横山 浩一 1978 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号

(5) 朝顔3の倒立位置より上が、ハケh種を用いていることは、本筋脱脂後の再検証の際に確認したため、本文について
は校正したものの、第61図h種欄へ原体拓影を追加することはできなかった。不備をお詫びしたい。



第57図 ハケ調整痕拓影(1) ($S = 1/1$)

ハケ
a1
種



13



14



15



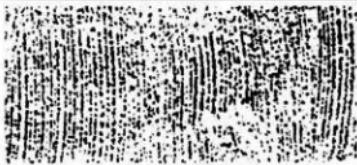
16

朝顔 2 (倒立位置より下)

ハケ
a2
種



2 (倒立位置より下)



5 (倒立位置より下)



6 (倒立位置より下)

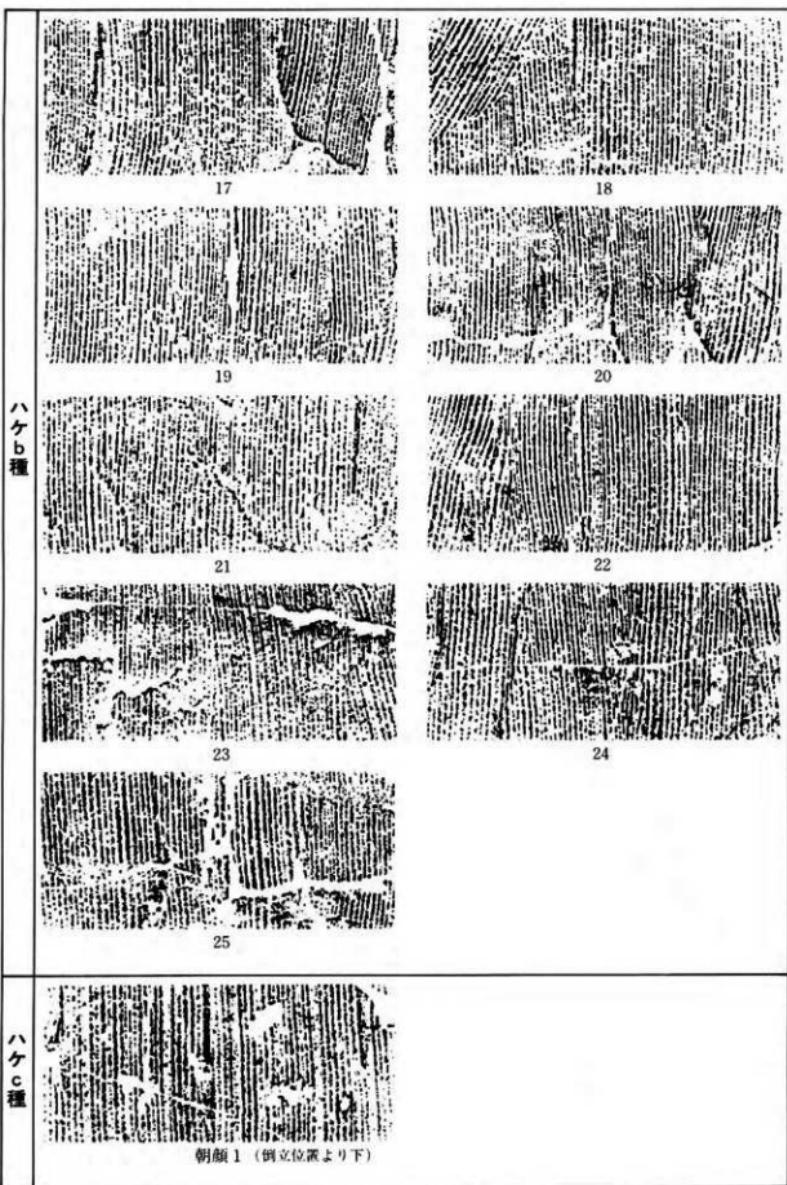


9 (倒立位置より下)

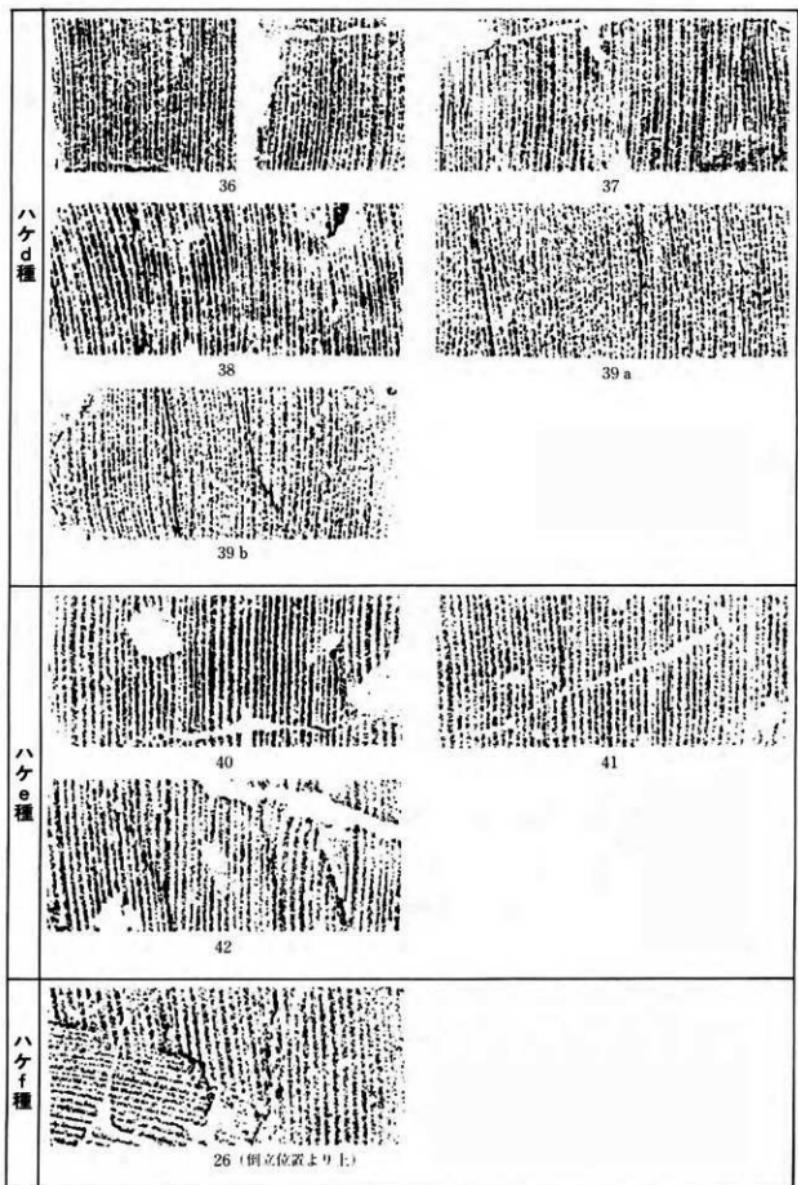


26 (倒立位置より下)

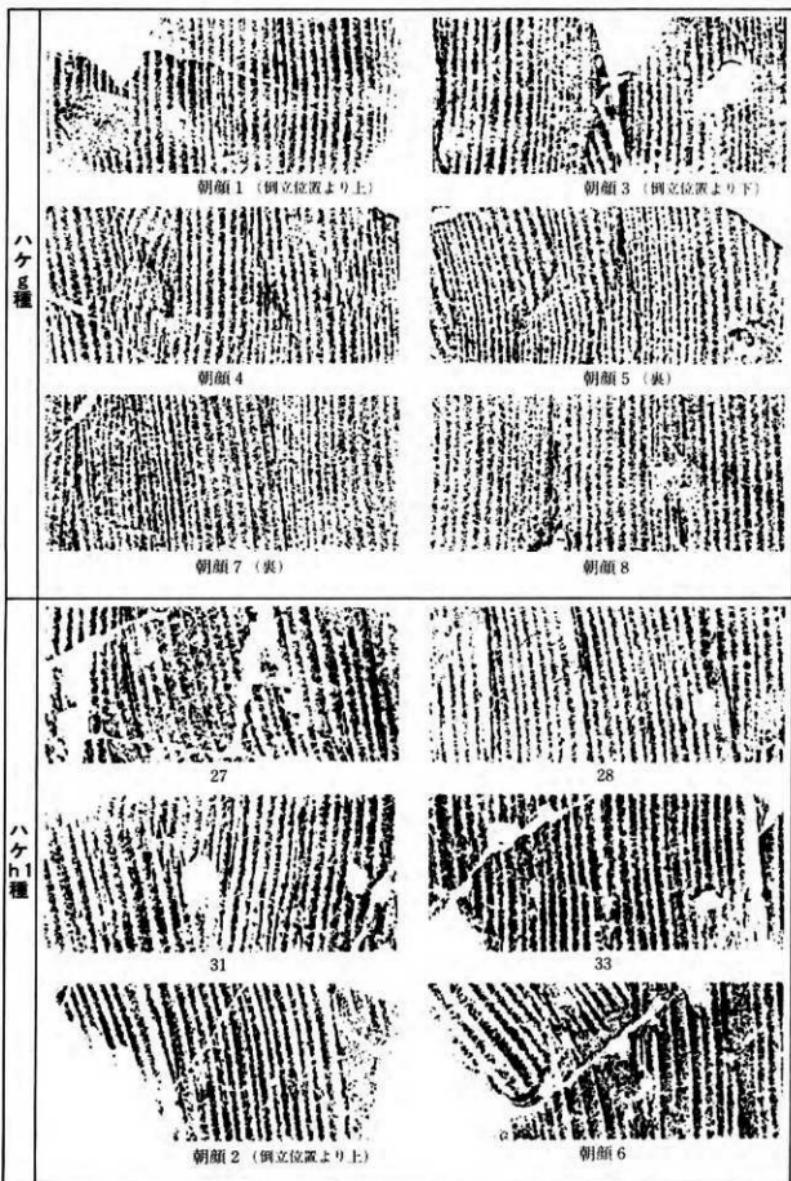
第58図 ハケ調整痕拓影(2) (S=1/1)



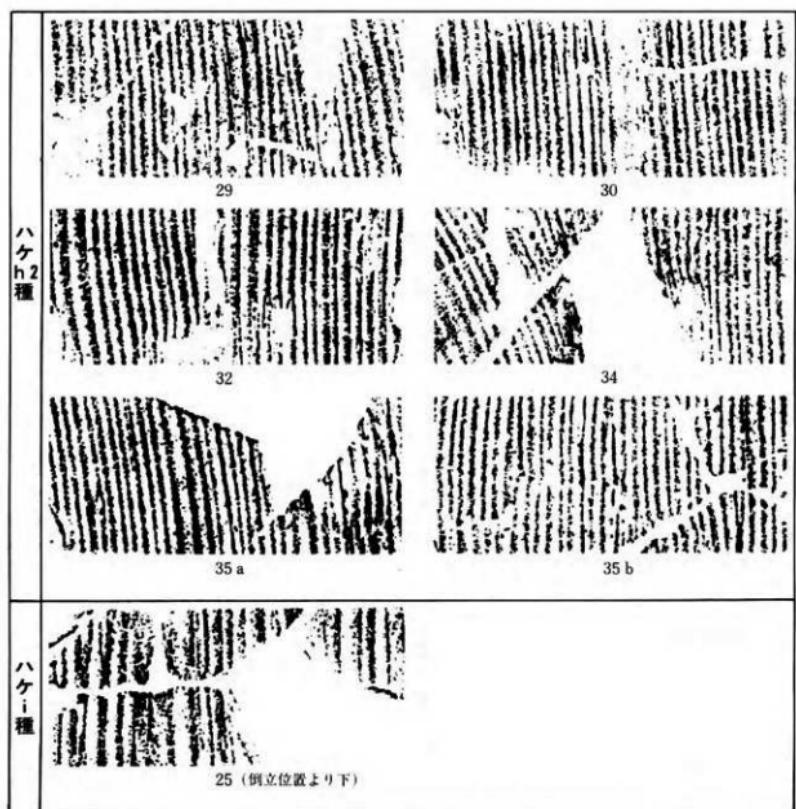
第59図 ハケ調整痕拓影(3) (S=1/1)



第60図 ハケ調整痕拓影(4) (S=1/1)



第61図 ハケ調整痕拓影(5) ($S=1/1$)



第62図 ハケ調整痕撮影(6) (S = 1/1)

表9 使用ハケ原体によるグルーピング

普通円筒埴輪I群

原 体	個 体 番 号
a 1種	1、3、4、7、8、10、11 12、13、14、15、16
a 1種 + a 2種	2、5、6、9
a 2種 + f 種	26
b 種	17、18、19、20、21、22、23 24
b 種 + i 種	25
h 1種	27、28、31、33
h 2種	29、30、32、34、35

普通円筒埴輪II群

原 体	個 体 番 号
d 種	36、37、38、39
e 種	40、41、42
朝顔形円筒埴輪	
a 1種 + h 1種	朝顔 2
c 種 + g 種	朝顔 1
g 種	朝顔 4、5、7、8
h 1種	朝顔 6
h 1種 + g 種	朝顔 3

4. 普通円筒埴輪におけるハケ工具以外の諸属性の分類

(1) 分類の方法

円筒埴輪から抽出される属性は非常に多く、全体の形状、法量といった器形自体に係わることから、口縁部や底部の断面形、凸凹の形態、透穴の形態、あるいは、各部の調整方法まで幅広い。このなかで分類上の優先順位を決めるのは非常に難しいが、調整方法や、それと密接に関係する各部形態については、製作者の手法やクセが比較的細かく發揮されるのに対して、法量については、本古墳の円筒埴輪を見るかぎり、「出来上がり」の結果としての偶発性をもったバラツキを感じるものが多い。このため、法量については、円筒埴輪の類型化を経たうえで、各類型のもつ傾向として、器形を含めて分析していくといふと考える。従ってここでは、調整方法と各部形態に着目し、それぞれを個別に分類し、その後、先の成形技法による大別とハケ工具の原体同定による分類作業の結果を基礎として、次項において普通円筒埴輪の分類として解析していきたい。尚、個体ごとの分類結果は、第75図でまとめた。また、比較属性内容の差異から、ここでは、普通円筒埴輪に限って記述し、朝顔形円筒埴輪については別項を設けることとした。

(2) 器面調整方法の分類

① 外面調整

本古墳の円筒埴輪は、すべてタテハケによる1次調整を基本としている。しかし、タテハケといつても、傾きによってむしろナナメハケと呼ぶべきものも認められる。以下に、外面調整（以下、外調と略す）a・bの2種を基本種として、2次調整などの付加属性をもつ亜種を含めて都合8種に分類した。

外調a種（1~13、17~24、30、32、36~39）

終始ほぼ垂直なタテハケを基調とし、まれにナナメハケを交える。次の4亜種に分けられる。

外調a1種：タテハケの1次調整のみのもの。（2~13、18~22、24、30、32、36~39）

外調a2種：2次調整として、回転力によるヨコハケを部分的に交える（第63図）。（1）

外調a3種：2次調整として、断続的でうねりをもつランダムなヨコハケを部分的に交える（第63図）。（31）

外調a4種：口縁部上端に著しく斜傾したナナメハケを連続してめぐらせる。（17、23）

外調b種（14~16、25~29、33~35、40~42）

第3段中位より上（I群にあっては倒立後に積み上げた口縁部側）で傾きの強い連続するナナメハケをもつ。次の4亜種に分けられる。

外調b1種：全体に、ナナメハケを多用する。ただ、傾きは弱く、倒立前の下半部のハケ調整がタテハケに近くなる傾向をもつものもある。これは、I群に認められる傾向であり、本種はI群に限るものとして、外調b4種とは区別する。（14~16、25、27~29、34）

外調b2種：b1種に加えて、口縁部端及び底部端で、特に傾きが著しく、短い単位のナナメハケをめぐらせるもの。底部端にのみ認められるもの（29）もあるが、本種は総じて底部の残存率が低いため、これを分類の基準とはし難く、口縁部端のものとの組み合わせを条件とした。（33、35）

外調b3種：全体にナナメハケを多用し、静止させた状態でうねりをもつランダムなヨコハケを部分的に交える（第63図）。（26）

外調b4種：全体に整然と連続させるナナメハケで、第1段から第4段へ次第に傾きを増す傾向にある。（40~42）



第63図 外面調整各種のヨコハケ ($S=1/2$)

②内面調整

内面調整はナデを基本としているが、その手法には強い差異がみとめられ、以下に、内面調整（以下内調と略す）a～gの7種を基本種として、付加属性による亜種を含めた都合10種に分類された。

内調a種 (1～16, 25, 26)

終始斜め方向の強い指ナデ（第64図）をもち、これを内調a 1種（1～11, 13～16, 25上半）として、次の2亜種が加えられる。

内調a 2種：全体をナナメ指ナデ後、口縁部に傾きの強いナナメハケをもつ。（12）

内調a 3種：全体をナナメ指ナデ後、凸帯位置内面に、横方向の指ナデ2次調整をもつ。（26）

内調b種 (27～35)

工具によるナナメナデ（第64図）をもつ。この工具ナデの認定根拠は、ナデの面が比較的平坦でかつ1単位の幅も広く、工具（皮か布？）の「たわみ」あるいは「しわ」によるような浅い丸底の沈線や微隆線がナデ方向に平行して走ることである。ただし、この痕跡は、倒立位置より上の口縁部でのみ明瞭であり、それ以下の倒立前の調整には指ナデを用いていた可能性もある。内調a種に比し傾きが強い傾向にあり、部分的にヨコナデに近くなる場合もある（特に凸帯位置内面付近で）。全体がこのナナメナデのものを内調b 1種（27～31, 33～35）として、次の1亜種が加えられる。

内調b 2種：倒立後積み上げの口縁部側のみナナメ工具ナデで、下部はタテ指ナデ後、凸帯位置内面にヨコ指ナデを施す。（32）

内調c種 (17～24, 36, 39)

工具を用いたヨコナデ（第64図）で、細い棒の先端で横方向に引っ搔いたような断続的な沈線がナデ単位ごとに伴ってめぐるが、口縁部側ではその痕跡を認めない場合も多い。全て凸帯位置内面に、横方向の軽い指ナデ2次調整をもつ。全体がこのヨコ工具ナデのものを内調c 1種（17～19, 21～24, 39）として、次の1亜種が加えられる。

内調c 2種：ナデ後、口縁部に傾きの強いナナメハケをもつ。（20, 36）

内調d種 (37, 38)

ナナメナデで、工具を用いた形跡があるが、b種ほど明確ではなく決めがたい。口縁部に傾きの強いナナメハケを施す。これを内調d 1種（38）として、次の1亜種が加えられる。

内調d 2種：第4段においてナナメハケに先行する工具ヨコナデが認められる。（37）

内調e種 (25, 40～42)

横方向の指ナデ（第64図）をもち、これを内調e 1種（25下半, 40, 42）として、次の1亜種が加えられる。

内調e 2種：下約2/3で、ヨコ指ナデ後にタテ指ナデによる再調整を施す。（41）



第64図 内面調整のナデ手法 ($S=1/2$)

(3)各部形態等の分類

①凸帯 (第65・66図)

凸帯は、断面をM字状とさせることを基本としている。ただ、1条の凸帯が一周する間に幅や断面形が激しく変化するものが多く、さらに、段を越えて著しく異なる場合もある。特に前者のような平面上での変化を含むものについては、断面のみでは説明しがたいのが事実で、断面形では区別しがたいものでも、現物では明らかに雰囲気が異なるものも多い。しかし、実測による線描写にも限界があり、個々の雰囲気については写真図版で補うものとして、ここでは、1個体につき特徴ある複数の断面形を抽出しながら、調整方法を含めて分類していきたい。尚、第65・66図は、以下の凡例に従って掲載している。

第65・66図 凡 例

- I群の凸帯は、倒立の前後で凸帯貼り付けが行われているため、断面も逆転する。この場合、貼り付け時の上下を基本とする。したがって、下2条の凸帯断面を表記する場合は、正立させてみた時の形とは上下逆としている。
- 1つの個体の中から、幅の大小や形態の変異を考慮して、最高3ヶ所の断面を抽出したものであり、段単位での凸帯抽出は行っていない。つまり、第1凸帯のみから3ヶ所抽出の場合もある。
- 表示は、上下の立ち上がり点を結んだ線を基準線とし、幅と高さが比較できるよう、5mmの方眼を重ねてある。(第IV章 観察表付属の凡例参照)
- 国隅に示した各種の模式図で、基本型とした図の数値は、平均値あるいは主体的数値を示す。また、ナデ調整切り合ひ模式図については、最終ナデを「→」で、そのナデに先行し、最終ナデによって消されたか、または重ねられた部分のナデは「……」で示してある。

凸帯a種 (1~10、17~24)

幅や高さの変化が非常に激しく、断面形の変化を全て把握するとキリがない。基本はM字状で、上部立ち上がりの屈曲が強い「フ」の形態である。幅が狭い場合に、この基本形態を維持している場合が多く、断面形の変化は、貼り付けた粘土紐の幅の変化と同調している。この幅が広くなると断面形が変化するのは、調整方法と密接な関係がある(第65図)。その調整手順は、粘土紐貼り付け後、まず下凸部を2本の指で挟んで、つまみ出すようにしてナデ整形する。このとき中の凹部も同時に造り出される。次に上凸部の整形も同様に指で挟む様にし、凹部では、下からはみだした粘土を押さえるようにナデ整形する。このように、上下に独立した整形が組み合わされているため、結果として中の凹部は、2度のナデを受けることになる。これが幅広になった場合、中の凹部で、上下に先後関係をもつナデの段差を生むことにつながっている。また、凸帯幅の均一化を目指していない意図ともかかわってこよう。この上下のナデ整形は、回転方向も逆の可能性もある。

本種は、幅と高さにおいて明確に 2 つの亜種に分けることができる。

凸帯 a 1 種：幅 15mm、高さ 5 ~ 6 mm 程度を平均値とする。（1 ~ 10）

凸帯 a 2 種：幅 20mm、高さ 8 mm 程度を平均値とする。（17 ~ 24）

凸帯 b 種（14 ~ 16、25）

整形手法は a 種と同じであるが、極めて特徴的な形態を示す。上下の立ち上がりの屈曲は非常に緩やかで、凸部も丸く、上凸部が高い 2 つのなだらかな山形をなす。従って、幅は 20mm 前後であるが、立ち上がり部からの幅は 35mm 前後と広い。25 は、唯一第 1 凸帯まで確認できる個体であるが、その第 1 凸帯の形態は大きく異なり、凸帯 d 種を持つ個体にみられる分厚な類似している。本例は、器形や整形の点でも特異な存在のものであるため、これをもって 14 ~ 16 の第 1 凸帯も同様の可能性を指摘することはできない。

凸帯 c 種（11 ~ 13）

凹部のみを整形する独立したナデを持っている。上下対称の M 字形に近く、上下立ち上がり部のナデと凹部整形のナデが各々独立しているため、凸部に狭い平坦面をもつたり、端部の仕上がりが比較的鋭くなる傾向がある。立ち上がり部のみを対象としたナデをもつたため、器面にかかるナデ部分が幅広で整美な直線状となり、凸帯幅の変化も少ない。

凸帯 d 種（26 ~ 35）

a 種と同様な整形手法を持っていると思われるが、最終的に c 種のような、凹部を造り出す調整が含まれることが多い。a 種の幅広部分でみられた断面形に近いものもあるが、本種の場合、上部ナデの被覆による段差ではなく、独立した凹部作出によるものである。凸帯幅の変化が認められるが、1 周するなかでの変化は少なく、段単位で差を持っているものが多い。全体として凹みが比較的浅く、台形に近い無骨な凸帯を 1 条ないし 2 条含むものが多い。このように、1 つの個体のなかでも段を越えて極端な形態差をもつなど、本種の内容は全体の傾向といった漠然とした把握に近い。しかし、これ以上細分となると基本属性の把握が困難で、複雑となるため、亜種の認定はしないものとした。

凸帯 e 種（36 ~ 39）

整形手法は c 種とほぼ同様であるが、凹部は、先端の丸い棒状具を用いたかのように、幅が狭く、下底は丸い。凸部も分厚く、非常に丸みがあり、上下対称に近い M 字形をなす。

凸帯 f 種（40 ~ 42）

上半部に比較的広い平坦面を持ち、下半には凹線をもつ。a 種の幅広部分の断面形に類似し、ナデ調整の切り合ひ関係もほぼ同様となっているが、本種の場合、この断面形態はほとんど変化せず、幅もほぼ均一で、こういった形態を指向して製作されていたことがうかがえる。上部立ち上がりは比較的緩やかで、高さは 5 mm 程度と低い。

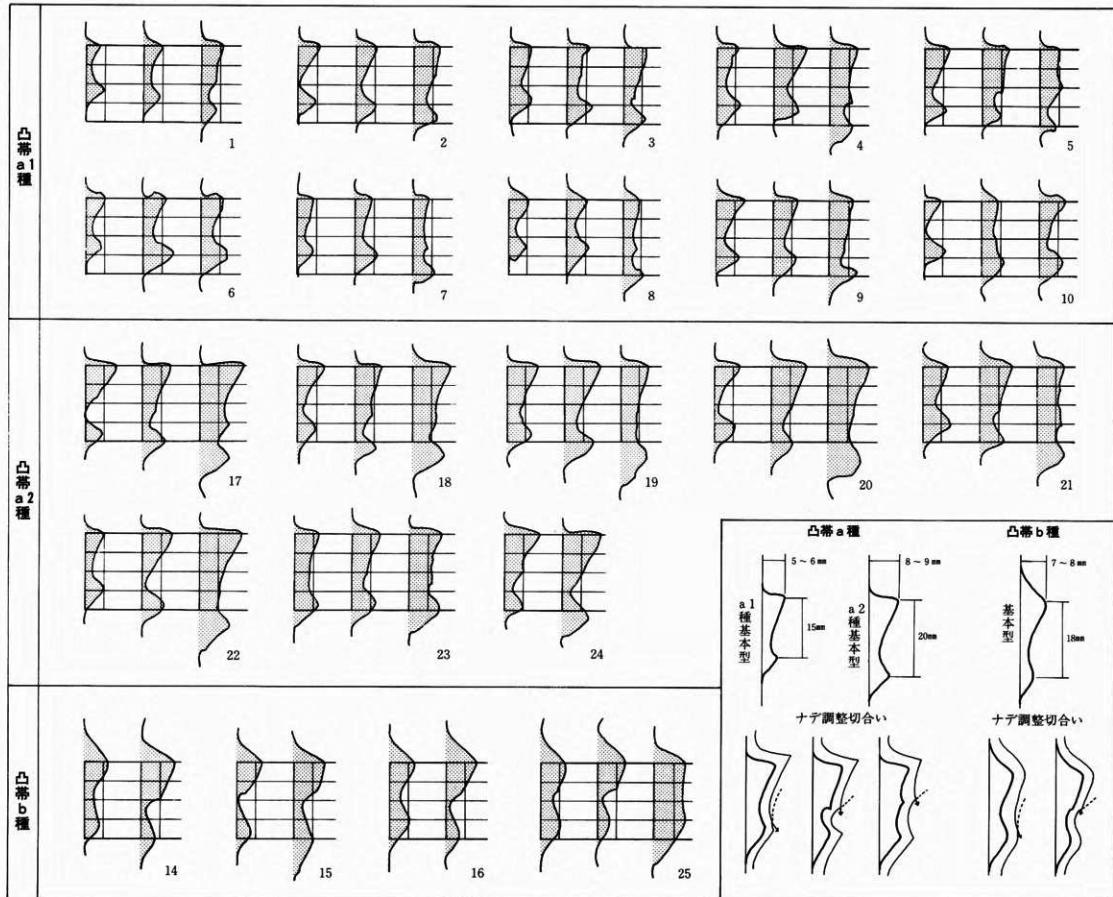
②透孔（第 70・71 図）

透孔は円形を基本としているが、一定の傾向もあり、以下の 3 種に分類された。尚、第 70・71 図は、以下の凡例に従って掲載している。

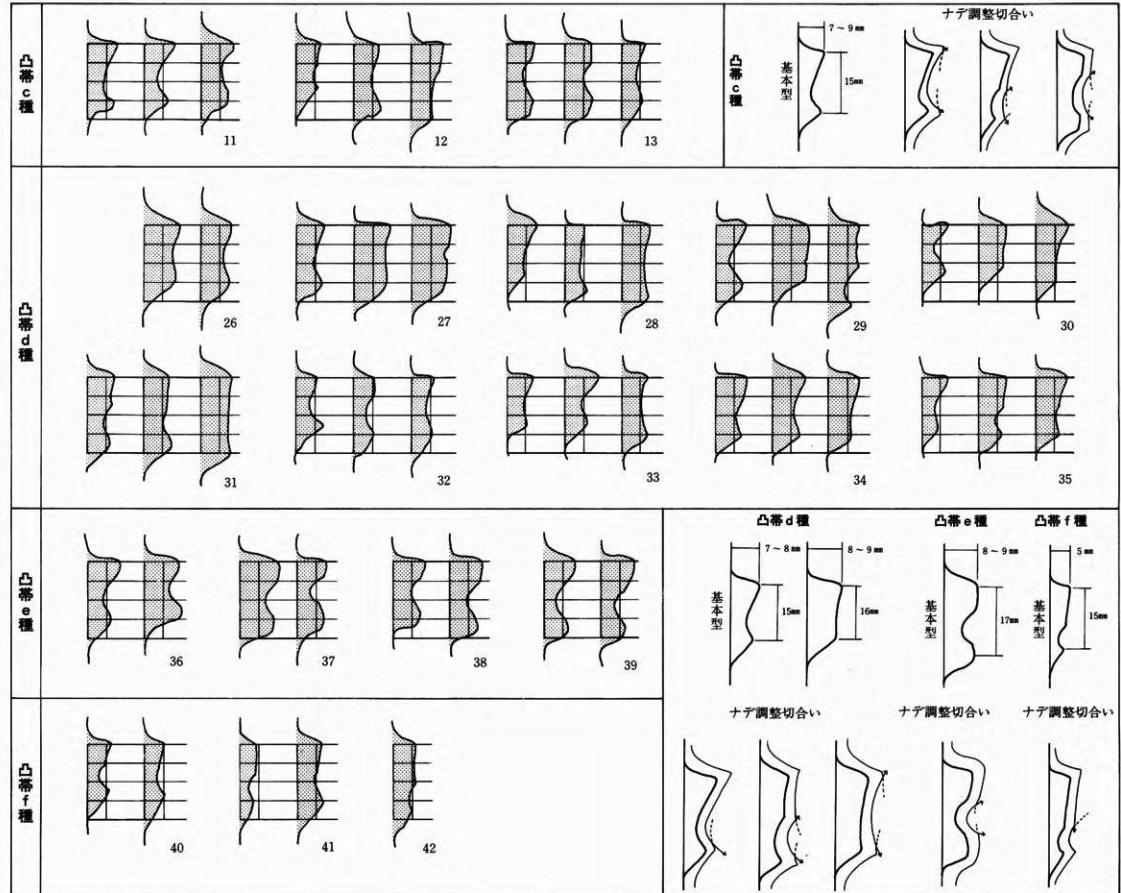
— 第 70・71 図 凡例 —

○ A ~ D の区別は、第 IV 章観察表付属の凡例のとおりである。

○ 図中、起・終点と思われる部分には、「！」を入れ、切り抜き方向を示す「→」をそれに向かわせて書き入れた。また、起・終点が不明なものについて、切り抜き方向が判明した場合は、粒子の動きによって方向が確認されたおおよその位置に「→」を書き入れた。



第65図 凸帶断面形態分類図(1) (S = 1/1)



第66図 凸帯断面形態分類図(2) (S=1/1)

透孔a種（1～10）

円形を目指しながらも、大きく歪んだバラツキをみせる。細かくは、三角形や五角形、長方形、橢円形など形態分類されるが、一つの個体でいくつかの形態が共存しており、歪みが大きいことを特徴として把握しておく。全体として、透孔が大きい傾向にあり、縦横寸法の合計値が16cmを越えている。また本種の最も特徴的な点は、切り抜き面に、螺旋状の鋭い棱線が数条認められることである（第67図）。つまり、器壁に工具を貫通させて切り抜いた痕跡ではなく、外から内方へ螺旋状に巡って抜ける幅5mm程度の浅い凹線状となねケズリの単位が数条認められるのである。複数単位が並ぶ場合に生じる複数の棱線は、うねりをもったとしても相互が常に平行を維持し、かつ単位幅もほとんど変化しない。これは、工具の刃自体が波状であったか、切先を器壁内に留めて螺旋状の回転で何周かして切り抜いていったとしか思えないが、後者の場合は、かなり機械的な動作をしないと実現しないような痕跡である。切り抜きの起・終点を示す段差等の痕跡が、複数単位をまたがる1回のものとして認められるものが存在するため、前者の可能性を指摘しておきたい。（例えば年輪の浮き出た木製刀子）。切り抜き方は、起・終点位置に若干のバラツキがあるが、概ね時計回りとするものが主体を占める。



第67図 透孔a種切り抜き面拓影（個体No.1）

透孔b種（11、13～22、25、27～35）

透孔a種に比し、歪みは概して少ない傾向にあるが、具体的には、切り抜き面に螺旋状の痕跡を持たず、平坦な工具を貫通させて一気に切り抜いたものを主体とするもので、透孔c種以外のものを一括したことになる。まれに複数の面取り痕を残すものもあるが、a種とは異なり、切り抜き後の部分補正的なものと考えられる。切り抜きの方向が観察しにくく、その多くは、ナデによる再調整が介在している可能性が強い。従って、時計回りとその逆回りの双方を確認しているが、分類の基準とできるほどの観察結果とは言い難い。切り抜きの起・終点位置も様々で、複数位置確認しているものや、はっきりしないながらかな小隆起をそれと認定したものもあり、先のナデ調整の影響を受けていると考えられる。このようなことから、あえて細分は行わなかった。サイズは、透孔a種と同様に大きく、縦横寸法の合計が概ね15cmを越えている。

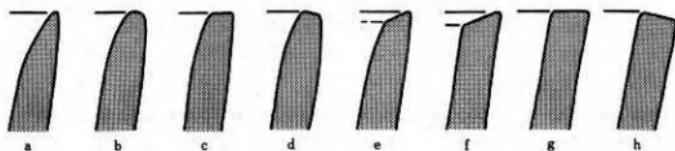
透孔c種（26、36～41）

比較的整った円形で、縦横寸法の合計が14cm以下の小型のものである。40、41が右上からの時計回りで、一気に切り抜いている。他も時計回りであるが、起・終点ははっきりせず、ナデ調整されているようである。

③口縁部断面形態（第68図）

口縁部の断面形態については、第68図のように概念的に分けることができる。口縁a～hまでの8種であるが、第75図でその構成を示したように、ほとんどの場合、複数形態が同一個体に共存している。従って、この口縁部形態があいまいな点が、本古墳円筒埴輪全体の特徴であるわけで、個体のグルーピングといった分類の方針からすれば、組み合わせのあり方の傾向を把握する作業が必要と思われる。しかししながら、組み合わせのパターンを単に羅列して、個体を振り分ける作業を行っても、全体が口縁部

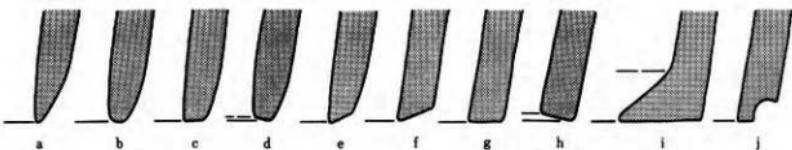
形態のあいまいさを特徴とする点を考えれば、この段階ではグルーピングの意義が薄く、むしろ、法量や器形と同様に、分類後の傾向把握の視点で捉えるべきと考える。



第68図 口縁部断面形態分類図

④底部断面形態（第69図）

底部についても、第69図のとおり、底部a～jの10種に分けたが、その捉え方については、口縁部と同様のことが言える。ただし、この段階で、I群とII群という点では、明確に分離されており、さらに、II群の中にあっても、2つに分離されることがわかる。底部は、製作技法の相違を最も端的に表しているものと言えよう。



第69図 底部断面形態分類図

(4)記号等の分類（第72図）

記号には、工具による線刻のものと指ナデによるものがある。絵文字的なものも記号として扱う。

記号a種（1～7、9、10）

へラ状工具の角を使ったような断面V字の線刻記号で、「W」あるいは筆記体で「U」と「V」を連ねたかたちである。すべて第4段に描かれており、横方向の位置は様々である。大きさや筆跡には大きなバラツキがあり、細分類の必要があるかもしれないが、ここでは、同じ記号として一括しておく。

記号b種（4）

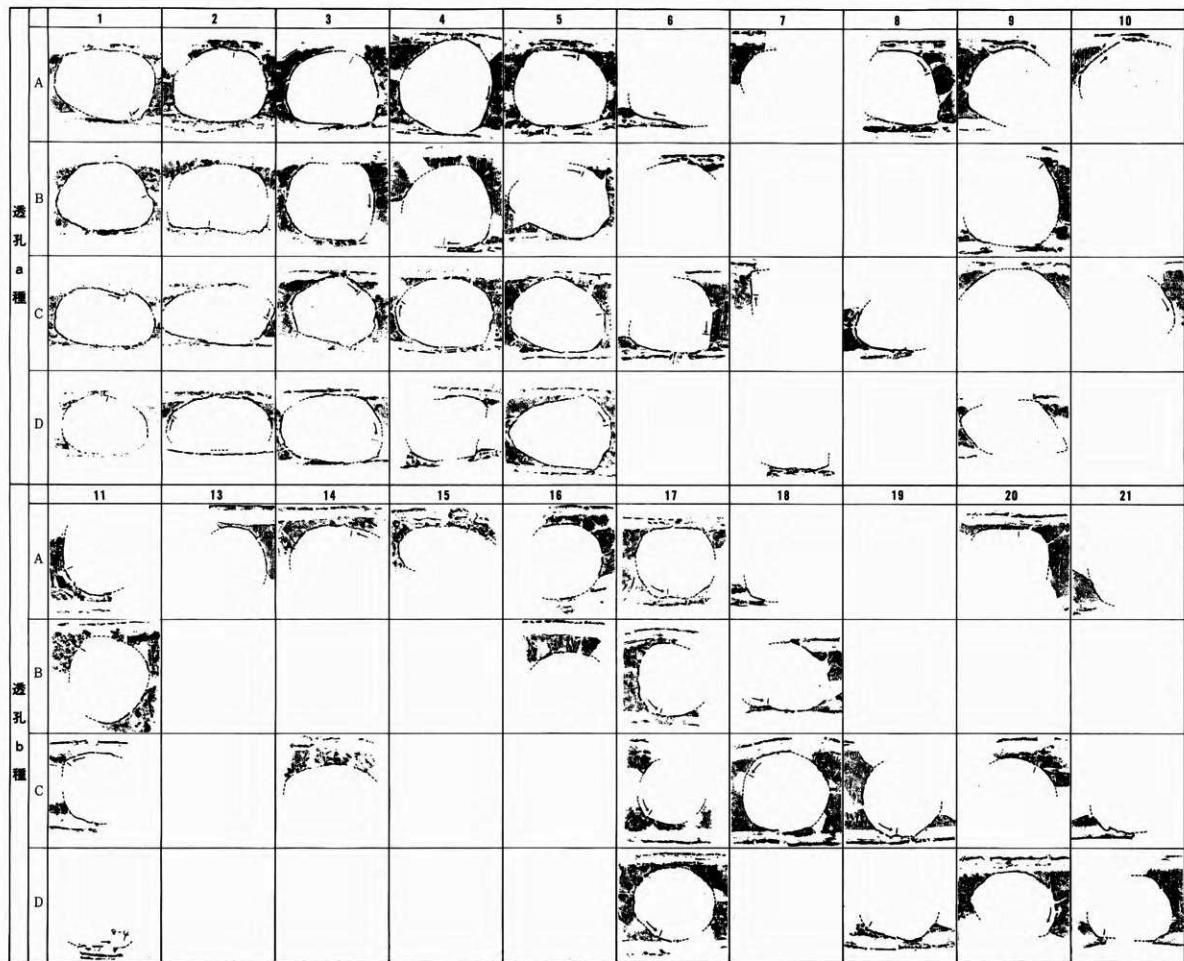
記号a種と同様、工具による線刻記号で、逆「U」字形のものである。4の個体の口縁部にあってa種と共に存しておらず、位置的には、a種が第3段透孔の上方に描かれ、これを正面として、本種は、左へ90度の位置、即ち第2段透孔の上方位に描かれている。この真下の第3段には、記号d種が描かれている。

記号c種（8）

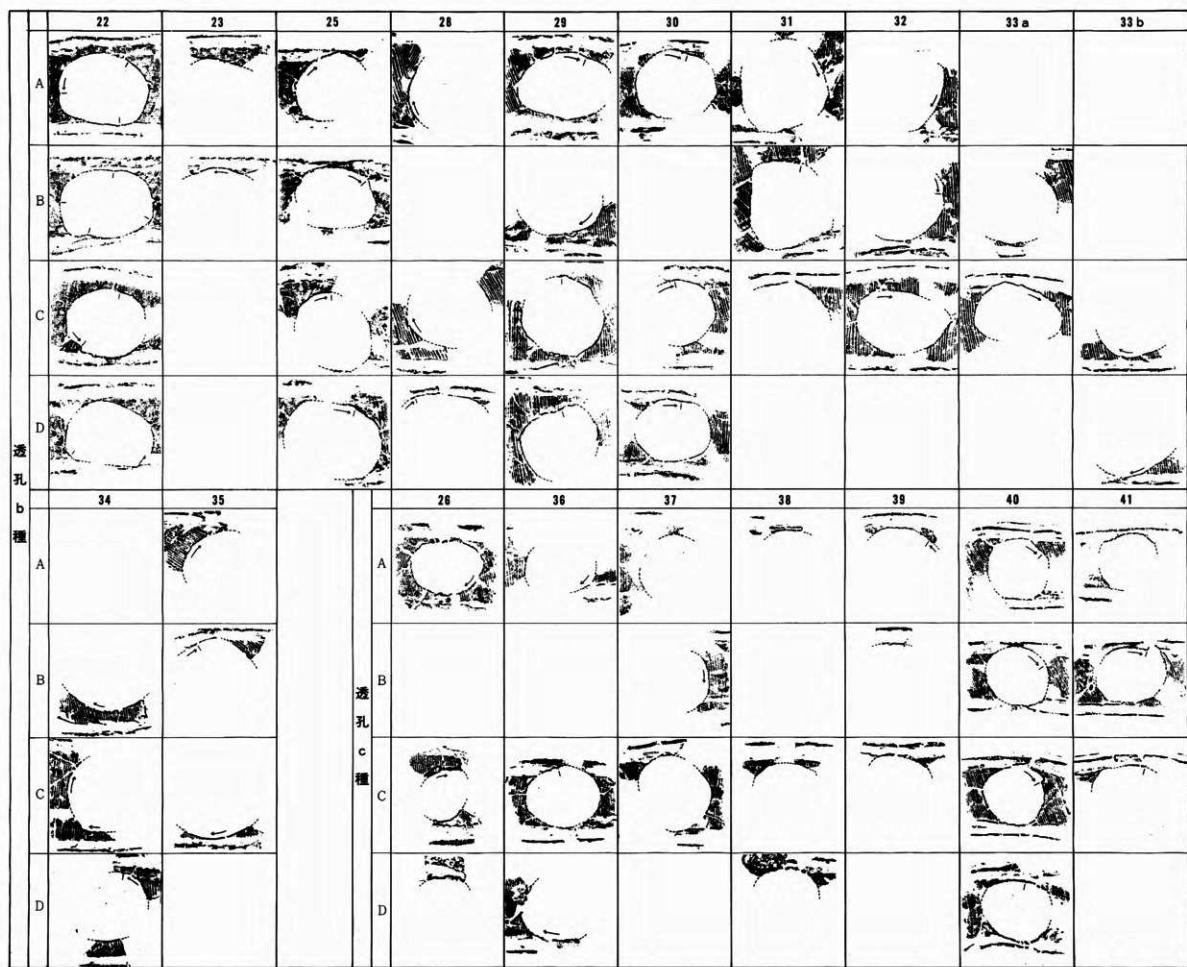
指ナデによるもので、完存していない。

記号d種（4）

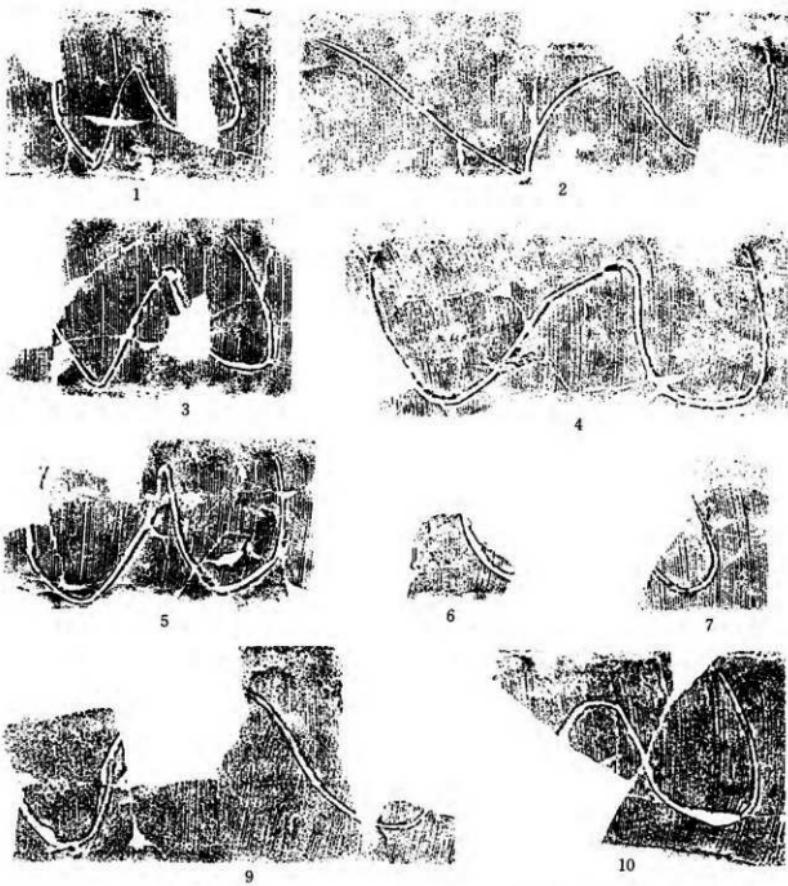
4の個体において、b種の直下第3段に描かれている。線刻と指ナデを組み合わせた絵画的傾向をも



第70図 透孔分類図(1) (S = 1/4)



第71図 透孔分類図(2) (S = 1/4)



記号 b 種



記号 a 種

記号 d 種



第72図 記号分類図 ($S = 1/2$)

つ。右半部箱形ナデの内部に描かれている細線は、線刻とはいえ、細いヘラ状工具を用いたような比較的のナデに近い浅いもので、外側の幅広ナデに先行して描かれている。それは、弓形右上がりの弧を描いた後、それを細ナデ線で四角く囲むものであったようで、囲む線の上下の線は、続く外側の太いナデによって消されている。

(5)タタキ工具による分類

I群の円筒埴輪は、倒立後の口縁部側を積み上げる準備段階として、倒立前に底部であった部分に対して、タタキによる補正作業を行っている。内面に同心円文当具を用いるものであるが、口縁部側を積み上げた際にナデ消されたり、また、ほとんどが当具のヘリを使用しているなど、原体の同定作業は非常に難しい。以下に、可能性の高いものとして原体の分類を行っておきたい。

①内面同心円文当具（第73図）

内当具a種（4～6、8～10、17、23）

中心円は径5mm程の円形で、それをとり巻く1重目に、弱い年輪状凹凸を複数もつ幅広の浅い溝を持つ。この年輪状凹凸は、2重目・3重目の溝中にも1条ずつみられる。また、1重目の溝と2重目の溝との間の凸線上に、潰れたキズ様のものが確認できる場合が多い。

内当具b種（3、7、11～13、18、20、22）

中心円は径7mm程度の比較的大きな円形である。1重目の溝は梢円形であり、中心円が一方に強く片寄った配置となっている。ただし、12と13はやや不明瞭で、検討余地を残す。

内当具c種（28、29、32）

中心円は径6mm程度で、1重目の溝に、中心円から放射状に伸びるような凸線のキズがみられる。32を基準としているが、本種に含めた28・29では、キズが明瞭ではなく、わずかな痕跡と、とりまく同心円の状態から、同一原体として考えた。しかし、タタキ目の歪み等を考えた場合、内当具b種との区別という点でやや不安がある。

内当具d種（31）

中心円は明瞭ではないが、径5mm程度で、細かい同心円文である。

内当具e種（14～16）

遺存状況が悪く、種別認定が難しい。いずれも、同心円文の一部が「へ」の字に折れ曲がるという現れ方が良く似ており、種別可能かもしれないが、中心円が残されていない。内当具a～c種における外方の同心円文部分との判断も可能であることから、本種の成立は検討余地を残している。

②外面当具（第74図）

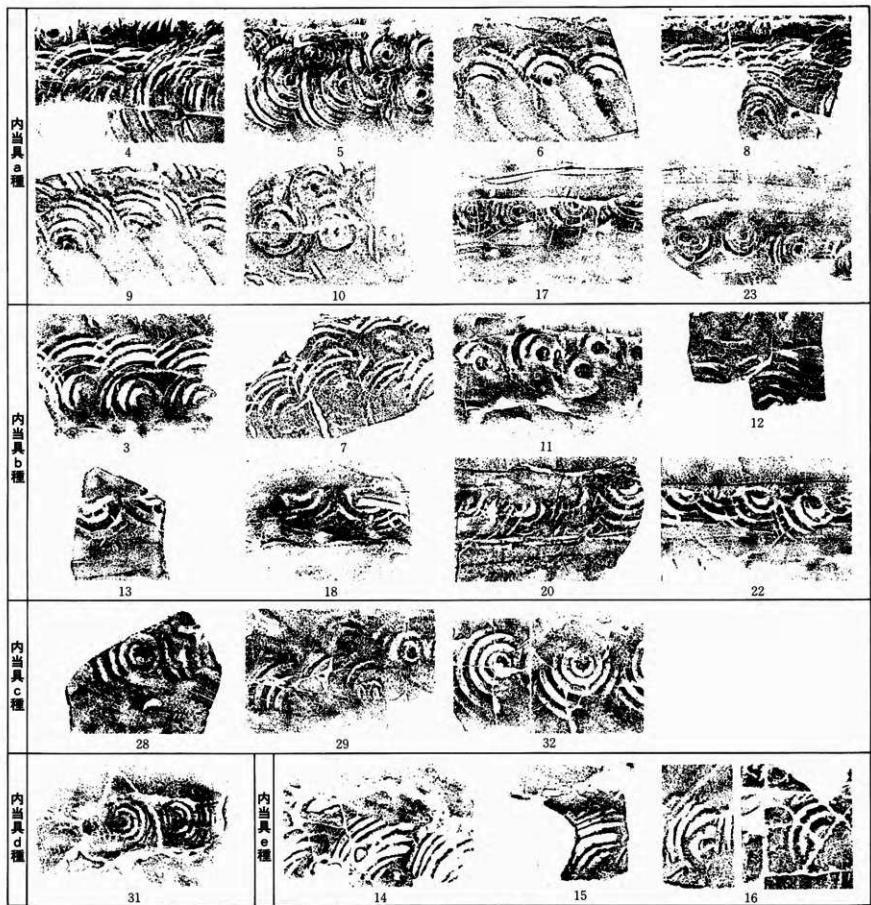
外面当具については、原体の同定は不可能である。なぜならば、ほとんどが線刻なしの板材を用いていると考えられることや、ハケ調整によって消されているものも多いからである。ここでは、当具の種類を把握できたものについて種別して列挙したい。

外当具a種（2～10、16、17、22、25、28、30）

板目板材を用いたものである。後出するハケ調整を免れた部分で小規模に確認されるのみで、痕跡も板目ということで、全ての資料を拓本で明瞭に表現するのは難しい。16は木目幅が2～3mmと細かく、他は概ね木目幅3～5mmである。

外当具b種（23）

平行線文をもつもの。ほぼ直交する明瞭な木目が観察される。



第73図 内面同心円文当具拓影 ($S=1/2$)



第74図 外面当具拓影 (S=1/2)

(6)色調による分類

①器面色調

色調については、標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局監修）をもちいた。色調について、単なる観察結果の羅列するのではなく、グルーピングを目的とした「分類」というレベルで捉えようとする場合、やはり、製作の同時性と一括性の把握を目的としなければならない。しかしながら、全く同じ色調を呈することは極めてまれで、結局は似た色調を呈するものという枠組となる。この枠組の設定もまた、非常に困難な作業で、方法としては、例えば、一つの個体において、7.5Rの赤褐色から2.5YR明赤褐色までの色調変化があり、別の個体では、5YRの赤褐色を主体として、部分的に7.5Rの赤褐色をもつとする。さらに5YRの赤褐色と他の色調の組み合わせを持つ個体もある、というように、個々が構成する色調を抽出しながら、共有の色調をたどって、連鎖する複数の個体を選別するのである。この作業を経ることによって、一定の傾向が把握されるが、一方、ある程度の主観的な見た目を交えなければ、主体的色調の相違が看過され、すべての個体が連鎖的に把握されてしまうこともありうる。色調による分類結果が、工芸単位の一括製作を示すのか、焼成単位を示すのか、あるいは同一窯体内での設置位置の差に係わってくるのかといったような、評価のしかたによっても見た目をえた枠組設定の立場は変化する。このように、色調については、円筒埴輪の分類を経たうえで各類の色調の傾向を把握し、意味付けを考えいく必要があるように思われる。従ってここでは、傾向把握による分類はとりあえず保留し、構成する色調を羅列して、どの色調を各個体が保有しているのかを第75図で示しておきたい。ほとんどの場合、同一器面には複数の色調が存し、かつ変異幅も大きいのであるが、以下の12に分けた色調は、個体毎に外面を構成する色調を観察して列挙し、次に、数十に別れた色調を系統及び濃淡によって、一定の幅をもたせたものに整理統合したものである。従って、同一色調となっている場合でも、その範囲内での差をもっていることが多い。色調によって、その変異幅に差があるのは、濃淡で個体毎の偏在傾向がある場合に同系統色でも細分し、濃淡が漸移的で、細分しても特別な傾向を示すことにならないものは幅広く捉えるという観察所見をえたことによる。第75図では、その個体の主体的色調を濃いトーンで、部分的色調を薄いトーンで示しているので、傾向把握における大きな誤認は生じないと考えている。

色調1：暗赤灰色(7.5R 3/1.4/1)～灰赤色～にぶい赤(褐)色(7.5R 4/2～4/4)

色調2：灰赤色～にぶい赤褐色～赤橙色(7.5R～5R 5/2.5/3.6/2.6/3)

色調3：暗赤褐色～黒褐色～褐灰色～灰褐色～にぶい褐色(7.5YR～5YR 3/1～3/4.4/1～4/4)

色調4：にぶい赤(褐)色(7.5YR～5YR 5/3.5/4)～にぶい橙色(7.5YR～5YR 6/3.6/4)

色調5：灰褐色～灰黄褐色(7.5YR～10YR 6/2)～にぶい黄橙色(10YR 6/3.6/4)

色調6：灰黄褐色(10YR 5/2)～にぶい黄橙色(10YR 5/3.5/4)

色調7：褐灰色～灰褐色～灰黄褐色(10YR～7.5YR 6/1.6/2)

色調8：橙色(7.5YR~5YR 6/6~6/8.7/4.7/6.7/8)

色調9：浅黄橙色(7.5YR~10YR 8/3.8/4)

色調10：淡黄色(2.5YR 8/3.8/4)

色調11：(赤)橙色(10R~2.5YR 6/6~6/8)

色調12：赤色(10R 5/8)

色調1・2は、人物埴輪の多くにも特徴的な色調で、一般的にはワインレッドと呼ばれるものに近い赤紫系統のものである。色調3は、いわゆる茶系統で、色調1・2に通じる赤みをあまり交えず、色調4の黄土色系から漸移的に黒みを増して濃くなつた感じである。色調8~12は低温焼成の、いわゆる生焼け状態に近い部分の色調である。

②断面色調

断面の色調は、器面の色調ともかかわって複雑となるため、実際の「色」としての分類ではなく、むしろ器肉の焼成状態を表すという視点で捉えた。以下の4つに分類したが、個体によっては漸移的であったり、また、他に加味すべき属性を備えたものもある。一応、傾向の把握というレベルで留めておきたい。各個体の所属は第75図に譲る。

断面1：表面のみ色を塗ったように発色しており、内部はほぼ均質な褐色～灰白色。

断面2：厚さ約1mm程の橙色系のやや薄い表層にはされ、内部は均質な明青灰色。

断面3：厚さ約2mm程の橙色系の表層にはされ、内部は褐色系が多い。

断面4：器面とほとんど色調は変わらないか、あるいは部分的に厚い表層をなし、内部に黒～灰色をはさむ。

(7)胎土による分類

胎土の肉眼観察については、筆者の観察眼不足のせいかもしれないが、主に砂礫構成の点では明確な差異を認めるには至っていない。その含有の量的なものでみれば、若干の違いは認められるものの、グルーピングは成し得なかった。ただし、破面にみる土の緻密さという点では、11~13の個体が比較的緻密で、平滑な面を成していることが指摘できる。これらは決して焼成温度が高いとは言えないものであり、胎土自体が比較的良質であったと考えられる。他のものは概ねザラつき、時には部分的に破面が多く孔質となっているものもみられる。構成砂礫は以下のとおり。

①(乳)白色粒〔不透明・軟質・風化?・亜角～角(長石?)〕 微細粒(0.5mm以下)極めて多量、

中粒(1mm程度)多量、大粒(1~3mm)中量

②白色粒〔不透明・硬質・亜角～角〕 0.5~1mm主体に多量

③白色粒〔半透明・やや光沢・亜角～角(石英?)〕 0.5~1mm主体に中量

④透明粒〔透明・光沢・角(石英?)〕 0.5~1mm主体に少量

⑤灰(黒)色粒〔硬質・亜角～円(チャート・流紋岩?)〕 1~3mm主体に少量

⑥黒色粒〔微細粒・一部光沢(角閃石?輝石?)〕 少量

①の微細粒子は、同じ白色粒とした大きいもとは別の鉱物の可能性がある。また、火山ガラス様のものも含まれているが、④との区別は成し得ていない。また、鉱物名等は、正式な鑑定を得る機会を持てなかつたため、筆者自身の認識の範疇で記載したものである。

群番号	ハケ工具原体	外面調整	内面調整	凸帯	透孔	口縁部断面	底部断面	記号	内面当具	外当	外面色調	断面色調	番号
	a1 a2 b c d e f g h i h2 i	a1 a2 a3 a4 b1 b2 b3 b4 a	a1 a2 a3 b1 b2 c1 c2 d1 d2 e1 e2 a1 a2 b c d e f	a b c a b c d e f g h a b c d e f g h i j a b c d a b c d e a b	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3 4	1							
1													2
2													3
3													4
4													5
5													6
6													7
7													8
8													9
9													10
I	10												11
	11												12
	12												13
	13												14
	14												15
	15												16
群	16												17
	17												18
	18												19
	19												20
	20												21
	21												22
	22												23
	23												24
	24												25
	25												26
	26												27
	27												28
	28												29
	29												30
	30												31
	31												32
	32												33
	33												34
	34												35
II	35												36
	36												37
	37												38
	38												39
	39												40
群	40												41
	41												42

* 内外面調整の基準は、a1～e1の各々を基本として、それに別の属性が加わることによって細分されたものであることから、顕著性の把握を見やすくする目的で、基本型に変種を加えたかたちで表記した。

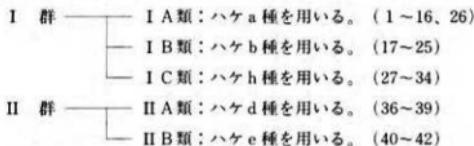
第75図 属性分類一覧

5. 普通円筒埴輪の類型化と内容

(1) 基本分類

普通円筒埴輪は、その成形技法違いによって、大きく I 群と II 群に分けられた。この群毎に、以下、各属性の種別化を基礎として普通円筒埴輪を類型化するわけであるが、各属性で種別された全てを分類の根柢として同列に扱うわけにはいかない。統合する要素をまず抽出し、さらに、細分する基準に値する要素を認定するという階層的な把握が必要となる。具体的には、類型の成立は、各属性の分類結果のいくつかが整合性をもって重なったときである。ただし、一つの類型として成立させるための属性の組み合わせ方にに関しては、統一させることはできず、多分に主観的要素を含むことも否めない。たとえば、少数派の属性であっても、工具自身に起きた何かを物語る可能性をもつものもあり、階層的にさらに下位のレベルで分類しておくべき場合もある。

まず最初に、分類上の基本属性として、ハケ工具の原体に着目した。このハケ工具は、すでに述べたように、有機的な集合体を最も客觀的かつ固定的に把握できる材料である。したがって、普通円筒埴輪の分類にあたっては、使用するハケ工具を最も上位の基準として把握し、以下のとおり基本的な分類をおこなった。これを基準として細分し、類型化を進めていきたい。



I A 類のハケ a 種は、a 1 と a 2 に分けられているが、a 2 のみを用いた個体はなく、倒立位置より下を a 1 種、上を a 2 とするものが 4 個体 (2, 5, 6, 9) と、下を a 2 、上を f 種とするものが 1 個体 (26) 含まれる。これらについては、より下位の分類レベルで検討したい。I C 類のハケ h 種も、h 1 と h 2 に分けられたが、分類時に触れたとおり、同一工具の可能性が高いものである。また、I B 類の中に、倒立位置より上をハケ b 種とし、下にハケ i 種を用いたものが 1 個体 (25) 含まれている。

II 群については、ハケ工具によって明確に 2 分され、同一器面で共存する別種のハケは認められない。

(2) 類型の把握とその内容

① I A 類

本類の主な属性構成を整理し、類型化すると下図のようになる。

	1	3	4	7	8	10	2	5	6	9	11	12	13	14	15	16	26
ハケ工具				a 1				b 2					a 1			f	g 2
外面調整							a 1								b 1		b 3
内面調整									a 1		a 2						c 3
凸 带						a 1								b		d	
透 孔						a										e	
記 号					a												
色 調					1~2~4~5					7~11			9~10			3~4	
類 型	I A 1 - a			I A 1 - b			I A 2			I A 3			I A 4				

第76図 I A 各類型の主要属性構成

I A 1 類 (1~10)

主属性：ハケ a 1・a 2 種、外調 a 1・a 2 種、内調 a 1 種、凸帶 a 1 種、透孔 a 種の組み合わせで、記号については、唯一 8 が口縁部の残りが少なかったために確認できなかったが、すべて記号 a 種をもつと考えられる。

外 面：回転によるヨコハケをもつ外調 a 2 種が 1 個体 (1) 存在しているが、一時的な応用で、分類の基準として捉えないものとしておきたい。むしろ、全体がヨコハケを省略していく傾向が強いという解釈も成り立つ。尚、1 のヨコハケは、口縁部側積み上げ後のハケ目には切られている。倒立位置 (第 3 段) のタタキ調整は、すべて板目板材を用いた外当具 a 種と考えられ、3、5、6、8、9 において当具の木目が明瞭に観察できる。口縁部側積み上げ後のハケ調整は、このタタキ痕をほぼ被覆する位置から上方へ向けて施しているため、部分的にしか観察できない場合が多い。1 の第 3 段上方で認められる鱗状の痕跡は、粘土紐積み上げていく際の指整形圧痕で、ハケ目には切られているものの、強く凹んでいたために残存したものである。また、特に第 1・2 段で、ハケ目の途切れた空白部が横方向に細く走ることがあるが、粘土紐接合部が強く凹んでいたために生じたものである。

内 面：ナデは力強いものであるが、同時に丁寧さを欠き、粘土紐の積み上げ痕が比較的良くわかる。凸帶貼り付け時の指圧痕が比較的明瞭に残存し、その形状は、1 本の指の腹による概ね一回の押さえつけとして横に連続させるものである。この指圧痕は、凸帶貼り付け時において、それより下にあるナデを切っているが、上位のナデには切られている。ただ、圧痕を覆うナデではなく、圧痕上端から上位のナデをはじめるかたちである。倒立位置のタタキ目は、口縁部側積み上げ後の軽いナデを受けているものが多く、1 と 2 では、ほとんどナデ消されている。当具は、内当具 a 種を用いた 4~6、8~10 と内当具 b 種を用いた 3、7 の 2 様が確認できる。同心円文は、斜め上方に傾けて用いたものが多く、横に連続させて 1 周する調整を、概ね 2 段施している。連続させる方向は、6 と 9 が時計と逆回りで、かつ右上方に当具を傾けているのに対し、他は時計回りで、左上方に当具を傾けている。

口縁部形態：口縁 a~d 種の範囲内で、全て 2 ないし 3 つの形態の組み合わせをもつ。特に、他では乏しい a・b・d 種を含むものが多いという点で、特徴的な傾向を認めることができる。内・外面そして上面それぞれの調整が独立しているとは考え難く、複数面を指で挟んで軽くヨコナデするものである。

底部形態：底部 a~c・e 種の範囲内で、2~4 つの形態の組み合わせをもつ。形態の変異幅が大きいことが特徴であり、また、a・e 種は、他の類ではあまり認められないものである。調整は、口縁部と同様で、口縁部まで完成させた後で再び調整した形跡は認められない。

色 調：赤みの強い色調 1・2 を主とするグループ (1、2、7、9) と、くすんだ茶~黒系をもつ色調 5 を主とするグループ (3~5、8、10)、及び色調 4 を主とするもの (6) に分けられるが、色調 5 を主としながら部分的に色調 1・2 をもつものもあり、同時焼成で発色の差とも考えられる。断面色調は断面 1 のいわゆる「須恵質」のものである。色調 4 を主とする 6 のみ、にぶい橙色の表層を持ち、内部に褐色・灰色・灰赤色等の層状の色調差をもつ部分があるなど、焼成温度の低さを思わせる。

細 分：ハケ a 1 種のみを用いるもの (1、3、4、7、8、10) と、倒立位置より下にハケ a 2 種を用いているもの (2、5、6、9) に分類される。前者を I A 1-a、後者を I A 1-b とするが、その他の属性では分類の裏づけをもたない。あえてあげれば、後者の 6 と 9 において、内面当具の方向が逆まわりとなっている点が指摘されることであろうか。

I A 2 類 (11~13)

主属性：ハケ a 1 種、外調 a 1 種、内調 a 1・a 2 種、凸帶 c 種、透孔 b 種の組み合わせをもつ。

外 面：第 4 段において、ハケ方向が若干傾きを強める傾向にある。凸帶 c 種は、変異やうねりの少

ない均質かつ丁寧なもので、凸帯立ち上がり部のナデも幅広く直線的となるのが特徴であるため、全体に整美な印象を受ける。

内面：IA1類に準ずるが、口縁部に傾きの強いナナメハケをもつ内調a2種を含む(12)。倒立位置のタタキ目は、すべて内当具b種を用いている可能性が強い。また、当具に傾きをあまりもたせず、中心をあてがう傾向にある。

口縁部形態：11、13は口縁a・b種、12は口縁d種で、IA1類とほぼ同様の傾向といえる。ただ、凸帯上下のナデと同様、比較的直線的で整美なヨコナデ仕上げである。

底部形態：11が底部b・c種、12が底部b種となっている。調整はヨコナデで、11の外面では幅広で丁寧な仕上げとなっている。しかし両者とも、倒立後の自重によるたわみが認められる。

色調：色調11と色調7の組み合わせを特徴とする。両色調は、器体の表裏の関係で認められ、表面的には、片面が土師質といった感じで、全体に焼成温度が低かったのであろう。断面は、橙色で厚さ1mm程の表層をもち、その内部は均質な明青灰色を呈する断面2で、他の類とは明確に区別される。

IA3類(14~16)

主属性：ハケa1種、外調b1種、内調a1種、凸帯b種、透孔b種の組み合わせをもつ。

外面：残りが少ないが、倒立後に積み上げた口縁部側に施すナナメハケと、凸帯b種の組み合わせが本類を特徴づけている。凸帯はうねりが大きく、細かな整形意図を欠いた稚拙な印象を与える。16の倒立位置に、外当具a種の痕跡が部分的に認められる。

内面：内調a1種であるが、傾きが比較的強く、口縁部近くではほとんどヨコナデに近くなる。第3凸帯位置内面の指圧痕は、指頭を下から上へ右上がりで小刻みに連続させた鱗状の単位が並列するもので、これもまた本類の特徴となっている。内当具の種は明確にできないが、本類のなかにあっては、同じ当具の可能性が強い。すべて左上方に当具を強く傾け、時計回りに連続させている。

口縁部形態：口縁c種のみで、角を比較的明瞭にした丁寧なヨコナデ仕上げとなっているが、外面へのナデはほとんど見られず、上面を平坦に仕上げることに重点を置いている。あるいは、ケズリによる調整が介在していた可能性もある。

色調：色調9・10を主とする焼成不良の土師質で、器面の摩耗も激しく柔らかい。乾燥単位で色調差をもつものがあり、14では、倒立位置より上と凸帯が色調10、下が色調9であり、15も同様で、倒立位置より下はさらに赤みの強い色調8に近い。断面色調は、外面とほぼ同じか、あるいは、その色調を呈する厚い表層を持ち、内部が黒色～灰色となる断面4である。

IA4類(26)

主属性：ハケa2・f種、外調b3種、内調a3種、凸帯d種、透孔c種の組み合わせをもつ。ハケa2種の保有をIA類に含める根拠としたが、他の属性では全くの独立した存在を示しており、IA類のなかでの細分類の成立には若干疑問がもたれる。

外面：第1段がハケa2種、その他がハケf種となっているが、倒立位置は第3段中位に認められ、2種類のハケ工具を用いる他の個体の場合とは状況を異にする。ハケa2種は、第2段の下方でも僅かに確認でき、それをハケf種の調整が被覆している。そして、ハケf種を用いた調整は、倒立後の正置させた状態で、上方に向けて施していることから、実際は、倒立位置より下部をハケa2種で調整したものの、倒立後に、ハケf種を第2段から重ねて再調整したものと考えられる。そして、第1凸帯は倒立前に付けているが、第2・3凸帯は正置させた状態で付けている。このことは、第2段のハケ(ヨコハケ含む)調整が、第1凸帯の立ち上がり部のナデを切り、第3凸帯には切られていることからも伺える。第2凸帯の剥落部中央には、貼り付け前の目安とするナデ線が観察される。第3段の倒立位置付近

には、口縁部側積み上げ後のハケ調整に伴う著しい粘土被覆がみられ、第2・3段の再調整が、口縁部側積み上げ前に別の調整単位として施されたことが予想される。最終的な調整は、口縁部のうねりをもつ不規則な1単位のヨコハケとなっている。

内面：ナナメ指ナデ後に凸帯を貼り付け、さらに、貼り付け時の指圧痕をヨコナデにより消している。内調a 3種である。倒立部のタタキ調整痕は確認されず、第2・3段の再調整によってタタキ調整を不要とした可能性がある。

口縁部形態：口縁c種あるいはg種で、軽いヨコナデ調整であるが、上面の整形にケズリを介在させていた可能性がある。

底部形態：残存部が少ないが、底部b種あるいはc種で、内面の調整に小規模で断続的なヨコハケが認められる。

色調：色調3・4と色調11が、器体表裏の焼成具合の差で表れており、色調2が、色調3の黒褐色部に重なるかたちで部分的に発色している。断面は、橙色～明赤褐色を呈する厚さ2mm前後の表層を持ち内部は褐灰色である。

② IB類

本類の主な属性構成を整理し、類型化すると下図のようになる。

	17	18	19	20	21	22	23	24	25
ハケ工具				b					i
外面調整	a·4			a·1				a·4	b·1
内面調整	c·1		c·2		c·1				c·1
凸 带			a·2						c·d
透 孔				b·1					
色 調				1·2·5·6					12
類 型				I B 1					I B 2

第77図 IB各類型の主要属性構成

19の第2段に認められる繩(?)圧痕の原因は不明で、第2凸帯の下突出部上にも、小範囲で並列して

いる。

内面：極めて特徴的な内調c種を持っており、強いタッチの丁寧なものであるため、粘土紐の接合痕は確認できない場合が多い。倒立位置のタタキ調整は、内当具a種を用いたもの(17, 23)と内当具b種を用いたもの(18, 20, 22)がある。使用当具に違いはあるが、ともに器面に工具をほぼ垂直にあてがって時計回りにめぐる共通の使用方法である。凸帯貼り付け時の指圧痕には、軽いヨコ指ナデが施されている。

口縁部形態：口縁c～f種の中での組み合わせで、口縁c種のみか、それと口縁e種の組み合わせを持つものが主体である。口縁a・b種を交えないという点でIA類とは傾向の差を認める。いわば、口縁の仕上げが比較的丁寧で、上端面の作出意図が明瞭といえる。17の外面上には強いナデによる凹みがみられる。

底部形態：底部 b・c の組み合わせで、変異は少ない。外面ナデ調整の幅に差が認められ、17が極めて幅広であるのに対して、19ではほとんどナデが認められない。

色調：色調 1・2 を主とするもの（17、19、21～24）と、色調 5 あるいは色調 6 を主とするもの（18、20）があるが、後者は、部分的に色調 1・2 を交えるもので、一括焼成と考えられる。

I B 2 類(25)

主属性：ハケ b・i 種、外調 b 1 種、内調 a 1・e 1 種、凸帯 c・d 種、透孔 b 種の組み合わせとする。

外面：倒立位置が第 2 凸帯直下にあり、上 2 段と下 2 段で分離される唯一の例である。下 2 段を逆さの状態でハケ i 種を用いて調整し、第 1 凸帯を付す。倒立後、倒立位置にタタキ調整（外当具 a 種）を施してから上 2 段を積み上げ、タタキ調整痕を消すように第 2 段中位付近からハケ b 種を用いて調整して、最後に第 2・第 3 凸帯を貼り付けている。第 1 凸帯と第 2・第 3 凸帯とは形態差がみられ、凸帯 d 種に共通する傾向があるが、第 2・第 3 凸帯の形態は I A 3 類の凸帯 c 種に類似する。

内面：内面調整も、倒立の前後で大きく変わり、下 2 段が内調 e 1 種、上 2 段が内調 a 1 種となっている。総体としては、上 2 段の特徴は I A 3 類に通じるといえる。倒立位置のタタキ目は、ナデ消されている部分が多く、同定はできなかった。

口縁部形態：口縁 c 種あるいは一部 g 種に近く、比較的丁寧な仕上げとなっている。

底部形態：数 cm が残存するのみで、全体は不明であるが、底部 b 種または丸みのある c 種である。外面は比較的強いつまり上げるようなヨコナデで、若干内傾し、凹む部分もある。

色調：倒立位置を境に色調がやや異なり、上段は色調 9 を主として部分的に色調 11 を呈し、下段は、色調 11 を主として部分的に色調 12 を呈する。断面色調は外面とあまり変わらない土師質の断面 4。

③ I C 類

本類の主な属性構成を整理し、類型化すると下図のようになる。

	27	28	29	33	34	35	38	31	32
ハケ工具					h				
外面調整			b 1・b 2					a 1-(a 3)	
内面調整				b 1					b 2
凸 帯				d					
透 孔				b					
色 調				3・4・8・9					10
類 型				I C 1				I C 2	

第78図 I C 各類型の主要属性構成

I C 1 類 (27~29, 33~35)
主属性：ハケ h 種、外調 b 1・b 2 種、内調 b 1 種、凸帯 d 種、透孔 b 種の組み合わせとする。
外 面：外調 b 1 種を基本とし、口縁部端と底部端に傾きの強いナナメハケをもつ b 2 種のもの（33, 35）を含めた。これは、底部端にのみ強いナナメハケをもつ 29 の存在から、端部処理にこのようなハケ調整を応用する場合があるものとして全体を理解したことによる。両者の分類を補強する他の属性が認め難いこともあり細分は保留としておきたい。倒立位置のタタキ調整は、外当具 a 種を用いたものと思われ、唯一 28 でその痕跡を確認できる。凸帯は、凸帯 d 種とするが、この種は、同一個体内での組み合わせの傾向をも含めたやや漠然としたものである。雰囲気の相違を感じるものもあるが、細分するための明確な根拠とすべき点を挙げるとなると苦慮する。第 1 あるいは第 2 凸帯がボッティとした断面台形に近くなる傾向は、27 や 34, 35 がとくに顕著で、第 3 凸帯は断面 M 字形を維持しているものが多い。また、ヨコナデ成形の際に、凸帯上下の山形部が、粘土の不安定な引き延ばしによって、激しい凹凸の連続となるこ

とも多い（29第3凸帯、33など）。

内面：内面調整は、ナナメ工具ナデをもつ内調b1種で、粘土紐の接合痕をほとんど残さない。凸帯貼り付け時の指圧痕は、ヨコナデあるいはそれに近いナナメナデによって消されている場合が多いが、このナデは独立した調整ではなく、IA1類と同様、それより上方のナデへ連続していくものと考えられる。倒立位置のタタキ調整は、ほとんどが比較的丁寧にナデ消されているが、28と29において、内道具c種の可能性をもつものを確認している。

口縁部形態：口縁a～e種のなかで、2～4種の組み合わせを持つものが多く、傾向は判然としない。小刻みなうねりも多く、丁寧さを欠く仕上げが主体を占める。ただ、角部がしっかりととした比較的整美な28や33では、外面にナデがほとんどみられず、上端面を作り出すケズリが介在した可能性が強い。

底部形態：底部の残存が乏しいが、確認できたものはすべて底部c種である。

色調：29が、色調3と6に覆われて最も良好な焼成状態で、色調1を呈した一部分は、叩くと金属音に近い音を発する硬質な焼成となっている。一方その他は、器体の片面が色調3・4で反対側に酸化状態の色調8・9をもつものが多い。全体としては焼成温度がやや低い感じである。断面は、橙色を呈する厚さ2mm前後の表層を持ち、内部は、概ね褐色を呈する断面3である。

I C 2類(30～32)

主属性：ハケh種、外調a1・a3種、内調b1・b2種、凸帯d種、透孔b種の組み合わせとする。

外面：口縁部におけるナナメハケが発達しない外調a種を基本とし、第3段において部分的に回転力によらないヨコハケを最後に施す外調a3種の31も含めた。この31のみ凸帯がやや異質で、全体に分厚く、M字状を目指した形跡を伺える程度で、ランダムな調整が交錯して断面形態は位置によって著しく変化する。

内面：32のみ内調b2種で、IC類のなかにあっては特異な存在である。倒立位置より下のタテナデは力強く、2次調整として採用した可能性は少ない。全体タテナデ後に凸帯を貼り付け、指圧痕の残された付近をヨコナデで軽く再調整している。倒立位置に施したタタキ目は、工具を垂直に当てて、重複少なく等間隔に整然と並列させたもので、内道具c種認定の基本としたものである。30と31の調整はIC1類と同じである。タタキ目は、30はほとんど消されており不明で、31では、僅かに残されている同心円文を観察すると、他の種に共通点を認めがたい細かい文様が使われている。

口縁部形態：32は、口縁部の残存が1cm幅のみで、口縁a種に近いが、2mm程の平坦面は確実に作り出されており、先細りの著しい口縁c種とすべきであろう。31は口縁c種で比較的整っており、IC1類で指摘したように、外面にヨコナデがほとんど及んでいないという特徴とからんで、上端面にケズリを施した可能性がある。30は、口縁c～d種である。

底部形態：確認できるのは32のみで、底部b・c・d種を確認している。実測図に表れた断面は局部的なもので、全体としては丸みの強く底部b種に近いものが主体である。

色調：30が色調3のやや良好な焼成部分を含んで、反対面に色調8をもつものであるが、32は色調8・9を主体として生焼け状態に近く、31は、さらに軟質の色調9・10を中心とする。断面色調は、31が表面の色調とほとんど変わらない土師質の断面4で、他はIC1類と同じである。

④ II A類(36～39)

本類は4個体の確認で、属性構成に若干の差がみられるが、細分せず、一括して1類型とする。

主属性：ハケd種、外調a1種、内調c・d種、凸帯e種、透孔b種の組み合わせとする。

外面：各段に、周回するハケ調整単位の切り合いを認めるものが多い。凸帯は、うねりが少なく、均

質で丁寧な仕上げとなっている。

内面：内面調整の構成は複雑で、各個体にバラエティーがある。36と39は、I B 1類と全く同じヨコ工具ナデの内調c種で、36は口縁部にナナメハケ調整をもつ内調c 2種となっている。一方、37と38はナナメナデと口縁部ナナメハケをセットとする内調d種で、37が、口縁部ナナメハケの前にヨコ工具ナデを施した形跡を留める内調d 2種である。この内調d 2種の存在を橋渡しとして、本類全体に一括性を認めることもできるが、内調cとd種の差は、一時的応用の範囲を逸脱しているようにも思える。凸帯貼り付け時の指圧痕はほとんど消されており、外面のハケ調整単位が示すように、各段毎に粘土紐積み上げの単位をもち、その都度凸帯を付けた可能性もある。

口縁部形態：口縁gまたはh種で、整美で均質な仕上げである。上端面を丁寧にナデる一方、内外面に対しては非常に軽いヨコナデがめぐる程度である。

底部形態：36と39でしか確認できなかったが、本類を最も特徴付ける底部j種をもっている。断面円形の底部設定輪型の圧痕で、いわゆる淡輪技法と考えて良いと思われるが、輪型の断面径はせいぜい7~8mm程度と小さく、結び目を示す特徴的な圧痕は残存部では確認していない。また、口縁部までを完成させた後で倒立させて、この輪型圧痕を一部水平に削り取って底部h種の形態とする底部調整が認められる。圧痕すべてを削り取っていないことからすると、輪型取り外し時に生じた変形部の補正を目的とする程度のものであったと考えられる。

色調：すべて色調11・12で、個体間の差もほとんどない。断面は、同色の部分と、同色を呈する厚い表層をもって内部が褐色となる部分をもつ土師質の断面4である。

⑤ II B類 (40~42)

本類の構成も3個体と少なく、細分せず、一括して1類型とする。

主属性：ハケe種、外調b 3種、内調e種、凸帯f種、透孔c種の組み合わせとする。

外面：いずれも各凸帯の下位でハケ調整単位の切り合いを明確に認める。ハケ方向は、口縁部に向かうに従って傾きを増す傾向にあり、いずれも整然と並列する。凸帯はうねりが少なく、上下立ち上がり部のナデも直線的で整っている。凸帯の一部分に、工具あるいは手が上方（まれに下方）に強くこすれて、突出部が潰れてしまっている部分がよく目に付く。また、40の第2凸帯の一部に布圧痕がみられ、調整工具に布も係わっていた可能性を示す。

内面：ヨコ指ナデの内調e種であるが、41は、第1・2段に2次のタテナデをもつ内調e 2種となっている。しかし、40においても、実測図には表れていないが、ごく一部に2~3状の短いタテナデを認めるので、両者は使用頻度の差を示すのみとも言える。粘土紐の接合痕は比較的良好に残す。凸帯貼り付け時の指圧痕は、比較的丁寧に消されており、成形の途中で凸帯を貼り付ける段階を持っていた可能性もある。

口縁部形態：口縁eまたはf種で、基本的には上端面が幅広い後者である。整った丁寧な仕上げで、上端面と外面に指をあてがうヨコナデを主な整形手法としているため、内面上端に上端面のナデに伴う粘土の被りがみられることが多い。

底部形態：通常の正立成形による本類を特徴付ける底部j種をもつ。自重により内面に屈曲したのではなく、自重に耐えうるだけ基部とするため、最初に幅広い底面をもつ断面3角形の分厚い基底部を意図的に作り出したものと考えられる。底面には木目状の圧痕とともに蔓状の圧痕も部分的に認められる。底部に対する調整は一切認められない。

色調：色調9・10を主体とする柔らかい土師質で、断面色調は断面4である。

6. 朝顔形円筒埴輪におけるハケ工具以外の諸属性の分類

(1) 分類の方法

基本的には普通円筒埴輪と同様の属性項目で分類するが、個体数が少ないとや、器種としての根本的相違等から、普通円筒埴輪各属性の細分項目をそのまま運用するのは困難で、多くについては、新たな細分項目として設定した。個体数が少ないとや、普通円筒埴輪で得た分類方法の有意性がそのまま保持されるとは考えがたいが、観察手順の統一という点から、あえて準拠することにした。

尚、口縁部側の朝顔4・5と、底部の朝顔7・8については、ハケg種で共通するものの、ハケ工具原体に表裏の関係の差異が認められ、朝顔4と朝顔8が表、朝顔5と朝顔7が裏である。このことから、接合関係はないものの、それぞれを同一個体であるという前提で分析していきたい。

(2) 器面調整方法の分類

① 外面調整

すべてタテハケによる1次調整のみを基本としているが、総じてハケ目は斜傾している。また、口縁部では特にハケ目の傾きを強め、下から見ると放射状渦巻きのごとくなっている。ほぼ統一的に以上のような傾向を認めるが、あえて細分すれば、底縁付近のハケ手法から、以下の2種に分類される。

外調1種（朝顔1、朝顔2）

底部端までは一気にハケ調整を施すもの。

外調2種（朝顔7、朝顔8）

底縁付近で特に傾きを強めたやや短い単位のハケ目をめぐらせるもの。

② 内面調整

内面調整はナデを基本としているが、その手法にはいくつかの差異がみとめられ、以下に、内面調整1~4の4種を基本種として、付加属性による亜種を含めた都合5種に分類された。

内調1種（朝顔1）

終始斜め方向の指ナデをもち、底部近くではやや傾きを強める。また、口縁部にハケ調整をもつ。

内調2種（朝顔2）

倒立位置より下は斜め方向の指ナデ、倒立位置より上は、やや傾きをもつものの、ほぼヨコナデに近い。口縁部にハケ調整をもつ。

内調3種（朝顔3）

斜め指ナデを主とし、倒立位置からくびれ部にかけてはやや傾きを強める。底部端付近にヨコ指ナデがめぐる。口縁部にハケ調整をもつ。

内調4種（朝顔4・8、朝顔5・7）

倒立位置より下は、なんらかの工具を用いたと思われるナナメナデで、幅広平坦な1単位内に、ナデ方向に沿った1条の細い沈線が走る。ナデ単位毎にはば常に同じ位置でこの沈線を認めるため、工具が持ち合わせている凸部の痕跡と思われる。これは、普通円筒埴輪のナナメ工具ナデの様相にはば一致するが、ナデ面の表れ方に違いがあり、同じものではない。底縁付近においては、ヨコ指ナデがめぐる。倒立位置より上は、ヨコ指ナデあるいはそれに近いナナメ指ナデで、口縁部にハケ調整をもつものともたないものがあり、2つに細分される。

内調4a種：口縁部にハケ調整をもつ。（朝顔5）

内調4b種：口縁部にハケ調整をもたない。（朝顔4）

(3)各部形態等の分類

①凸帯（第79図）

凸帯の断面形態については、肩部、くびれ部、朝顔部といった、円筒部とは異なる貼り付け位置の環境をもつたため、普通円筒埴輪より多く断面を抽出するとともに、断面抽出の凸帯位置も明確にした。原則として、各凸帯より2ヶ所ずつの断面を抽出している。

凸帯1種（朝顔1、朝顔3～5、朝顔7、朝顔8）

基本はM字状で、上部立ち上がりの屈曲が強く、凹部下底を下半部におく「フ」の形態である。幅が狭い場合に、この基本形態を維持している場合が多く、若干幅広くなると、下半部に凹線を伴うタイプに変化する。この変化は、普通円筒埴輪における凸帯a種に共通する。しかし、凸帯のうねりや、幅の変化はそれほど激しくなく、比較的整然としており、幅の変化に対応して生じた凹線を持つタイプも一定距離を維持してめぐり、一見普通円筒のf種を思わせる。

凸帯2種（朝顔2の第1・第2）

凹部のみを整形する独立したナデを持っているため、上下対称のM字形に近く、凹みも概して浅い傾向にある。また、立ち上がり部のみを対象としたナデをもつたため、器面にかかるナデ部分が幅広で整美な直線状となる。普通円筒埴輪における凸帯c種によく似た雰囲気をもつ。

凸帯3種（朝顔6）

1種と同様な整形手法を持っていると思われるが、全体として凹みが比較的浅く、台形に近い無骨な凸帯を含んでいる。このような点で、普通円筒埴輪における凸帯d種に共通する雰囲気をもっている。

以上の3種を認定したが、凸帯2種をもつ個体の朝顔2については、第3凸帯より上位の凸帯がやや雰囲気を異にし、種別を決めかねた。調整方法自体では決定的差異を認めるものではないが、一方、凸帯1種との区別もあいまいと言える。第3が丸みが強く、第4は鋭い、第5では台形に近くなるという変異をもつ。朝顔形全体としては、第3凸帯より上は、貼り付ける部位の状況が、通常の体部とは異なるため、当然、調整時の指先の使い方にも若干の変があると考えられる。細かな分類を行うには、やや資料数が乏しく、検討余地は多分に残されている。

②透孔（第80図）

分類基準は大きさによるものとした。

透孔1種（朝顔1）

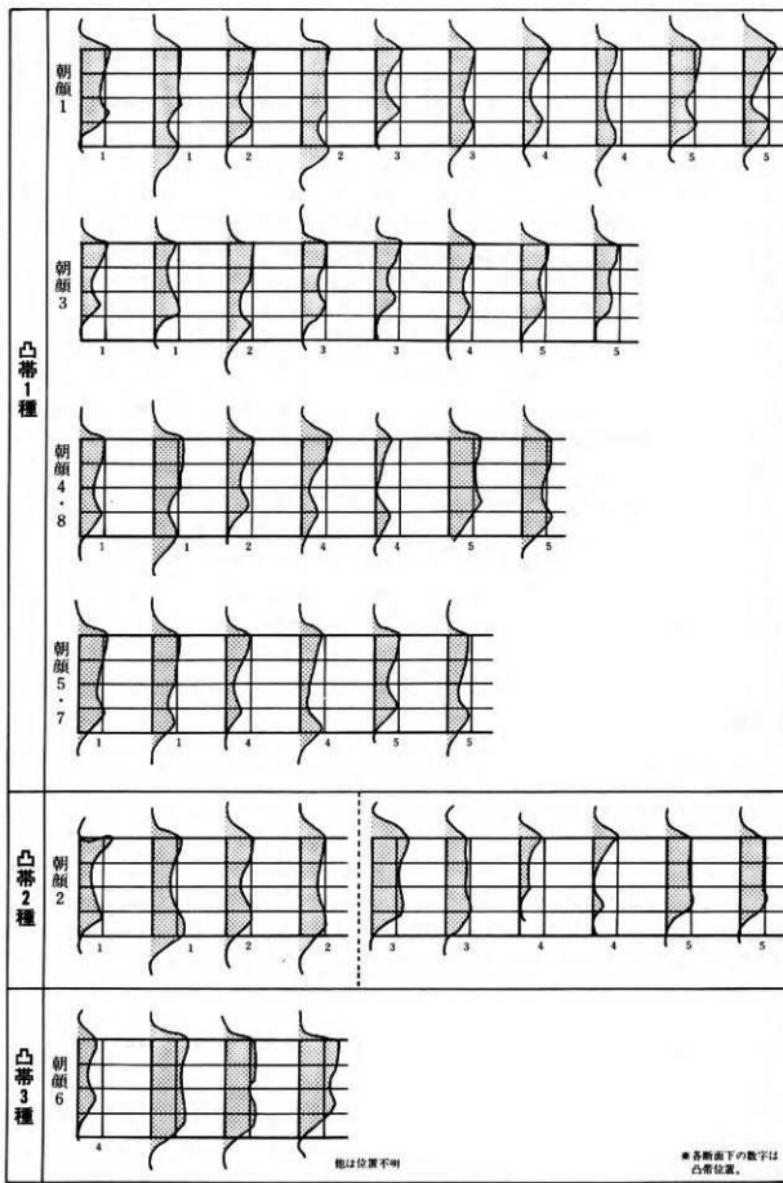
比較的整った円形で、縦横寸法の合計値が13～14cmと小さい。切り抜き面は、工具を貫通させて一気に切り抜いたような平坦面をなす孔が多い。しかし、Aの孔では、最初に内面へすばまるかたちで孔を穿ち、次に、内面側に孔を広げる面取りを再度施して修正している。このため、切り抜き面の断面は山形を呈する。他の孔でも、外面寄りで僅かに別の切り抜き面の痕跡を認めるものがあり、再調整が外面にまで及ぶように幅広く施されたものとしても理解される。切り抜きの起・終点位置は、概ね上方にあり、方向は時計回りと考えられる。

透孔2種（朝顔2）

縦横寸法の合計が16cmを越える非常に大型の透孔である。一気に切り抜いたものと考えられるが、その方向については、砂粒の移動に明確なものもなく、ナデによる再調整が介在している可能性が強い。起・終点における段差のあり方から、時計回りと予測している。

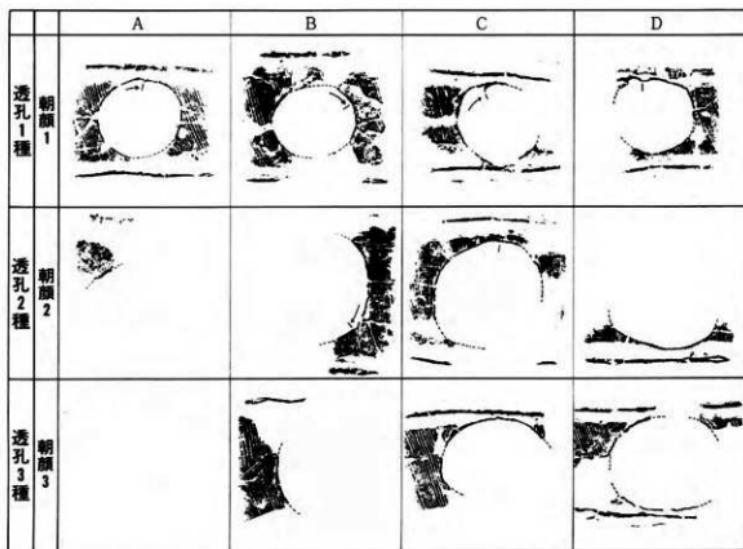
透孔3種（朝顔3）

縦横寸法の合計が15cm程度に復元され、やや横長の楕円形に近い。残りが乏しく、切り抜き方は明確



第79図 朝顔凸帯断面形態分類図 (S=1/1)

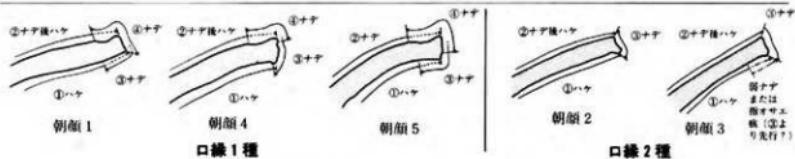
にはしがたい。切り抜き面は概ね単面であるが、透孔1種と同様の過程があった可能性もある。また、砂粒の動きも観察しがたく、平滑なため、ナデ調整されていると考えられる。



第80図 朝顔透孔分類図 (S=1/4)

③口縁部断面形態（第81図）

口縁部の断面形態については、普通円筒埴輪の場合とは異なる状況にあるので、以下の2種に大別させた。端部内面にナデによる凹線をもつものを口縁1種、もたないものを口縁2種とするもので、結果として、器肉の厚さの点でも違いが認められた。調整方法等の係わり方からくる微妙な差を含めて細かくみれば、個体単位で細分可能であるが、概略的には、大別とは矛盾しない傾向を認めることができる。



第81図 朝顔口縁断面形態 (S=1/2)

④底部断面形態

底部については、基本としては普通円筒埴輪における底部 a ~ j の10種から抽出するが、個体数が少なく、さらに、構成も単純であることから、断面の組み合わせをもとに、以下の2種に整理する。

底部1種（朝顔1、朝顔3、朝顔7、朝顔8）

底部 b と g の組み合わせである。b は、先細り傾向が乏しく、下端に丸みをもった g という雰囲気である。これが調整時の基本的な形態であったと考えられ、g の形態を呈する部分は、器体の重圧を受けたかたちで、総じて下端内側に粘土のせりだしを認める。

底部2種（朝顔2）

底部 c · d · h の組み合わせで、下端面の内傾が目立つ。また、先細り傾向が強く、薄手である。

(5)タタキ工具による分類

①内面同心円文当具（第82図）

内当具1種（朝顔1）

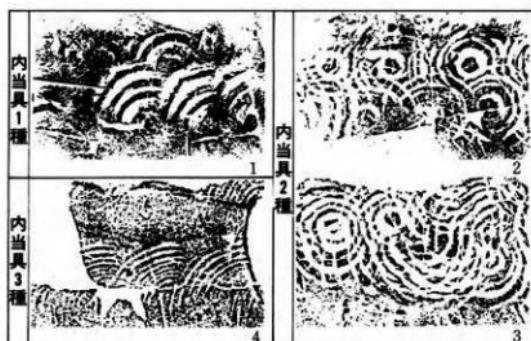
中心円は明確ではない。外方同心円の状態は、普通円筒埴輪における内当具 c 種あるいは e 種に近似している。

内当具2種（朝顔2、朝顔3）

中心円は径 6 mm 程度の円形で、同心円文は比較的細かく、普通円筒埴輪における共通工具はない。

内当具3種（朝顔4）

中心円は明確ではない。同心円文は非常に細かく、普通円筒埴輪における共通工具はない。ただし、人物埴輪のなかで、人1「棒掛け製裘衣の女子」の基台底部内面の同心円文と同一の可能性がある。



第82図 朝顔同心円文当具分類図 ($S = 1/2$)

②外面当具

外面当具については、朝顔2と朝顔3の個体において板目板材の使用を確認しているが、他は、ハケ調整によって消されている。朝顔2の木目幅は 4 ~ 5 mm、朝顔3の木目幅は 2 mm 前後と明確に異なり、前者を外当具1種後者を外当具2種として分類する。尚、拓本での表現はできなかった。

(6)色調による分類

色調については、普通円筒埴輪で使用した基準に準拠し、各個体の色調構成をみる方法をとるが、1点のみ追加の必要な色調がある。ここでは、各個体の内容について、整理して述べておきたい。

①器面色調

朝顔1、朝顔3~5、朝顔7、朝顔8は、全て色調1と2を主体とし、個体内部でも、また、相互においても、色調の大きな変化は認められず、同一環境で一括焼成されたことが予測できる。

朝顔2は、色調4を主体に、色調5・7を含む。さらに、肩部から口縁部にかけては、色調1・2を主体としている。

朝顔6は、灰白色～にぶい黄橙色(10Y R 7/1~7/3)を呈し、色調13として新たに加えなければならぬ

い。小破片であるため、色調構成の主体であるかどうかは判断できないが、他との類縁を考えるとすれば色調7に近い。

②断面色調

普通円筒埴輪の分類基準に準拠し、各個体の所属は第83図の一覧に譲る。

(7)胎土による分類

全てにおいて普通円筒埴輪との差異は見出していない。

以上の各属性分類の結果を普通円筒埴輪と同様に、一覧にすると、以下のとおりとなる。

朝顔 No.	ハケ工具原体	外調	内調	凸帯	透孔	口縁	底部	内当具	外当	外面色調	断面色調									
a	a	b	c	g	h	l	h	2	1	2	3	4	5	6	7	13	1	2	3	4
1																				
2																				
3																				
4-8																				
5-7																				
6																				

第83図 朝顔形円筒埴輪属性分類一覧

7. 朝顔形円筒埴輪の類型化と内容

先の属性分類の結果、朝顔形円筒埴輪については、いくつかの属性における共通性を認める一方で、個々にバラエティーもあり、個体数の少なさを念頭におけば、類型化は必ずしも妥当な作業とはいがたい状況と考えられる。たとえば、普通円筒埴輪において、もっとも上位の分類基準であるとしたハケ工具をみると、その組み合わせ方によって、以下の5つに分類可能となる。

朝顔A類：朝顔1：倒立位置より下をハケc種、上をハケg種とする。

朝顔B類：朝顔2：倒立位置より下をハケa1種、上をハケh1種とする。

朝顔C類：朝顔3：倒立位置より下をハケg種、上をハケh1種とする。

朝顔D類：朝顔4（8）・朝顔5（7）：ハケg種のみ。

朝顔E類：朝顔6：ハケh1種のみ。（ただし、口頭部のみの破片）

実に、1個体1類型に近い細分となるのであるが、共通原体を追ってみると、いずれもが連鎖的に関連性を有しているのが分かる。この相互の関連性の強弱を明確にするのがその他の属性である。第83図の属性構成を整理した図をみれば、B類とE類の独立傾向が強い点が指摘され、この点は、外面色調の相違に明確に反映されている。A類とC類及びD類は、ハケg種を共有することに加えて、色調及び底部と凸帯の形態が共通する。しかし一方で、C類の朝顔3は、倒立位置より上にB類同様ハケh1種をもっており、これと整合するように口縁形態及び内当具が共通している。また、D類としてまとめた中にあっても、一部の属性に相違があり、分類のレベルとしては多分に検討余地が残されている。このような

個々の複雑な関連性と相違については、工人の作業のあり方と密接に結びついているものと考えられ、さらに、普通円筒埴輪に共有関係をみないハケ g 種が、人物埴輪全ての円筒部と共通の可能性が極めて高いことも、工人の体制を考える上で看過しえない点である。これらの点については、第4節で、評価をまとめる。以下に、ハケ原体を基に一応分類した類型ごとに内容は、個体数も少ないため簡単に記載し、詳細については、先の属性分類の記載で補いたい。

朝顔 A類(朝顔 1)

倒立位置より下をハケ c 種、上をハケ g 種とする。前者は他に共有する個体をもたない原体であるが後者は、朝顔 D類と共通する。内面の同心円文当具については、普通円筒埴輪のある種と共通する可能性が高い。他の個体にくらべて胸部凸帯間の幅が狭い傾向にある。透孔は小型であり、普通円筒埴輪を含めても少數派の特徴的な形態である。色調は朝顔 C・D類と共通し、同じような状況で焼成されたものと考えられる。残存率が高く、唯一法量の計測ではば正確な値を求めることができる個体である。

朝顔 B類(朝顔 2)

倒立位置より下をハケ a 1種、上をハケ h 1種とする。前者は、普通円筒埴輪の I A類と共有し、一方後者は、普通円筒埴輪の I C類と共有する。内面の同心円文当具は、朝顔 3と共有するが、普通円筒埴輪にはみられないものである。全体のプロポーションはやや異質で、胸部上半から肩部にかけてが強く膨らむ形態である。むしろ、底部にかけてのすぼまりの強い普通円筒埴輪をそのまま利用したような華奢な造りであるといったほうが妥当かもしれない。倒立位置の外面は、板目タタキと軽いナデによってハケ目は広く消失したままとなっており、上部積み上げ時のハケ目の被覆はほとんどみられない。この位置から下方へ、棒状具の先端で粘土をナデ下ろしたような痕跡が部分的にまとまって認められるが、性格は判然としない。口縁部は強く大きく開くが、残存率は低く、径等は復元である。

朝顔 C類(朝顔 3)

倒立位置より下をハケ g 種、上をハケ h 1種とする。残存率が低く、各部径及び高さ等すべて推定復元である。口縁部の断面形態及び同心円文当具が朝顔 2と共通しており、倒立位置より上がハケ h 1種という同一原体を用いていることと有機的な結び付きが推定される。内面はナナメ指ナデを主体とし、口縁部にハケ調整をもつ。

朝顔 D類(朝顔 4、朝顔 5、朝顔 7、朝顔 8)

4と8、5と7のそれぞれは、原体の表裏関係から、同一個体と判断したものである。ハケ g 種を用いており、朝顔形埴輪独自のハケ原体といえる。底部を除いて残存率が低く、かなりの推定復元で図化している。両者ともに、倒立位置より下の内面調整にナナメ工具ナデを用い、外面調整の手法も同一である。ただし、朝顔 4のみ口縁部内面にハケ調整がみられないほか、朝顔 5では、くびれ部の屈曲が弱く、第5凸帯から極めて短い口縁部がのびるという、全体の中にはあっても異質な形態をとることが指摘できる。ただし、口縁部の断面形態自体は共通する。また、朝顔 4で使用されている同心円文当具が、円筒埴輪では他に認められず、人1に類似し、色調もほぼ酷似する。ハケ g 種が、人物埴輪すべての器台部の調整にも使用されていると考えられることとともに注目される。

朝顔 E類(朝顔 6)

くびれ部の破片である。くびれ部の屈曲が弱く、直立ぎみに立ち上がるやや異質な形態である。色調についても著しく異なっている。

8. 普通円筒埴輪の法量と形態

(1)はじめに

法量と形態の分析は、資料数の多い普通円筒埴輪を対象とする。普通円筒埴輪の法量属性は、器高、口径、底径、器肉厚を抽出した。その各数値については、第IV章の一覧表で提示してあるが、表凡例でも触れたとおり、抽出方法はやや一貫性に欠ける面もあるため、ここで、前提となる資料提示の方法について再度確認と補足を行っておきたい。

器高は、自立可能な状態に復元できたものについて、据え置いた状態の最大と最小を計測し、その平均値を求めた。口径と底径についても、残存状態の良好な個体については、同様の方法をとっている。従って、実測図から求められる数値とは、齟齬が生じる場合が多い。この方法をとった個体は、概ね拓本によらない器面実測を行った個体と合致する。一方、拓本を用いた復元実測個体については、実測図から数値を抽出している。両者の数値抽出方法に差が生じているように思われるが、実際は、前者の実測では器面の状態を優先して実測位置を決定し、正面觀を忠実に描寫した実測図であるため、むしろ、こういった平均値を求める方法の方が、後者の復元数値との比較には有効と考えられる。器肉厚については、実測図から計測した。最大と最小の平均値を求めているが、粘土紐接合部等で局部的に薄くなったり、あるいは肥大した部分は計測対象外としている他、口縁部及び底部の端部付近も対象外としている。尚、平均値は単位をcmとし、小数点第2位以下を四捨五入している。

以下に、前節で分類された各類型を念頭において傾向を把握するが、ただし、すべての法量属性の数値がそろうものはむしろ少なく、あくまでも計測可能な個体でみた傾向であり、さらに、復元実測個体の数値についても、各個体の歪みの大きさを考慮すれば、検討余地が多分に含まれている数値であることを留意しておかなければならない。また、ここでは I C 1・2 類は I C 類として一括して扱いたい。

(2)各法量属性の内容（第84図-1）

①器高

全個体の平均値は49.9cmで、それと5cm以上隔たる個体は1個体のみ(25)である。大小の変化は、製作意図によるものではなく、製作時のバラツキあるいは工具単位(類型単位)の傾向的な差異に留るものである。各類型毎の平均値は、表10のとおりであるが、その平均値でも、個体毎の数値でも、全体の平均値を下回るものは I A 1 類には限られている点が注目される。

②口径・底径

口縁部と底部については、正円形に近いものは乏しく、焼成時の歪みに加えて、むしろ、製作段階において精緻さを欠く仕上げであったということができる。これは、作業工程に倒立を介在させるという物理的な作用によるものと、回転惰力による調整等を省略するなど、丁寧に仕上げる意識の弛緩によるものという二つの側面が考えられる。復元実測の個体では、円弧からの半径の割り出しを基準点を変えて複数行い、その平均値で直径を確定した。この段階でも同一個体で実際に3~5cm程度の計測値の差を生じることが多く、残存度の低い個体については、かなり誤差を含む可能性がある。

口径の全体の平均値は31.2cmで、全体としては3cm内外のバラツキ内に収まるものが多い。各類型毎の平均値は表10のとおりである。平均値では類型単位で差が認められるものの、計算上の結果であって、各類型を構成する個体毎の数値を比較すれば、何類が大きいといったような一定の傾向は指摘しがたい。ただ、I A 1 類が全体の平均値と一致し、バラツキも小さい点が指摘できる。また、I 群よりもII群が大きい傾向にある。

底径の全体の平均値は20.7cmで、多くは2cm内外のバラツキ内に収まる。類型単位では、IA 3類とII A類が大きく、II B類が小さい。

③器肉厚

全体の平均は1.1cmである。1mm単位の数値であるので、微妙な相違を表しがたいが、I群のなかにあって、IA 1類とIB 1類の相違は際だっており、製作者単位の傾向の差を明確に表している。これは、双方の類を持ち上げたときの重量感の違いでもはっきりと判るものである。最も厚いのはII A類である。

表10 類型別法量属性平均値

(単位cm)

	IA 1	IA 2	IA 3	IA 4	IA	IB 1	IB 2	IB	IC 1	IC 2	IC	II A	II B
器 高	47.3 (7)	52.8 (1)	— (0)	— (0)	48.0 (8)	50.9 (3)	56.0 (1)	52.2 (4)	52.2 (1)	51.5 (1)	51.9 (2)	49.9 (1)	50.8 (2)
口 径	31.2 (10)	23.2 (1)	31.1 (3)	34.6 (1)	30.9 (15)	29.6 (5)	29.4 (1)	29.6 (6)	31.9 (6)	32.3 (3)	32.0 (9)	32.7 (4)	32.1 (2)
底 径	21.2 (8)	22.0 (1)	— (0)	23.6 (1)	21.5 (10)	19.8 (6)	25.0 (1)	20.5 (7)	19.4 (4)	20.0 (1)	19.5 (5)	23.3 (2)	17.8 (2)
器肉厚	0.9 (10)	1.0 (3)	1.0 (3)	1.1 (1)	1.0 (17)	1.2 (8)	1.1 (1)	1.2 (9)	1.0 (6)	1.0 (3)	1.0 (9)	1.3 (4)	1.2 (3)

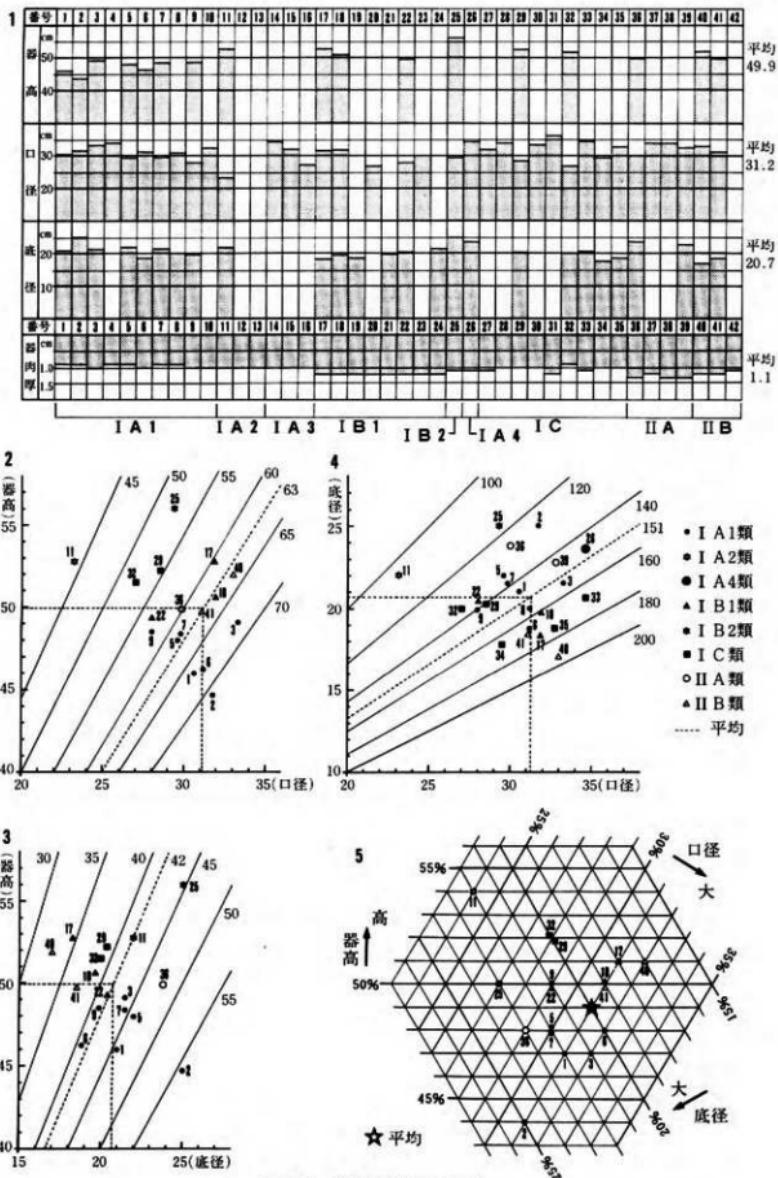
(下段()内数字は資料個体数。IA、IB、ICの数値は、各類型平均値の合計で求めたものではない実質平均値。)

(3)各法量属性の相関

①器高／口径 (第84図-2) と 器高／底径 (第84図-3)

両者のグラフをみると、まず数値の上では、IA 1類が、平均を下回るものを主体とすることが明確となっている。全体的な分布は、散在型で、数値の開きも比較的大きい。口径／器高の指數分布では、指數63を平均として、その周間にある程度集中している。類型毎の傾向をみるとIA 2類の11は例外的位置にあり、IC類とIB 2類が指數50と55の間、IB 1類が指數60周囲で、正の相間に近い分布を示し、II B類が、平均指數に沿って正の相関関係を示している。これらは一応、類型単位での分布領域がある程度定まっているようであるが、資料数が少ない。一方、資料数の多いIA 1類をみると、注意すべき傾向が認められる。分布が逆相間に近い形態をとり、径が大きくなると器高が小さくなるのである。即ち、双方の数値が比例する著しい小型品や大型品は、3を例外として、見受けられない。このことは、各個体が示すボリュームに感覚的な最低限のバランスを保持しようとした製作意図が表れたものか、あるいは、1個体あたりの使用粘土の割り当てに起因したものとも考えられる。

底径／器高の指數分布では、指數42を平均として、その周間に集中している。そして、先の口径／器高の分布で正に近い相関関係を示したIB 1類とII B類が、ここでは逆相間の分布を示している。しかし、個体数も少なく、実際の数値としては2cm内外の僅かな差があるので、相関関係という点での評価には耐えないと思われる。指數としては、II群では、II B類が指數35を挟む際だった低い値を示しているが、逆にII A類は同等の器高を保持しつつ指數45を越える高い値を示しており、対称的である。また、I群では、平均指數ラインを境に、高い指數へ分布を伸ばすIA 1類と、逆に低い指數を示すそれ以外の類型とが対称をなしている点も指摘できる。ただ、IA 1類は、器高／口径での表れ方とはやや異なり、相関関係は認めがたく、底径は、唯一2を例外として、器高に関係なくほぼ一定であるといえる。さらに、これはI群全体でみても、同様の傾向である。



第84図 普通円筒埴輪の法量

②口径／底径（第84図－4）

この比率では、指數151を平均とし、分布は散在傾向が強いが、指數130と180の間に多くが収まる。底径に差が少なく、口径にバラツキが多いI群の状況を良く示しており、このため、類型単位での傾向は認めがたい。一方、II群については、II A類とII B類とで明確な指數の差がでている。形態でいうならば、前者が円柱形タイプで、後者が円錐台形タイプということになる。

③器高：口径：底径（第84図－5）

3つの属性の数値を合計し、各属性が占める割合を求め、いわゆる三角ダイヤグラムを作成した。第84図－5は、その部分抜粋であるため、判りにくくなっているが、上の頂点に器高100%と底径0%、底辺右の頂点に口径100%と底径0%、底辺左頂点に底径100%と口径0%を置いた。この図の示すものは、左に分布するものほどの円柱形に近く、右に分布するものほど開きの大きい円錐台形であり、上下の分布は、上へ行くほど器高の割合が増してスマートなプロポーションである。例えば、IA 2類の11は、スマートな円柱形、IA 1類の2は、背の低い寸胴の円柱形、IB 2類の25は、器高が50%と調度中間的な位置にある円柱形である。口径と底径の差が6%以下（即ち指數130以下）が円柱形タイプの目安となりそうである。対する円錐台形では、II B類の41が、スマートかつ、ラッパ状に強く開く形態である。この他については、口径と底径の比率ではとくに区別できなかったIA 1類とIB 1類は、器高の割合をみると、50%以上のIB 1類、50%以下のIA 1類という明らかな分布の片寄りがみられる。また、IC類が特にスマートな傾向を示す位置にまとまっているが、本類の特徴とみなすだけの資料ではない。

(4)形態の分類

形態については、外郭線の形態から、3つに大きく分けられる。形態Aは直線的、形態Bは第3段の倒立位置で膨らみをもつもの、形態Cは、中央で膨らみをもつものである。最後の形態Cは、25の1点のみで、膨らむ部分の特徴としては、形態Bと同様に倒立位置となっている。形態Aに属する倒立技法の埴輪では、形態Bと全く逆に倒立位置で凹むものが多い。形態Bに属する個体は、IA 1類の10、IA 3類の16、IB 1類の17・18・20・21・22・23、IC類の31である。これらの他は、残存状況の悪いものを除いてすべて形態Aに属する。以上のことから、形態Bは、IB 1類に最も特徴的な形態であるといえる。次に、その細分であるが、前項の分析結果をもとに、きわだった傾向を示すものに着目し、以下の分類基準を別に設定した。

口径／底径指數による分類

- 1：指數が180を越えるもの。II B類40
- 2：指數が130以下のもの。IA 1類2、IA 2類11、IB 2類25、II A類36
- 3：その他。このなかには、指數が150～180のもの（IA 1類3・6・8、IB 1類17・18、IC類33・34・35、II B類41）と、指數が130～150のもの（IA 1類1・5・7・9、IA 4類26、IB 1類22、IC類29・32、II A類39）がある。

器高の占める割合による分類

- a：45%以下のもの。IA 1類2
- b：53%以上のもの。IA 2類11
- c：その他。このなかには、47～49%のもの（IA 1類1・3・5・6・7、II A類36）と、50～52%のもの（IA 1類9、IB 1類17・18・22、IB 2類25、IC類29・32、II B類40・41）がある。

以上の分類項目を網羅して分類される資料数は少なく、傾向の把握にとどまるが、各類型毎に形態の

構成をみると、以下のとおりとなる。

I A 1類：形態A 3 c (1・3・5～9)、形態A 2 a (2)

I A 2類：形態A 2 b (11)

I A 4類：形態A 3 ? (26)

I B 1類：形態B 3 c (17・18・22)

I B 2類：形態C 2 c (25)

I C類：形態A 3 c (29・32)、形態A 3 ? (33～35)

II A類：形態A 2 c (36)、形態A 3 ? (39)

II B類：形態A 1 c (40)、形態A 3 c (41)

形態Aは1 c、2 a、2 b、2 c、3 cの各組み合わせがあり、形態Bは3 cのみ、形態Cは2 cのみとなっている。即ち、形態Bと形態Cは単独で成立し、それぞれI B 1類とI B 2類に帰属する形態であることがわかる。形態Aは、各組み合わせの内容を普通円筒埴輪の各類型との関係で以下のように整理できる。ここでは便宜上、各分類項目の組み合わせを連ねて形態細分の名称とした。

形態A 1 c：II B類のみに属し、本類には他に形態A 3 cも含まれるが、口径／底径指数が高いグループに属することから、比較的スマートで、口縁部が大きく開く形態をII B類の特徴として把握可能である。

形態A 2 a：器高の低い寸胴タイプで、I A 1類の中では特異な存在を示す。

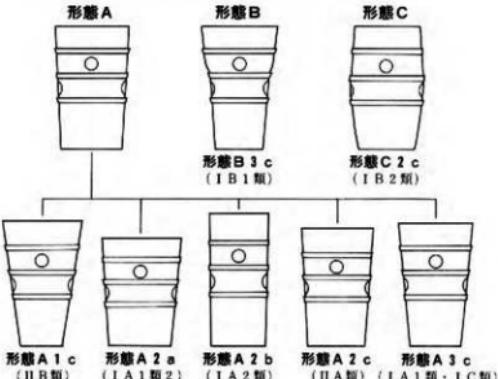
形態A 2 b：2 aとは逆に、スマートな円柱形で、I A 2類のみとなっているが、残存度が低く、本類の特徴とまでは言い難い。

形態A 2 c：II A類のみで、本類には他に、形態A 3 cもみられるが、口径／底径指数が低いグループに属することから、寸胴の円柱形に近いタイプをII A類の特徴として把握可能である。

形態A 3 c：内容的には、口径／底径指数及び器高割合が2分されるものであるが、類型の構成をみると、細分の意義は薄く、I A 1類とI C類の主要形態として把握できる。

以上の4形態に、形態Bと形態C

を加えて都合6形態を認定したことになるが、群単位で見ていけばかなり形態の構成は明確となる。I群では、類型と有機的に結ばれた形態A 3 c、形態B 3 c、形態C 2 cの3形態にはば集約され、他は少数の特異な位置付けのものとみなされる。特に、I A 1類とI B 1類の形態差は、工人の差を如実に示していると考えられる。II群でも同様に、形態A 2 cと形態A 1 cの両者が、II A類とII B類の違いとして認定され、形態の上からでも明確に区分できる違いがあることがわかるのである。



第85図 普通円筒埴輪形態模式図

第2節 増輪の製作技法

1. 人物増輪の製作工程（第86図）

第1工程【衣裾の製作】

最初に製作されるのは衣裾いわゆるスカートの部分であったと考えられる。成形は、上下逆さまの状態（即ち、上方に広がる朝顔形）で粘土紐を巻き上げておおよその形を造り、内面を丁寧にロクロナデする。次に倒立させて、外面をカキ目調整している。そして一旦、乾燥段階をもつと考えられる。

第2工程【基台の製作】

衣裾を乾燥させている間に基台部の製作に入ると予測される。底部から粘土紐を巻き上げて成形し、成形段階での倒立は介在しない。上方が丸く収束して開口する戴頭砲弾形に整え、内面は比較的丁寧なヨコナデに近い傾きをもつナナメナデと、稀に一部タテナデを交える。外面は、タテハケのみのものとタテハケ後にヨコハケを施すものがある。ハケ調整後、基台高を3等分した下1/3の位置に凸帯を付す。底部は、全体の調整が終わたった後、倒立させて、ヨコナデによる調整が行われるが、人1人と人4では、内面に同心円文当具が残されており、タタキが底部調整として介在していたことがわかる（図版24-1）。ただしこの底部調整は、次の第3工程で施された可能性が強い。

第3工程【基台と衣裾の接合】

基台の成形が終わると直ちに、先に製作されていた衣裾が乗せられる。基台の上端は、衣裾内面に密着しており、内面においては、衣裾と基台との接合点がほとんど判別できないほどに一体的に調整されていることから、基台の成形直後の柔らかい段階で接合されたものであろう。従って、衣裾との接合以前に基台の底部調整を行ったとは考えにくく、接合後に、基台の乾燥段階として倒立させ、底部の歪みを補正したものと考えられる。この倒立させた段階で、衣裾内面と基台外面との間の隙間に、粘土塊を部分的に埋め込んで固定する場合が多い（図版24-2）。

第4工程【胸部の製作】

基台がほぼ乾燥したところで、衣裾上端（腰部分）から粘土紐を巻き上げて、まず脇の下の位置までを成形する。全体は丁寧なナデ調整で、方向は臨機応変である。腰部分は、乾燥状態に著しい差があるため、最も剥離しやすい箇所となる。このため、調整の時に、粘土を衣裾側へ縱に撫で下ろして被覆する調整がよく見られ、また、接合位置に腰帶を付すようにしている。内面においても、基台と衣との接合点を粘土で被覆し、ナデ調整している（図版24-3）。脇の下の位置までの成形後の胸から肩にかけては、首の部分と左右の腕の挿入部という3つの開口部を備えるため、短い粘土帯やブロックをいくつも組み合わせる複雑なつくりとなっている。基本的には、肩は、粘土帯をアーチ形にして胸から背に渡し、両肩のアーチに挟まれた部分の前後に短い粘土帯を埋め込んで胸と背を成すようにしている。アーチの外側には、腕の動作を考えて、さらにいくつかの粘土塊が付け加えられ、腕挿入のための一回り大きいほぞ穴が準備される（図版24-4～5）。この段階で一旦乾燥させ、腕の製作に入る。

第5工程【腕の製作と接合】

腕は中実の棒状で、一方は先細りで肩への差し込み部分とし、もう一方は平たく済して手のひらをしている。手を開くものの場合は、この手のひらの上に、細い棒状の指を5本並べ、その上へさらに粘土を撫でつけて、腕からスムーズにつながる手の甲を作り上げる。一方、手を握る場合は逆で、先の手のひらは手の甲となり、折り曲げた指が付される（図版24-6）。胸部とのバランスを調整後に一旦乾燥させてから、腕を挿入する。ほぞ穴は一回り大きいので、腕の取りつけ角度を調節した後、粘土を巻き付けて密着・固定するが、厚く被覆させる粘土は二の腕にまで及び、胸部とつなげ

てナデ仕上げされる(図版24-7)。手のひらを衣裾や腰部に置く場合には、その周囲に粘土を撫で付けて固定し、巫女像のように前に差し出して手を合わせせるものは、姿勢を維持させるために、両腕に棒を横に貫通させ、それを中央で継棒によってT字形にささえるようにしていたようである。



第86図 人物埴輪製作工程図

第6工程〔頭部の成形〕

頭部は、首の開口部に連続して粘土紐を巻き上げて、ほぼ一気に成形している。帽子の部分も一体的につくられ、成形後に帽子としての装飾がなされている。即ち、帽子の形態を念頭に置いて成形しているのである。頭部は、髪（図版25-11）を付す場合のみ、開口させているが（図版25-12）、その他は、ごく小さな開口部を成す程度まで巻き上げてから絞り込んでおり（図版25-10）、蓋をするようなものはみられない。

第7工程〔顔面等各部の造形〕

頭部形態が整った後、舌状にやや垂下する頬、そして耳や鼻が付けられる。眉は、細い粘土紐を貼り付ける場合も想定されるが、恐らくは、周辺の粘土を撫で寄せて隆起させたものと考えられ、額央隆起もそれに起因するのであろう。帽子の鉢等は、飾り帽子の男子像を見る限り、額央隆起形成後に行われている（図版25-14）。そして最後に、目と口の切り抜きが行われたと考えられる。

以上の全7工程に別けたが、すべての作業が時間を追って連続させるのは困難で、例えば第1から第3工程とそれ以降の間には一定の乾燥段階をはさむ。こういった場合、基台と衣裾の部分を幾つも連続製作し、その後胴部製作にとりかかったことも考えられ、あるいは、基台と衣裾はそれぞれ別工人が分担して製作するなど、各工程には、複数の工人が係わることも可能な部分が多い。

2. 馬形埴輪の製作工程（第87図）

第1工程〔脚の製作〕

脚は回転台の上で、倒立させた状態で製作する。脚の透孔直下の高さまで粘土紐を巻き上げ、タテハケの後、カキ目調整を施す。

第2工程〔脚配置の固定と腹部の製作〕

脚は一旦乾燥させてから、大きさを規定する脚配置が決められる。その方法は、左右の脚に横棒を渡すもので、前後の脚の股間に、直径2cm程の丸太が貫通していた形跡が明瞭である。各脚外側の透孔は、丸太を抜き取った後で孔の拡張切り抜きを行ったものである。従って、外側の透孔を一方から覗くと、反対側まで見通せるわけである。具体的な手順は、4本の脚を立ててその上に左右をつなげる棒を渡し、その上から粘土紐を再び積み上げて、脚の付け根周囲を完成させる。次に、前後をつなぐ腹部として、粘土板（？）が渡される。尚、前後の距離を定める外側の棒の存在は推測である。

第3工程〔胸部の製作〕

脚と腹部を完成させた後、肋から脾臍にかけて、背にかかる高さまで粘土紐を積み上げる。やや乾燥させてから次に、粘土紐をアーチ形にして左右に渡し、背中を作り上げていく。この場合、尻から前方に向へ順次粘土紐の接合を進め、最後に、胸部の形成と併せて首の付け根が円形に開口するよう収めている。ここで再び乾燥させる。背部形成後、先に積み上げた脚腹部等に歪みがある場合には、その部位の外面に平行線文タタキを施して、面整形することがある。背部形成後としたのは、内面には当具痕が見られないためである。全体をナデ調整後、一度乾燥段階に入ると思われるが、この工程におけるいずれかの段階で、恐らく脚配置設定用の棒は抜き取られ、脚外側透孔の調整が施されたと考えられる。

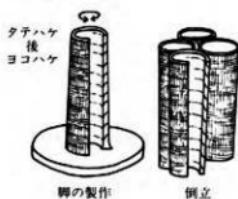
第4工程〔頭部の製作〕

首付け根の開口部から粘土紐を巻き上げ、頭部の目の後方位置までを作る。目の位置から口までは、乾燥段階を挟んで再び粘土紐を巻き上げたものか、あるいは、別に製作した筒状のものを接合させたのかもしれない。ここまでで本体は完成したことになる。

第5工程〔各部の造形〕

最後に、目の穿孔、たて髪、馬具等の装飾が施される。頭部側面と胴部をつないで錫膜状に垂下する頬は、三角形粘土板を貼り付けたものである。耳及び尻尾は、取り付け位置に円形の孔を穿ち、その孔を取り巻くように粘土紐を筒状に巻き上げて製作している。

第1工程



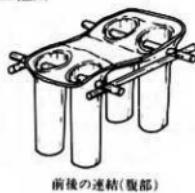
第2工程(1)



第2工程(2)



第2工程(3)



第3工程(1)



第3工程(2)



第3工程(3)



第4工程(1)



第4工程(2)



第5工程



第87図 馬形埴輪製作工程図

3. 円筒埴輪の製作工程

(1) 普通円筒埴輪Ⅰ群の製作工程（第88図）

I群は倒立技法によって特徴付けられ、その工程は次のように復元される。

第1工程

①台（恐らく回転台）の上に、粘土紐を概ね時計と逆回りの方向に巻き上げて、上方にすばまる円錐台形に造り上げていく。粘土紐は、両端が先細りとなるもので、積み上げ方は、内面側に親指をあてがつて下方へ被せるように押し下げ、同時に、外面にあてがった人差指は、下から上へ指押さえを連続させて粘土を上方に伸ばすようにし、概ね3cm程の粘土帯に仕上げている。長さは、ほぼ1周強で終わる場合と3周以上に及ぶ場合がある。

②まず、外面をハケ調整で仕上げるが、ハケの調整単位（縦ハケを横方向に運動させて周回する動きを1単位とするものとし、上下に単位同士の切り合いをもつ。尚、1回のハケ目自体は単に「ハケ単位」とする。以下、ナデの場合も同様「ナデの調整単位」「ナデ単位」とする。）は、概ね3単位あるらしく、第1段と第2段に切り合う部分を認める場合が多い。そしてそれが、粘土紐積み上げにも単位があつてその都度ハケ調整を行った結果であるかどうかは判然としない。一応、ハケ調整単位を粘土紐積み上げ単位に付随するものとした。

③外面のハケ調整に引き続いて内面のナデ調整が行われると考えられる。ただ、このナデ調整は、凸帯の貼り付けと運動している可能性が強い。IA1類をみると、貼り付けに伴う指頭圧痕は、その直下のナデを切っているが、それより上のナデはこの圧痕に連続するかあるいは切ることが多い。このことから、次のような手順を想定した。最初の粘土紐積み上げ単位（ほぼ第3段から第2段の中位部分に該当）を仕上げた後、その上端から第1段上半部分までの間を1単位とする粘土紐積み上げが行われ、外面ハケ調整が行われる（図②）。そして、内面のナデ調整（あくまでも最終調整としてのナデ）を行う前に、最初の調整単位上に第2凸帯を貼付する。次に、貼り付けた凸帯より上方をナデ調整し、続いて第1凸帯が貼付される。この第1凸帯貼付時の指頭圧痕は、第2凸帯と同様に、それより下方のナデを切りつつ、その直上から次のナデ調整単位が始まる場合と、ナデ単位上（即ち上下方のナデを切って）圧痕を残す場合がある。これは、第2凸帯貼付後に施されるナデの長さに起因すると思われる。第2凸帯の貼付を最初の粘土紐積み上げ及び調整単位に置かず、2回目の積み上げ後に想定したのは、2回目の調整単位に属すると思われる1つのハケ単位が、第1と第2の双方によって切られている場合があるためである。このようにして、2回の粘土紐積み上げ単位と内外面調整単位、そして第1・第2凸帯の貼付が完了した後、3回目の積み上げ単位を経て（図④）、底部（この段階での口縁部）までが仕上げられる（図⑤）。

内面のナデ調整及び凸帯貼り付けが、粘土紐巻き上げと外面ハケ調整を完了した時点で一氣に行われたとも考えられるが、上方にすばまる形態と、深さの関係を考えると妥当な手法とは言い難い。

④底部（この段階での口縁部）は内外面の調整後に指ではさむ横ナデで仕上げている。ここまでで、第3段までが逆さまになった状態で完成したことになる。透孔は、切り抜きの起・終点や、ケズリの方向の観察から、この時点では穿たれていないかったと考えたい。

第2工程

⑤ある程度乾燥させた後で倒立させるわけであるが、第2段の部分を両手で持って逆転せたらしい。これは、第2段にハケ目の擦り消えた痕が対向する位置によく見られ、その付近の凸帯に指で圧迫された痕跡も時折認められること、さらに、この第2段において、器体の横断面が楕円形あるいは卵形に歪んでいるもののがほとんどであることからも推察される。

⑥倒立させた後、以前に底部であったところには、タタキによる調整が施される（図⑥）。内面には同心円文当具痕が1段ないし2段めぐり、外面は、多くの場合柱状板材によるタタキ工具を使用している。このタタキ調整は、以前に底部であったために自重で歪んでしまった器体を補正する意味と、さらに積み上げていく粘土紐の接着を助ける意味もあったと考えられる。

⑦次に、タタキ目の上端から粘土紐を巻き上げていき（図⑦）、口縁部を完成させる。外面のハケ調整は、タタキの部分と重複する位置から始められ、結果として、倒立位置直下の基面を粘土が薄く被覆するかたちとなっている場合が多い（図⑧）。内面のナデ調整は、第3凸帯貼付後と考えられる。内面の当具痕は、ナデ消されている場合とそうでない場合があり、完全に消そうとする意識はなく、あくまでもナデ調整の結果としての状態を示している。但し、IB類やIC類にタタキ目の消失しているものが多く、特にIB1類の横ナデ手法は、積み上げ接合痕をも消してしまう。口縁部は、底部と同じようにナデ仕上げしているが、口縁を水平にするために、部分的にケズリを介在させたと思われるものが、特にIB類やIC類で一部認められる。

⑧最後に透孔が穿たれて完成となる。製作台からの取り外しと運搬は、ほぼ例外なく第2段の透孔に手を掛けて行われているらしく、持ち上げによる重圧の痕跡を認めることができる。

以上のような工程は、ほぼI群全てに共通するが、2点のみ例外がある。IB2類25とIA4類26である。各々1個体1類型で、特に独立した存在であることは、分類作業の中で示したとおりである。これが、製作工程においても異質であることは注目すべきである。まず、25については、形態分類においても、器体中央部で張りをもつ特殊なものとなっているが、この張る位置が倒立位置となっている。即ち、器体を2等分割するような位置にあり、第1工程では第1凸帯のみが貼付され、倒立後の第2工程では、ハケ工具を遠えて調整した後、第2・第3凸帯を貼付している。一方26は、倒立位置に関しては他と共に通するが、ハケ工具の交換と凸帯貼付の段階が25と共通する。倒立位置が第3段にあり、倒立後のハケ調整が第2段から行われているということは、第2段から倒立位置までが前後2回のハケ調整を受けているということである。これが計画的な工程か、何か突発的な原因による応用かは不明である。

第1工程



第2工程



第88図 普通円筒埴輪I群 (IA1類) の製作工程

第1節の2において概説したように、粘土紐巻き上げによる「成形」の過程に倒立を介在させていることをもって、「成形技法」という枠で独立させて区分したが、以上の工程をふまえれば、小栗氏の倒立技法の概念規定で示された「粘土紐を積み上げたある段階」というのは、製作に係わる全工程、即ち整形（調整）から凸帯の貼り付けに至るまでの段階ということができる。従って、倒立技法は、埴輪製作工程全体を対象とした製作技法そのものである。このため、倒立位置を境として、上下でハケ調整やナデ調整の方向は逆転し、重なる場合は、口縁部側への調整がそれ以下の調整痕より必ず後出となる切り合い関係を示す。さらに、凸帯の断面形も、第1・第2凸帯と第3凸帯とでは全く逆転するし、口縁部と底部の断面形態が極めて良く似るというのも特徴である。これらのことから、破片一つとってもみた場合、それの上下の区別をつけられない場合が多いということになり、倒立位置からいえば、破片の3分の2以上は、通常の上下の判断基準と逆に捉えなければならないことになる。口縁部と底部についても、倒立させて焼成しているもの（17、20）が存在するため、窯床に埋置した生焼け部の存在をもって底部と即断することはできない。

(2)普通円筒埴輪II群の製作工程

II群については、製作技法の異なる二つの類型をもつが、ここで詳述する準備と紙幅がないため、要点のみを述べておきたい。

①II A類の製作工程

本類は、淡輪技法によって特徴付けられる。しかし、各地で確認されている淡輪技法とは、やや趣を異にする。まず、底部設定のための輪型が非常に細く、直径が1cm程あるいはそれ以下と考えられることである。尚、輪型結束部分の圧痕をもつ破片は見いだしていない。次に、底部端面の一部にケズリを施す調整が行われていることがあげられる。ただ、このケズリは、輪型圧痕すべてを除去するものではないことから、輪型取り外しによる変形部を補正する意図であったと考えられる。粘土積み上げ単位と内外面調整単位、そして凸帯貼付という3者の工程上の関係は判然としない。ハケ調整単位は、各段ごとに切り合い部を認めることが多く、粘土紐積み上げ単位とほぼ連動していると予想され、凸帯貼付も単位に付随している可能性はあるが、判断は控えたい。ただ、凸帯貼付の内面指頭圧痕は、ナデ消されているものが多く、I群と同様に、内面の調整と近い工程にあったと予想され、また、口縁部内面のハケ調整が、凸帯貼付後に施されていることからも、凸帯貼付が最終工程ではなかったことを示している。

②II B類の製作工程

底部は、内面側に屈曲する断面三角形で、広い底面をもち、底部調整は一切行われない。また、この断面形態は、自重により屈曲したのではなく、自重に耐えるための底部として、あらかじめ断面三角形に作り上げられていたものと考えられる。粘土積み上げ単位と内外面の調整単位、そして凸帯貼付の工程上の係わりは、II A類と同様のことが言え、即断はできない。

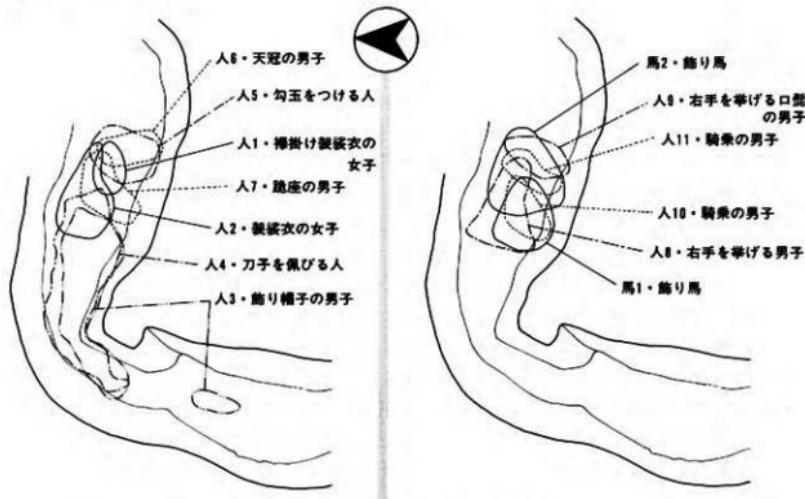
(3)朝顔形円筒埴輪の製作工程

肩部直下を倒立位置としており、逆さまの状態で製作される範囲は、I群と同様である。ただし、普通円筒埴輪よりは一回り大きく作られているため、倒立位置より上をどちらにするかといった違いではなく、朝顔として最初から意図されている。倒立後の粘土紐積み上げ単位は、ハケ調整単位と合致すると考えれば、くびれ部まで1回、口縁部凸帯（第5凸帯）までで1回、そして口縁部までという合計3回が認められる。尚、朝顔1と2では、倒立を境にハケ工具の交換がされている（工人の交替？）。

第3節 塗輪の分布状態

1. 形象埴輪の分布

各形象埴輪の平面分布については、付図及び概念図（第89図）で示したとおりである。埴輪配列の状態を復元するにはほど遠い出土状態といわざるを得ない。個体ごとにある程度のまとまりは維持しているが、これが、破壊、そして投げ捨てによって形成された分布の可能性は極めて大きいといえよう。従って、当初の希望的観測に反して、埴輪配列の復元推定とまではいかなかった訳である。くびれ部の集中するのは、くびれ部の近くではあるが、正確には前方部北側辺の周溝が分布範囲である。くびれ部の最深部には円筒埴輪の集中が形成されており、形象埴輪の分布域は言わば円筒埴輪の希薄部である（第15図参照）。また、形象埴輪の破片は、南側周溝や前端部周溝では殆ど分布が見られず、前方部墳丘上面の一定範囲に配されていたというよりは、くびれ部近くから前方部北側斜面裾部分に沿って一列に並べられていたと予測したい。くびれ部に横穴系の埋葬施設の入口部を想定すれば、群馬県の綿貫觀音山古墳で確認されたような配列を想起させる。ところで、先に推測したような破壊と投げ捨てが介在したとして、その行為の結果が配列の位置を僅かでも反映していると考えるならば、大略的には、次のような傾向が指摘される。まず、最もくびれ部寄りに分布するのは人6・天冠の男子、最も前端部寄りに分布するのは人3・飾り帽子の男子と人4・刀子を佩ぐる人で、その他は、くびれ部寄りに混在する。このなかで、馬2体の各分布は、大きく重複しつつも領域は東西方向へのズレがあり、これに呼応するように、馬とと思われる人物2体（人8、9）と騎乗の男子像2体（人10、11）も各々分布が分離されている。即ち、馬1と人10、人8が西側分布で、馬2と人11、人9が東側分布となっている。馬と騎乗の人物とのセット関係は、色調の点から予測が付いており、この分布のあり方はこれを補強している。その他の人物は、馬2に伴う一群に重複して集中しており、くびれ部に近い分布であるという以外の細かな傾向はつかめない。



第89図 形象埴輪分布状況概念図

2. 円筒埴輪の分布

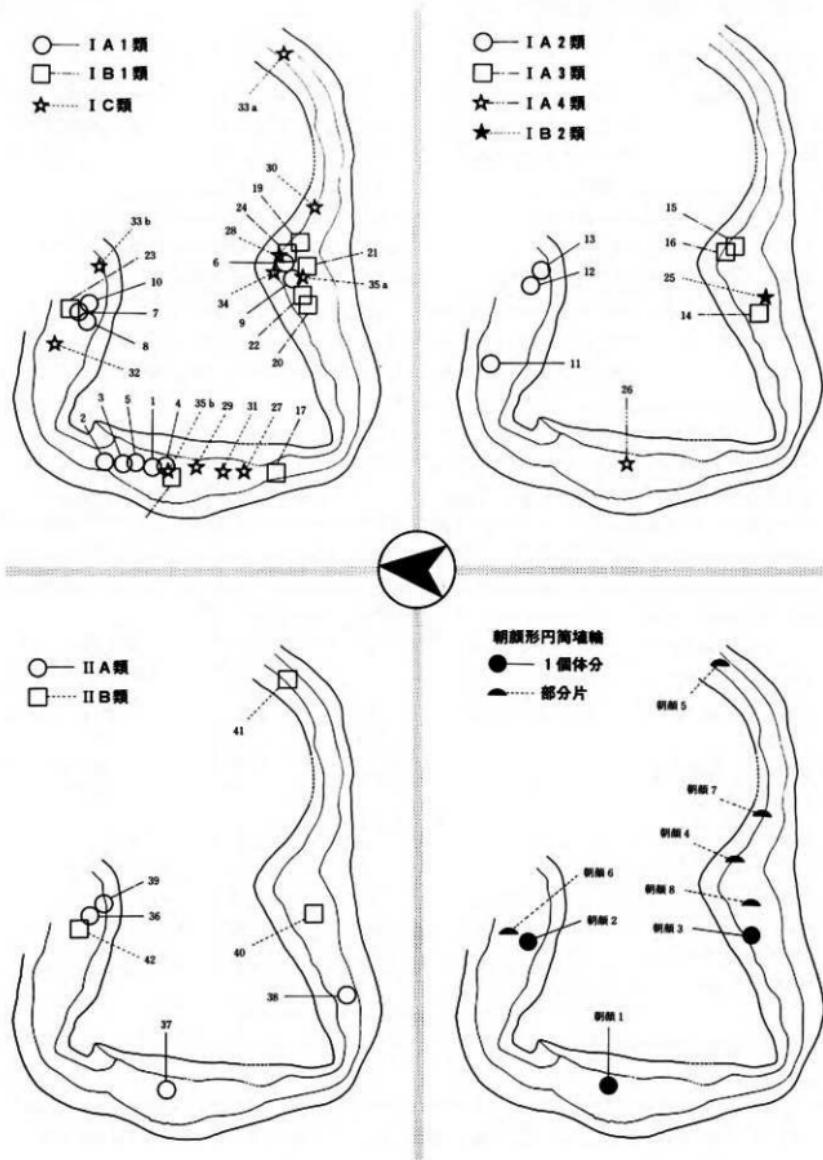
円筒埴輪の分布の形成過程についても、形象埴輪と同様のことが言える。特に、くびれ部及び前端中央部といった、周溝の最深部での集中傾向が著しく、廐棗場所としてそういう部分が選ばれたか、あるいは深い部分への流れ込みがあったかである。従って、僅かでも樹立位置を反映していると仮定しての傾向把握となる。まず、I群の普通円筒埴輪で、ある程度の個体数を保持する類型に着目すると、IA 1類が、北辺くびれ部に3個体、南辺くびれ部に2個体、前端部北寄りに4個体と、ほぼ均等な数が各辺に振り分けられている。IB 1類は北側くびれ部に1個体、前端部に2個体、南側くびれ部に5個体と南辺偏在である。くびれ部の5個体は、後円部寄り3個体と前方部寄り2個体に分離可能である。また、前端部では北半に1個体、南半に1個体と対称的な分布を示すことから、比較的正確な位置を反映しているかもしれない。IC類は、北辺では、くびれ部に1個体と前方部側に1個体、南辺では、くびれ部に3個体と後円部に2個体、前端部では、中央からやや南寄りに4個体みられる。この前端部の集中は、IA 1類と対称を成している。

次に、個体数の少ない類型では、IA 2類は北辺のくびれ部に2個体と前方部側に1個体、IA 3類は南辺のくびれ部に2個体と前方部側に1個体、というように、両者は主軸を中心に折り返したように対称的な偏りをみせている。IA 4類は前端部中央、IB 2類は南辺くびれ部の前方部寄りにある。

II群の分布では、IIA類が北辺くびれ部に2個体、南辺前方部に1個体、前端部中央やや北寄りに1個体ある。IIB類は、北辺くびれ部に1個体、南辺くびれ部に1個体、後円部東端に1個体みられる。

以上の分布のあり方は極めて示唆に富む。埴輪がほぼ全周していたとすると、くびれ部の集中は、前方部と後円部の双方から寄せられたものと考えられ、少なくとも、北辺、南辺、前端部といった分布の傾向把握は可能である。総合して見ていくと、類型単位に偏在するパターンと、1類型を各辺へ均等に割り振って配置するパターンの2者が抽出できる。前者のパターンはIA 2類とIA 3類で、IA 4類も含めると、IA類で少數個体の類型は、基本的な3つの辺に対して類型毎に配置されたことになる。一方、後者のパターンは、IIA類とIIB類において典型的なあり方が示されており、IA 1類やIC類もほぼ同様のパターンと解せる。ところで、くびれ部の集中は、前方部と後円部双方からの寄せ集まりと考えられたが、一方の前端部は、墳形を念頭におけば、他の辺の埴輪が混在しにくい位置にあるということと同時に、埴輪の配列を反映する度合いも大きいことが容易に予測できる。そして実際、ある傾向が示されている。北寄りにはIA 1類、南寄りにはIC類が集中し、IB 1類が、2個体南北に振り分けられている。このように、円筒埴輪の配置には、各類型即ち工人毎の製品というものが強く意識され、ある程度計画的な配置を行っていたか、あるいは、埴輪の配列作業に埴輪工人自身も関与していた可能性も予測されるのである。

次に、朝顔形円筒埴輪の分布をみると、南辺では、後円部に1個体(朝顔5+7)、くびれ部に1個体(朝顔4+8)、くびれ部に近い前方部に1個体(朝顔3)あり、北辺では、くびれ部に近い前方部に2個体(朝顔2、小破片の朝顔6)、前端部では中央に1個体(朝顔1)が配されている。北辺くびれ部の朝顔6は、その本体は恐らく未調査区にあるであろうから、中軸で折り返したような対称的配置が復元可能である。推測を進めれば、主軸上の東西両端、後円部の南北両辺中央、両くびれ部、前方部の南北両辺中央の各部に1個体ずつ、計8個体が計画的に配置されていたとも考えられる。前方部北辺は、形象埴輪樹立位置と想定されるため、若干の変則はあったであろうが、基本的には、こういった一定間隔を置いた配置を示すものとして評価できる。尚、検出された埴輪の総数は61個体で、検出した埴丘輪郭の総延長は、約60mと計算される。すなわち、ちょうどほぼ1m刻みに埴輪を配列したことになる。勿論、樹立されていた埴輪が全て周溝内に落ち込んだものとしての計算である。

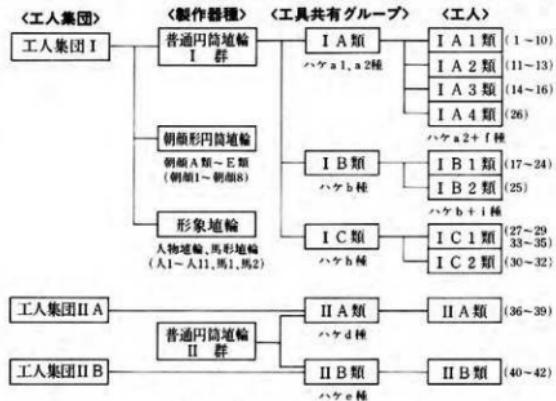


第80図 円筒埴輪分布状況概念図

第4節 塗輪の生産体制

1. 工人と工人集團

普通円筒埴輪は、全部で10類型に分けることができた。これは、属性の分類作業を通して客観的に得た、最も「工人」に近い単位の分類である。もちろん、個人のクセに帰納する属性と、同一人による一時的応用の範囲との区別については、曖昧な点が多分にあり、また、分類の視点としても、さらに細かく観察することで、別の類型が浮き彫りにされるかもしれない。従って、筆者が捉えた類型は、あくまでも工人の把握を目指して分類した結果であり、「最も近い」と仮定したものなのである。そしてこの類型は、ハケ工具によって大きく5つに分類したもの、属性分類結果の構成によって細分したものである。つまりハケ工具共有グループが5グループ存在したというように換言できる。そしてさらに、この5つのハケ工具共有グループは、製作工程の決定的差異によるI群とII群という2つの群によって再び収束される。II群のなかには、II A類とII B類とがあり、この二者はハケ工具の違いに加えて、底部設定技法にも差が認められる。のことから、製作工程の差異という視点でも把握可能であり、これを含めれば、技法の差異による3つのグループに分けられるのである。この3つのグループに対しては、各々に「工人集團」という言葉をあてはめておきたい。そしてその概念規定は、同一の製作工程を共有する集團とする。本項に供獻する埴輪の製作者全体を一つの工人集團としなかったのは、供獻体制と製作集團との関係は必ずしも明確ではなく、埴輪のように、一つの目的のために臨時編成されたかもしれない組織は、その構成メンバーに異なる地域の集團が組み込まれた可能性があるし、あるいは、特定の埴輪は他地域から運び込まれたものかもしれないからである。I群の工人集團には、製作技法等の関連性やハケの共有関係から考えて、朝顔形埴輪及び形象埴輪の製作者も含まれると考えられる。この集團を「工人集團I」と呼び、以下II A類は「工人集團II A」、II B類は「工人集團II B」としておく。先に述べた類型については、真に一人の作者を示すとは言い切れないもので、ただちに1工人として扱えない。この点に関しては以下の検討でより具体的ななかたちに推察してみたい。



第91図 塗輪分類概念図

2. 工人集團Iの生産体制

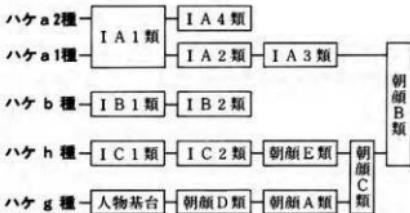
(1) 成形の段階

まず、各類型の個体数に着目すると、I A 1類（10個体）とI B 1類（8個体）が最も安定した個数を供給していることがわかる。また、I C類も9個体をもつ。本類は、I C 1類と2類の2つの類型からなるが、両類型の成立根拠は、他の類型の成立根拠に比べれば曖昧である（基本的には外側ハケの傾きのみが根拠）。2種類確認したハケ原体は、同一工具の可能性が高く、また、ハケ工具の差を補強す

るような属性の相違も明確ではない。どちらかといえば、I C類は、非常に不安定な内容であり、ここでは、複数工人関与の可能性を残しつつも、一括して考えたい。以上により、普通円筒埴輪の中心的な類型は3つで、各々概ね10個体程度の普通円筒埴輪の製作をノルマとされていた工人3人の存在を想定したい。そのほかの類型では、4個体を越えるものではなく、未調査区域を考慮しても、この量的比率の差に対する大きな修正は考えがたい。各々10個体の製作を課せられた3人は、それぞれに特徴あるナデ手法と凸帯造形のクセを持ち、生産組織の中では、普通円筒埴輪の供給主体として同列の存在であったと思われる。また、製作個体数という点で注目すれば、基台にハケg種を用いた形象埴輪の製作工人もまた、組織の中で極めて重要な存在であったことは想像に難くない。以上により、生産組織内の4つの供給主体者を抽出したことになり、ここで、各類型名称を冠した工人を設定しておく。即ち、IA 1類製作者を「IA 1工人」とし、以下同様にIB 1工人、IC工人とする。そして、形象埴輪製作者はKC工人と呼んでおきたい。これらのことを見頭に置いて、以下に具体的な生産体制を復元していく。

まず、前提となる基本的な考え方は、円筒埴輪の製作に使用されるハケ工具は、その使用頻度から考えると、製作中は工人によって常に保有されていなければならない。即ち、ある類型の一個体を製作している時には、ハケ工具を共有する他の類型は製作されなかったわけである。そして、仮に一つの類型が連続して製作されるるとすると、ハケ工具共有グループ内での複数類型が同時に製作されることはないことになる。この工具使用の段階を単純に羅列したのが第92図である。これによると、順序は別として、主要なものでは、ハケa 1種は4段階、ハケa 2種は2段階、ハケb種は2段階、ハケh種は5段階、ハケg種は4段階ということになる。この段階とは、別工人への工具受け渡しの場合と、同一工人の異器種製作の場合の二つを含んでいる。また、2人の工人が関与しているかも知れない個体についても、それを製作する一つの段階として設定している。

そこで、先に認定した主体的類型と形象埴輪に注目すると、各々は別のハケ工具が用いられていることから、並行して製作することが可能である。そして、それぞれの製品は、構成上主体となる埴輪であるから、4人の工人が中心的役割を担わされるかたちで組織編成を受け、同時に埴輪製作に着手したと考える方が自然であろう。IA 1類とIB 1類の凸帯は、大きさが違うだけで、形態と手法は全く同じである。また、焼成も同質で、ハケの細かさの近似性からも、一見して有機的な関連性を直感させる。そして両者は、同心円文当具2個を共有している。しかしながら、内面のナデ調整は全く異にし、保持する手法に明確な差が認められる。これらのことから、次のように推測したい。両者は同一の製作技術を保持する極めて近い関係にありながらも、それぞれの製品の一貫性と完成度からすると、2人が独立した熟練者であった。一つの工房の中の近い位置で同時に製作にとりかかったものと思われ、製品を区別するため、IA 1工人の製品にはヘラ記号が付けられた。同心円文当具は、成形の途中、乾燥段階を挟んで一時的に使用されるため、2個が両者使用できる位置に置かれて、必要なときに空いてる方を使用したものと考えられる。一方、IC工人は、別の内面當具を保持し、一定量製作しているものの、大きさや技術的な面での一貫性はやや乏しく、製品にバラツキがある。これをやや未熟な作者とみると、複数工人の関与とみるかは判断できない。使用のハケ原体は、IA 1工人あるいはIB 1工人の製品と



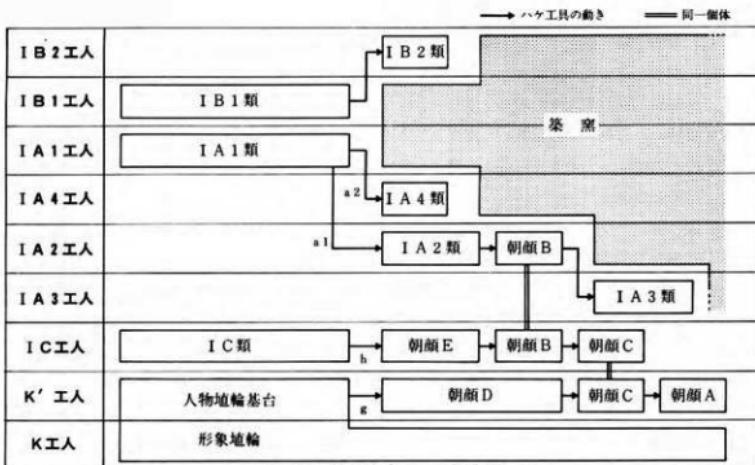
第92図 主要ハケ工具使用段階図

の区別をするには容易な特徴をもっている。K工人は、もちろんかなりの熟練者であったが、普通円筒埴輪10個体というノルマをかなり上回る労力が必要とされる。しかし、その複雑な製作工程は、一定の分担作業も可能とすることから、複数工人の関与も十分推測される。

それでは、個体数の少ない類型と朝顔形円筒埴輪の位置付けをからめて考えてみたい。個体数の少ない類型のそれぞれは製作総数5個体を越えるとは考えにくく、特にIA4類とIB2類は単品の製作ではないかとも思われる。つまり、単純に考えて、少數の製作ノルマを課せられた工人が4人存在したことになり、各類の製作者については、先と同様に、IA2工人、IA3工人、IA4工人、IB2工人とする。一方、朝顔形円筒埴輪は、朝顔A～E類の5類型に分類されているが、ハケは、a1種、c種、b種、g種の4種が使用されており、朝顔A類でハケg種とともに用いられているc種を除けば、すべて受け継いだハケ工具である（第93図）。さらに、工人のクセを最も端的に示す凸帯形態と調整手法に着目すると、人物埴輪の基台部と同一と思われるハケg種を用いた朝顔A類、朝顔D類、朝顔C類倒立下部は、K工人が人物埴輪製作から引き続いて製作したものと考えられる。さらに、ハケa1種を用いた朝顔B類倒立下部は、IA2工人の手によるもの、ハケト種を用いた朝顔E類、朝顔B類倒立上部、朝顔C類倒立上部は、IC工人の手による可能性が強い。このことから、朝顔形円筒埴輪の製作は、IC・IA2・Kの3工人（ハケc種を持つ朝顔A類下部を別の工人によるとすれば4者）の共同体制で製作された公算が大きい。即ち、朝顔形円筒埴輪の製作は、主体的製品の製作を終えてからの段階と考えられる。すると、IC工人とK工人の2者は、最も長い期間製作に携わったことになる。一方では、IA1工人とIB1工人は10個体+αというノルマを果たした時点で姿を消し、IA2・3・4工人とIB2工人の4人が途中から現れる。予測としては、熟練者であるIA1工人とIB1工人は、焼成窯の構築にまわったものと考えている。そして、後者の工人は、熟練したIA1工人やIB1工人あるいはK工人の補助員として指導を受けたものが、主体的製品製作の補佐役を終えた時点で、引き続き補充品の製作を課せられたものかもしれない。たとえば、IB2類の個体は、倒立位置より下をハケi種とするが、このハケは、人物4の髪の素材となる粘土板に残されたハケメに酷似し、一方倒立位置より上はハケt種を用いながらも、凸帯はIA3工人のものに類似する。つまり未熟な2者の共同作とも取れる雰囲気をもっている。またこれらの工人のなかで、比較的整美な製品を作り上げていたIA2工人のみは、朝顔形円筒埴輪の製作にも参画している。もちろん、少數個体の製作を課せられた別の立場の工人が交替で新規に参画した可能性もある。各ノルマを果たした工人は、順次築窯にまわったと考えられる。尚、K工人についてであるが、IA1工人らとともに同時に作業を開始したとなると、製作時間は少なくとも2倍以上になると予測される。人物埴輪の製作において、ハケ工具を必要とするのは、基台の製作においてであり、上半身の製作より先行して作業を終える。形象埴輪の製作に熟練した2工人の関与とその作業分担を想定すれば、基台製作に携わった工人が途中から朝顔形円筒埴輪製作に転向したとも考えられる。この工人をK'工人としておきたい。以上を整理したのが第94図である。時間的流れは概念的にしか考慮していないが、むしろこれ以上の憶測は限度を越えるであろうし、あらゆる矛盾点を解決するための分析は、作業速度等人の動きに大きく関わる領域と思われる。ただし、朝顔形円筒埴輪については、もう少し細かく見る余地がある。朝顔形埴輪は、ほぼ1個体1類型として捉えられ、個体数は少ない。この中には、倒立の前後で分担製作の可能性が強いもの



第93図 朝顔形円筒埴輪のハケ工具関連図



第94図 塗輪生産フロー概念図

があり、さらに、当然乾燥単位をはさむわけであるから、工程の前後の整理は可能である。第95図で概念図化したように、第1段階を倒立位置より下の製作段階、第2段階を乾燥後の倒立位置より上の製作段階とすると、第1段階には3ないし4人の工人の係わりを認めるが、完成させる第2段階では、結局IC1工人とK'工人の二人が、3個体ずつの仕上げを行っているのである。



第95図 朝顔形円筒埴輪製作工人の分担概念図

(2) 焼成の段階

次に、埴輪の焼成状態の点からの補足を行っておきたい。まず、実際に窯がどのような大きさであったかが大きな問題となる。6世紀前半の標準的な須恵器窯は、大きくて長軸10m程度で、現在知見にのぼっている埴輪窯跡を考えれば、概して須恵器窯よりは小さい傾向にある。仮に全長7mの窯とすれば有効焼成部は最大でも長さ5m、幅2m未満であろうから、本墳の普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪、形象埴輪の全てを一括焼成するのは極めて難しい。せいぜいが20数個体の焼成であろう。これをもとに焼成単位を考えると、まずIA1類とIB1類は、個体間で漸移的に関連しあう色調構成となっており、両者一括で焼成された可能性は極めて高い。すると、失敗品や、未調査区にあるかもしれない個体を考えれば、この2者が1つの焼成単位を成していたと予測される。次に形象埴輪について考えると、色調としては、IA1類と全く同じ暗赤灰色を呈するものから、赤橙色までと幅広い。しかし、これもまた、中間的色調によって重複・連鎖し、同一窯体内の位置的な結果とみるのが自然である。この中で、焼成の最も弱い個体の色調構成は、赤橙色と褐灰色で一部に赤灰色を持つものである。これと似た色調のものは、IA2類と朝顔2(B類)で認められる(普通円筒埴輪の色調?)。朝顔形円筒埴輪は、その他の大半(朝顔6を除く)が暗赤灰色を呈して、形象埴輪の良質焼成品と一致し、工人の関与のあり

方からも、形象埴輪と朝顔形円筒埴輪によって一つの焼成単位を成していたと考えたい。それに、朝顔2の製作に関与したIA2人が加わっていた可能性もある。残ったIC類とその他の普通円筒埴輪についてであるが、極めて焼きの弱い色調9と10がIC類の一部とIA3類そしてIB2類に共通し、IC類の良質焼成の部類とIA4類も共通する。また、朝顔形円筒埴輪の6(朝顔E類)も良く似ている。従って、結果的には、先の焼成単位から残されたものという形となつたが、これらを1つの焼成単位とすることに矛盾はない。

以上によって、3つの焼成単位が抽出できたことになる。この結果は、先に分析した製作体制そして関わる工人のあり方と非常に密接に結び付くものである。前半に作業を終了したIA1人とIB1人は、同時に焼成し、熟練工に相応の均質な焼成を実現している。形象埴輪と朝顔形円筒埴輪の大半を手掛けたK工人も、良好な焼成状態を維持させている。朝顔形円筒埴輪がつくられる後半まで作業を継続したIC工人は、その後半に並行して作業を開始したその他の工人とともに一つの焼成単位をもつたわけである。この製品は、整形上でも焼成上でもやや見劣りするものとなっている。また、IA1工人とIB1工人そしてK工人の製品は、硬い須恵質でありながらも表面を赤化させるという技術を保持し、ほとんど焼成単位の区別ができない仕上がりとなっている。これが2回の焼成とすれば、かなり安定した技術である。むろん、以上のことは、窯の大きさと焼成個数を規定したうえでの仮説である。

3. 胎土による検討と工人集団IIの性格

最初に触れるべきであったが、本遺跡の埴輪の胎土については、肉眼観察の結果からは、特に明確な違いは把握できなかった。むろん、粒子の級密度や、構成粒子の多寡を細かく見れば、分類される可能性はあるが、筆者の観察眼では明瞭にできず、粒子の種類構成の点で、すべて同じと判断したものである。これが正しければ、先の生産体制が、一つの工房を核として一括管理されていたシステムを補強するものと考えられる。II群については、IIA類とIIB類の二つの類型に分けられ、I群を含めた3者は明らかに系譜を異にする製品と判断された。工人集団の差として分離したものであるが、にもかかわらず、当初の予想に反して、胎土に顕著な差がみられないのである。IIAとIIBの両集団は、1種類ずつ異なるハケ工具を用いているものの、内面調整の違いから、それぞれに複数の工人が製作関与していた可能性も強い。とすると、一人1~2個体程度を製作するために、異なる集団からこの工房に派遣された工人が想定される。もちろん、胎土の共通が同一工房の同時使用を語るとは言えず、また、異なる集団とは、異なる地域を示すのかどうかもわからない。焼成はいわゆる土師質で、尚且つ、両者は明確な色調差を有している。それが小さな埴輪窯を構築して焼成されたとも考えられるし、色調の構成からすればIIA類は形象埴輪中心窯体内の最後尾、IIB類はIA3類と同様、IC類中心窯体内の最後尾の焼成の可能性もある。いずれにせよ、製品を運び込んだのではなく、異なるものを製作する工人が生産組織に組み込まれ、埴輪全体の中でも僅かな部分の担当を課せられていたとすれば非常に興味深い。

4. 小結

生産体制について整理したい。工人集団は3集団を抽出した。工人集団Iは、同一の技術基盤でつながれ、埴輪全体の90%近くを供給している主体的集団である。従って、古墳被葬者の地域における直轄工人という捉え方が可能である。また、この工人集団は、埴輪製作の中心的役割を担った工人と、少数個体の製作を課せられた工人という2者で構成されている。前者を「供給主体工人」、後者を「供給補助工人」と仮称しておく。工人集団IIA(IIA工人)と工人集団IIB(IIB工人)の性格は、数量的にみれば、いわば供給補助工人である。この2集団の出自を他地域に求めるべくすると、埴輪が運び込まれ

たのではなく、工人が生産組織に加えられて、そのノルマを果たした可能性が強いと考えた。有力首長の葬儀に際しては、同盟関係にあった地域の参列も予想される。そのような関係が、埴輪供献のための生産組織編成においても、他地域からの出向というかたちで同盟関係の責の一部を果たしたとも考えられる。

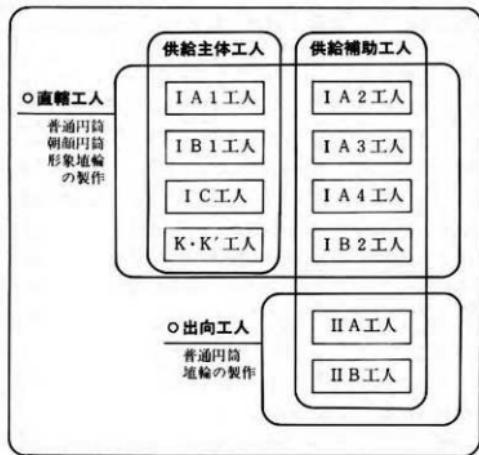
工人集団Ⅰの供給主体工人と供給補助工人的有機的関連性の度合いについては、必ずしも明確ではない。類型化の基礎となった工人集団Ⅰのハケ原体は、主なもので4種が使用されている。一方工人の数は8工人（K工人をK' とに分ければ9工人）

を想定した。この数字の差はⅠ群の

ハケa種とb種の動向に大きく左右されている。即ち工具の受け渡しがあったわけである。そして、これらを工具共有グループと呼ぶことはできるが、そのグループ構成員の関連性については、必ずしも、集団的の統一としての最小基本単位とする「工人単位」とまでは言いきれない。なぜなら、工具は工房に帰属していただけ（言わば備品として）かもしれない。むしろ技術面からは、IA1工人とIB1工人、そしてK工人が埴輪製作の中心的役割を担った熟練した工人単位としての姿も有力である。あるいは、工人集団Ⅰは、倒立技法を紐帶としていた一つの工人単位ということもできる。このようにしてみると、「工人単位」とは極めて曖昧な概念のようである。そういう単位は確かにあったであろうけれども、我々が最小単位と認める場合の基準がない。結局は、工人集団とその構成員である工人という2つの概念でまず考察を進めるべきであろう。工具共有グループを基本単位と認定したり、焼成単位、あるいはある特定の調整手法の共通性を基本単位としたりと、研究者の分析の方法によっては異なるレベルの共通性を「工人単位」という一つの言葉で安易に規定してしまう危険性がある。筆者は、埴輪分析はあくまでも1人の把握をまず目指すべきであると考えている。その次に、工人集団を最も大きな枠として、それに近い位置の集合から順次掘り下げていき、総合的な分析を経て歴史学的解釈として最後に求めるべきものは「工人」ではなく、「工人単位」であると考えている。しかし本報告で行った分析をもってしても工人集団と工人との間を埋める工人体制は明確にはできなかった。また、集団相互の関係、たとえば、IB1工人とIIA工人の両者が共有する特徴ある内面調整手法や、その他種々のことを考えると、想いは複雑となる。もちろん、ここで分析を尽くしたとは言い難く、一作業仮説に基づく憶測の域にあり、検討の余地は計りしれないほど残されている。分析を重ねるべき部分と、分析では明らかにできない、より人間的な事象が絡み合っている部分との関係を整理できなかった筆者の力量不足によるものであり、今後の課題として、諸先学の方々の叱正を仰ぎたい。

注

(1)用語は、吉田恵二「埴輪生産の復元」（『考古学研究』第19巻3号 考古学研究会 1973）による。



第96図 エジリ古墳埴輪供献に関する生産体制

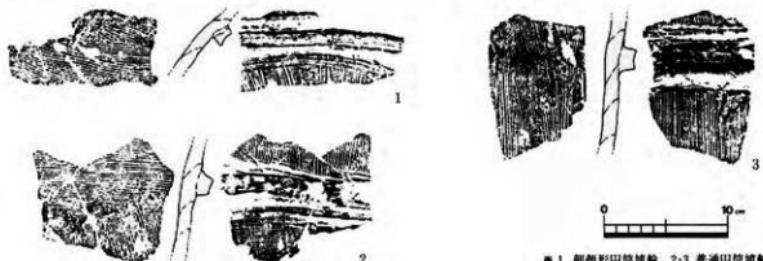
第5節 自然科学的分析

1. 分析試料の概要

出土埴輪の胎土について、奈良教育大学の三辻利一氏に螢光X線分析をお願いした。主な目的は、矢田野エジリ古墳出土埴輪が全て地元産であるか否かを推定するという点にある。幸いにも、近隣には南加賀古窯跡群という一大須恵器産地があり、そしてこの中には、須恵器と埴輪の併焼窯である二ツ梨殿様池窯が存在する。二ツ梨殿様池窯は、石川県内で唯一確認されている須恵器と埴輪の併焼窯で、以前鳥形埴輪の頭部も発見された。窯体の一部は破壊を受けているが、未調査で現状保存されている。採集されている埴輪は、矢田借屋古墳群や矢田野エジリ古墳のものに類似している。矢田借屋古墳群の埴輪には倒立技法のものは認められず、二ツ梨殿様池窯採集資料の大半もそうである。ただ、窯採集資料の一部には、倒立技法の可能性を示す破片も僅かに存在する。須恵器は、田辺編年におけるT K 10に近い特徴を備えている。この窯跡の分析試料については、石川県立埋蔵文化財センターの木立雅明氏がセンター保管資料から分析用に抽出したものを活用させていただいた。試料総数は、埴輪10点、須恵器20点の計30点である。

矢田野エジリ古墳出土の普通円筒埴輪の分析試料は、各類型単位に複数の破片を抽出しているが、復元された個体の割合は無理なものが多く、個体別については、必ずしも明確とはいえない。人物埴輪及び朝顔形円筒埴輪についても、個体別を明らかにできるものは少ない。須恵器についても、1点を除いて同様である。試料総数は、人物埴輪3点、普通円筒埴輪32点、朝顔形円筒埴輪5点の計40点である。これら各資料の類型や所属個体、特徴等については、分析値一覧表の参考欄に記載した。

また、関連資料として、御幸塚古墳出土埴輪及び矢田借屋古墳群出土埴輪を加えている。御幸塚古墳は、同じ月津台地の最北端にある全長約30mの前方後円墳で、昭和57年に、周辺整備事業に先立つ埴丘確認調査が行われた古墳である。時期の明確にできる須恵器は出土していないが、凸帯の形態等は矢田野エジリ古墳のものと著しく異なり、時期的に先行する（5世紀末？）と考えられている。従って、月津台地では最も古い段階の埴輪ということになる。全て赤橙色の土師質であるが、密窯焼成と考えられ、焼成は比較的硬く良好である。提出資料は3点である。矢田借屋古墳群は、前方後円墳2基と円墳6基（1～8号墳）からなる古墳群で、昭和25年に2・4号墳（円墳）、昭和30年に7号墳（前方後円墳）、昭和37年に8号墳（前方後円墳）が調査されているが、それらを含めて現在は全て消滅している。調査が古く、遺物の保管状況も良好ではなくため、遺物の所属古墳の特定は困難なものが多い。しかし、時期的には概ね6世紀の前半代に全て収まるものと考えられている。提出資料は1点で須恵質である。



■1. 朝顔形円筒埴輪、2-3. 普通円筒埴輪。
尚、分析試料とは異なる個体である。

第97図 御幸塚古墳出土埴輪 (S=1/4)

2. 分析

矢田野エジリ古墳出土埴輪・須恵器の螢光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

(1)はじめに

生産地である窯跡が残っており、かつ、そこに多数の破片が残されている土器類は産地推定法の開発研究に絶好の対象となる。須恵器、中世陶器は堅固な窯窓でしか焼成できないので、その窯跡は各地で見つけられている。最近、埴輪の窯跡も各地でみつけられており、産地推定の研究対象として浮かび上がってきた。

石川県内でも、小松市周辺に二ツ梨殿様池窓という、須恵器とともに埴輪を焼成した窯がある。他方、小松市の矢田野エジリ古墳には多数の埴輪が出土する。これらの埴輪胎土が二ツ梨殿様池窓の埴輪胎土と一致するかどうかを螢光X線分析法を使って分析した結果について報告する。

(2)分析法

全試料はすべて、表面を研磨して付着物を除去したのち、タンクステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3~5mmの錠剤試料を作成した。錠剤試料はそのまま試料室に入れ、理学電機製の波長分散型全自動螢光X線分析装置、3270型機を使って分析された。標準試料には日本の地質調査所が配布している岩石標準試料JG-1を使用した。

(3)分析結果

表1には矢田野エジリ古墳出土埴輪の分析値、表2には石川県立埋蔵文化財センターの木立雅明氏から提供された二ツ梨殿様池窓出土埴輪・須恵器の分析値、表3には矢田野エジリ古墳出土須恵器、御幸塚古墳、矢田借屋古墳群出土埴輪の分析値をそれぞれまとめてある。分析値はすべて、JG-1による標準化値で表示されている。

はじめに、表2よりRb、Srの生データをプロットして描いた二ツ梨殿様池窓の埴輪・須恵器のRb-Sr分布図を図1に示す。かなり大きくばらついているが、その大部分を包含するようにして、二ツ梨殿様池窓領域を描いた。勿論、適当に描いたこの領域は定性的なものであり、とくに、領界については判別分析を行わない限り、定量的には決められない。

次に、表1より矢田野エジリ古墳の埴輪のRb-Sr分布図を作成したのが図2である。全試料が二ツ梨殿様池窓に分布し、二ツ梨殿様池窓産の可能性があることを示している。これが二ツ梨殿様池窓の製品であるとすると、判別分析をすると容易に証明することができるはずである。そのため、二ツ梨殿様池窓の埴輪・須恵器、および、矢田野エジリ古墳の埴輪について、二ツ梨群の重心からのマハラノビスの汎距離を計算した。マハラノビスの汎距離とは母集団の重心から、その標準偏差を尺度目盛として測った統計学上の距離である。勿論、この距離が遠くはなるほど、母集団の試料の持つ化学特性に類似しなくなる。マハラノビスの汎距離は正負両方の値をとり得るので、二乗して負符号を消去して使用するのが普通である。図3にはマハラノビスの汎距離の二乗値を使って二ツ梨群への帰属を調べた結果を示してある。マハラノビスの汎距離の計算にはK、Ca、Rb、Srの4因子が使用された。図3ではD²=10のところに領界線を引いてある。普通、5%の危険率をかけて判別分析を行った結果、検定合格

する領界線である。図1、2では定性的に領界を決めてあるが、判別分析によって定量的に決められる領界線がこれである。そうすると、二ツ梨殿様池窯の埴輪・須恵器30点のうち1点のみがこの領界線を越れる。5%危険率をかけた検定、別のいい方をすれば、95%以上の試料がこの検定に合格することを意味する。二ツ梨群の埴輪・須恵器等はこの条件を十分満足していることがわかる。他方、矢田野エジリ古墳の埴輪は40点中37点が検定合格した。したがって、矢田野エジリ古墳出土埴輪はほとんどすべてが二ツ梨群であることを示している。人物埴輪、朝顔形埴輪も円筒埴輪とともに二ツ梨群の製品であった。外部からの搬入品ではなかった。

なお、念のため、図4には判別分析で使用しなかったN_a因子を比較してある。予想どおり、矢田野エジリ古墳の埴輪は二ツ梨群によく対応していることがわかる。

次に、矢田野エジリ古墳出土須恵器の推定産地について調べる。二ツ梨群の中には埴輪とともに須恵器も含まれていた。須恵器も埴輪と同じ胎土を持つわけである。また、この時期に外部地域から須恵器が搬入されるとすれば、大阪陶邑が考えられる。それで、二ツ梨群と大阪陶邑がどの程度に相互識別できるかを調べるために、両者の間で2群間判別分析が行われた。その結果が図5に示されている。この2群間判別分析図で両群の化学特性が全く異なり、完全に相互識別されるとすると、二ツ梨群の試料はD⁺（二ツ梨群）≤10、D⁻（大阪陶邑）>10の領域内に分布し、他方、大阪陶邑群の試料はD⁺（大阪陶邑）≤10、D⁻（二ツ梨群）>10の領域に分布する。図5では、大阪陶邑の試料はほとんどが上記の条件を満足し、大阪陶邑領域に分布する。ところが、二ツ梨群の試料の中には自群のみならず、大阪陶邑群への帰属条件を満足するものがあり、その結果、一部は重複領域に分布した。この領域に分布する試料が増えると、誤判別される確率が高くなる。しかし、大阪陶邑の試料の中に、重複領域に分布するものがほとんど無いことから、両者はほぼ完全に相互識別できると見られる。

この基礎データをもとにして、図6に矢田野エジリ古墳出土の須恵器の産地推定の結果をみてみよう。図5と同じ2群間判別分析図上にプロットしたものである。No.1～5が矢田野エジリ古墳出土須恵器である。図5と比較すれば、No.1、2、3は二ツ梨群産の須恵器であることがわかる。他方、No.4、5の2点は二ツ梨群の須恵器ではない。明らかに大阪陶邑からの搬入品である。この推定結果は図7のR_b～S_r分布図上でも再確認される。こうして、矢田野エジリ古墳には地元二ツ梨群の須恵器の他に、大阪陶邑からの搬入品があることが立証された。このような須恵器供給パターンはこの時期の全国各地の古墳でみられる。

次に、御幸塚古墳（No.6、7、8）と矢田借屋古墳群（No.9）の埴輪の胎土について述べる。図6より、No.8、9の2点の胎土は二ツ梨群と同質である。したがって、これらの古墳群が二ツ梨殿様池窯の操業時期と合っていれば、二ツ梨殿様池窯で製作されたものと判断され、逆に、操業時期にずれがあるとすれば、二ツ梨殿様池窯近くで焼成された埴輪ということになる。No.7はほんの少し陶邑領域に入っているが、二ツ梨群からの距離も十分近い。二ツ梨殿様池窯近くで焼成された埴輪である可能性を持つ。これに対してNo.6は、二ツ梨群から少しずれる。二ツ梨殿様池窯の埴輪ではない。しかし、図7からもわかるように、二ツ梨領域内には分布している。したがって、二ツ梨群の周辺で焼成された埴輪であると推定される。

この結果、今回分析した埴輪は二ツ梨殿様池窯産か、それともその周辺で焼成されたものであり、外部地域から搬入された埴輪は1点もなかった。したがって、製作技法からみて、他地域に類似のものがあったとしても、その地域からの搬入品ではなく、むしろ、工人集団に何らかの関係があったと考えられる。この点については今後、さらに究明する必要がある。

図1 ニッケル鉱様池窯出土埴輪・須恵器の
Rb-Sr分布図

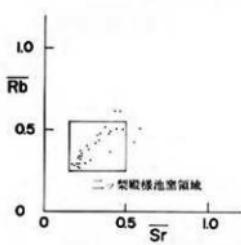


図2 矢田野エジリ古墳出土埴輪の
Rb-Sr分布図

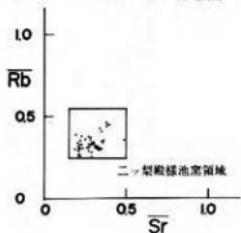


図3 ニッケル鉱様池窯群への帰属
(K、Ca、Rb、Sr因子使用)

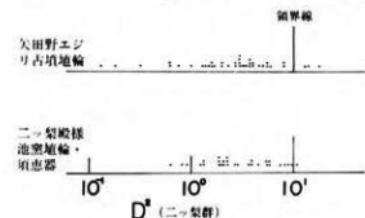


図4 Na因子の比較

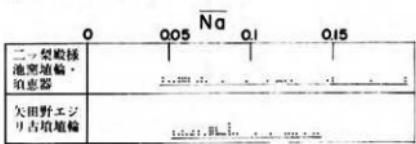


図5 大阪陶邑群とニッケル鉱様池窯群の相互識別
(K、Ca、Rb、Sr因子使用)

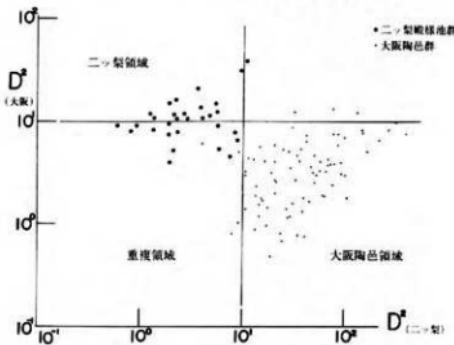


図6 矢田野エジリ古墳出土須恵器、御幸塚古墳、矢田借屋
古墳群出土埴輪の产地推定

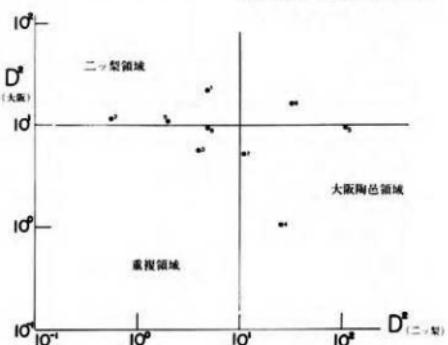
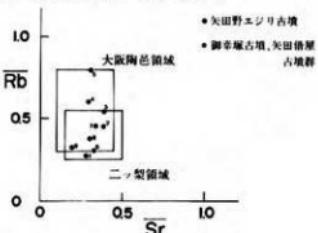


図7 矢田野エジリ古墳出土須恵器、御幸塚古墳、矢田借屋
古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図



第98回 矢田野エジリ古墳出土埴輪の螢光X線分析挿図

表 1
矢田野エジリ古墳出土埴輪分析値

	Rb%	Rb	K	Ca	F.e	Rb	Sr	Na	Mg	Si	Rb%	K	Ca	F.e	Rb	Sr	Na	Mg	Si
1 村 村	0.270	0.143	2.15	0.311	0.321	0.293	0.079	0.679	1.16	0.763	1	1.254	0.270	0.086	2.78	0.294	0.204	0.061	
2 村 村	0.263	0.150	2.19	0.290	0.329	0.087	0.079	0.679	1.17	0.259	2	0.254	0.071	0.260	2.78	0.293	0.203	0.060	
3 村 村	0.267	0.143	2.19	0.329	0.297	0.083	0.079	0.679	1.17	0.259	3	0.258	0.091	0.272	0.324	0.216	0.056		
4 普通田園 村	0.305	0.110	2.43	0.270	0.169	1 A 1 銀 (9.1)	4	0.470	0.215	0.619	4	0.457	0.171	0.619	0.460	0.194			
5 村 村	0.293	0.099	2.57	0.363	0.248	0.105	0.075	0.248	1 A 1 銀 (7.1)	5	0.457	0.199	0.622	0.451	0.173				
6 村 村	0.264	0.166	1.96	0.356	0.277	0.069	n	n	n	6	0.298	0.160	0.218	0.368	0.218	0.058			
7 村 村	0.302	0.188	2.05	0.266	0.278	0.084	n	n	n	7	0.284	0.102	0.353	0.229	0.057				
8 村 村	0.284	0.077	2.82	0.266	0.291	0.065	1 A 1 銀 (13)	8	n	8	0.278	0.063	0.285	0.298	0.061				
9 村 村	0.302	0.062	2.81	0.325	0.215	0.068	n	n	n	9	0.225	0.077	0.265	0.175	0.046				
10 村 村	0.282	0.078	2.73	0.312	0.223	0.055	n	n	n	10	0.248	0.080	0.288	0.292	0.174	0.046			
11 村 村	0.260	0.084	2.47	0.297	0.211	0.061	1 A 1 銀 (14)	11	1.044	n	1.292	0.189	0.370	0.397	0.110				
12 村 村	0.284	0.065	2.07	0.313	0.260	0.079	n	n	n	12	n	n	n	1.67	0.370	0.297	0.110		
13 村 村	0.306	0.061	2.05	0.284	0.224	0.075	n	n	n	13	n	n	n	0.965	0.482	0.356	0.117		
14 村 村	0.248	0.139	1.69	0.454	0.397	0.128	1 B 銀	14	n	n	1.251	0.070	2.33	0.335	0.225				
15 村 村	0.344	0.135	1.85	0.451	0.397	0.128	n	n	n	15	n	n	n	0.254	0.070	2.075	0.291	0.056	
16 村 村	0.351	0.136	1.54	0.450	0.398	0.128	n	n	n	16	n	n	n	0.257	0.130	2.59	0.294	0.053	
17 村 村	0.277	0.040	2.46	0.383	0.192	0.065	1 B 1 銀 (25)	17	n	n	1.292	0.084	2.38	0.340	0.221	0.069			
18 村 村	0.319	0.061	2.78	0.379	0.226	0.076	n	n	n	18	n	n	n	0.371	0.151	1.53	0.508	0.440	
19 村 村	0.278	0.098	3.12	0.296	0.185	0.053	1 A 1 銀 (26)	19	n	n	1.237	0.082	1.93	0.268	0.224				
20 村 村	0.279	0.111	2.39	0.313	0.295	0.176	1 C 銀	20	n	n	0.357	0.135	1.55	0.484	0.390	0.121			
21 村 村	0.288	0.066	3.16	0.336	0.263	0.052	n	n	n	21	1.042	n	0.229	0.097	2.05	0.377	0.258	0.070	
22 村 村	0.271	0.129	1.54	0.376	0.328	0.092	n	n	n	22	n	n	n	0.999	2.13	0.416	0.309		
23 村 村	0.253	0.112	2.02	0.290	0.273	0.076	n	n	n	23	n	n	n	0.345	0.104	1.81	0.442	0.327	
24 村 村	0.239	0.132	1.31	0.436	0.384	0.136	n	n	n	24	n	n	n	0.381	0.118	2.43	0.474	0.319	
25 村 村	0.302	0.158	1.73	0.353	0.361	0.112	n	n	n	25	n	n	n	0.385	0.183	1.87	0.569	0.478	
26 村 村	0.309	0.135	1.77	0.409	0.352	0.121	n	n	n	26	n	n	n	0.390	0.254	1.36	0.566	0.580	
27 村 村	0.297	0.679	2.39	0.329	0.213	0.086	1 D 銀	27	n	n	0.400	0.126	1.46	0.515	0.389	0.125			
28 村 村	0.265	0.673	2.80	0.296	0.215	0.058	n	n	n	28	n	n	n	0.319	0.226	1.52	0.427	0.548	
29 村 村	0.270	0.675	2.67	0.286	0.229	0.059	n	n	n	29	n	n	n	0.281	0.093	1.93	0.295	0.254	
30 村 村	0.270	0.672	2.91	0.271	0.212	0.056	n	n	n	30	n	n	n	0.287	0.103	1.60	0.322	0.281	
31 村 村	0.274	0.153	1.51	0.296	0.349	0.067	II B 銀 (41)	31	n	n	n	n	n	n	n	n	n	0.062	
32 村 村	0.311	0.136	1.65	0.353	0.365	0.103	n	n	n	32	n	n	n	n	n	n	n	n	
33 村 村	0.327	0.222	1.34	0.364	0.491	0.141	n	n	n	33	n	n	n	n	n	n	n	n	
34 野地山田園 村	0.280	0.091	2.70	0.329	0.255	0.064	新南(2)	34	n	n	0.351	0.146	1.31	0.452	0.380	0.111			
35 村 村	0.276	0.134	2.63	0.330	0.280	0.082	n	n	n	35	n	n	n	0.414	0.132	1.77	0.542	0.374	
36 村 村	0.300	0.137	1.62	0.429	0.344	0.123	n	n	n	36	n	n	n	0.507	0.194	2.10	0.603	0.484	
37 村 村	0.282	0.123	2.41	0.354	0.275	0.075	n	n	n	37	0.367	0.071	0.690	2.27	0.265	0.168			
38 村 村	0.278	0.163	2.51	0.343	0.355	0.087	n	n	n	38	n	n	n	0.366	0.170	2.76	0.297	0.250	
39 不 不	0.263	0.697	2.13	0.280	0.262	0.072	手塚(1)大根(無)	39	n	n	0.367	0.170	2.55	0.454	0.344	0.079			
40 不 不	0.261	0.111	2.19	0.246	0.263	0.086	n	n	n	40	n	n	n	0.327	0.147	2.81	0.372	0.304	
41 不 不	0.270	0.672	2.91	0.271	0.212	0.056	n	n	n	41	n	n	n	0.258	0.081	2.69	0.316	0.281	
42 不 不	0.274	0.153	1.51	0.296	0.349	0.067	II B 銀 (41)	42	n	n	n	n	n	n	n	n	n	0.062	

二ツ割輪焼古墳埴輪頭部試験・地盤分析値

番 号	種 類	資 源	年 代	C _a	K	Rb	Sr	Na
1. 久野エジリ古墳	角柱	久野エジリ古墳	1	1	2.78	0.086	2.78	0.294
2. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	2	0.354	0.071	2.80	0.293	0.060
3. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	3	0.354	0.123	2.82	0.324	0.216
4. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	4	0.357	0.125	2.85	0.324	0.216
5. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	5	0.355	0.125	2.87	0.325	0.216
6. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	6	0.358	0.129	2.87	0.325	0.216
7. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	7	0.369	0.130	2.87	0.326	0.216
8. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	8	0.366	0.131	2.88	0.326	0.216
9. 久野エジリ古墳	筒瓦	久野エジリ古墳	9	0.366	0.132	2.88	0.326	0.216

測定方法の概要は、分析結果に記載したものである。

3. 分析結果に対する考古学的所見

分析結果について若干の所見を述べておきたい。矢田野エジリ古墳出土の埴輪の胎土について、筆者なりの肉眼観察を行った結果、少なくとも構成粒子には差が認められないということはすでに述べた。螢光X線分析の結果においても、全て同一産地で、しかも、二ツ梨般様池窓の分析試料と領域が一致することが図らずも判明したことになる。従って、第4節の埴輪の生産体制で述べたように、異なる技術系譜をもった複数の工人集団が、本墳に供献する目的で、二ツ梨近辺で埴輪を一括生産した可能性は益々高くなつたといえよう。ただし、前節では、他地域からの出向という可能性を全面に押し出したが、同一地域に保有技術を異とした複数の工人集団が存在していたことも考えられる。このことについては今後他地域の資料との比較検討を重ねた上で結論を出していかなければならないことである。

実際のデータについてであるが、6つの因子の分析値を普通円筒埴輪の類型単位でみていくと、比較的明瞭な差を示すものが少くないことに気付く。まずC aであるが、0.090以下の数値を示すものは、IA2類、IA3類、IA4類、IB2類、IIA類の5類型である。他の数値とは概ね0.05以上の大きな開きが認められる。前節で、補助供給工人の製作としたものがII B類を除いて全て含まれることに注目したい。この他、IA1類とIB1類の2者を比較すると、ほとんどの元素の分析値において差が明瞭となっている。特に、IB1類の数値は全体の中でみても個性的である。一つの類型内でバラツキをみせるのはIC類のみで、おおよそ類型毎に個性的かつ安定した数値を示しているものが多い。また、朝顔形円筒埴輪については、概ね0.130を越えるC a値を中心に、他の因子も含めて類似する数値構成となっているものを搜すと、IC類の一部と人物埴輪が指摘できる。これも、前節で指摘した、朝顔形円筒埴輪の製作に、形象埴輪の工人とIC類の工人が主体的に関与していたとする予測と整合する。

このように、細かく見ていった場合の数値のバラツキが、考古学的に分類した類型と整合性をもつくるとなると、そこに何らかの原因を想定しなければならなくなる。たとえば、実際の粘土採掘については一括して行われたとして、それを陶土として仕上げる工程が各工人に帰属していたと考えるならば、その過程で工人が施した混和材の影響が数値に現れると考えられないであろうか。あるいは、工人単位に粘土採掘が行われ、その採取場所の違いが微妙な数値の差を生み出したのではないだろうか。こういった素朴な疑問が湧いてくるのである。しかし、本古墳の埴輪については、産地同定という枠のなかでは、ほぼ同一とみなされる結果を得たのであり、このような数値の差は、言わば「微妙な差」の範疇に入るであろう。ただ、考古学的に得た各類型の特徴も、個人のクセの抽出といった「微妙な差」に基づくもので、この視点にたてば、自然科学的な分析データの微妙な差も、看過し得ぬことのように思えてしまうのである。もし仮に、このような数値の差が、考古学的な分類をも裏付けるデータとしての効力を持つとなると、螢光X線による胎土分析の有意性は益々高まるものと考えられる。この微妙な差の生因についても今後自然科学の側からの微視的な検討と説明が加えられることを望みたい。

ま　と　め

矢田野エシリ古墳は、月津台地において、6世紀代の埴輪を伴う古墳としては初めて周溝をほぼ全掘した古墳である。その初例において多量の円筒埴輪そして人物埴輪群を検出した意義は大きい。現状の資料蓄積からすれば、本墳の内容は傑出したものとの評価をせざるを得ないが、本墳のように、墳丘に樹立されていた埴輪の大部分が、比較的早い段階で周溝内に落ち込んだと考えた場合、過去の調査で得られている資料が、いかに実態を反映したものではないかがわかる。昭和25年に調査された矢田借屋4号墳では、粘土棺陥没痕の上面で形象埴輪片を発見したとしており、直径20m未満の小円墳にも形象埴輪が樹立されていたことを示唆しているし、また、昭和37年に調査された同8号墳では、円筒埴輪列の存在が報告されている。¹¹ 8号墳は、全長30mを越える前方後円墳と考えられるため、本墳の内容を上回る埴輪群を備えていた可能性もある。このようなことから、初めて発見された本墳の形象埴輪群の内容のみを過大に評価し、江沼の地域首長墓として安易に組み込むことは控えなければならない。本地域で最後の前方後円墳であるとはい、全長30mをやや下るという規模は、墓造時点での特異な政治状況を想定しなければ、江沼地域首長墓と認定するわけにはいかない。古墳時代後期に新たに月津台地で古墳群が展開した意味を総括的に問いかねばならない。

形象埴輪についてみると、本古墳の資料は、埴輪配列の意味を考察する様々な論議に対して、全国レベルの同一机上で扱われるべき構成内容を備えている。樹立の意味については、葬送儀礼あるいは首長権繼承儀礼の一場面であるとか、あるいは故人の偉業を称える顕彰碑であるなどの多くの意見が出されている。この中で、首長権繼承儀礼に関しては、そのままの意味でとれば、首長墓に限られる埴輪祭式であり、当然その登場人物の主役は首長である。極度に神聖化された身分繼承の儀礼というものが、厚葬の普及があったとは言え、無制限に末端まで拡大されたとは思えない。人物埴輪群が示す儀礼は、被葬者の性格に応じて様々な意味や登場人物が与えられたのが実態ではなかろうか。ただ、葬送儀礼や繼承儀礼、そして顕彰碑としての樹立、そのいずれもが故人に対する誇が深く係わるという共通点を備えているのであり、これが人物埴輪による祭式の本質と考えられる。さて、本墳の人物埴輪群の構成が示す儀礼とはいっていいどのようなものなのであろうか。まず注意しなければならないのは「天冠の男子」の性格である。天冠が真に王者の被る冠とすれば、これは首長像と考えるのが自然に思える。しかしながら、主役とすべき首長像が半身像であるばかりか、その意匠はあまりにも貧弱と言わざるを得ない。本古墳の人物像が、全般的に簡素な表現で、半身像を基本としているとは言え、そのなかにあってもさらに簡素化されているこの人物像をみると、これを首長とみるには躊躇せざるを得ない。巫女や從者、跪座の人物、そして馬に付随する人物などから、全体の構成が描こうとしているものは、葬送の儀式そのものであると考えられる。従って、こういった意味から、本墳を江沼の首長墓とすべき圧倒的な根拠は持ち合せていないのであり、逆に、本地域において、人物埴輪による祭式が小地域首長のレベルに至るまで展開していた可能性を示唆するものと考えられる。

次に円筒埴輪についてであるが、北陸で初めて倒立技法の存在が明らかになった。倒立技法は、赤塚氏が「味美バターン」として指摘し、後に「2分割倒立技法」と呼んだ「尾張型埴輪」における一製作工程と極めて類似するものであり、時期的にもほぼ重複する。この倒立技法については、その技法名称の概念規定とともに、統括的な分析が小栗氏によってまとめられている。¹² ただ、その解釈については、赤塚氏が須恵器工人の関与によって実現した「須恵器系埴輪」の一具体像として捉えているのに対して、小栗氏は、土師器工人の係わりの結果ではないかという全く逆の解釈を与えている。後者は、「埴輪工

人」と「土師器工人」そして「須恵器工人」という3者の関係でまず捉え、倒立技法は、弥生時代以来の系譜を引く土師器工人によって所持され、引き継がれてきた技法とし、須恵器技法の導入を特徴としている尾張型埴輪のかな一部に倒立技法が発現するのは、供膳形態器種製作の中心が須恵器に移行するなかで、土師器工人組織の縮小が余儀なくされ、埴輪工人として再編成された結果現れた技法と考えたのである。確かに、倒立技法は不思議な技法で、ある一時期の埴輪製作技法として凌駕するわけでもなく、正立技法に加わる様相をみせ、しかも一定の広がりをもって散在的に分布している。現在のところ、その分布は、東海地方の環伊勢湾地域を中心とした尾張型埴輪あるいは淡輪技法の分布域との重なりを見せており、その飛び地的な分布域である越前北部や南加賀地域でも同様の重複関係が本墳の調査によって確認されたことになる。本古墳では、倒立技法の埴輪（Ⅰ群）の他に正立技法の埴輪（Ⅱ群）が少数ながら共存している。そして、後者のなかには、淡輪技法が含まれている。この倒立技法と淡輪技法という二つの技法の存在から、東海との関連性がより積極的に論じられることになろう。

ところで本墳の倒立技法は、ほぼ最上段の積み上げのみを対象としたもので、器高50cm程度のものの製作を考えると、決して効率的とは言えず、大型の埴輪製作における技術応用といった範疇から逸脱しており、ある種の「こだわり」すら感じる。産地に推定される二ツ梨般様池窯の資料は、正立技法のものと、わずかに倒立技法と考えられるものが混在している。前者のものは、近隣の矢田借屋古墳群出土のものに極めて類似し、後者のものは、それより凸帯がかなり萎縮する傾向を認め、本墳のものに近似する。本墳の埴輪のなかでは、須恵器として捉えられるもの全てが倒立技法を採用しており、本墳に供獻する埴輪の製作段階においては、倒立技法が複数の工人にわたって規範的に採用されていた可能性が強い。のことから、先の2者の埴輪は、同時製作の工人単位による差ではなく、僅かな時間差を示す可能性があり、同時に、尾張の倒立技法とは、やや異なる展開が想定される。そして、この円筒埴輪の倒立技法に、人物埴輪や馬形埴輪の製作工程を含めて総覧すると、極めてシステムティックな手順が全体に組み上げられていることに気付く。これらの手順は、埴輪祭式遂行の当事者であった埴輪製作工人に引き継がれてきた固定的な技術を払拭できる立場の工人集団が、「必要な形のものを作るため」という新たな「受注者」としての立場で応用を重ねたものかもしれない。即ち、須恵器の窯窓焼成を取り入れた埴輪工人の段階（御幸塚古墳期）から、須恵器工人に埴輪工人が参画して同時焼成を行った段階（矢田借星期）を経て、須恵器工人として埴輪を製作するという段階（矢田野エジリ古墳期）に至った過程を想定したい。ただ、最後の段階の須恵器工人集団は、前段階に埴輪製作者との融合を経た特定集団であり、継続して受注する立場にあったと考えられる。技術革新は、埴輪工人自体がもはや須恵器工人化しつつあったという状況を反映した現象であろう。そしてこの技術は、後継されることなく、直後に埴輪祭式・製作の終焉を迎えるのである。工人自身の立場が変化しつつあったとはいえ、あくまでも支配層が掌握する埴輪工人として、尾張地域の技術に接する機会も持ち合わせていたと考えられる。その一つに倒立技法があり、それを独自に消化し、先に指摘した「受注者」としての立場で、須恵器技法との融合をはかりながら独特な製作工程を構築した。埴輪工人集団解体直前の姿である。この埴輪工人と須恵器工人の融合は、自然発生的に生じたのではなく、支配者層の管理のもとで図られていた。それは、須恵器と埴輪の併焼窯が現在のところ1箇所しか発見されておらず、他に発見されている同時期の須恵器窯では一切埴輪が焼成されていないことから、その一箇所が、埴輪生産を前提として特定された工房であったと考えられるからである。

埴輪が須恵器と併焼されたことは、須恵器工人による埴輪製作を単純に示すものではない。埴輪祭式遂行者の一員たる埴輪工人は、須恵器窯導入以前から存続しており、須恵器窯の導入を機に埴輪の生産者が単純に入れ替わるといった性格のものでもない。当地の須恵器が、あくまでも陶邑系中心として捉

えられているにもかかわらず、こと埴輪に関しては、尾張との関係が強調されているという両者の齟齬は、こういった事情に根差しているのである。つまり、政策的契機によって実現した在地須恵器窯と、地域間の政治的交流の裏付けを発現する埴輪とは、基本的には区別して扱わなければならない。このことは須恵器生産技術の獲得が、決して古墳祭式に主眼を置いていたのではなく、まさに生産・流通権の掌握を目指したものであったことをも物語る。⁽⁴⁾ 純粋な陶邑系譜でもたらされた須恵器生産であるが、在地化するなかで、僅かながら尾張系の須恵器が混在して製作されるようになるのは、埴輪工人のような政治的地域間交流を具現化する工人が須恵器生産に関与するようになったことの証左となろう。以上のような現象から逆に推測すれば、尾張は極めて早い段階で須恵器生産技術を獲得していたものの、その技術流布に関しては非常に強い規制が強いられており、畿内政権が須恵器を政治的に利用しようとしていた意図が強く現れているのである。そして、在地窯が成立して以後、月津台地での古墳の展開、前方後円墳と埴輪祭式の終焉などといった大きな変化が引き起こされているのである。

最後に生産体制について触れておきたい。結論としては、9工人の把握、そして供給主体工人と供給補助工人、直轄工人と出向工人の振り分けということになるが、再考すべき点は多々ある。まず、出向工人という捉え方の是非であるが、その枠で捉えたII群の埴輪は、その系譜が明らかにされているわけではない。非常に特徴的な属性を備えた個体ではあるが、今後、他地域の資料との対比を行った上で検討する必要がある。当該地域内部における工人差を示している可能性も残されているのである。次に、9工人の把握であるが、この中で、IC類については、筆者自身固定的な分類が成し得ず、疑問点や曖昧な点を隠蔽したまま一括して取り扱ってしまったきらいがある。他の分析でも、この扱いは同じである。このIC類の存在が最後まで心にひっかかっていた。もう一つは、工具受け渡しの事実を認めたことである。ハケ工具や当具が、特定の製作機会に限るとはいえ、いわば工房の備品として存在していたとすると、極めて重要な事実である。しかし、これについても、同じハケ目配列をもつ工具が複数製作される可能性は残されているので、確実とは言えない。ただ、朝顔形円筒埴輪の製作状況を考えると、基本的にはハケ工具は個人に帰属するものであったようである。この他、問題点を指摘すればキリがなく、生産体制の復元で述べたことは、かなり憶測に近いばかりか、考察で許される範囲を逸脱しているかもしれない。ここでは、ハケ工具の原体同定と、細かな属性分類に基づく類型化が、どのように活用されるかの試論としての意味合いが大きい。このことは、とりもなおさず筆者自身がどこまで推測したのかという報告であって、ある種の思い込みも含まれている。この生産体制復元に関しては、先学諸氏の御批判を真摯に受け止めてゆきたいと考えている。

注

- (1) 小松高校地歴クラブ考古学研究班 1951 「江沼郡月津村矢田借屋古墳調査報告」『研究報告』第三輯 石川県立小松高等学校
- (2) 小松高校地歴クラブ 1962 「借屋八号墳発掘調査」『石川県高等学校文化連盟郷土部会報』2号
- (3) 配列と儀式の復元を統括的に考察した以下の論文を参考にさせていただいた。
- 橋本博文 1980 「埴輪祭式論」「塚廻り古墳群」群馬県教育委員会
- 山内紀嗣 1992 「復元される儀礼」「古墳時代の研究 9 古墳III 墓輪」雄山閣
- (4) 杉山晋作 1990 「人物埴輪の背景」「古代史復元7 古墳時代の工芸」講談社
- (5) 赤塚次郎 1983 「尾張としての埴輪製作者」「考古学の広場』第1号 考古学フォーラム
- (6) 赤塚次郎 1991 「尾張型埴輪について」「池下古墳」愛知県埋蔵文化財センター
- (7) 小栗明彦 1992 「埴輪倒立技法の問題」「史学研究集録』第17号 国学院大学
- (8) ここで述べた大筋に関しては、木立雅朗氏の下記論文における卓見に触発された部分が多い。
- 木立雅朗 1991 「須恵器の編年 6北陸」「古墳時代の研究 6 土師器と須恵器」雄山閣
- (9) 望月精司 1990 「第Ⅳ章 考察——南加賀古窯跡成立期の様相——」「二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡」小松市教育委員会

おわりに

本報告では、埴輪の分析に紙数の多くを費やした。一見、考察的要素を多分に含んでいるようであるが、分析内容の大半は、普通円筒埴輪の分類作業であり、出土遺物分類結果の提示が、遺物報告の基本的な作業とすれば、本分析の主眼はあくまでも基礎資料の提示であって、考察とは考えていない。出土した埴輪群は、北陸においては、極めて異例のまとまった埴輪資料であり、この突出した資料をどのようにして報告すべきかという困惑があった。筆者は、この調査で埴輪というものに初めて触れ、その後、いくつかの報文や論文に接したが、資料の扱い方や基本的視点を理解していない事へのジレンマが常に伴い、実測図の提示方法の段階から多くのつまづきと試行錯誤を繰り返した。筆者にとっては、荷が重すぎる代物のようにも感じた。埴輪の分析には、筆者が、他の報文でつかみきれなかった現物の雰囲気や疑問をこの報告書に盛り込みたいという意図がむしろ大きかった。たとえば、凸帯の断面形態やハケ目については、実際の質感を示すように原寸としたり、分類については、結果と基本型のみを提示するのではなく、なるべく全個体の情報を基本資料として網羅すること、あるいは、矛盾点や疑問点もそのまま記載すること等である。分析の中心作業は普通円筒埴輪の分類であったが、その結果を報告する際に、現物を提示できない以上、分類の手順と経過を明確にすることも必要不可欠であると考えている。このようなことから、本書の分析は、あくまでも資料報告の枠内と位置付けているのである。ただ、筆者の力量不足から、分類に客觀性を貢いたとは言えず、多くの検討余地を残したまま取り繕った部分があるのも事実である。また、時間的な制約から、熟考を重ねないままに筆を進めたため、必要な事項の記載が欠けたり、節や項の構成が錯綜したりしている。紙数の不足から、後半かなり割愛した事項も多く、言葉足らずで誤解を招くような箇所も多いが、これらの点については御寛容願いたいと思う。

本文脱稿後にも、多くの先学の方々が遺物を実見されて、意見等を聞かせていただいたが、そのなかには、本文の内容を再検討すべき事項や、修正すべき見解も數多く含まれている。また、人物埴輪等に関する研究書や論文もその後多く出され、筆者の勉強不足を痛切に感じるとともに、本文に生かせなかっ悔いも後をたたない。本報告書について、先学諸氏のご批判とご指導を仰ぎ、今後、再度検討を重ねてゆきたいと考えている。報告書を作成するにあたり、終始手元に置いて参考としたのが『塚廻り古墳群』である。筆者が学生時代に、その評判を受けて衝動的に購入した唯一の埴輪文献であったが、その後は本棚にずっと眠っていた。それが、この機会に、報告書の体裁や文章の書き方、視点に至るまでのよりどころとして活用することになったわけである。引用というかたちでは用いなかったため、参考文献として列挙する場はなかったが、全体を通して、基本的な参考文献となっていたことをここに明記するとともに、執筆された方々の業績に敬意を表したいと思う。

最後になりましたが、開発事業主である信開産業株式会社とその関係者の方々には、発掘調査の実施から報告書の作成に至るまで、甚大な御協力をいただきました。そして、予想をはるかに上回る資料の重要性から、長い整理期間を費やし、報告書刊行年度の遅れを招いたことについても、寛大な御理解をいただきましたことについて、厚く御礼申し上げます。



調査前近景



周溝プラン検出状況



周溝検出状況



A-Line 周溝土層堆積状況 ($A \longleftrightarrow A'$)



B-Line 周溝土層堆積状況 ($B \longleftrightarrow B'$)



C-Line 周溝土層堆積状況 ($C \longleftrightarrow C'$)



D-Line 周溝土層堆積状況 ($D \longleftrightarrow D'$)



E—Line 周溝土層堆積狀況 ($E' \longleftrightarrow E$)



F—Line 周溝土層堆積狀況 ($F' \longleftrightarrow F$)



G—Line 周溝土層堆積狀況 ($G' \longleftrightarrow G$)



H—Line 周溝土層堆積狀況 ($H' \longleftrightarrow H$)



I—Line 周溝土層堆積狀況 ($I' \longleftrightarrow I$)



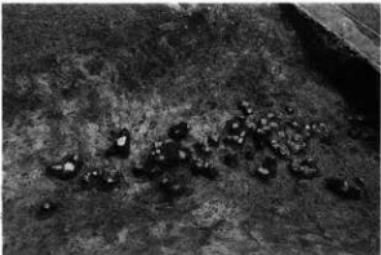
周溝V区調査風景



周溝VI区調査風景



周溝Ⅰ区遺物出土状況



周溝Ⅰ区遺物出土状況



周溝Ⅰ区鉢台付高環出土状況



周溝Ⅱ区遺物出土状況



周溝Ⅱ区下底環蓋(No.)出土状況



周溝Ⅱ区下底土坑内遺物出土状況



周溝Ⅲ区遺物出土状況



周溝Ⅳ区遺物出土状況



周溝Ⅴ区遺物出土狀況



周溝Ⅵ区遺物出土狀況



周溝Ⅶ区遺物出土狀況



同左、形象埴輪集中狀況



同上、形象埴輪出土狀況



同左



同 上



同 上



周溝完掘状況(前方部北西コーナーより)



同左(前方部南西コーナーより)



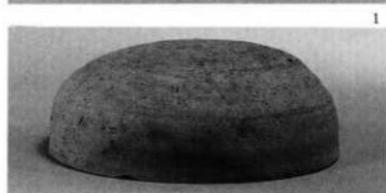
同上(前方部側より見た南側周溝)



同左(後円部側より見た南側周溝)



古墳完掘状況全景





13



14



15



17



16



19



18



20



土師器

22



23



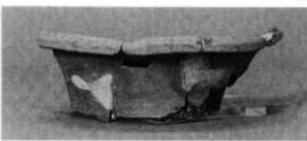
24



27



25



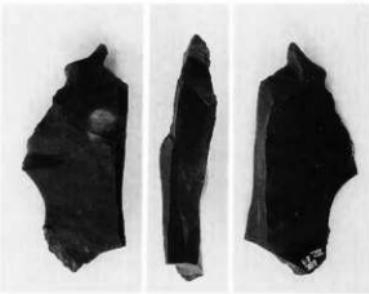
28



29

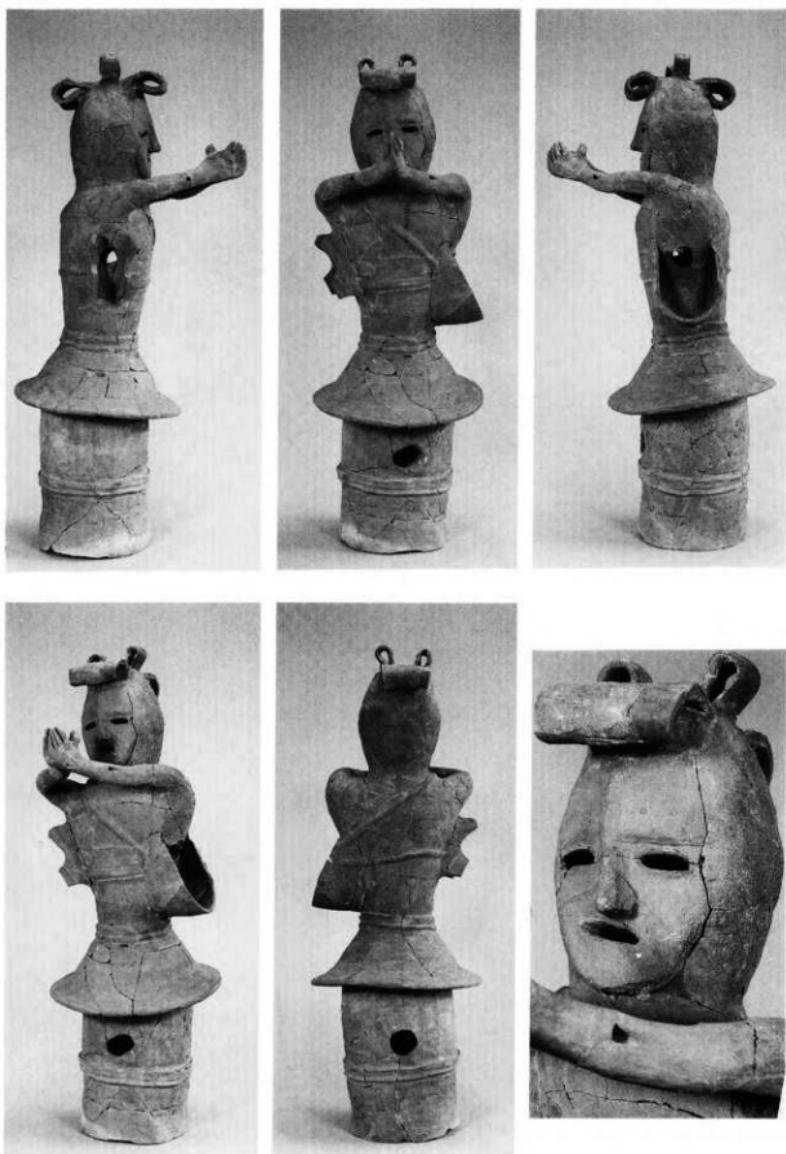


26



石器

写真図版9 人物埴輪（人1）



人1・櫛掛け製装衣の女子



人2・製袴衣の女子



人2. 着袴衣（右）



人2. 着袴衣（左）



人2. 肩部穿孔



人2. 頭頂開口部



人2. 衣裾内側



人2. 貼付粘土壤



人3・飾り帽子の男子

飾り帽子（後方）



人4・刀子を佩びる人

刀子と衣裾の模様



人5・勾玉をつける人

胸部23玉



人6・天冠の男子



帽子鉗後方突出部

人7・跪座の男子

足の表現



人8・右手を挙げる男子



口 鼾

人9・右手を擧げる口髭の男子

胸部ヘラ描き



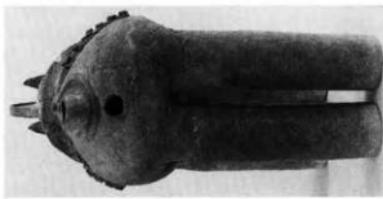
股間円形剥落痕

人10・騎乗の男子



人11・騎乗の男子







馬1 後脚收間の斜面 A1c (左右の脚A深を固定する脚底質→P139参照)



人10と馬2の騎乗状態



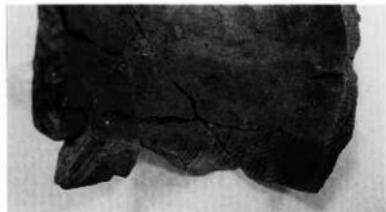
人9と馬1の騎乗状態



馬1



馬2



1. 基台底部内面の同心円文当具痕（人1）



2. 衣裾と基台を固定させる粘土塊



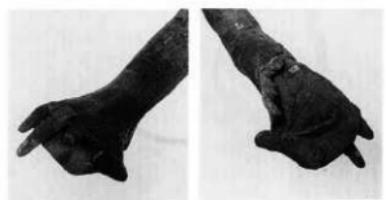
3. 衣裾と基台の接合部内面



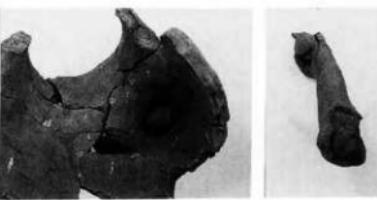
4. 胸部までの製作段階と腕挿入部設定状況



5. 肩部と腕挿入部の内面。肩は、粘土帯を前(胸)から後(背)へアーチ状に渡してつくられる。



6. 手の製作
棒状とした腕の先端を
バチ状に潰し、指を配
置する。



7. 腕の挿入
肩部に挿入後、二の腕
近くまで粘土が被覆さ
れて仕上げられる。





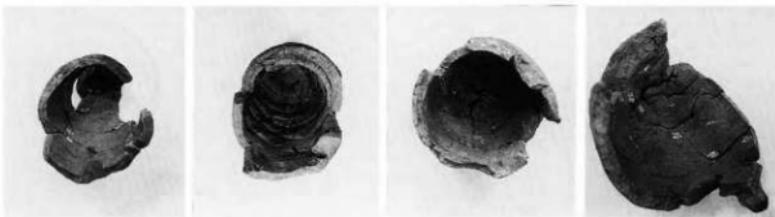
8. 跪座の男子の足



9. 頭面部内面



同左



10. 頭頂部内面、取東部の状況



11. 人1の體



12. 體の収まる頭頂開口部



13. 下から見た頭



14. 貼り付けた頭が剥落している状況。右は粘土の貼り付きを
良くするために十字の刻みが見られる。



15. 穿孔をもつ耳の内・外面



1



2



3

(IA1類)



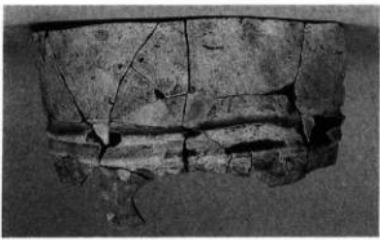
4



5



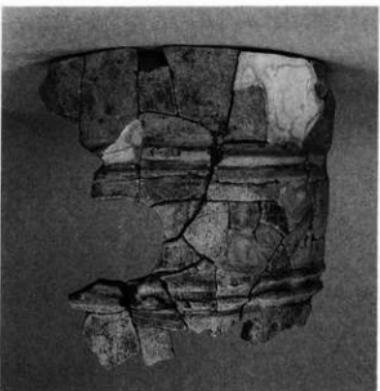
10



15



11



16

(5, 10・I A 1類、11・I A 2類、13, 14・I A 3類)



17



18



19
(I B 1類)



22



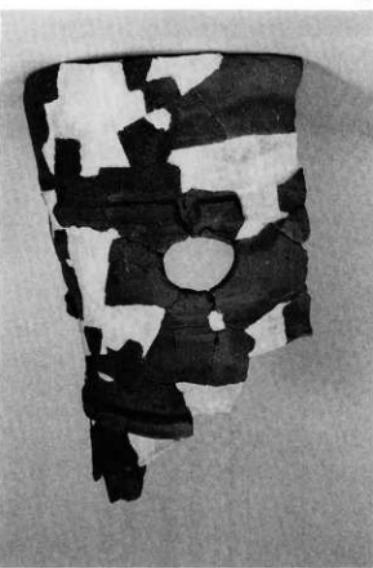
20



21



24

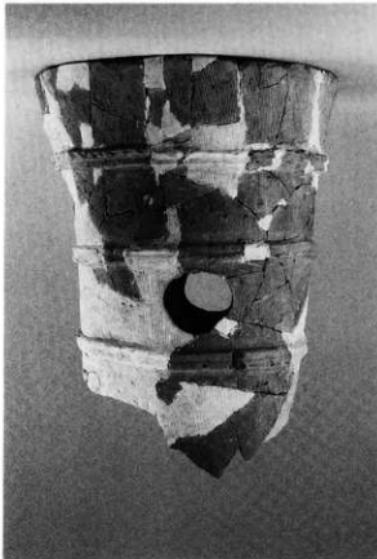


25

(20, 21・I B 1類、24・I B 2類、25・I A 4類)



29



30

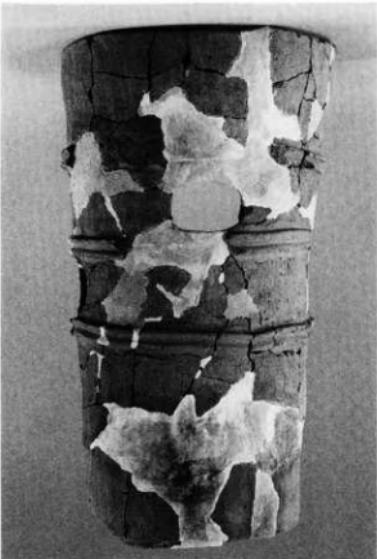


31



32

(29・I C 1 類、30～32・I C 2 類)



36



37



40



41

(36, 37-II A類、40, 41-II B類)



朝顔 1



朝顔 2



朝顔 4



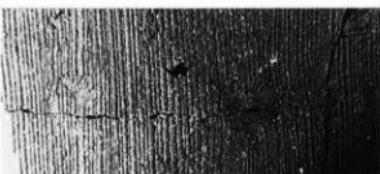
朝顔 7



朝顔 8



ハケ a 1種



ハケ a 2種



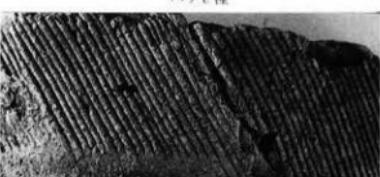
ハケ b 種



ハケ c 種



ハケ d 種



ハケ e 種



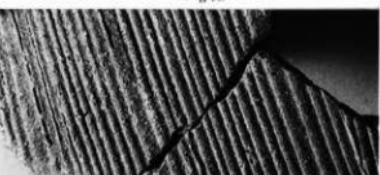
ハケ f 種



ハケ g 種



ハケ h 1種



ハケ h 2種

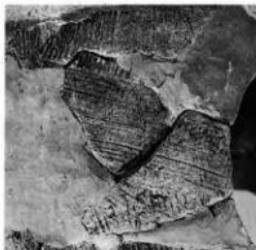


ハケ i 種

東には原寸。上がハケ原体の動く
方向である。



外調 a 種のヨコハケ



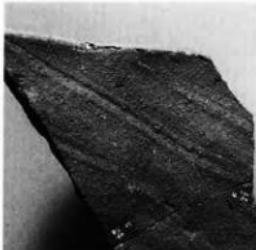
外調 ε 3 種のヨコハケ



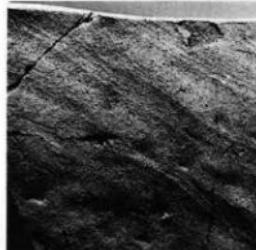
外調 b 3 種のヨコハケ



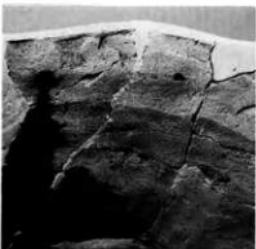
指ナナメナデ (IA 1類)



工具ナナメナデ (IC 類)



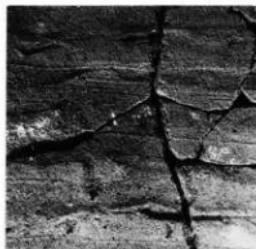
同左



指ヨコナデ (IB 類)



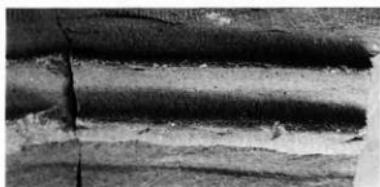
工具ヨコナデ (IB 1類)



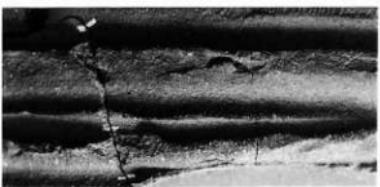
工具ヨコナデ (II A類)



透孔 a 種の切り抜き面 (IA 1類)



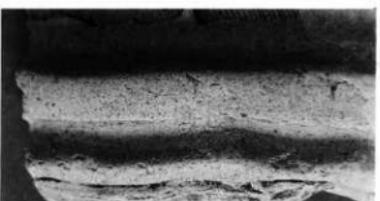
凸帯 a 1種



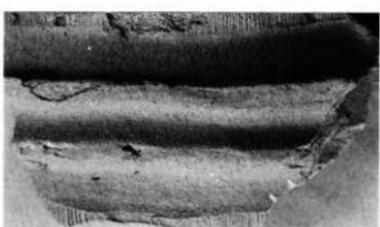
同左幅広部分



凸帯 a 2種



凸帯 b種



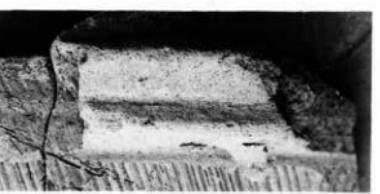
凸帯 c種



凸帯 d種



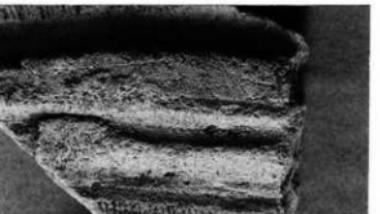
凸帯 d種



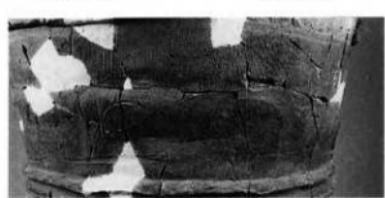
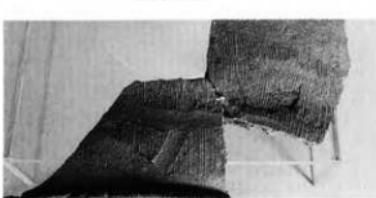
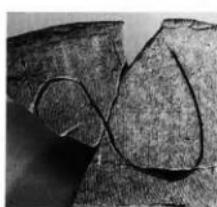
凸帯 e種



凸帯 e種



凸帯 e種





内当具 a 種



同左



内当具 b 種



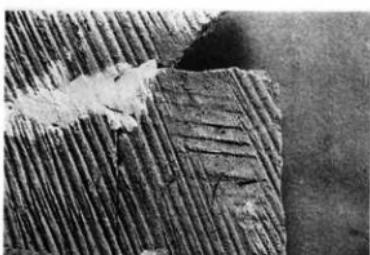
内当具 c 種



内当具 d 種



内当具 e 種



外当具 a 種



外当具 b 種



凸帯 1種



凸帯 2種



凸帯 2種肩部



凸帯 3種クビレ部



内当具 1種



内当具 3種



内当具 2種

矢田野エジリ古墳

発掘調査報告書

初版発行日 平成4年3月31日(1992)

第二版発行日 平成9年3月31日(1997)

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地

印 刷 有限会社 源田美術印刷
